隣の席のツンデレツインテールが何故かおれの傍から離れない！

水埜 アテルイ

目　次

隣の席のツンデレツインテールが何故かおれの傍から離れない！
第1章　あなたの孤独の物語
第1話　ぼっちくんと孤独なツインテール
第2話　友だちを用意しなさい！
第3話　やっと会えたね、って言ってるよ。
第4話　バカ睦紀なんて興味ないし！
第5話　俊足のぼっちくん
第6話　ぼっちを探しなさい。わたしのために！
第7話　榊木アリスの住む世界
第8話　お泊まり会に来なさい！
第9話　ぼっちたちの過去
第10話　約束してね、忘れないで。
第11話　やはりツインテールがお隣にいる。
第12話　んもぅー！　何なのよあんた！
第13話　あんたがどう思ってるか知りたいだけだし！
第14話　ぼっちくんはツインテールの水着なんか気にならない。
第15話　こんなに近いのに知らないことだらけ。
第16話　誰だって繋がりがほしいのよ。
第17話　別にツインテールなんて興味はない。
第18話　ショートカットの雀が雨宿りをしていた。
第19話　カラスとスズメは仲が悪い。
第20話　ツインテールは喜怒哀楽でお忙しい。
第21話　ぼっちたちの成就させたいこと。
第22話　あんたが寂しがると思ったから言ってるの！
第23話　湯けむりツインテールは上機嫌。
第24話　ずっと一緒だったんだよ。
第25話　この一歩は小さいが、ツインテールにとっては偉大な一歩だ。

第26話　朝烏との朝チュンは朝飯前ではない。
第27話　ツインテールは席替えに命をかける。
第28話　ぼっちくんのロンリー・ワールド
第29話　昔、ある少女と別れた。そしてまた出会った。
第30話　ツインテールはスルーがお得意？
第31話　ドスケベツインテール＆ドスケベポニーテール VS 目覚めはじめたショートカット
第32話　ツインテールがしてと言ったらするんです。
第33話　わたし以外とイチャイチャしてほしくないんだもん!!
第34話　これが、ぼっちとツインテールの物語
第2章　あなたの友人の物語
第35話　わたし子猫じゃないもん。
第36話　サキュバスツインテールは小雀を警戒中。
第37話　きみの声でいっぱい。
第38話　本当は冗談がキライですわ、お母様。
第39話　ツインテールは何でもできる良い子なんだもん。
第40話　熱くてじれったいミッドナイト
第41話　それでも世界は変わろうとするのだ。
第42話　あんたがイヤでもずっと隣にいてやるもん。
第43話　ツインテールといっしょ。
第44話　夏休みの終わり
第45話　ポニーテールは救われたい。
第46話　恥を捨てた男の真実
第47話　龍の如く、彗星の如く、ポニーテールは空を駆ける。
第48話　絶対不可侵の女神さま
第49話　誰かを守るということ、愛するということ。
第50話　ぼっちの信条と生き方
第51話　上を向いて歩こう。
第52話　玲音の嘘と他人のために生き続けること。
第53話　アリスの母性と繋がるということ。
第54話　睦紀の変化とひとりになるということ。

第55話　不透明の二人三脚
第56話　百年後も好きだと言いたい。
第3章　あなたの恋の物語
第57話　変わったぼっちくんと愛しのツインテール
第58話　おしゃれデビュー
第59話　わたしも可愛くなりたいもん！
第60話　幸せの真実
第61話　愛のケーキ作り
第62話　本物の寂しさ
第63話　わたしだけはあんたの隣にいる。
第64話　ヘンタイ・ツインテール
第65話　それぞれの夢

あらすじ：

◆あらすじ

式島睦紀はぼっちこそが最高と考える変わった高校一年生。

彼は高校に入学してからもぼっちを貫き、自由を楽しんでいたが完全にぼっちになりきれない点で悩んでいた。

そこにツインテールの少女が現れる。

彼女は朝烏百合愛。ツインテールが特徴的でちょっとツンデレ気味な彼女は、惚れ惚れするほどの完璧なぼっちを貫いていた。しかもそんな彼女は隣の席。いてもたってもいられず、睦紀はぼっちを学ぶために彼女と関わるよ

うになるが――。

ぼっちの高見を目指す少年とぼっちの女神様との面倒くさいラブコメディ！

掲載ページ：

https://ncode.syosetu.com/n5231fw/

隣の席のツンデレツインテールが何故かおれの傍から離れない！

第1章　あなたの孤独の物語

第1話　ぼっちくんと孤独なツインテール

春、ツインテールが寝ていた。

まるで猫が昼寝でもしているかのような穏やかな表情で、彼女はおれの右隣の席で目を閉じ、夢の世界に旅立っていた。

おれは驚きを隠せなかった。その席は高校に入学してから二週間もの間、空席だったのである。飲食店の予約席みたいに綺麗な状態で、教室にぽっかりと空いた穴だった。来る日も来る日も空席なので、もしかして見えない誰かが座ってるんじゃないか、と思い始めたタイミングで、とうとうぬしが現れたのである。

「む」

呆然と立ち尽くしているとツインテールの少女が目を開けた。長い睫毛の奥で輝く瞳がこちらを認識する。

しかしおれは口を開かない。というのもおれはぼっちを極めている過程にあり、初対面に気さくな挨拶などしてはいけないのである。それに相手はツインテールの美少女だ。面倒に巻き込まれる可能性が非常に高い。

だがお隣さん同士だ。ほんの少しだけ会釈しておこう。

「あっ……す……」

おれは何かを言った。自分でもわからない。地球（アース）とでも言いたかったのかもしれない。とにかくおれは意味不明な声を発し、羞恥心で死にたくなった。

対してツインテールの美少女は一切の反応を見せず、おれの渾身の謎言語は目の前の少女に届くことはなく空中のどこかへ消えていった。そして少女は再び目を閉じ、眠りについた。

沈黙、そして静寂。

これが朝烏百合愛（あさがらすゆりあ）との出会いだった。

彼女と出会ったからと言って、おれの――式島睦紀（しきしまむつき）の日常が変わることはなかった。

おれの日常は非常にシンプルだ。登校し、授業を受け、昼食を摂り、授業を受け、下校する。模範的高校生である。しかしながらこれを「コミュ症」だとか「陰キャ」だとか言って侮蔑する輩がいる。勝手に言っていろ。親鳥を追

う雛鳥のように、群衆の中で個性を殺していればいい。

仕方なく譲歩して陰キャということにしてやるが、別にここから脱却しようなどとは考えていない。一人は自由でストレスがない。全ての悩みは大抵人間関係から起因するのだからそれを絶てばストレスフリーのハッピーライフになるのだ。これぞ幸せの真理と言ってもいい。

その理解者が一人いた。

ツインテール美少女、朝烏百合愛（あさがらすゆりあ）だ。

彼女が姿を現してから一週間が経過したが、なんと彼女は卓越したぼっちっぷりを披露していた。挨拶はもちろん誰にもせず（おそらく挨拶の概念がない）、トイレ休憩は本当にトイレしかせず、昼食は黙々と食べ、放課後は速やかに教室を後にする。

おれは感動した。彼女からは一切「ぼっちの苦悩」というものが感じられ

ず、恐ろしいくらい孤独を貫いていた。彼女が言葉を発するのは授業で教師から問題を当てられたときくらいである。それ以外は呼吸音くらいしか発しない。

――彼女はぼっちの神だ。クレイジーだね。（日本・十代男性）

おれはそう思った。長年ぼっちを続けてきたおれでさえ、しばしば孤独に狼狽することがあるのに彼女にはその様子が微塵も見られない。人間味のない徹底した人間関係の拒絶は神業であった。

それから心の中で朝烏百合愛を師匠扱いするようになった。日々の中で彼女の孤独っぷりを観察し、技術を盗もうとした。運良く彼女はおれの隣の席だったため観察に苦労することはなかった。ちょっと首を捻れば神がいるのだ。もう運命だろこれ。

[illegible]

四月某日、高校生活初日。

五月上旬に「体育祭」という運動が苦手な人間を公開虐殺する残酷な祭りが開催されるので、それに向けて本日の体育はその競技練習ということになった。今日だけでなく以前からも大縄跳びやらリレーやらをやっていたので「またか」と思う程度であったが、状況はいつもと違った。

「準備体操。ペア作れー」

体育教師がそんなことをほざきやがった。

いつもの体育教師ならそんなことは言わないが、花粉症の悪化で今日はお休みらしく、その代わりにこの馬鹿げた体育教師がやってきたのだ。

ぼっちにペアを作れとは何事か。もしこの世に「ぼっち国際連合」のような組織があったらその発言は大問題となり、ただちに世界中で議論が巻き起こるだろう。ぼっちを滅ぼす最悪の指示だ。そしてぼっちを苦しめる最悪の言葉だ。

周囲のクラスメイトたちは次々とペアを作っていった。磁石のように、素早く。自分が誰と引き合うかわかっているようだ。磁力を持たない路傍の石たるおれはその光景を見て冷や汗が額に滲んだ。おれはどうなるのか、おれはどうすべきなのか。ぼっちには相応しくない考えが脳裏を駆け巡り、おれを焦らせた。

そんなとき、朝烏百合愛のことを思い出した。

彼女はぼっちの神である。この状況下においても彼女は素晴らしい方法で問題を打破しているに違いない。おれは彼女の姿を探し、できるならば真似しようと思った。

「……」

おれのすぐ横に、数十センチの距離にツインテールがいた。周りから見れ

ばペア成立と言ったところだろう。いつの間にか朝烏百合愛がおれの傍で突っ立っていた。

何をしているんだ、と後学のためにも聞いておきたかったがぼっちにコミュニケーションは不要だ。この場合は傍観が正解である。

しかし彼女は違った。

「わたしと組みなさいよ」

ぼっちの神が、実にぼっちらしくないことを言った。

おれは失望した。なんで話しかけてくるんだ。それじゃあただの女子高生みたいじゃないか。きみは孤独の覇者なのに、どうしてぼっちっぽくないことを言うんだ。

おれは怒りにかられて重い口を開けた。

「……がっかりだ。師匠だと思っていたのに」

には？　どうでもいいけど、さっさと座って、どうせ組むやついないんでしょ」

組むやついないんでしょ、だと？　とても胸に刺さることを言うじゃないか。

「なんで不機嫌なのよ。べ、別にあんたと組みたかったからとかじゃないんだからね！　わたしはただ一人になるのがイヤだったから仕方なくあんたの隣にいただけなんだから！」

「期待していたおれが馬鹿だった。もっとスマートにこの場をやり過ごして、ぼっちらしく気丈な振る舞いを見せてくれると本気で信じていた」

「ぜんっぜん意味わかんないんだけど……とにかく座りなさいよ」

地面に尻をつき、足を閉じる。そのまま両手を足先に向けて伸ばし、身体を倒した。朝烏は小さな手でおれの背中をぐっと押した。何とも頼りない弱々しさで補助をするりかさえ疑問である。

弱々しさで神田の必要なあるのだろう疑問である。

朝烏は女子高生としては平均的な身長だ。しかしながら頭の大きさや足の長さのバランスが取れており、スタイルが良かった。だからもう少しばかり力はありそうなものなのだが、箸すら折れそうにないほど弱い圧力だった。

「もっと力、入れてもらっていいぞ」

「えっ。うん……」

多少上がった。だがまだまだ弱い。

そんなこんなしていると一つ気付いた。朝烏はさっきから震えている。感覚を研ぎ澄まさないとわからないほどだが確かに震えがあった。おれを恐れているのか、それとも気持ち悪がっているのか知らないが、おれの興味は引いた。

「手が震えてるぞ」

「ふ、震えてないし！　ちょっと緊張してるとかそんなんじゃないんだか

ら！」

なるほど、神でも緊張はするのか。まぁ無理もない。神とはいえ、彼女は人の子だ。久しぶりに人と会話すればそりゃあ多少は緊張するだろう。おれだってそうだ。朝烏と話したのは今が初めてで、クラスメイトと話したのも数週間ぶりだ。唾液の乾きが早すぎて喋りづらい。

良い機会なので一つお願いしてみた。

「おれに、ぼっちの極意を教えてくれないか」

「さっきからなんなの……」

「おれはこの一週間きみを見続けてきた。そう、ぼっちとしてのきみだ。あまりにも見事なぼっちっぷりで本当に感動した」

「……煽ってるわけ？」

「まさか。おれはぼっちを極めたい。それにはきみのぼっちスキルが絶対に必

要な気がするんだ。どうか教えてくれないか」

おれは真剣な声音で語った。まだまだ準備体操の途中だが関係ない。今しかない。教室に戻ってしまえばただのぼっち同士になってしまう。この機会を逃さずここで師弟関係を結ばなければならない。

そしておれの懇願に対し、ぼっちの女神は意外な返答をした。

「わたし、むしろぼっち卒業したいんですけど……」

神は、死んだ――。

第2話　友だちを用意しなさい！

春、またツインテールが寝ていた。

彼女は昼寝をしていた。弁当を黙々と食べた後、すぐ机に身体を倒して寝始めたのだ。

昨日、体育の授業で弟子入りを志願したが彼女に軽く流された。それ以来言葉を交えていない。そもそもぼっちなのだから会話など愚かな行為でしかないのだが、彼女の場合は別だ。色々と教えてもらわなければならない。

《朝烏百合愛（あさがらすゆりあ）》

《裕福な家庭で生まれ、日本国のみならず他国で暮らした時間も長い帰国子女。容姿はツインテールが特徴的で整った顔立ちをしている。性格は現段階では不明瞭だが悪辣ではないようである。クラスの立ち位置はぼっち。関わろうとする雰囲気は皆無》

現時点で判明している彼女の情報だ。非常に少ない。もちろん原因は彼女が情報を出さないことにある。まぁこの件については少しずつ収集していけばいい。

「起きてくれ、師匠」

腕枕に顔をうずめる朝烏に声をかける。

「きみから学びたいんだ。どうすればそこまで身も心もぼっちになれる」

「うるさいわね……」

「ぼっちライフを満喫のところ申し訳ない」

「別に満喫してないし。昨日もあんたに言ったでしょ。わたしはぼっちが嫌なの。人の傷を抉るのやめてもらえる？」

「そう言うけどな、見事なものだったぞ。劣等感や寂寥感の感じられないあの雰囲気は人間業じゃない。どうやったっておれたち人間は孤独の苦しみからは逃れられない。でもきみは克服しているように見える」

「だから克服してないから卒業したいって言ってるんじゃない……」

朝烏はため息をついてスマホをいじり始めた。まさかその数インチの液晶画面にぼっちの秘訣が……!?　おれは首を伸ばして覗いた。

「ちょ、見るな！　変態！　バカ！　人のスマホ覗き見るとかサイテー」

「すまない。でもおれは本気なんだ」

「全く、ぼっちのどこがいいんだか……」

「頼むよ。きみの『ぼっちを卒業したい』という願いはおれが叶えてやるから

さ。代わりにぼっちの極意を教えてくれ」

そう提案すると朝烏は目を輝かせてこちらに目を向けた。何だかロボットに感情が芽生えた瞬間のようだった。

「ホントに!?　わたしに友だち用意してくれるの!?」

「流石ぼっちの神……友だちを用意、だなんて恐ろしい言い方だ……人間はモノじゃない……」

「その話が本当なら教えてあげてもいいわ。ただしわたしのことは『先生』って呼んで。あんたは友だちでも何でもない、ただの冴えない男だから。同等だと思わないで」

「いいだろう、朝烏先生」

「わたしはあんたのことバカ睦紀って呼ぶから」

「いいだろう。というかおれの名前知ってるのか」

「[illegible]

べ、別にこっそり調べたりとかしてないし！　あ、あんたなんか興味ないし！」

「そうかい」

これで神から技術を学べる。いつの日か彼女のような最強のスタンドアローンになれるはずだ。何も恐れず、何にも怯えず、確固たる強い意志を持った鋼の人格に生まれ変わるのだ。

「それで。あんたはどうやってわたしに友だちをくれるの？」

彼女はぼそっと呟いた。

おれは目を閉じた。方法が思いつかなかったのだ。何一つ、微塵も。

友だちを紹介するなんてことはできない。おれには友だちがいないからだ。それにぼっちだから人間自体にあまり関わりがない。いわゆるネットワークのようなものが存在しないのだ。世界は海底ケーブルで繋がっているが、おれにはそのケーブルのような繋がりがない。こいつに感づかれずにガラパゴス犬

おれにはその分、この先楽をしたいという感じでカニノ状態なのである。

「どうにかする」

「信じられない。もしかして適当に嘘ついて自分だけ得しようって考えてたわけ？　サイテー」

「いや、マジで友だちは用意する。本当だ。最大限の努力はする」

「あんたの努力とか知らないから。友だちを用意できるかできないかの問題だから。理解してる？　先生に逆らう気？」

「いえ、逆らう気はありません」

「うん、それでいい。早く友だち用意して」

どうやらおれから何か成果を見せないと最新のぼっちテクノロジーは教えてくれなさそうだ。なかなか面倒なやつだな。だからぼっちなんだよ。

愚痴っていても問題は解決しないので考えた。
彼女には友だちが必要だ。
そもそも友だちとは？
What is the meaning of Tomodachi？
わからない……友だちとはなんぞや。会話が成立すれば友だちなんじゃないのか？　おや、つまりおれと朝烏は既に友だちでは？
「式島睦紀は朝烏先生の友だちだと思う」
「気持ち悪い」
「え、おれたちもう友だちだよな？」
「全然友だちじゃないけど。やっぱバカじゃん。バカ睦紀」
難しい。おれにはわからない。
深く考えることを止め、もっと柔軟な考えに変更だ。

友だちを用意する、は「人間を用意する」と同義だ。友だちとは人間のことだろう。まさか宇宙人やら空想のお友だちを連れてこいとは言わないはずだ。少なくとも「友だち＝人間」の方程式は成立すると思われる。

そう解釈すればおれでも用意可能だ。

「明日は土曜だが、朝烏先生は暇か？」

「暇だけど」

「にんげっ……いや、友だちを用意できる」

「ホ、ホントに!?　嘘じゃないよね!?」

「先生の前で嘘なんかつかん。任せろ。素敵な友だちを紹介しよう」

「ふ、ふんっ。なかなかやるじゃん？　バカ睦紀のくせに」

「バカかどうかは明日になってから決めるんだな、朝烏先生」

彼女はぼっちのくせにコロコロと表情を変える。ぱっと目を開いて喜んだ

と思いきや、すぐに眉の角度を上げて拗ねたような顔になる、ほっぺたのくせして贅沢な表情だ。

明日、土曜日に彼女と会う約束をした。しっかり約束通りに友だち（人間）を連れていく。大丈夫、きっと朝烏の友だちになってくれるはずだ。彼女でも気さくに話ができてすぐに仲良くなれる。

おれの妹――式島（しきしま）沙月（さつき）なら。

第3話　やっと会えたね、って言ってるよ。

「はじめまちて、さつきです」

うちの可愛い妹――式島沙月（さつき）がツインテールに挨拶した。生意気そうなツインテールの小娘相手にも怖じけず、とてもご丁寧でエレガントだった。

沙月は幼稚園年長で来年から小学生だ。ランドセルを背負った姿が実に楽しみでならない。沙月の新しいスクールライフが順風満帆なものになることを願っている。

「朝烏先生。こちらが友だちだ」

「そう」

誰もいない公園に朝烏の気の抜けた声が流れる。朝烏は休日だというのに制服姿でやってきた。おれに私服姿を見られたくないらしい。「あんたなんかにプライベートを知られたくない」と会って早々そんなことを言われた。おれだって神のプライベートなど興味はない。あるのはぼっちスキルだけだ。

「バカ睦紀。この子どうしたの？　まさか誘拐してきたんじゃないでしょうね」

「沙月はおれの妹だ。来年から小学生になる。仲良くしてやってくれ」

「あのね……友だちを用意しろとは言ったけれどこうじゃないでしょ……」

朝烏は腰に手を当て呆れた様子だった。

そんな彼女を放っておいて、おれと沙月はいつものように砂場で泥団子を作り始めた。沙月は外で遊ぶのが大好きなのだ。だから暇な休日はこうして公園で遊んでいる。

「にぃに。今日はとってもおばさん嬉しそうだよ」
「マジか。やったぜ」
沙月の一言に朝烏が反応した。
「お、おばさんっ……ですって!?」
「いやいや、違うんだ、先生」
「わたしはまだピチピチのＪＫだってのに……！」
「落ち着け、ツインテール。沙月はな、見えるんだ。見えないものが見える」
「……は？」

「この公園にはずっと昔から霊がいるらしいんだ。おれには見えん。けれど沙月の目には映っている」
霊感持ちってやつだ。沙月は昔から不思議なことを度々こぼしてきた。も

う慣れたし、害があったこともないので深く考えてはいない。しかし事情を知らない人からすれば背筋が凍るような話だ。なので沙月が小学生になって周りから気味悪がられないか心配している。

「こわ……大丈夫なの？」

「多分大丈夫だ。ここにいる『おばさん』とやらはいつもおれと沙月を見守っているだけっぽいしな」

「ふぅん」

「で、友だちになれそうか。沙月は世界一良い子だぞ」

「そうねぇ……」

彼女は腕を組んで悩み始めた。悩むまでもないだろう。沙月と友だちにならないとか人生損だ。

うじうじと朝烏が悩んでいると沙月が立ち上がった。

「[illegible]

「おねぇちゃん、お名前なんていうの？」
「わ、わたし？　わたしは……百合愛。朝烏百合愛よ」
「ゆりあちゃん」
「そうよ」
「お人形さんみたいなお名前ー」
　ぼけーっと見上げる沙月に対し、朝烏はどこかドギマギしている様子だった。こやつ、おそらく人見知りだな。圧倒的年下相手に何をドキドキしているのだ。全く見ていられない。
「朝烏先生。人見知りをする必要はない」
「そ、そういうバカ睦紀だって人見知りのくせに！」
「おれは人見知りじゃないぞ」
「ふん。嘘ね。だったらあんたがぼっちなわけないじゃない」
「うぐが人見知りごっこうきみこ舌ンかけてこない。うぐは王うぼっうを選

「おれたち人見知りだから会話には参加していない　おれは自分にはっきりと違んだ。ぼっちになりたいからぼっちになったんだ。人見知りだからとか、そんな原因があったわけじゃない」

「むぅ……」

おれと朝烏の会話をぼけっと見ていた沙月が口を挟んだ。

「ゆりあちゃん。お団子つくろー」

砂だらけの手に乗せた泥団子を両手に包み、沙月はそう提案した。

「沙月。このツインテールのお姉ちゃんはそういうことしないんだ。それに服が汚れちゃう。また今度にしような」

「えー。お団子～」

「兄ちゃんがすげーの作るから我慢しておくれ」

だが朝烏はおれの言葉とは真逆の行動をした。

「沙月ちゃん。お団子ならわたしも上手に作れるわー

「そうなのー？」
「うん。この男よりもずっと上手いの」
朝烏は膝を折って砂場に手を突っ込んだ。お嬢様感のある彼女が雑菌まみれの砂場に触れるとは驚きだ。ツインテール美少女なりの免疫強化訓練だろうか。
「ゆりあちゃん、ハンカチどーぞ」
「ん？　どうして？」
「お膝いたくなるよ」
「ま、まままぁ～！　ありがと～！」
いきなりテンションが上がりやがった。彼女はいつもツンケンしているのでおれは驚いた。
「バカ睦紀。この子、わたしの妹にするわ」

「やめろ。もう友だち用意してやらないぞ」

「友だちは沙月ちゃんだけでいいわ。あんたは用済みよ」

彼女は手で首を切る仕草をし、沙月に向き直った。

「沙月ちゃん上手ね～！　お姉さんびっくり！」

「ゆりあちゃん。にぃにとけんかしちゃダメだよ」

「大丈夫大丈夫。喧嘩じゃなくてただお話ししてるだけだから」

「でもおばさんが言ってるよ。『やっと会えたのに』って。さびしそうだよ」

「……本当に？」

おれも泥をこねていると朝鳥の声調が変わった。相手は幼女だぞ。そんなマジなトーンで話したら沙月が怯えてしまう。

「うんち」

「ちょ、え？」

「わんわんのうんち」

「ぎゃぁあああああ！」

朝烏の足下付近に転がっていた犬のフンを目にして彼女は叫んだ。砂場にたまにあるトラップだ。注意しないと踏んづけ靴をダメにしてしまう。

飛び跳ねた彼女は傍らで同じく泥団子作成中のおれの肩をがっちり掴んだ。

「犬のフン程度で驚くなよ。世の中生きていけないぞ」

「うるさいわね……ちょっと驚いただけよ」

ともあれ沙月と友だちになってくれたようでよかった。沙月でダメだったら終わりだった。おれには男友だちすらいないのだからましてや女子など無理があったのだ。

しかしこれでぼっちスキルを学べる。

「明鳥先生。これでぼっち耐性を教えてくれるんだよね」

「卓烏先生、これでは女の極意を教えてくれるんだよな」
「あんたまだそんなこと言ってるわけ？　というか本気でそう思ってるの？」
「本当だが……」
「はぁ……仕方ないわね。来週にでも教えてあげるわ」
「よし。頼むぞ」
その後、少しだけ公園で遊び、解散した。特に語ることはない。泥団子を作って、丸くなったら公園のベンチの下に並べた。次来る頃には乾燥して固まっているだろう。それから表面を手で擦って綺麗な球体にすれば完成だ。
そもそも朝烏がまた遊んでくれるかはわからない。でもきっと来てくれるはずだ。去り際、朝烏は沙月に小さく手を振った。あれが最後の別れになるはずがない。

第４話　バカ睦紀なんて興味ないし！

週が明けて月曜日。待望の日がやって来た。

朝烏はまだ教室には来ていない。彼女はいつも八時二十分頃のギリギリに登校してくるので、おれはいつも通り席に座って静かにチャイムだけを待った。

待て。

彼女の到来を待ち望むのはぼっちらしくない思考法だ。あくまでおれはチャイムを待っている。そう、チャイムだけを。孤独なツインテール美少女など断じて待っていない。

朝烏が現れた。

彼女はぼっちのくせしてオーラだけはある。容姿が優れているからというのもあるだろうが、彼女が現れると目が自然と動くのだ。あのヒラヒラと揺らめくツインテールの仕業かもしれない。それともカリスマというやつか？

誰も寄りついていないが。

「ジロジロ見ないで。ぼっちらしくないわよ」

彼女は冷たく言い放ち、自分の席に腰を下ろした。

「今日は約束の日だ。ちゃんと教えてくれるんだろうな」

「えぇ。昼にでも教えてあげるわ」

それで会話は終わった。元々おれたちはぼっちだ。口は食べるためにあり、声を奏でるためにあるのではない。面倒な人間関係を切り捨てた自由人な

のだ。それに彼女と話すためにいちいち首を右に向けるのが怠い。しぼったときの雑巾みたいに首から汗が滲み出てきそうでイヤだ。

しかしながら彼女はおれのぼっち活動を邪魔するような動きをし始めた。

二時限目の化学の実験だ。

化学の実験室にはご存じの通り大きな実験台が並んでいる。つまり班を作って座らなければならない。こういうのが一番面倒だ。他人の存在を意識する必要が出てくる。

適当に座っておくかと考えていたところ、傍に朝烏がいた。立ち尽くしていたおれの隣に、同じく立ち尽くしている朝烏百合愛。教材を胸の前で抱きしめるように持ち、若干視線を落としている。

「朝烏先生。何か」

おれは彼女に話しかける。本来は話しかけないところだが、彼女は一応ぼっちの先生でもあるので話しかけた。もしかしたらここでぼっちスキルを教えてくれるのかもしれない。

「あ、あんたが一人だったから一緒にいてあげただけよ……」

「いや、おれは一人が好きなんだが」

「……は？　あんた嬉しくないの……？」

「ぼっちを極めてる真っ最中なんだが」

彼女はやつれたような表情になって肩を落とした。おれに対する失望が垣間見えた。ぼっちのくせに本当に表情が豊かだな。

おれは椅子に座った。先に着いてしまえばこっちのものだ。クラスメイトの誰と相席しようが構わない。おれはロボットだ。ポンコツ人工知能で動く無

愛想な人型ロボットみたいに、死んだ目で手を動かせはいい。

そんなことを考えていたら隣に誰かが座った。またも朝烏だ。背中を丸めて自慢のツインテールを胸の前に垂らし、じっと机上に視線を固定していた。

彼女がちらっと横目でこちらを見る。

目が合う。

おれは咄嗟に逸らした。彼女も髪が揺れるほどの勢いでバッと顔を背けた。

何なんだよ、その目は。どうして恥ずかしそうに顔を赤くしているんだ。

実験は淡々と進む。白衣を着、試験管やら薬剤やらを用意した後、教師の指示に従う。化合物の変化を観察し、その様子と結果をノートに記していく。

いく

その過程でずっと朝烏のことが気になって仕方がなかった。彼女は事あるごとに小声で「バカ睦紀」や「それ取って」と言い、そしてチラチラとおれを横目で見てくるのだ。ぼっちモード実行中のおれにとってはいい迷惑である。ぼっちが破綻するじゃないか。

「朝烏先生。さっきからなんだが――」

「その口調、なんなの？」

「？」

「バカ睦紀ってなんでそんな変なしゃべり方してるわけ？」

「変、か……？」

「変よ。おかしいわ」

おれは、おかしいのか……？

自然とこうなった気がする。コミュニケーションを排除し、より非人間的で

あることを目指しているうちにこうなった。無駄をそぎ落としたしゃべり方だ。端的で実に効率が良い。

「そっちこそさっきから様子がおかしい。何度もこっちに目を向けるから気になってしょうがない」

「べ、別にあんたなんか興味ないし！　ちょっとわたしのことどう思ってるかなとか思ってないし！」

「おれよりよっぽどおかしいな」

「うるさいうるさい！」

ぎゃんぎゃん喚いてどうしようもないな。

おれは改めてぼっちモードに戻った。ダメだダメだ。朝烏ごときに翻弄されていては高みになど上れない。このままではどんどん孤独への耐性が弱くなり、常にビクビクしてる弱小ぼっちになってしまう。

けれど、やはり気になる。

授業が終わり、教室へと戻る途中でも朝烏はおれの背後を歩いた。どうして傍から離れてくれないんだ。

しかしながら友好的な話をする気配はなかった。

『昨日アレ見た？』

『あそこのお店美味しいよ』

『今日は部活何時から？』

『あいつ付き合ったんだってさ』

そんな耳を澄ましていれば聞こえてくる世間話たち。けれどおれたちの間でされることはない。おれと朝烏が共有できるのは沈黙だけだ。何もせず、ただ座っているだけ。ただ、傍に、隣にいるだけ。

意識しているつもりはない。彼女がこの沈黙を共有しようとしている。勘

違いかもしれないが、おれがそう思うくらい彼女はおれの傍にいた。ほっちになりたいと願う男に近づいても無益だと知らずに。

「孤独は、優れた精神の持ち主の運命である」

昼食中に朝烏が独り言を始めた。突然のことだった上に割と痛々しかったため、おれは反応しなかった。とりあえず彼女の様子だけは確認しようとほんの少しだけ首の角度を変え、視界の片隅に朝烏を入れた。

すごい勢いでこちらを見ている。ガン見だ。

ここで無視するのは流石に酷なので相手になってやろう。

「何か言ったか」

「このまま無視してたら蹴り飛ばしてたわよ、バカ睦紀」

「不思議ちゃんのイメージが付いて人気が出るかもしれない。それと暴力キャラは今の時代そぐわないからやめとけ」

ユミコは今の時代にそぐわないからやめておけ」

「そんなのイヤよ。わたしは普通がいいの、普通が」

おれはもう普通なんて忘れてしまった。少なくともおれは普通じゃない。

朝烏もそうだ。

彼女は言葉を続けた。

「ドイツの哲学者の言葉よ。孤独は強い人にしか選べない。そういうこと」

「適当に言いすぎじゃないか」

「後は自分で調べなさい、バカ睦紀」

「バカだからきっと調べてもわからない」

「その揚げ足取ったような言い方はセコいわ……しょうがないわね」

彼女は箸を置き、こちらに身体を向けた。

するとおれにビシッと指さした。

「あんた、夢はある？」

「……ないな」

「うわ、つまんない男。わたしはあるわ。友だち百人作ることよ」

「これ笑うところか？」

「笑ったら足踏んづけるわよ。夢とか何かを実現するとき、人は孤独になる。でも孤独はわたしたちが身に染みて分かっているようにすごく辛いもの。それでも何かのために孤独を選び、自分の意思を貫く人は精神が優れている、ってことよ。脆弱な人は群れの中で安心していたいの。孤独を味わうくらいなら自分を捨てた方がいい、ってね」

ツインテール美少女は得意げに指を振って語った。足まで組みだして随分とご機嫌な様子だった。

「で、具体的にどう行動すれば？　精神論じゃないか」

「今回はこれだけよ。全部教えちゃったら取引ができなくなっちゃうわ。この

言葉をよぉく頭に染み込ませて今後の糧にすることね。わかった？」

「……先生の言うとおりにしておこう」

「よしよし、偉いわ」

そうしてまた恐ろしい台詞を吐くのだった。

「次の友だち、早く用意しなさいよね！」

第5話　俊足のぼっちくん

五月某日。

素晴らしい晴天に恵まれた本日は体育祭の開催日だ。

頭上にはギラギラと輝く太陽があり、地面には大きなビニールシートが展開されている。ビニールシートはグラウンドを囲うように敷かれており、生徒らは各クラスごとに固まっている。

おれも胡座をかいて座っていた。周りのクラスメイトたちはスマホをいじったり、お菓子を食べたりして楽しんでいるようだ。元気ある者は応援し、全力で体育祭を盛り上げようとしていた。

ぼっち修行中の式島睦紀は通常通りぼっちを営業していた。すぐにビニールシートから離れられるよう端っこに座り、傍に水筒や荷物を置いて快適な環境を作っている。

「バカ睦紀」

おれの隣でツインテール美少女が体育座りしていた。全く気付かなかった。流石はぼっちの神。その生命の気配すら匂わせない隠密行動はおれにはできそうもない。

「いつになったら次の友だち用意してくれるのよ」

朝烏はいじけたようにシートの砂を指で弾きながらおれに問う。

「そうだな……」

おれは目を閉じて考えるフリをする。もうおれには手札がないのだ。沙月以外に紹介できるのは自分の両親ぐらいしかいない。

どうしたものか。これではぼっちスキルを彼女から引き出せない。

「そうだ。今日、沙月が来てるんだが会いに行くか」

「え!?　沙月ちゃん来てるの!?」

「待ってろ。連れてくる」

「早く！　早く！」

話題のすり替えにうまく成功した。今後彼女が友だちをせがんできたらこういった手を使おうと思った。

家族のいる元へ行き、沙月をゲット。はぐれぬよう手を繋ぎ、朝烏が待っているシートまで連れた。

「あ。ゆりあちゃんだ」

「沙月ちゃ～ん！　沙月ちゃ～～ん！」

朝烏はハグをするでもなく沙月に握手した。外交活動かよ。

「沙月ちゃん可愛い～！」
「ゆりあちゃんはお姫様みたいでかわいいー」
「嬉し～！　沙月ちゃんは本当に良い子ね。お兄さんはちっともそんなこと言わないのよ」
「そうなのー？」
沙月がおれを見上げる。おれは空を見上げた。綺麗な青空だった。
「にぃに。おじーちゃんが大きくなったなだって」
「そうか」
すかさず朝烏が口を挟む。
「あんたのおじいさまも来ているの？」
「いや。祖父母はもう天に召されている」
「あ……そういうことね……」

どうやら祖父が天から降りてきたようだ。まぁ過去に何度か祖父はおろか遠い祖先も沙月の前に降りてきているので今更驚きやしない。

「何か言ってるか」

「けんかしちゃだめだよって言ってるよー」

「誰と？」

「ゆりあちゃん」

「ケンカするほど仲良くないから大丈夫だ」

「そうよ。この男はわたしの手下なだけだから」

先生と生徒の関係じゃなかったか？

ツッコんだところでぼっちっぽくなくなってしまうからスルーしよう。そんな時、アナウンスが流れた。徒競走の選手集合の合図だった。

「行かねば」

「え。あいこ走競走に出るの？」

「え、あんた徒競走上手なの？」

「まぁな」

おれは中学の頃「俊足のぼっちくん」と呼ばれていた。昔から公園で遊んでいたこともあり、駆けっこは得意だったのだ。身体能力は幼少の頃にいかに運動をしたかで決まる。

だからといって立候補したわけじゃない。入学して間もなくの頃に行われた体力測定で足が速いことがバレていたのである。

「べ、別に応援なんかしないけど……み、見てはあげるわ!!」

「朝烏先生。沙月のことを頼む」

「えっ、あ……うん」

ということで徒競走の始まりだ。

周りはいかにも運動ができそうな輩で活気に溢れていた。よくわからない準備体操をし始め、牽制するやつもいる。そんな中ではおれは浮いてしまい

そうであったが、ポーカーフェイスかつ一切身動きしない振る舞いが返って強者感を演出してしまったようで、両脇の選手がちらちらとおれの動向をうかがい始めた。

無駄なことを。おれはただのぼっちだ。

おれのクラスの様子は微妙な雰囲気だった。代表者の一人が謎に包まれたぼっちくんなのだ。当たり前の反応だろう。だが安心したまえ。徒競走の選手はなにもクラスからはおれだけなわけじゃない。後続に期待しろ。

そうしていよいよピストルの音が鳴ろうとしていたときだった。

「頑張れー！　バカ睦紀ー！」

マナーとして、このタイミングで喋ってはいけない。なのに朝烏はそう叫んだ。スタート地点のすぐ横で沙月と手を繋いでだ。だから周囲の人間は彼女を好奇の目で見た。今にも「なにこの人」とでも言いそうな顔だ。

おれは彼女を見て不思議と力がみなぎった。

ほんのちょっとだが、彼女が可哀想だと思ったのだ。その場の全員が彼女を変な人扱いをしている。

朝烏百合愛は普通じゃないが、変ではない。

おれはそれを知っている。彼女はただ友だちが欲しいだけの純粋な女の子だ。ちょっと臆病で人付き合いが苦手なだけなのに、そんな目で彼女を見るのが気にくわなかった。

破裂音、そして一斉に走り出す。

ほどほどに頑張ろうと思っていたがやめだ。

周りがシラケてしまうくらい頑張ろう。おれが勝てばみんな朝烏を見直す。彼女だって傷つかずに済む。だからおれは競馬の馬みたいに足を必死に動かした。

[illegible]

誰かのために走るのは初めてだった。

「バカ睦紀にしてはよく頑張ったじゃない」

ブルーシートに戻るとおれが座っていた場所に朝烏がいた。沙月も一緒でおれの水筒をコロコロと転がして遊んでいる。

結果は二位だった。陸上部にはかなわない。反則だ。

「できれば一位を取りたかった」

「あら。あんたにやる気なんてものがあるとは驚いたわ」

「おれも驚いた。朝烏先生がまさか応援してくれるなんてな」

「あ、あれはその……あんたがひとりぼっちだったから……その……か、可哀想だと思ったのよ」

「そうか」

「そうだ」

気まずい空気が流れる。こういうのがイヤだからおれはぼっちを極めたいんだ。そうすれば変に動揺することもなくなる。今みたいに。

「にぃに照れてるー」

「照れてないぞ、沙月。水飲ませてくれ」

沙月から水筒を取って口を付ける。余計な感情を洗い流すつもりでごくごくと喉を鳴らした。喉から出かかりそうな式島睦紀らしくない言葉を全部飲み込み、脳みそをリフレッシュさせる。

「あんた、ちょっと格好よかったわよ」

霧吹きみたいに吹き出してしまった。沙月はその様子を見て楽しそうにはしゃぎ、朝烏もケタケタと一緒に笑った。

「な、なんなんだよ……」

「バカ睦紀はぼっちにはなれないわね。わたしがいる限りー

「いや、おれはぼっちをちゃんと極める」
「ふふ。どうかしらね」
全く何を考えているのかわからない。
今日一日、朝烏は一段と表情が豊かだった。

第6話　ぼっちを探しなさい。わたしのために！

体育祭が終わってから数日が経ったある日のこと。

本日もぼっちの高見を目指して自己研鑽に励む。難しいことをするわけではない。ただ何もしないだけだ。人間は何もしないのと何にも関わらないことが中々できない生き物である。その両方を平気でこなすことができれば一人前のぼっちと言えよう。

次々と教室に生徒らが登校してくる。顔はわかるが名前は覚えていない。

入学してから一ヶ月が経つというのに。いかにぼっちでいたかがうかがえる。

不幸にも六月九日に結ばれたというのは、しかもおれは女の宿命だ。嘆いている場合ではない。

「わかったわ！　バカ睦紀！」

唯一名前と顔が一致している人物が登校してきた。ツインテール美少女帰国子女（ぼっち）という長ったらしいステータスをお持ちの朝烏百合愛だ。

最近、おれのぼっち活動をちょこちょこ邪魔してくる。

「何がだ」

「わたしに友だちができない理由よ！　やっとわかったわ！」

それはよかったな、と言いかけたところで危機感を覚えた。彼女が友だちの作り方を知ってしまったら、友だちを用意する代わりにぼっちスキルを教えてくれる、という取引が終了してしまう。

おれは恐る恐るその内容を訊いた。

「どういった理由だ」

「みんな定員オーバーなのよ！　これ以上友だちの枠がないのね、きっと。優先席が埋まっちゃってるイメージよ」
「なるほどな」
アホで助かった。おれは安堵して正面に向き直った。
「驚いた？　とっても理論的でしょう？」
「そうだな」
「薄い反応ね。ぷぷ、圧倒されちゃったのかしら」
「じゃあ訊くが、それが本当だとして朝烏先生はこれからどう動く」
「そ、それは……その……適当に動く」
「具体的に」
「う、うるさいわね！　あんたには教えない！」
ぷくっとふくれていじけてしまった。

もし彼女の理論が正しいとしたら、もう友だちを作ることができないじゃないか。それに「友だちの枠」とやらが実際に存在したとして、どうやって見極めるのだろう。まさか「友だちの枠、空いてますか」と質問しまくるわけないよな。そんな質問したら絶対に怖がられるぞ。

当の彼女もそう勘付いていたようで、通常通りぼっちモードに入っていた。何にも興味がないといった感じの光のない目。教室内のどんな物音に対しても微動だにしない無関心。まるで精巧なドールのようだった。

昼になるとおれたちのぼっちっぷりは際立つ。

他のクラスメイトたちは机を寄せ合ったり、教室から出て行ったりしてクラス内の風景を無自覚に変えていく。しかしながらおれたちは固定されたまま飯を食う。仲が良いってわけでもないのに二人セットで。

「……早く友だち用意しなさいよ」

[illegible]

朝烏がぼそっと呟いた。間違いなくおれへの命令だ。

「理論的な方法があるのでは」

「め、面倒だからやらないだけよ。あんた、ぼっちを極めたいんでしょ。用意しないと教えてあげないんだからね」

味をしめているな、このツインテール。

仕方なくおれは考えた。友だちのいないおれに友だちなど用意できないことは十分に理解している。その上で友だちとやらをどこからか引っ張ってこないといけないのだ。非常に厳しい状況だとつくづく思う。

考えていると朝烏の言葉を思い出した。友だちの枠、というやつだ。

「朝烏先生の『友だちの枠』は空いてるか」

「空いてるというかすっからかんですけど……」

「だよな。ぼっちは友だちの枠が空いているということだ。つまり同じぼっちを探せばいい」

を探せばいい」

「ふぅん。でもぼっちなんているの？」

現に二人いるだろうが。目の前に、しかも隣同士で。

「いるはずだ。探したら見つかる」

「まぁいいわ。それで見つけたらどうすればいいの？」

「話しかければいいんじゃないか。きっかけは何でもいい。誰だって最初は赤の他人だ」

「……わかったわ。じゃああんたも探しなさい。わたし一人でやるより見つかりやすいでしょう？」

「断る」

「ぼっちスキル、教えないわよ」

「……わかった」

彼女はニンマリと悪い顔を作った。なぜおれも見つけないといけないのか。

こちとらぼっちを極めている最中なのに人と関わろうだなんて自らぼっちを辞めようとしているものだ。

だが従うしかない。何事も痛み無しに成功はないからな。

それからおれと朝烏は席を立つようになった。

目的はぼっち探し。校内にいるぼっちを探しだし、タイミングを見て意思疎通を図るというクレイジーな活動だ。

早めに登校し、朝はグラウンドや校内を適当に歩く。トイレ休憩時はトイレに行きつつ廊下を何度か往復。昼休みは昼食後に校内散策。放課後は活動しない。ぼっちはすぐに帰宅するため成果が得られにくいからだ。

ちなみに朝烏とは別行動だ。これはぼっち捜索の視野を広げるためである。

それとこの活動をするにあたって彼女から条件を出された。

『同学年の女の子であること。仲良くしてくれそうな人』

同学年の女の子という点はわかる。けれど「仲良くしてくれそう」とはなんだ。めちゃくちゃ主観じゃないか。専門家じゃないと難しいだろ。

なのでぼっち捜索は困難を極めた。

一人でいると思いきや待ち合わせをしていた、一人だと思いきやクラスでは話し相手が何人もいた等々、人は想像以上に他人と繋がっていた。実際に話して相手を知ろうとしない限り、人の関係性は見えてこないとわかった。

朝烏もきっと同じだろう。彼女も毎日休み時間は教室から姿を消し、ぼっち探しの旅へ出た。成果があったかはわからない。

一体いつまで続ければいいんだろう、と思っていたある日。

ぼっちを捜索し始めてから一週間が経過した日の昼に、彼女は唐突に話しかけてきた。

[illegible]

「ほっち、見つけたかもしれないわ」
諦めていなかったのか。半ばサボっていたおれは彼女の熱心さに驚いた。
「良かったな。で、話しかけたのか」
「そ、そんなの無理よ……」
「おれには話しかけられるのにな」
「あんたは人間だと思ってないから平気なの」
冷酷なツインテールだ。
「名前とか、どのクラスか、とかは？」
「わからないわ。でも同学年なのはわかってる。リボンが赤だから一年生よ」
「そうか。応援してる」
「無理って言ってるじゃない！　あんたも手伝いなさいよ！」
「どう手伝えと」
「うーん　そうね。まずはあいこちら見てこうって誰なりかを聞くまでよ

こそ、A……それ、まさかあんたにも見てもらって話なのかを訊くまでもない。ほら、さっさとお弁当食べちゃいなさい」

どうやら今からそのぼっちを見物しに行くつもりらしい。

朝烏はおれを急き立て、弁当を食べ終わると早速彼女の案内で校内を歩いた。そうして到着した場所は校内ではなく外だった。グラウンドを一望でき、昼練に励む運動部員たちの姿が見えた。

「で、どこにぼっちが」

「あそこよ」

彼女の指さす方向は下のグラウンドへと続く階段だった。そこには女子生徒が一人座っていた。長い黒髪でパッと見て身長の高そうな女子だった。

遠目ではよくわからないがぼっち感はある。眼下に広がるグラウンドを眺めながらパンを食べており、包装紙が風に飛ばぬよう石をのせている。慣れ

ているようだ。
「野球部のマネージャーでは？」
「違うわ。あの子、いつもあそこで食事しているのよ。一人でね。校内で見かけたときも一人だったわ」
「ほう」
それなら可能性はあるな。わざわざ外で食事なんて珍しい。教室の方がよっぽど便利なのにそれでも外を選ぶのは居づらさを感じているからだろう。
おれはスマホを取り出してカメラモードに切り替えた。
「あんたスマホ持ってたの？　ぼっちだから持ってないと思っていたわ」
「まぁな。最近のスマホは便利だから望遠鏡代わりにもなる」
「うわ、盗撮とかありえない。サイテー」

「撮影する気はない」

おれは黒髪の女子生徒にレンズを向け、画面をズームした。どうせ知らないだろうが顔をよく知っていた方が彼女を調べやすくなる。顔を覚えたらどこのクラスかを調べよう。

拡大された画面を見ておれは思わず「え？」と声を漏らした。

何度も見たことがある顔だ。おれだけじゃない。多分、この学校の生徒はおろか、日本中がよく知っている顔だ。いつもテレビ画面の中で笑っていて、昔からドラマや映画の中でも登場している。あらゆることに無関心なおれでさえ彼女を知っていた。

彼女は子役として有名な、榊木（さかき）アリスだった。

第7話　榊木アリスの住む世界

「榊木（さかき）アリスじゃないか。この学校にいたとは知らなかった」

おれはスマホの画面内に拡大された榊木アリスを見て呟いた。あんな大物の存在に一ヶ月以上も気付かなかったとは、おれは上級ぼっちだな。

心の中で自分を褒め称えているとツインテールが丸い頭を画面の前に割り込ませた。

「そんなに有名なの、この子」

「おや？　朝烏先生、榊木アリスを知らないのか？」

「えぇ、知らないわ。誰？」

「嘘だろ……おれでさえ知っているのに……流石はぼっちの神……」
「わたし日本と海外を行き来してばかりだったのよ？　昔から流行に疎いの」
「そういや帰国子女だったな。なら無理もない」
おれは軽く説明してやった。
名前は榊木アリス。幼少期から子役として様々な場面で活躍し、現在は現役女子高生としてモデル、テレビ放送はもちろんのこと、映像作品の中でも頻繁に見かける。
実物はテレビで見るより美人だった。大きなつり目と艶やかな黒い長髪、そして大勢が憧れているであろう細身のモデル体型。朝烏もだが、榊木アリスもまた異質なオーラを放っていた。
「ふぅん。人気者なんだー

「大人気だ」

「じゃあぼっちじゃないわね。ふん」

朝烏は腕を組んで機嫌を損ねた。

「無駄な嫉妬はやめておけ。相手は芸能界にいる人間だぞ」

「し、嫉妬なんかしてないわよ！」

「そうか。話しかけないのか？」

「え……む、無理よ。あんたが行きなさい」

「おれが？　なぜ？」

「なぜってそれは……うぅ……」

彼女はぷるぷると震えて視線を下に落とした。悔しそうに赤面して何か言いたげな様子だが口は固く閉ざされ、開きそうになかった。

だからと言っておれが話しかけるのはどう考えてもおかしい。おれは友だ

ちが欲しいわけでもないし、榊木アリスに興味があるわけでもない。

二人して佇んでいると榊木アリスが立ち上がった。すっと背が伸び、風で美しいロングヘアが流れる。

「やばい、来るぞ」

おれは朝烏に警告した。榊木アリスがこちらの方向に歩いてきたのだ。

朝烏はおれの背後に移動して隠れた。おれも対抗して朝烏の背後に移動した。だが負けじと朝烏もおれの背後を取る。意地を張って再び彼女の背後に回る。そんな感じでくるくると回転しながらおれと朝烏は後退していった。他人から見れば変な踊りを練習しているようにしか見えないだろう。

そして遂に榊木アリスがダンス中のおれたちに肉薄した。緊張が走り、おれと朝烏は射貫かれたように固まった。だが榊木アリスは全く興味を示さ

ず、紙パックの林檎ジュースを飲みながら僕を横切った。なぜかおれたちは安堵のため息をついた。まるで逃亡中の犯罪者みたいに。

「サイン？」

聞き慣れた声が背後から飛んできた。ビクッと二人とも肩をすくめて振り返ると榊木アリスがこちらを見ていた。

「ずっとわたしのこと見てたでしょ。サイン欲しかったのかなって思って」

榊木アリスがそう言う。おれは心の中で「朝烏先生、何か喋ってくれ」と言ったが彼女も考えていることは同じだったらしく、肘でつついてきた。おれが何を語れと。無茶ぶりすぎる。

「いや、そうじゃないんだ」

「ふーん。そ」

彼女はくるりと翻って歩き出した。嘘でもサインが欲しいと言っておけばよかったか。いや、それ以降り舌を影うます自言はない。そうそう明鳥が舌

なったな。したら私以降の言を鵜呑みにないそもそも卓鳥な言しかけるべきである。

と、思っていたら朝烏が一歩踏み出した。

「あ、あのっ!!」

両手を握りしめ、彼女は叫んだ。

「サ、サイン欲しいですっ!」

色紙もペンも用意していないのに朝烏はそう言った。少々目頭が熱くなった。あれほど引っ込み思案な彼女が勇気を出して一歩踏み出したのだ。ちょっと感動した。このツインテールは本当に友だちがほしいようだ。

「ごめん。事務所から言われててフリーの時はできないの」

榊木アリスは申し訳なさそうに断り、校舎へと戻っていった。

何だよこのオチ。悲しすぎないか。

春、ツインテールが泣いていた。

榊木アリスにフラれたショックで朝烏は一粒の涙をこぼした。授業中のことである。あれから彼女は虚無状態になり、日頃よりもぼっち感に磨きがかかった。誰も近寄れない雰囲気を醸し出して周囲には冷気でも立ちこめているみたいだ。

そんな彼女の精神状態を案じて授業中にこそっと観察していたらほろりと涙を流したのだ。ただ目薬をさしただけとしか思えないくらい無表情だった。よほどショックだったのだろう。勇気を振り絞った結果がアレだ。繊細な彼女には酷な現実だった。

虚脱状態では色々と困るので授業が終わったタイミングで話しかけてみ

た。

「朝烏先生、気にするな。嫌われたわけではないのだから泣くことない」

「……バカ睦紀。友だちって、何」

「検索した方が正確だ」

「そうね。そうね……」

外はカリカリ、中はふんわり。揚げ物みたいなツインテールだな。

おれは榊木アリスについて調べ始めた。

別にお隣のツインテールが可哀想だったからとか、喜んでほしいとか、どうにか榊木アリスが友だちになってくれないかとか思ったわけじゃない。絶対に思っていない。ただ個人的に榊木アリスのプライベートがどんなものか気になっただけだ。ツインテールは関係ない。全く、関係、ない。

数日にわたり調査した。

榊木アリスは本当にほっちだった。朝鳥が言ったように昼食はあのクラウンドの階段で腰を下ろして昼食を摂り、教室ではつまんなそうに顎に手を添えて外の景色を眺めていた。部活には入っていないようだ。撮影の時間を考えれば当然の選択だろう。

彼女は何となく浮いている気がした。

『あまり近寄ってはいけない存在。生きている世界が違うから』

クラスメイトたちの心情がおれの中に入っている。そして榊木アリスが感じている「退屈」も。感受性豊かでないおれですらひしひしと伝わってきた。

じゃあどうするか。

そんなもの本人たちが一番わかっているだろう。まずは話すことだ。どんな人かわからないから足がすくむ。だから話して知ればいい。できないと駄々をこねていたら一生独りのままだ。

「朝鳥先生。今ご飯食べないか」

「草原先生、外で食べないか」

おれは虚無虚無ツインテール（朝烏百合愛）を誘って外に出た。もはや命令遵守のロボットみたいになっていたため簡単に連れ出すことができた。

行き先はもちろんあそこだ。虚無虚無ツインテールの腕を掴んで歩く。

そして広いグランドを一望できる場所に着いた。

「いいところで飯食ってるな」

榊木アリスが顔を上げる。林檎ジュースに挿したストローを咥え、つまんなそうにおれを見る。

「きみは……あぁ、前に……」

「そう、前に。このツインテールと一緒にきみを見てた」

虚無虚無ツインテールは半歩下がってドギマギしてる。

「変な話だが、自己紹介してもいいか。不審に思うのはわかる。ただ――」

「いいよ。してよ、自己紹介ー

意外にも榊木アリスは友好的な反応を見せ、うっすらと笑みを浮かべた。

そう、これでいい。

これだけで朝烏百合愛の世界も榊木アリスの世界も形を変えていく。少しずつ、鉄筋コンクリートの建物が楽しい学びの場へと変わっていくはずだ。

第8話　お泊まり会に来なさい！

「ちょっとバカ睦紀！　寝てないで起きなさい！」

机に身体を倒して寝ているとお隣さんのツインテールからお声がかかった。ぼっちスキルである「寝ているフリ」を実行していた最中にだ。

「何だ」

「だらしない顔ね。朝なんだからシャキッとしなさいよ。それよりも聞いて」

朝烏は椅子を引きずってこちらに近づき、前のめりになって話を始めた。

「お泊まり会を開こうと思うの！」

目を宝石みたいに輝かせて彼女はそう言った。とてもエネルギーに溢れた

目だ。ぼっちの神とは思えないくらいである。
「榊木アリスとか？」
「そうよ！　ようやく気兼ねなく話せるようになってきたわ。ふん、わたしだってやればできるんだからね」

榊木と朝烏が接触してからもう一週間以上経過したが順調に親睦を深めているようだ。おれはあれ以来榊木と接触していない。故に朝烏と彼女の関係がどうなっているかは全く知らなかった。
「友だちになれたようだな」
「そうね。そ、その別に感謝とかしてないんだからね！　あんたは友だちを用意してわたしはぼっちスキルを教える。これで貸し借り無しよ」
「そうか。感謝してるんだな」
「だ、だから感謝なんかっ……あ、ありがと……とか思ってないし！」

小さな声で彼女は最後にそう言った。素直じゃないツインテールだ。

「それより！　あんたも来るのよ、お泊まり会に」

「断る」

「そ、即答ね……でも来るのよ。もしアリスと言葉に詰まったらあんたが話題を振るの。ピンチヒッターみたいなものね」

「何度も言っているがおれはぼっちを極めようと日々努力している。それを踏まえた上で考えて――」

「はいはいはいキモいキモいキモーい」

本気の説得を遮って彼女はおれの椅子の足をコツンと蹴った。

「実はもう今週の土曜日にお泊まり会をするの。わたしの家でね。ということであんたも来なさい。住所は直前になったら教えるわ」

「おれは行かないぞ。土日は沙月と遊ぶ約束があるんだ」

「そのシスコン体質やめなさい。じゃ、お望み通りぼっち活動に戻りなさい」

ものすごくイヤだ。そもそも言葉に詰まるような心配をするならお泊まり会なんぞ開かなければいいのに。さらに付け加えると、そのお泊まり会とやらの参加者が三人中女子二人というとんでもない構成である。

しかし文句を垂れても意味がない。おれはぼっち。口喧嘩をして教室内で注目を浴びてしまったら本末転倒だ。大人しく従おう。

日をまたぎ、あっという間に土曜日になった。

住所は前日の金曜日に朝烏から告げられ、ネットで大体の位置は調べている。なので迷う心配はないだろう。

休日の午前中から公園以外を出歩くのは久しぶりだった。ちなみに親には友人の家に泊まるという大嘘をついているので問題ない。そんなことは一

度もなかったので怪しまれたが押し通した。

ということで必要品を詰め込んだバッグを背負い、朝烏家まで電車と徒歩で向かった。スマホで位置を確認しながら歩き、住宅街の中でようやく目的地の朝烏家に到着した。

「あ」

「あ」

門の前で榊木アリスとばったりはち合わせた。

気まずいな。榊木と共有できる話題が何一つない。

「えーと……式島くん、だっけ？」

「合ってる」

「よかった。式島くんも呼ばれてたんだね」

「どうやらここは記憶喪失になった

「でもおれのことは気にしなくていい」

「どうして？」

「ただのピンチヒッターだからだ」

榊木は首をかしげた。理解できていないようだが大丈夫だ。おれもよくわかってない。何がピンチヒッターだ。おれは野球すらしたことないぞ。

彼女は女優でもあるのでてっきり派手な格好で来るだろうと予期していたが、デニムパンツ、シンプルなTシャツ、帽子と普通だった。普通じゃない部分もある。スタイルだ。脚がとても長い。

それはさておき。

インターホンを押した。朝烏の自宅は大きな一軒家だった。土地の価値を考えれば相当良い暮らしをしているようである。

『はーい！　行きまーす！』

朝烏らしくない明るい声がスピーカーから流れる。すぐに玄関の扉が開

かれ、パジャマ姿の朝烏が飛び出してきた。相変わらず髪型はツインテールだ。榊木みたいにさらっと流した状態を見たことがない。

「二人ともよく来たわね！　さぁいらっしゃい。お昼は食べてないわよね!?」

「食ってない」

「食べてないよ」

「よーしよし！　美味しいもの用意してるから！」

鼻歌交じりにステップし、朝烏はおれと榊木を玄関に通した。本当に今日は一段と元気だ。さっきからツインテールがウナギみたいに蠢いている。榊木も同じ考えだったようでちょっと驚いているようだ。

なんであれ、朝烏のご機嫌な様子は気持ちが良いものだった。

早速お泊まり会は始まった。

広いリビングに通される。とても清潔感のある空間だった。無駄にモノが

置かれておらず、広告のモデルルームみたいだ。この異空間を前にして、おれは記憶を無くした主人公のように身の回りをあ然としながら観察した。

「何してるのよ、バカ睦紀。早く座りなさい」

ソファで座る朝烏に声をかけられ、やっと我に返った。いつの間にか榊木もソファに座っている。

おれも余所余所しさ全開で近づき、腰を下ろした。テーブルにはいかにも高級そうな寿司の出前がずらりと並んでいた。これが回らない寿司か。律儀に整列してやがる。

「すごいな。朝烏先生何者だよ」

「ただの帰国子女よ。あ、ちなみに両親は国内出張してるから今日はいないから」

「え」

[illegible]

一変な期待したら警察呼ぶわよ。一日あんたはこの家の警備員よ」

実は朝烏のご両親に挨拶しようと菓子折を用意していたのだ。おれはぼっちだが失礼な人間ではない。紳士的なぼっちだ。一泊お邪魔するのだからこういったご挨拶は必要だと思い、良いタイミングでバッグから取り出そうと考えていた。

不在なら不在でいいか。

おれは再び余所余所しさ全開でテーブルへとすり足で近づいた。

座る前、とある写真に目が引き寄せられた。

固定電話の横に立てかけられていた写真。幼少期の頃の朝烏が写っている。泥だらけの手には丸い泥団子。見覚えのある公園。あの鼻をつく砂の匂いが蘇る。

そこに彼女の背後にはかつて別れを告げた。

そして彼女の背後には幼い頃の私と母が写っていた

第9話　ぼっちたちの過去

衝撃的なものを目の当たりにしても寿司は最高に美味かった。回転寿司と何が違うのかおれにはてんでわからないがとにかく美味しい。これが富の味か。

朝烏と榊木はというと、おれのことは気にせず談笑しながら寿司に箸を伸ばしていた。もはやここに式島睦紀という生き物はいなかった。もしかしたら見えていないのかもしれない。まぁドラマでよく見るSPとかも完全に無視されているし、警備員というものはそういう運命なのかもしれない。

いや、そんなことはどうでもいい。

昔、おれは朝烏と出会っていた？

そんな記憶はない。というか小学校六年間の記憶すら危うい。おれは小学生のときからぼっちの神童として圧倒的孤独を確立していたのだ。他人の記憶など残っていない。

ちらっとしかあの写真を見ていないため情報を分析するにはしっかり見るしかない。おれは立ち上がって固定電話が置かれている棚の方を向き、歩いた。

「バカ睦紀。どこ行くの？」

何だと。さっきまで完全無視を決め込んでいたくせに今更認識するのか。

「お花を摘みに」

「あんたトイレの場所知らないでしょ。よく行こうと思ったわね。出て左よ」

「助かる」

尿意などないが言い訳がそれしか思いつかなかった。おれは歩調を遅めた。そして棚の真横で歩いているふりをした。歩いているようで歩いていない高等テクニックだ。その技を巧みに利用して写真を凝視する。

「何やってんのよ……」

朝烏が背後からドン引きしたような声音でそう言った。誰だって同じ反応をすると思う。奇妙に思われない環境はきっとダンススクール教室くらいだろう。

「ムーンウォークの練習だ」

「……は？　と、とにかくわたしの家でやんないで。さっさとトイレ行ってきなさい」

「了解」

時間は全く稼げなかったが成果は得られた。あの写真に写っていた人物は間違いなく朝烏百合愛（ロリ）と式島睦紀（ショタ）だ。

一体おれと彼女の間に何があったんだろう。

おれは改めて自分が何者かを整理した。

名前は式島睦紀。一人でいることに幸せを見いだし自由の素晴らしさを知った男。将来の夢は独身の金持ち。現在ぼっちを極めようとぼっちの神たる朝烏百合愛から技術を学んでいる。

そう、おれはぼっちだ。

朝烏との過去を知ろうとして、その後どうする気だ。ぼっちを目指している男が人間関係の発展を図るなんて言動が矛盾している。

おれは小便を放出しながら考える。

掘り返すのはやめよう。過去に何があっても過去は過去だ。大切なのは今

どうするか、そしてこれからどうするかだ。

気付けばミキサーを手で押さえていた。

容器内には生クリームが容赦なくかき混ぜられている。おれはこの激痛で暴れる生クリームが逃げ出さないよう上から蓋を押さえ、トロトロになるまで心を鬼にした。

「式島くん。イチゴ食べる？」

エプロン姿の榊木がイチゴをつまんだ指をこちらに差し出してきた。彼女は自慢の黒髪を束ねてポニーテールになっていた。

「余りそうだから食べていいよ」

「ありがたくいただこう」

イチゴを受け取ろうとしたらすっと口元に突き出された。おれは困惑しつつ明鳥に目を向けた。許可を求めるべきではないと思うが人っているかと思う

て朝烏は目を向けた。話を変えたれはしょないと思って様子を窺ったのだ。

てっきりニタニタしているかと思っていたが朝烏は大層つまらなそうな顔をしていた。ツーンとした感じで所謂ジト目だ。そんな彼女もエプロン姿である。

ありがたくイチゴをいただくと眉間に皺を寄せて朝烏は不機嫌になった。仲良くケーキを作っているのにケーキが辛くなりそうだ。

「バカ睦紀。早く生クリームよこして」

「わかった」

ミキサーの容器を朝烏に手渡す。どうやらしっかりホイップ状になっているようだ。彼女は指で掬って味見した。

「う～ん、美味しいわね。バカ睦紀も味見してみなさい」

「おう」

真似して指で味見しようとしたら朝烏はおれにスプーンを突き出した。既にクリームがのっている。だが持ち手を持たせる気はないようで、「そのまま食え」と言わんばかりに口元に突き出してきた。

「……？」

「な、なによ、その顔。さっさと味見しなさい！」

片手を腰に添え、ちょっと怒ったような口調で彼女はせきたてる。おれはさっきみたいに榊木に目を向けた。朝烏の行動が全くもって理解できなかったのである。答えを求めて榊木を見たが彼女はニヤニヤするだけでヒントはもらえなかった。

仕方なくクリームを口に含んだ。優しい甘みが脳にまで染み渡る。

「ふふ。餌付け完了ね」

「朝烏先生が何をしたいのか予測がつかない」

「あんたはわたしの従属でもあるんだからたまにはこうして餌付けしないとね。ご褒美なんだから嬉しく思いなさい」

「先生と弟子の関係なのでは……？」

「あんたは弟子でもあり、従属でもあるの。覚えておきなさい」

そうだったのか。数分後に頭を打って記憶を消しておこう。

このお泊まり会は食ってばかりのお泊まり会だ。

寿司を食べ、ケーキを作って食べ、夜になったらお菓子パーティーになった。このツインテールとポニーテールはいつまで食う気なのだろう。朝烏は気にせず暴飲暴食しても問題ないだろうが、榊木は女優でもあるので食事管理とか大丈夫なのだろうか。特にスタイルの維持とか肌の状態とか。

まぁただのぼっちが心配することではない。榊木とは何の関係もない。

と思っていた矢先に対処の難しい環境ができあがった。朝烏が風呂に行っ

たのである。リビングでおれと榊木が置いてけぼりだ。共通の話題がないのでとても気まずい。こういう時は……。

――ぼっちモード、ON。

精神を限りなくフラットにする。外部情報を意識から遮断し、式島睦紀の生命活動しか感じられない状態に移行。たった一人だけの世界を構築する。いや、一人という概念すらない。この世界はおれだけで、一人二人と数を数える概念はないのだ。

そうしてぼっちモードに入り、時間と共に研ぎ澄ましていこうと思っていたら外部情報が侵食してきた。

「式島くん。なんで、一人が好きなの？」

榊木がそう述べた。おれは答えない。だが良心が悲鳴を上げる。

「ぐ、ぐ、ぐ　－

「し　し　し……」
「ん？　蝉の真似？」
　しょうがない。ぼっちモードを切ろう。
「自由だからだ。おれは一人の方が気楽で気分が良い」
「いいなぁ。わたしもそんな風になれたら苦労しなかったかも」
「苦労してきたのか」
「うん。わたし、小さい頃からひとりぼっちだったから」
　そうして榊木アリスは自分の過去を語り始めた。

第10話　約束してね、忘れないで。

榊木アリスは幼い頃から役者だった。

テレビが好きだった幼少期の彼女は純粋な気持ちで親に頼み込み、子役の道を歩み始めた。最初は広告のモデルだった。玩具で遊ぶ幼児を演じ、それから様々な広告に出るようになった。

遂にテレビCMに出演するようになり、それをきっかけにどんどん映像の世界に入り、そしてドラマに抜擢。彼女の演技力はもちろんのこと、可愛らしい容姿も評判で、すぐにひっぱりだことなった。

しかし楽しい日々に陰が落ち始める。

妬み。

年齢を重ねる度に徐々に浮き彫りになってきた周囲の嫉妬。

役者という属性ゆえの誤解、猫かぶり。

人気になればなるほどクラスメイトとの溝が深まった。特に同性からだ。

悩みを打ち明けると榊木の母親はこう言った。

「アリスの理解者はきっと現れるわ。わたしもそうだったから」

彼女はその言葉を信じようと努めたが、うまくはいかなかった。

どうすればいいか、どうすべきだったのか。何もわからなかった彼女は仕事に専念した。専念していれば学校からもクラスメイトからも遠ざかれる。自分が必要とされている場所でもっと彼女は輝こうと思った。そうすればイヤなことに気後れしなくて済む。

そうして彼女はぼっちになっていった。

「だから式島くんのことを聞いて驚いちゃった。一人がいいって人、中々いないから」

榊木は自分の過去を語り終えると煎餅を一つ取ってかじった。テレビで明るいからといって、それが本当の彼女だとは限らない。誰だって複数の仮面を用意してある。おれにもある。沙月を前にしたときの仮面、朝烏と喋るときの仮面、そしてぼっちとしての仮面だ。

「多分、おれは変わってる方だ。無視してもらっていい」

「……本当に一人が好きなの？」

「そうだが」

彼女は一呼吸置いた。腑に落ちていないような目をしているが言いたいことはわかる。自分と同じ状況なのにきみは苦しくないの、とでも訊きたいの

だろう。
「そういえば百合愛と式島くんの関係ってどんな感じなの？　随分と仲よさそうだけど」
「おそらく……師弟関係が一番近いな。朝烏はぼっちスキルをおれに教え、おれは朝烏のために友だちを用意する」
「あ、それでわたしのところに来たんだ」
「気分を悪くさせたらすまない」
「ううん。むしろ嬉しいよ。最近学校楽しいし」
　それなら良かった。おれのぼっち捜索作戦は見事成功に終わったようだ。
「でもいいなぁ、式島くんは。同じクラスに百合愛がいるんだもん。わたしは今でも教室ではひとりぼっちだからね」
「おれは朝烏の友だちじゃないぞ」
「[illegible]

「意固地だねぇ、きみも。百合愛はそうは思ってないかもよ？」
「まさかな」
リビングに朝烏が戻ってきた。ご自慢のツインテールが今はただのロングヘアになっており、ちょっと新鮮だった。学校での彼女は必ずツインテールだったから別人かと思った。生意気な顔は変わっていないが。
「なになに、ふたりとも良い雰囲気じゃない。ムカつくわね。次、アリスいいわよ。バカ睦紀はシャワーだけね。湯煎とか飲んだりしたら通報するわよ」
「そう言うかと思ってしっかり家で入ってきた」
「ふ、ふんっ！　冗談よ。ちゃんと入っていいわ」
ドライヤーでぶわーっと髪を乾かし始め、強制的に会話は終わった。そうこれだ。これがおれと朝烏の薄くてどうでもいい関係だ。
写真のせいで揺らぎつつあるが……。

あれが好きだとか、あれが嫌いだとか、よくわからないＪＫの世間話を語り尽くした朝烏と榊木はようやく就寝する気になったようで、洗顔やら歯磨きを各々始めた。

警備員たるおれは隙を見て邪魔にならぬよう行い、パパッと済ませた。あとは寝るだけだ。

「バカ睦紀はパパのベッド使っていいわ」

「え、使っていいのか。おれはソファでいいぞ」

「構いやしないわ。ただし、わたしたちの部屋に入ってきたらマジで殺すから」

「了解」

「はぁ。本当にわかってるのかしら。まぁいいわ」

わかってるに決まってるだろ。マジで殺されかねん。

ひらりとツインテールを宙で泳がせ、彼女は背を向け寝室へと消えていった。榊木は手を振って「おやすみ」と一言残し、ツインテールと一緒の部屋に入った。

榊木アリス。いいやつだな。

おれも朝烏の父親の部屋に入った。が、すぐに出たくなった。ここもモデルルームみたいにとても綺麗に整頓されていて落ち着かない。貴族の待合室かよ。

ここで寝るのは流石に気が引けたので毛布を一枚拝借し、一人で暗いリビングに戻った。ソファは男一人が横になれる幅があるため快適に寝られる。

ということでソファに横たわり、毛布に身を包んで目を閉じた。

おやすみなさい。

とはいかなかった。

眠れそうにない。やはり他人の家は何かが違う。目を閉じて開いて、また閉じて開いて時計を確認する。時間だけが過ぎていき、一時間、二時間と時計の針はぐるぐる回転した。寝ようとしても寝られない状態は疲労感を生む。頭を無にしようとしても「寝ないと」という思考がこびりついて結局寝付けない。

家に帰ったら昼寝しようと考えていたら音がした。誰かがリビングに入ってきたのだ。

「バカ睦紀」

ツインテールだ。

おれは狸寝入りを決め込んだ。話し始めたらどうしてソファで寝ているのか弁明しなければならなくなる。このまま彼女がいなくなるのを待とう。

冷蔵庫の低い駆動音が響く。食器の当たる音。流れ出る水道水の音。

足音がこちらに近づいてくる。おれは心の中で祈った。早く戻れ、と。

「ふぅ」

あろうことかもう一つのソファに座りやがった。コップが机に置かれた音までしていよいよ面倒なことになりそうだ。

早く戻れ早く戻れと念じ続ける。目を開けてしまいそうなのだ。この暗闇の中で一体何をしてやがるのか。そして何をし始めるのか。

「あんた、本当にわたしのこと忘れたの？　約束したのに……」

おれの呼吸が止まった。

彼女はその一言を呟くと立ち上がり、リビングから去って行った。おれは金縛りにでもなったかのように全身が硬直し、彼女が出て行ったのを確信した後、息を大きく吐いた。まるで全力疾走でもしたかのように疲労感。背中がそう

した後、息を大きく吐いた。まるで今夜初めてもした後のように肺が膨張と収縮を繰り返した。

朝烏百合愛。きみは、何者なんだ。

第11話　やはりツインテールがお隣にいる。

六月上旬。

温かい春から暑い夏へと移行しつつあるこの時期はあることが始まる。

「朝烏先生。いい加減おれの隣からはばばばば――」

朝烏はホースから勢いよく吹き出る水をおれの顔面にぶっかけた。

今日はプール清掃の日だ。水をまきながらブラシでこすって汚れを落とすだけの授業である。みんな体操着で腕や足をまくり、できるだけ濡れぬよう対策している。濡れたら面倒だからな。だがやはり一定層はふざけてブラシで水をかけたりする。

その最もふざけた野郎が朝烏百合愛ことツインテール美少女だった。

「おい、ツインテール。やめばばばばばば――」

直接水をぶっかけるなんて悪行は彼女しかしていない。真面目にブラシで掃除している優秀なぼっちをいじめるなんて中世なら極刑である。

「呼吸できないんだが」

「それはよかったわね」

「よくないが」

ひとりでプールの底をゴシゴシ擦っていたおれの隣に朝烏はいた。いつものことである。ひとりになりたいのに気付けば彼女が隣にいる。

おれは最近、朝烏のことをよく考えるようになった。特別な意味はない。ただ、彼女が何を考えているのかわからないのだ。

あのお泊まり会が元凶だ。彼女はおれのことを以前から知っていて、理由

は不明だが彼女はそのことを隠し、おれと出会った。出会ったときも初対面の振る舞いだった。なので彼女は何かを隠して演技しているのだ。

「朝烏先生。水が足りないからかけてくれ」

「自分でやりなさいよ。ブラシを持って掃除してる風に動いた方が楽だわ」

彼女はおれにホースを渡した。おれは速攻で彼女に水をぶっかけた。いいざまである。お調子者になりつつある彼女への歯止めであり、そして罰でもある。

「サイテー……」

びしょ濡れツインテールの一丁上がり。少年漫画のお色気シーンで使えそうだ。対して彼女はちょっと恥ずかしそうに胸の辺りを隠しながらブラシでおれの脛を殴った。

いてぇ。地味にいてぇ。

おれはぼっちらしく無表情を維持しつつ片膝をつき、痛みが引くのを待った。

黙々と掃除が続く。依然としてツインテールはおれの真横にいる。

正直なところ、やはりおれと朝烏の過去はとても気になる。しかし露骨に訊くのは避けたい。おれが朝烏百合愛という人物に興味を抱いているようで気持ち悪い。おれはぼっちだ。人間など眼中にないスペシャリストだ。

というわけで当たり障りのない質問をしてみた。

「朝烏先生。そういえば入学当初、二週間くらい学校に来てなかったがあれは何かあったのか？」

彼女は高校生活初日も入学式もいなかった。その後二週間も不在だった。

「[illegible]」

「謝ったら教えてあげるわ」
「誰に謝罪を？」
「わたしによ、わたしに。水をぶっかけたことを謝罪しなさい」
「おれへの謝罪は？」
「しないわ」
この世界は狂ってやがる。善はどこで放浪しているのだろう。
仕方なく謝罪することにした。
「水をかけてしまい、大変申し訳ありませんでした」
「ふんっ、許してあげるわ。わたしもその……わっ、悪かったわ」
「え？」
「に、二度も言わないわよ！　今のナシ！」
朝烏はツインテールの片方を持ち、鞭のようにおれを軽くはたいた。
再びブランコで帰余、台りるこ支女は口を開いた。

再てニヨシて掃除し始めると彼女は口を開いた
「簡単な話よ。両親のミス。帰国のタイミング、賃貸契約のタイミング、その他色々とあって二週間も来られなかったの。そして高校デビュー失敗ってわけよ」
「初日から来ても失敗してたと思うがな」
「いちいち余計ね、あんた。で、あんたはわたしがいない間はどうしてたのよ」
「何も変わらない」
「だと思った。あんたが友だちを作ろうとしてる姿なんて想像すらできないわ。もししてたら盛大に笑っちゃうわね」
彼女は胸を張って悪人面を浮かべ、おれを嘲笑した。濡れて透けている下着を自ら強調しているとも知らずに可哀想だ。クソガキツインテールだな。
「ブラジャー透けてるぞ」
「バ、バカ！　もっとそういうことはオブラートに包んで言いなさいよ！　ホ

ントバカ！　バカバカ！」

空白の二週間は特に深い意味があったわけではなかったようだ。てっきり新しい環境が怖くて引きこもっていたのだと思っていた。そこまで臆病ではないか。人に問答無用で水をぶっかける鬼畜だからな。

ぺちゃくちゃ喋るようになったから、お泊まり会までしたから、といって式島睦紀の日常は朝烏の髪型のように変わらない。

登校、授業、ツインテールのどうでもいいお話し、授業、昼食、ツインテールのどうでもいいお話し、授業、放課後、下校。

何ら変わらない。入学当初と一切――いや、余計な時間があるな。

じっくりとおれの日常にツインテールが侵食し始めている。ぼっちの最適

な環境が腐りつつあるのだ。これではいけない。自由は絶対に奪われてはいけない。人間の歴史は「自由の歴史」だ。いつの時代も人々は自由のために戦ってきた。

ぼっちこと式島睦紀は動いた。

「朝烏先生。最近どうだ」

とある日の昼休みに彼女に話しかけた。おれから話題を持ち込むのは珍しいことである。だから彼女も少し驚きを見せていた。

「どうって……あんた何考えてんの？　気味悪いわね」

「最近どうだと訊いている」

「意味分かんないわ。きっしょ」

きしょいとは何だ、きしょいとは。とても傷つく表現だ。

「もう六月になったが友だち作りの方はどうかと思ってな。榊木以降に誰か

友だちはできたのか？」

「……」

「できてないんだな」

「……うるさいわね。思い出していたところよ」

「思い出そうとする時点でいないとわかれ」

「ぐっ……」

このペースでは友だち百人を作る前に天からのお迎えが来てしまう。

まぁ本心としては朝烏の友だち事情はどうでもいい。問題なのはおれのぼっち生活が侵されていることなのだ。それを解決する策として彼女の話し相手を発見することである。

その方法をおれは教えることにした。

「朝烏先生。半強制的に友だちを製造できる環境があるんだが、知りたくないか？」

ないだろ？」
「えっ!?　そんな素敵な場所があるの!?」
「ある。しかもこの学校にもちゃんとある」
「も、もったいぶってないで早く教えなさいよ！　そういうことはすぐに教えなさい！　バカ睦紀もやるときはやるわね！」
　目の色を変えて彼女は迫った。心なしか彼女のツインテールも踊っているようである。
　おれは真面目な声音で呟いた。
「部活だ」

第12話　んもうー！　何なのよあんた！

夕日が差し込み、教室内が穏やかなオレンジに塗り替えられる。教室に残った数人のクラスメイトたちの脚には長く伸びた椅子や机の影が落ち、そしてムスッとした表情の朝烏の顔にも深い影ができていた。

珍しくおれは放課後になっても教室に残っていた。もちろんツインテールのためである。

「部活なんて無理に決まってるじゃない」

「決めつけるのが早いな。話は始まったばかりだぞ」

隣で座る朝烏が速攻で否定する。その意思表示は想定内だ。だからこう

して教室に残り、話し合おうと思ったのだ。
「部活に入れば半強制的に友だちができる。朝烏先生みたいな引っ込み思案なぼっちでもだ」

「そ、そんなこと言われたって無理なものは無理よ。だってよく考えてみなさい。全員知らない人なのよ？　その中に入り込むだなんて恐ろしいわ」
「それでよく高校に入学できたな」
「それはその……まぁなんとかなったけど……部活は違うでしょ。教室より圧倒的に狭いコミュニティじゃない」
　このごね具合は想定外だった。しかし部活に放り込めれば朝烏だけでなくおれにも良いことずくしなのだ。部活で次々と友だちができればその数だけぼっちスキルを教えてもらえる。おれがわざわざ友だちを用意する必要

がなくなるのだ。

「朝烏先生。友だちできないぞ」

「むぐっ……」

「この調子では友だち百人は到底無理だな」

「むぐぐっ……」

時には厳しくしないとダメだ。おれはわざとらしく失望のため息をつき、荷物を持って席を立った。できるだけ見限ったといった感じに、朝烏を焦らせようとした。

結果、効果てきめんだった。朝烏はおれのシャツをがしっと掴み、若干涙目で「いく……」と呟いた。そこまで追い詰めるつもりはなかったので不覚にも罪悪感が胸にこみ上げた。

「じゃ、行きますか……」
「うん……」
やばい。帰りたい。

ぶっちゃけた話をすると体験入部などは絶対にやりたくない。耳が腐り落ちるほど言うが、おれはぼっちだ。人間関係を余計に拡大したくない。
そんな考えを持つおれと怖がりな朝烏ができることは遠くから眺めることだった。とりあえず難易度が低い運動部だ。難易度とはいっても眺める難易度である。文化部は室内ばかりなので無関係な傍観者でいることが難しい。
「朝烏先生は運動できた方か？」
「いいえ」

榊木が昼休みによくいる階段に座り、広いクラウンドで球を蹴ったり打ったりする運動部の連中を二人で眺めた。一体おれたちは何をしているんだろう。まるで安っぽい青春ドラマのドキドキシーンみたいじゃないか。絶対にあり得ないが。

「わたしが仮にマネージャーとして入部したとしても友だちなんかできないわ。あいつらなんか興味ないもの」

「わからないぞ。もしかしたらあの中にツインテール愛好家がいて、一緒にツインテールの良さを語ってくれるかもしれない」

「別にツインテールが好きでこの髪型にしてるんじゃないわ」

「ならどうしてツインテールなんだ？」

問いに対し、彼女は口をつぐんでキッとおれを睨んだ。少し深入りしすぎただろうか。髪型の話だけでそんな表情になるだろうか。女の髪は命、なんて言葉があるくらいだから、これが無礼ごとにあたるかもしれないな。

て言葉があるくらいだから、おれが無神経なのかもしれないな
「……教えないわ」
「そうか。すまん」
「べ、別に謝る必要とかないしっ！　い、今は話さなくてもいいかなって……思っただけよ……」
「顔が赤い」
「うるさい！　夕日のせいよ！」
そんな陳腐な台詞が実際に人の口から吐かれるとは。やはりツインテールお嬢様はなにかとズレている。
はなから朝烏が運動部に入りたがるとは思っていない。一応だ。
しばらく風に当たった後、次は文化部でも見に行こうと提案したが、
「今日はいいわ。バカ睦紀、校門までエスコートしなさい」
と断られた。

早くも部活への強制投獄作戦は失敗に終わった。おそらく明日はない。いや、未来永劫部活はない。そもそも既に六月に入っており、各々人間関係ができあがっている頃だ。入りづらいしついていけない。ましてやビクビクツインテールにとっては茨の道でしかない。

おれは代案を考えつつ朝烏と歩いた。何か、友だちを即席で用意できる手段はないのだろうか。即席ラーメンならぬ即席フレンドみたいな、そんな便利な存在だ。ネット通販あたりでありそうな気もするがもはや人身売買だな。

校門に到着。ようやくこれで自由の身だ。

おれは右向け右をして男らしく背中で別れを告げた。

「ちょ、ちょっと待ちなさい」

朝烏がうわずった声でおれを呼び止めた。振り返ると両足を開き、肩を

少し上げた緊張気味の彼女がこちらに正対していた。
「何だ」
「最近、何かと物騒じゃない？　ほら、つい数日前も大雨がすごかったでしょう？　危ないわよね」
「……？」
「そ、そういうときって何があるかわからないでしょ!?　だから適切な対処を取れる手段を確保しておきたいなって思って……その……」
「警察か消防を呼べ」
「ち、ちがくて！　むぅ～……だからぁ……むぅ……」
何の小動物の鳴き真似をしているのだろう。
「――先知っておかないと……」
「ん？」
「[illegible]

「むぐっ……連絡先！　教え！　なさい！」

彼女は自分のスマホを突き出して息を荒げた。

今まで見てきた朝烏の中で一番顔が赤かった。この夕日以上にだ。この目に映る全ての色の中で彼女が最も赤く、そしてちょっと綺麗だと思ってしまった。

「いや、断る」

「えっ!?　どうしてよ!?　う、嘘でしょ!?」

「と、言いたいところだが交換しておこう。朝烏先生の身に何かあったら困るからな」

「ふ、ふんっ！　そうよ！　わたしに何かあったらすぐ来るのよ」

「気が向いたらな」

「なにそれ!?」

こうして不貞てな手つきで画面を操作こ。土与なハごろ。重各七をハッ

おれは不慣れな手つきで画面を操作した。住所なしだと、連絡先をしるのは両親を追加して以来なんだ。

朝烏に「んもぅー！　機械音痴！　かしなさい！」と怒られながら何とか朝烏百合愛の名前を追加できた。ちっ、ぼっち度マイナスだ。

しかし彼女を見て少しだけ心が和らいだ。画面を見つめて嬉しそうに微笑んでいたのだ。いつもツンケンしているくせに、まるでお菓子を買ってもらった子供みたいに笑みを浮かべていた。

そんな子供っぽい一面を目にし、記憶が微かに波打った。

あぁ、どこかで見たことがある、と。

第13話　あんたがどう思ってるか知りたいだけだし！

『朝烏百合愛です。初めてのメールになります。これからよろしくお願いします』

夜中にそのような文のメールが届いた。それを見たとき最初はスパムかと思った。おれたちは同級生の高校生だ。なぜこんな堅苦しい文面を送ってきたのか本当に謎である。

てっきり「一　応登録したんだからね！　べ、別に深い意味はないんだからね！」みたいな文を送ってくるのかと思ったら。でも皮女っぽいといえば皮女

「このたびは送っていただき、ありがとうございます。彼女にふさわしいとしてふさわしいのかもしれない。きっとメールをどう送ればいいのかわからなかったのだろう。おれだって返信すべきかわからない。

正解は翌日になってわかった。

「なんで無視したのよ」

彼女は登校するやいなや、寝ているフリをしているおれに声をかけた。普通に話しかけるなよ。おれはぼっちだぞ。

「昨日のメールのことか」

「そうよ。折角送ってあげたのに無視とかサイテー。だから根暗なのよ」

「そっちこそアレはなんだ。企業のメールか」

「仕方ないでしょ！　あんたにどう送ればいいかわからなかったんだから……」

どうすべきだったのかは明白だろう。おれはぼっちを望んでいるのだ。言わ

ずもがな答えは出ている。メールを送るべきではなかった。

「今度からは返事する」

「そうしなさい。じゃないと寂しいわ」

「寂しい……？」

「ちっ、ちがうっ！　間違えた！　ムカつくの間違いよ！　忘れなさい！」

「そうだよな。朝烏はぼっちがイヤなんだよな。次からはちゃんと寂しくならないように返信しよう」

「うざぁー!!」

　これでメールの件は終わって再び静かなるぼっちライフが始まると思いきや、まだ続いていた。朝烏が気付かぬうちにお隣にいる現象はもう諦めてい

る。だが隣にいるだけで特に悪影響はない。おれが話しかけない限りは何もしてこない。

今回の問題は視線だ。

ずっと彼女からの視線を感じるのだ。椅子に座っているときも隣から視線を感じ、移動授業のときも感じ、おれの精神の落ち着くタイミングがなかった。まるで監視でもされているみたいだ。

痺れを切らしたおれは昼休みに尋問することにした。

「朝烏先生」

「何」

「午前中にずっとおれを見てた理由は何だ」

「はぁ？　あんた自意識過剰なんじゃないの？」

「いや、絶対に見てた」

「いや、絶対に見てた」

「ぶんっ、キモ」

ぷいっと顔を逸らして朝烏は弁当を開けた。

確実におれを見ていた。休憩時間なんて熱くがっつりおれのことを見ていたから勘違いなんてことはない。

今日一日の我慢と思って堪えよう。そう決めてスマホを取り出し、おれも飯を食おうとすると、また視界の片隅に朝烏の顔が入った。また見てやがる。

「また見てたな」

「み、見てないわよ！　あんただってわたしのこと見てるじゃない！」

「いい加減にしてくれ。もう疲れ――」

わかった。

原因はスマホだ。彼女が目を向けてきたとき、おれはスマホを手元に置いてこちらを、更用 ここと。

ていた。便利してい
そういうことか。メールを送ってほしいんだな。
おれは話を打ち切って文面を打ち始めた。案の定、朝烏はがっつりおれのことを見ている。とてもウズウズした様子で落ち着きがなく、もう隠すつもりがないらしい。身体までこちらに向けていた。
メールを送ると同時に朝烏のスマホが鳴った。彼女はパッと嬉しそうに目を丸くし、早速スマホを取り出して画面に食いついた。
「これからよろしくな、って昨日のメールに返信したつもり？」
「そうだ」
「ふーん」
声は平淡だが表情はにこやかだ。すぐに彼女は画面をフリックし、くふふっと笑って実に愉快そうであった。
そうして彼女はメールを送ったらしく、また目を向けてきた。スマホを確

認するともちろん朝烏からのメールが一件。
『あんたって好きな人いるの？』
思わず朝烏を見た。ツインテールをいじくりながら足を組んでいる。まるでいじわるな女王様みたいだ。靴を舐めなさい、とでも言いそうなくらい。
「どういう意味だ……」
「言葉の通りよ。あんたくらい人に興味がないやつでも好きな人はいるのかなって思ったのよ」
「朝烏先生も女子高生なんだな」
「そうよ。で、どうなのよ。もしかしてわたしのこと好きだったりするわけ？」
「そっちこそ自意識過剰だな。朝烏先生は、ない」
そう言うといつものツーンとした表情になり、つまんだツインテールで机

をぺしぺし叩き始めた。
「ふーん。なるほどなるほど。まぁそうよねぇ」
「次は何だよ……」
「だってねぇ、アリスのことを知ったらそりゃあ好きになっちゃうわよねぇ。あの子、本当に美人だもの。わたしの可愛さなんて敵わないわよねぇ」
「榊木が良いやつなのは確かだ。だがそれ以上の感情はない」
「ふーん」
そろそろ黙らさねば。ぼっちレベルが著しく減少している。
朝烏が怒りそうな台詞を考え、メールを打つ。自意識過剰と言われたので自意識過剰っぽく朝烏の逆鱗に触れる文章を送ってやった。
嬉しそうに確認する朝烏。だが予想通り彼女は顔を真っ赤にした。
「あんたなんか好きじゃないし！　バカ！」

第14話　ぼっちくんはツインテールの水着なんか気にならない。

夏、ぼっちくんは夢を見た。

夢の中で、おれは小さな男の子だった。忘れさられたはずの幼年期の記憶。幼稚園の記憶。竹馬に乗っているおれ、サンタクロースの姿をした園長先生、そして独特な臭いのするランドセル。

時系列の狂った夢の中を長く彷徨い、そうして辿りついた終着駅は公園だった。昼かも夕かもわからない。砂場に手を突っ込み、水をたっぷり含んでチョコレートみたいになった泥をすくいあげる。自分の小さな両足が建設こ

踏ん張っている。誰も、誰もいない。おれはひとりでそこにいた。

いや、誰かいる。

誰だ。おれはその子から泥団子を受け取った。お月様みたいに丸くて、隕石みたいなおれの泥団子とは大違い。

顔を上げると誰もいなかった。

だが、言葉だけは残っていた。どんな声音かもどんな感情が吹き込まれているのかもわからない。感嘆符や絵文字で装飾されていない簡素な文章のように、最低限だった。

『帰ってきたら、また遊ぼうね』

誰かがそう言った。

多分、泣いていたと思う。おれも、その子も。

土曜日の朝。

意識の覚醒とともに不快感が全身を襲う。暑さでべったりと背中が濡れている。最悪の目覚めだ。夏はこれがあるからあまり好きではない。

しかし今日に限ってはこの寝汗は後ほどやってくる快感を増長させることになる。

あえてシャワーを浴びず、朝食やその他色々と済ませ、落ち着いたところで準備を始めた。本来、休日は引きこもるのがおれのポリシーだ。（沙月と遊ぶのは例外）ぼっちはなるべく人と関わらないように生きているので、外出とは地雷原を歩くようなものである。

それでも本日外出するのは出会って二ヶ月程度のツインテールが命令を下したからであった。

「にぃに。どっか行くのー？」

玄関へと向かうおれに沙月が興味を示した。片手には棒アイス、おでこにはひんやりシートを貼り、とても夏らしい風貌をしていた。

「ちょっと運動してくる。沙月は家でゆっくりした方がいい。ぶっ倒れる」

「わかったー。さっき知らないおじさんがにぃにのお部屋の前にいたー」

「なんだそれ、怖すぎるだろ。おれは呪われてるのか？」

「いってらっしゃぁーい」

「そのスルースキル、おれにわけてくれ」

無邪気な沙月に手を振り、外に出た。その知らないおじさんとやらが帰宅する頃には消えていることを切に願う。

外出嫌いのぼっちくんが向かった先は市民プールだ。

夏場の市民プールは老若男女の人間たちが家畜小屋の豚のように身体を寄せ合って泳ぐイメージがあるが、それは猛暑のピーク時だけである。夏

がまだ本気を出していない現時点ではあまり人は多くなく、人混み嫌いのおれでも耐えることができる。

市民プールに到着すると入り口で見慣れたツインテールを発見した。

「やっと来たわね、バカ睦紀」

朝烏は日傘を差して待っていた。ショートパンツにTシャツという模範的夏服だった。これが彼女が最初に見せた私服だ。お泊まり会のときはパジャマだったのでカウントはしない。

「シャキッとしなさい。午前中に気分を上げないと昼の太陽に負けちゃうわよ」

「暑い……」

「暑いのはみんな同じ！　うだうだ言わない！」

「本当に苗字通りの性格をしてるな、朝烏先生」

「ん？　どういうこと？」

「おはよう。」

「早朝のカラスみたいにうるさいって意味だ」

「ふんっ、どうとでも言いなさい。あんただって苗字通りの人間ね。孤島でひとりぼっちの哀れな男よ」

貶(けな)しているつもりだろうがおれにとっては褒め言葉である。

いつまでも口喧嘩をしているわけにもいかないので、先行して市民プールの出入り口を通過した。このまま続けていたら還暦を迎える。

水着に着替え、シャワーを浴び、広々としたプールを前に待っているとようやく朝烏が現れた。自慢のツインテールがお団子に変わっていた。まぁ流石にツインテールで泳がれては他の客も迷惑するだろう。プールに昆布が浮いていると思われる。

「水泳帽は？」

おれは一応訊いた。

「え？　持ってきてないけど？」
「ガチで泳ぐんじゃないのか」
「なんでプールごときで本気出さなきゃいけないのよ。笑える」
いや、笑えねぇよ。
なぜおれたちが市民プールにやってきたかというと朝烏が泳げないからだ。来週から始まるプールの授業で彼女は恥をかきたくないらしく、さらに「格好いいところを見せて注目を浴びたい！」と身の程知らずの願望をおれにぶつけてきた。つまりおれに泳ぎ方を教えろということだ。
「まぁ何となく本気じゃないのはわかってたからいい。そもそもなぜおれに頼んだ。榊木がいるだろ」
「もちろんアリスにお願いしたわ。でも今日は撮影で忙しいらしいのよ。だか

ら仕方なくあんたに頼んだってわけ」

「なるほど。他に友だちっていったら沙月しかいないもんな。でも幼稚園児に教えを請うことはできず、最終手段の何でも屋・式島睦紀に頼んだわけか」

「そうよ。だから勘違いしないでちょうだい。あんたは機密情報がもう守りきれないから自爆するってくらいの最終手段なの」

手段が少ねぇ。もうどうでもいいや。

「それよりあんた、他に言うべきことがあるでしょ？　わたしを見て何か感想ないの？」

そう言うとツインテールはグラビアアイドルみたいにあざといポーズを取った。あえてツッコミはしなかったのだが、このツインテールはなぜかビキニで来たのだ。スクール水着ではなく、ブラジャーみたいな水着とパンティーみたいな水着だ。理解不能である。

本当は泳ぐ気なんて一ミリもないだろ。

単に遊びに来ただけだろ。

だが口には出さない。また無益な口論が始まるからだ。

「良いスタイルしてますね」

「うっわー。あんたが敬語を使うときって大抵脳みそ働かせてないときよね」

「いや、本音だ。朝烏先生は本当に良いスタイルをしている」

「うぐっ。ほ、ほんとうにそう思ってるなら……嬉しいかも……」

彼女は下向きがちになって照れた。チョロいな。

しかしお遊びはここまでだ。ぼっちが人類の蔓延る水場に危険を冒してやってきたのだ。朝烏にはちゃんと泳げるようになってもらう。クソガキどもが無秩序に小便を垂らしまくっているであろうこのプールの中で、サメに負けないくらいの泳ぎを会得させる。

チラリと朝烏を見る。フム、本当に良いスタイルをしている。出るところ

ろはちゃんと出て、引き締まるところもきゅっと引き締まり、とても美しい曲線を持つ肉体だった。

ダメだ、朝烏なんかに興味を持ってはいけない。

ぼっちの孤独な戦いが始まった。

第15話　こんなに近いのに知らないことだらけ。

泳げないと彼女自身から聞いてはいたが、本当に泳げなかった。

実力をまず推し量ろうと泳がせてみた。飛び込みではなく、あらかじめ水中で待機し、スタートと同時に壁を蹴って推進して泳ぐという一般的な方法だ。仮に授業で飛び込みがあったとしてもここでは絶対にやらせない。

ビキニがふっとんで乳が露出する。

十メートルくらいはいけるだろうと思っていたが、朝烏は壁を蹴った瞬間弱れこ。水中で可があっこりかっかっないがとこかく浩い裏ようで水ぶ

溺れた　女は何かあったのだろうかと酷く慌てふた
きが空に散った。
「大丈夫か」
「はぁうわあ！」

おれの肩につかまると沈静化した。息をぜーぜー吐いて既に二十五メートルを泳ぎ切った後みたいな疲れようだ。
「あんた殺す気!?」
「何もしてないが」
「わたしを泳がせようとした!!」
「あぁ、悪かった悪かった」
無茶苦茶な理論だ。
興奮気味の彼女の静め方を知らなかったので素直に受け取り、もっと初

歩的なところから始めることにした。おそらく誰もがやったことのあるバタ足の練習だ。プールのふちを両手で掴み、足をバタバタとさせるアレだ。これができないのならもう知らない。

「無理！　怖い！」

まだやってもいないのに拒否された。

「死ぬ気でふちを掴めば溺れない」

「怖いって言ってるでしょ!?」

「あぁ……わかったわかった。じゃあおれが補助するから。溺れそうになったらすぐ助ける」

両手を差し出すと朝烏は困惑した様子で躊躇った。プライドの高い彼女には難しい行為なのだろう。お子様っぽい扱いだからな。

観念した彼女はそっと手を握ってきた。だが納得はしていないらしく、今

にもきゃんきゃん喚きそうなくらいの恥じらい顔になった。
しかしながらバタ足を始めると鬼気迫るものに変貌した。
「あっぷ！　あぷぷ!!」
顔を水につけないよう必死に上半身を沿り、彼女は足をバタバタさせた。おれは「いいぞ～」と適当に褒めながら少しずつ後退した。推進力を感じろ。そして自分で泳げるようになれ。そう念じながら彼女をサポートする。
何だかいけそうな気がしたため、おれは少し手を水中に下げた。引かなくてもある程度進むだろうと思ったが、朝烏はたちまち慌て始め、おれの手をぐいっと引っ張った。
「近いぞ」
おれの手を放して両肩を掴んだ。確かに安定感は良いが、精神の安定感は非常に悪い。おれは無情なぼっちだが人間だ。美少女の顔がここまで近づ

けは流石に動揺する、しかもぐっと谷間が強調され、そこを伝ったしずくがまた卑怯なくらい官能的で、我がぼっちマインドは大ダメージを食らった。

朝烏も目を丸くして急に黙り込んだ。いつもみたいに罵倒してくれれば流せるものの、今回は乙女の恥じらいといった感じの反応をされたためどうしようもなかった。

「と、とりあえずバタ足は大丈夫そうだから一度休憩にするか。疲れただろ」

「そ、そそそうね。そうね、そうしましょう」

二人ともあがってふちに座った。

両足を水に浸かし、弱い波を愉しむ。子どものはしゃぐ声や木の葉を叩く風の音に耳を澄ませながら時間が流れゆくのを感じつつ、同時に心も落ち着かせようとした。

しかしどうにできない。朝烏が上がってから一つ分り巨雑

したしとうもできない　卓鳥な平女一たらない　振いこうぶしーーク分の距離で彼女も隣に座っており、時々波に揺られて水中で足がぶつかり合う。

彼女も同じことを考えているだろうか。何か喋らなきゃ、と。

ぼっちのおれが率先して喋ろうなどおかしな話だ。いや、おれ自身がおかしい。ぼんやりとだが、おれは彼女に楽しんでほしいと思っていた。

なぜ？

きっと朝烏を可愛いと思ってしまっているからだ。

「水泳も、勉強も、何事も楽しくないとダメだよな」

「……いきなり何よ」

横顔のまま、彼女は瞳だけをこちらに動かした。

「適当に遊びながら泳げば恐怖も吹き飛ぶし、楽しくなって意欲が増すと思ったんだ」

「言ってることは正しそうだけど、結局泳げることなく終わりそうねー

「かもな。でも楽しむことが一番だ。水泳ができないからといって馬鹿にされるなんてことはない。む、むしろ……むしろだな……一部の男子からは可愛いって思われるかもしれない……」

朝烏はくふふっと笑い、上目遣いで顔を覗き込んできた。

「バカ睦紀もそう思うのぉ？」

小悪魔な笑みを浮かべて問う。おれは目を合わせることができず、身体を反って答えた。

「ちょ、ちょっとはな」

「むふっ。じゃ、やーめた。泳ぐのあきらめるー」

「まだバタ足しかしてないぞ……」

「あんた教えるの下手くそなんだもん。もういいわ」

まだ泳ぎ始めてから三十分も経っていないのに早すぎるだろ。だが指摘

したところで彼女は素直に聞き入れやしない。
早くもお開きかと思いきや、立ち上がった彼女は中腰になっておれに手を差し伸べた。垂れた前髪を細い指で梳き、また小悪魔な笑みでおれのぼっちマインドを撫でてきた。
「わたし、あんたが笑ってるところを見たことがないわ。わたしがその固い表情を溶かしてあげる。だ、だから……一緒に泳がない……？」
どうして、そこまで踏み入ってくるのだろう。彼女が何を考えているのか全くわからないからずっと疑問符が増えっぱなしだ。
それでもおれは彼女の手を握った。
あぁ、わかる。
この手を知っている。
一緒に遊ぼう。
、、、、、、

ひとりなの？
わたしもひとり。
また、会えるよね。
また、会おうね。

断片的な言葉たちがこそばゆく耳奥で囁く。
いつも手を差し出されていた。おれはいつも下を向いて一人で何かをしていたから、あの子を見上げてばかりだった。
「わたしに見とれちゃった？」
「なわけあるか」
もしかしたら、運命ってやつかもしれない。

明日はうれしをぼっこさせたかった。

卓哉はおれをほったらかしにしなかった

流れのあるプールでも傍にいたし、ちょっと深めのプールでは手を繋ぎ、ウォータースライダーでは滑り終わった後も待っていてくれた。

彼女は心の底から笑っているようだった。学校ではみたことがないくらいのとびっきりの笑顔で、とても楽しそうだった。不思議だ。人の笑顔で心が安らぐなんて。

「中々笑わないわね、バカ睦紀」

「おれには表情筋がないんだ」

散々遊び尽くし、疲れが出てきたおれたちはパラソルのある席に座った。

それにしても目のやり場に困る。正面に座る彼女は両手を顎で支え、その間にはご自慢のツインボールが覗きみえる。お餅みたいテーブルの上でとろけ、お休みのようである。スクール水着を熱望するなんて、人生何があるかわからないな。

おれは邪念をなぎ払うため、気になっていたことを話題に持ち出した。

「朝烏先生」

「うん？」

「どうしていつもおれの隣にいるんだ？」

おれのお隣にはいつもツインテールがいる。何度か過去に訊いてきたが彼女はいつも濁してばかりで真面に答えてくれなかった。

でも今なら答えてくれる気がした。いつになく心を開いてくれている今なら、本心を見せてくれると思った。おれも真摯に彼女の目を見つめた。

朝烏は数秒の沈黙を挟むと手をテーブルに置いた。

「ぼっちになってもいいことなんてないわ」

彼女ははっきりとそう言い、そして古い記憶をその大きな瞳に蘇らせた。

一秒にも満たないその時間の中、彼女は過去を振り返り、そして語る過

去を選定した。

「今度教えてあげる。わたしの過去を」

おれはその日よく寝付けなかった。

彼女を苦しめたと思って、胸の動悸が止まらなかった。

第16話　誰だって繋がりがほしいのよ。

「だって……だって好きになっちゃったんだもん！　どうしようもないじゃん！」

榊木が苦しそうに叫ぶ。今、この場で崩れ落ちてもおかしくないくらい彼女の足腰は震えていて、捨て身覚悟の勇気を振り絞っているのだと伝わってきた。

おれがぼっち修行中の身でなかったら感涙していただろう。根っからの女優気質なところに感心した。これが天才というやつだろう。

「はぁ～流石というか、本当に榊木は演技がうまいな」

「ふふーん。コツがいるのよん、コツがね」
昼休みにグラウンドの例の階段に行き、榊木と会っている。おれの隣にはあのツインテールはいない。今日はそのことで榊木に接触を図ったのだ。

「泣く演技はどうやってるんだ？　泣こうと思って泣けるようにはできてないだろ、おれたち」
「それもコツ。わたしの場合は悲しいことを思い出して、全力でその時の心理状態を再現するの。そうすればいくらでも泣けるよ」
「感情が豊かなやつにしかできなさそうだ」
「そうかもね。式島くんには厳しいかも」
含み笑いをして彼女はそう言った。もちろん無理だ。
「それで、突然どうしたの？　演技が見てみたいってどういうこと？」

「話のきっかけがなかったから無理なお願いをした。気を悪くしたら申し訳ない。朝烏のことでお願いがあってな」

「百合愛？」

本日、朝烏は学校を休んだ。教師からは体調を崩したという話があったが、おれはあのうるさいツインテールが風邪を引くとは思えなかったので一応彼女が大好きなメールを送った。すると「あたまぐわんぐわん、やばい」と本当にやばそうな返信が来た。親はいるのかと再び訊くとまた不在らしく、家でひとりぼっちならしい。

別に朝烏が心配だとか、辛そうにしていないかとか、ちゃんと飯は食えているのかなど断じて思ってはいないが、彼女がくたばってしまったら色々と困るので苦渋の決断で様子を見に行くことにした。

という状況を榊木に説明した。

「おれ一人で行くのは気が引けてな。榊木が来れば喜ぶと思って……」

「なるほど。というか百合愛大丈夫なの？」

「まぁ多分大丈夫だろう。本当にマズかったら自分で救急車を呼べるくらいの常識はあるはずだ」

「そっか。でもごめん、今日撮影があって……」

「あ、そりゃ仕方ない。悪かった、困らせるようなこと言って」

彼女が大人気の子役ということを失念していた。

「ううん、いいの。式島くんって意外と優しいんだね。人に興味ないって感じだからあれれ？　って思っちゃった」

「朝烏に倒れられると野望の実現が遠のく。それがイヤなだけだ」

全てはぼっちを極めるため。それに基づいて日々を生きている。

[illegible]

別れ際、榊木が財布を取り出して千円札を手渡してきた。

「ごめん、これで百合愛のためにドリンクとかお腹に優しいもの買ってあげて。お釣りはもらっていいから」

「何か悪い気がする……」

「いいのいいの。あとキスもしてあげてね。元気になるかもよ？」

「榊木は慣れてるかもしれんが、おれは死んでもやらんぞ」

彼女は軽快に笑って否定した。

「わたしキスしたことないよ？　ドラマでもないし」

「事務所NGってやつか」

「ううん。パパNG」

「娘思いの良い父親だな」

「変な人ごなごなー

「変なこと言わないでよね」

自分の娘がどっかの男とキスしてるだなんて親は想像もしたくないだろう。おれも知り合いの同級生がキスしてるところなんて生々しくて見たくない。

放課後になったら急いで学校を出た。

親には少し遅くなる旨を伝え、朝烏家に向けて足を急がせた。夜遅くまで出歩いた結果補導されるなんてことはごめんだ。不良ぼっちほど馬鹿馬鹿しいぼっちはいないからな。

朝烏家付近に到着し、最寄りのコンビニでゼリー、ドリンク、その他食べ物を購入した。そしていよいよご家庭訪問だ。

インターホンを鳴らしてから三十秒後くらいに声が返ってきた。

「はい……」
「おれだ。式島睦紀だ」
「……は？　なんであんたが……」
「朝烏先生の容態を教師から見てくるよう指示された」
　嘘である。一切言われていない。
「そ、そう……」
「食い物等も買ってある。差し支えなければ上がってもいいか」
「……ん、いいわ。開いてるから入ってきなさい。部屋で待ってる」
「了解した」
　許可が下りたので門を通り、玄関を開けた。靴は一足だけ置いてあった。朝烏のだろう。そういえば彼女の部屋はどこだったか。お泊まり会の際はお邪魔しなかったからわからない。

「朝烏先生。来たぞ。どこだ」
「……ここよぉ」
呻き声が聞こえた。おれはその声の方向へと足を進め、ノックして入った。
「生きてるか」
「わからないわ……」
「よし、生きてるな」
朝烏はベッドに入り、顔だけを出していた。顔はほてりにほてって、サウナに長時間入った後みたいだ。
「これ、榊木からの差し入れだ。栄養剤とかも入ってる」
「ありがとう。もらっておくわ」
「今日はやけに素直に感謝するな」
「あんたに向けてじゃないもの。アリスへよ」
「羽[illegible]

「納得した」

彼女は身体を起こそうとしたが、おれは止めて傍の小机に置いておいた。

「病院には行ったのか？」

「いいえ。でもこれくらい寝てれば治るわ。疲れが出たのかも。あんたとプールではしゃぎすぎたわね」

「ぼっちらしくないことをするからだ。おれみたいに孤独に歩め」

「バカね。そしたらわたしたち無関係になるでしょ」

どうやら彼女はおれと無関係になりたくないらしかった。人との繋がりを求めている少女にぼっちの教えを請うなんて、本当に変な話だ。

「……ありがとう、バカ睦紀」

「やめろ。気味が悪い」

「人の善意までイヤがるなんてどうかしてるわ」

二人の言葉言ってンヤたるなんてとっしもないれれ」

「かもな。大丈夫そうだからおれは帰るぞ」

そう言い残して、おれは部屋から出ようとした。冗談を言える余力があるのなら明日には治っているかもしれない。きっと彼女の言ったとおり寝ていれば復活する。

だが、彼女は聞いたことのない声を出した。

「ダメ、帰らないで」

榊木が作品の中で出すような甘えた声で朝烏はおれにそう告げた。驚いて振り向くと彼女は毛布で顔半分を隠し、こちらを見つめていた。

「寂しいの。ダメ」

「……いや、帰っておこう」

「――ダメ」

彼女は立ち上がろうとした。そうさせるわけにはいかないので両手で制

止した。
「わかった。わかったから寝てろ」
「うん……ごめん、ありがとう。その代わりに話してあげる。わたしの過去」
「無理するな」
ベッドに腰掛けると彼女は手を差し出してきた。最初はどういう意味かわからなかった。飲み物でも取って欲しいのかと思い、再び立ち上がろうとすると手を握られた。荒く息を吐き、ちょっとした動作でも彼女にとっては重労働。それでも彼女は強くおれの手を握った。
安堵したように微笑むと彼女は語り始めた。とても柔和な声で。
「ずっと、誰かと繋がりがほしかった――」

第17話　別にツインテールなんて興味はない。

物心ついた頃から様々な土を踏んでいた。

湿り気のある土、乾燥しきった砂っぽい土、灰っぽい土。それらが違う国の土地だったことに気付いたのはわたしが学校に通い始めてからだ。

両親の教育方針から、わたしは母語の日本語と生活で困らぬよう英語を教えられた。英語は便利だった。大抵の国では伝わるし、英語話者向けの案内が親切に用意されていることが多い。

つまり、が一番困ったのは人間関係の希薄さだ。両親の仕事の都合上、主

わたしが一番困ったのは人間関係の希薄さだ。両親の仕事の都合で住む場所を転々と変え、そのたびに環境は変化した。最初は楽しかった。けれど徐々に落ち着きを求めるようにもなった。他人が知人という枠を超えることはなく、友だちを作ることが全くできなかった。

年齢を重ね、自我を獲得すると今度は人種的な面倒ごとが発生し始めた。東洋人の珍しさ、多民族国家における派閥、国ごとに違うスクール内の立ち振る舞い。わたしはそれらに翻弄され、そしてぼっちになった。

いや、自らぼっちになった。バカ睦紀みたいに、人と関わるよりひとりでいた方がだいぶ楽だったから。それからずっとわたしはひとり。黙っていてもちょっかいをかけてくるやつはいた。でもわたしは無視して、銅像みたいに傍観した。

このリセットを繰り返し続ける日々は中学生になって節目が見えた。

わたしの「日本に帰りたい」という要望を両親が聞き入れ、ようやく一定の場所に長く居続けることになった。

行ったり来たりを繰り返した日本。懐かしい土の匂い。

わたしは日本で高校生になった。

「で、あんたと出会ったってわけ」

彼女は微睡んだ目でおれを見つめて語った。お姫様用みたいな大きなベッドの中で横たわり、手はずっと握られたままだった。彼女が最初に語った「誰かと繋がりがほしかった」の通りに繋がっていた。

「わたしはずっとひとりぼっちだった。親は仕事で忙しいし、クラスメイトはすぐに変わるし。心のよりどころはなかった。だからずっと……寂しかった」

ぎゅっと手を握られる。
「バカ睦紀。ぼっちを目指すなんてこと、やめときなさい。苦しいだけよ。どう足掻いてもわたしたちは血の通った人間だもの。絶対的な孤独に耐えられるようにはできてないわ」
彼女は細々とした声で忠告した。今にも眠りそうで目蓋が重そうだ。
おれは毛布をかけ直し、もう寝させようと思った。話すことにカロリーを使うより、療養にカロリーを使ってほしい。それでも彼女は我が儘なお嬢様みたいにぷくっと頬を膨らませて睨んだ。
「……帰らないでよ」
「冗談言うな」
「バカ……ありがとう」
「朝烏先生らしくないな」
[illegible]

これたしだって、こういうときもあるわ……」

弱っているとツンツンしないらしい。いつもは棘を添えて感謝するくせに今は簡単に感謝の言葉を漏らす。調子が狂いそうだ。

おれは部屋から出る前、一つ気になったことを訊いた。

「なぜ、日本に帰りたかったんだ」

彼女は日本に帰りたいとは言ったがその理由は語っていない。

そう問うと彼女はまた彼女らしくない反応を見せた。恋をガソリンにして奔走する乙女のごとく、桃色に紅潮する顔を毛布で隠して眉をひそめた。

「どうしても会いたかった人がいたの……」

おれはそれ以上訊かなかった人が誰であれ、おれは多分下衆な思いをしてしまう。ごかうコを開ざして部屋を出た。

クラス恒例の見世をしていこうかなと口を開こうとして部屋を上が
榊木も苦しめられた「嫉妬」。それと、「困惑」も。

夏、ツインテールがいた。

真っ白なシャツをつまみ上げ、メモ帳を団扇代わりにして空気を入れていた。扇ぐ度にツインテールが揺れ、そして彼女の女の子らしい柔らかな匂いがふんわりと鼻を撫でた。

「朝烏先生」

「何よ」

「友だちできたか」

「ぐぬっ……い、いま頑張ってるところよ」

つまりできそうもないということか。

そろそろおれも本腰を入れて友だちを用意しないといけない。彼女から

教えられたぼっちスキルはまだ二つしかない。精神論と眠ったふりだ。これだけでは常に寝ている寝不足人間でしかない。

ぼっち捜索作戦は最近行っていないようであり、先日行った部活の見学もあれ以来やってない。

「どうしたものか……」

「どうしたって、何のこと？」

「朝烏先生の友だち事情だ。ぼっちスキルをもっと教えてもらわないと困る」

「あんたまだそんなこと言ってるの……いい加減キモいわよ」

「言い出しっぺはそっちなんだがな。さてさてどうしようか……」

次の授業に向けて脳をリフレッシュしなければいけないのに面倒だな。お

れは眉間を揉みながら考えた。
「あんたさぁ……もういいわよ。わたしがいくらでも教えてあげるから」
「何だその心意気は。友だち百人作るんじゃなかったのか？」
「死ぬまでに百人できればいいわ。それよりも、これ知ってる？　スノーホワイトジャイアントパフェ！」
クソ。それじゃあおれがぼっちを極められないと説明しただろ。
朝烏はスマホを持って椅子を移動してきた。上機嫌な顔で詰め寄ってきて彼女の息づかいまで聞こえてくる。
「ちょっと聞いてる？」
「あ、あぁ。なんだ？」
「だ、か、ら、これ！　スノーホワイトジャンボパフェ！　食べてみたくない!?」
「太るぞ」

こは～失礼ね～！　わたしの水着姿見たでしょ？　これでもスタイル維持のためにちゃーんと考えてるんだから」

ぼんやりと彼女の身体が思い浮かんだ。出るところがちゃんと出て、余分な脂肪のないスレンダーな体つき。

やばい、表情が歪みそうだ。おれは自分の頬を叩いた。

「あ、わたしのこと身体想像した？　ばーかばーか」

「するか。そのパフェ食いたいのか？　付き添ってくれってんなら構わない」

「あれ、てっきり断られるかと思ってたわ。ちなみにアリスも誘い済み。今日は大丈夫だって」

「了解。じゃ、放課後な。ぼっちモードに入る」

「はいはい、勝手にぼっちになってなさい」

放課後になると神木と合流し、三人で目的の店へ向かった。

放課後になると柚乃と合流して目的の店に向かった

朝烏と榊木はぺちゃくちゃ話ながら歩き、おれはイヤホンをして歩いた。秘技・会話拒否。これはぼっちじゃなくても日常的に使える技だ。例えば洋服店。話しかけてくる店員に対して事前にNOを突きつけられる。オススメだ。

ちなみに聴いている音楽はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの第九。これを聴いているとぼっちの威厳さが増す。孤独へ打ち勝つマインドをセットできるのだ。

「あんた何聴いてるの？」

そう言って朝烏がイヤホンの片側を取って自分の耳に付けた。

「交響曲第九番。いいもの聴いてるわね。散々聴いたわ。ほら、着いたわよ」

到着したのはファミリーレストランだった。それも沙月が大好きなレストランだ。お子様ランチを頼んでは毎回ライスに刺さった小さな国旗を嬉しそ

うに持ち帰っている。
店内に入り、店員に案内されてテーブルへと着く。朝烏と榊木は隣同士、おれは向かい側で広々と座った。
「ねぇ、バカ睦紀。気付いた？」
「何がだ」
「さっきの店員よ。うちのクラスメイトよ」
「そうなのか。生憎、クラスメイトは朝烏先生しか覚えていなくてな」
「記憶力なさすぎでしょ、あんた」
おれは全力で記憶を遡ったがダメだった。
朝烏は神妙な顔でおれに囁いた。
「あの子もぼっちっぽいのよ。気になってたのよね」
どうやら次の友だちをロックオンしたらしい。

第18話　ショートカットの雀が雨宿りをしていた。

ぼっちのパターンはいくつかあるがおれは珍しい部類に入る。自らぼっちの沼へと足を突っ込むタイプだ。誰かに突き飛ばされて沼へと沈むのでもなく、無自覚に足を突っ込んでいるわけでもない。

「お待たせしました。スノーホワイトジャイアントパフェになります」

女性店員が縦長の巨大なパフェを運んできた。朝烏曰く、彼女は同級生かつクラスメイトらしい。おれは彼女の顔に覚えはないが確実らしい。

そんな彼女はおれと同じタイプのぼっちだ。

そして改めて見ると、彼女はおれと同じクラスの女
「ごゆっくりどうぞ」
お客様用の声だがおれにはわかる。普段はあまり喋らず、囁き声のような細々とした声で受け答えする無感情系ぼっちだ。
彼女が去ると朝烏は再びずいっと前のめりになって話しかけてきた。
「あんた本当に覚えてないの？　いるでしょ、あの子」
「覚えてないな。だが何となくわかった。彼女はおれと似ている」
「あんたとあの子がぁ？」
「あぁ。おそらく、おれと同じ考えを持っていると思う」
そう言うと朝烏はむすっとした態度を取ってソファに背を持たれた。その態度に対して榊木がちょっかいをかけた。
「あ～百合愛妬いてるの～？」
「ちっ、違うわよ！　誰に妬くのよ！　別にバカ陸紀にムカついてなんかない

わ！」

「とか言っちゃって～。百合愛はすーぐ思ったこと口に出すんだから」

「うるさいうるさい！　ほら、食べるわよ！」

おれは二人の様子をまじまじと観察した。本当に二人は変わった。出会った頃とは大違いだ。朝烏は人形のように生気を感じられなかったし、榊木は今にも泣き出しそうなくらい寂しそうだった。

そんな二人が今はコロコロと表情を変え、元気よく声を出している。変わろうと思えば変われるんだな、ぼっちの女神でも。

「な、何よ。そんなに見ないでっ、バカ睦紀！　あんたも食べなさい。とっても美味しいんだから！」

長いスプーンを手渡され、自分の分を取るよう顎で示された。

おれは立ち上がって適量取り、幸せいっぱいの笑みを浮かべる二人を横目に一口食べた。うまいな。思わず彼女らみたいに笑顔を作ってしまいそうだった。

食べながら店員に目を向ける。

あの子が気になる。彼女がどんなことを考えてぼっちとして生きているのか。しかし本当に考えが同じだったら声をかけるわけにはいかない。おれ同様、人と関わるのを避けているはずだ。

また彼女が通り過ぎた。

ショートカット。小柄な少女。姿勢の良い背筋。丁寧な足運び。

実に上品なぼっちだ。やっぱり参考にしたい。

「いてっ」

テーブルの下で朝烏がおれの足を蹴った。

「あんたさっきから誰見てるの？」
「あのクラスメイトの女子だ。気になってな」
「き、気になるって……!?　どうして!?」
「おれと似てるからな。話してみたい」
「はぁ？　あんたとあの子がぁ？　やめときなさい。わたしが許可しないわ」
「やけに口を出すな、今日は。イライラしてるのか？」
「あんたといるといつもイライラしてるわよ！　バカ！」
ならどうしておれの傍にいつもいるんだ。そういう趣味なのか？　自分を苦しめて快感を得るタイプの特殊性癖持ちだったのか？
スノーなんとかパフェはどんどん減っていき、遂に底をついた。
会計の際も例のクラスメイトが担当してくれた。割り勘で預かったお金を精算している最中もおれは観察した。やはり彼女は同類だ。人との関係を望む色こうこ、ている意思が見える。上及ぼっうりうれこまっかっこ。

を自分の組とすることを意味する」組ぼっちのおれにはれたった
「わたしはもう帰る。バカ睦紀！　あんたはわたしと友だちを探していればいいの！　あんたはぼっちをひたすら極めなさい！」
「言われなくとも極めるが、この前言ってなかったか？　ぼっちはやめとけって」
「……言ってない。言ってないもん！」
「そういうことでいいか」
　ツインテールを左右に揺らめかせ、彼女は早足で去って行った。とりあえず今夜メールしとくか。メールを送った次の日の彼女は大抵機嫌がいいからな。
　二人残されたおれと榊木は顔を見合わせた。
「式島くん。百合愛の真似するね」
　そう言うと榊木は両手で後ろ髪を分けて持ち、朝烏みたいな不満げな表

情を作った。こっちもこっちで変わってるな。

「あ、あんたがわたしから目を逸らすなんて許さないんだからねっ！　別に好きとかそんなんじゃないからっ！　勘違いしないでよ！　でもあの子のことを好きになったら……そのときはぁ……うぅ……」

すごい、朝烏っぽいぞ。涙までセットだ。

「朝烏がそう思っているとは思えんな。それにしても演技が上手い」

「ふふ。パラレルワールドの百合愛だと思ってくれればいいよ。でもどうする？　本当にそんなこと言われたら」

「病院を勧める」

「式島くんらしー。ま、一応応援してるよ」

何のことかさっぱりだが受け取っておこう。榊木も背を向け、手を振りな

がら去って行った。綺麗なモデル体型なものだから群衆の中でも際立っていた。通り過ぎざまに後ろを振り返る通行人が何人もいた。

そんな彼女と話しているなんて今でも時々信じられない。

最近信じられないことだらけだ。おれはここ数ヶ月、人生の中で他人と最も多く言葉を交わしている。特にあのツインテールと。おかげで顔面の筋肉が悲鳴を上げている。

けれどまだ口を動かさなければならない。あのショートカットが気になる。

その機会は数日後にやってきた。

いつにも増してツインテールが傍にいる頻度が多かった。それと距離も近い。真っ直ぐに歩かないと彼女とすぐぶつかってしまうくらい近く、まるで張り付いているようだった。

[illegible]

「朝烏先生、近いそ」

「あんた目悪いの？　全然近くないわ、ばーか」

いやいや、二の腕が当たっている感触があるのだが。そちらこそ視力を矯正したらどうだ。眼鏡ツインテールも中々可愛いかもしれないぞ。

こんな距離感ではあるが言葉数は少ない。ただ隣にいるだけだ。あぁ、ぼっちになりてぇ……気まずい。朝烏のことを考えてしまう。

そんな恋人みたいな日が終わりかけていた夕方。

突然雨が降った。天気予報にはなかった突発的な雨だ。しかしながら優秀なぼっちたる式島睦紀は対策済みだ。常に折りたたみ傘を用意しているため問題なし。

教室で朝烏に別れを告げ、おれはひとり昇降口に向かった。

雨の音が聞こえてくる。昇降口では傘を持ってきていなかった生徒らが雨宿りをしていた。その中に女友がいた。最近覚えたこのヨーメンクソ少女

宿いをしていた。その日は彼女たちは最近覚えた……――ナ、――の少女――

静かなるぼっち。

雀（すずめ）　玲音（れいん）

雨（レイン）の中を孤独に旅する雀のよう。

全員が雨を見上げて止むのを待っているのに彼女は静かに下を向いていた。

第19話　カラスとスズメは仲が悪い。

人は名前の通りに育つのかもしれない。

朝烏百合愛が良い例だ。朝のカラスのようにやかましい。榊木アリスも名前から漂う女優感の通りに育っている。

昇降口で雨宿りしている雀玲音（すずめれいん）も同じだ。雀のように小柄でどこか哀愁がある。さらにこの雨（レイン）だ。彼女の持つ儚さがより際立ち、この雨が止めば彼女は消えてしまうんじゃないかと思わせられる。

一体、何を考えているんだろう。

彼女は手提げ鞄を両手で持って前に提げ、じっと下に視線を落としてい

た。誰かを待っているのだろうか。それとも周りと同じく雨が静かになるのを待っているのか。おれは靴を履き替えつつ彼女の様子を窺った。

ふと思った。彼女はファミリーレストランでバイトをしている。先日、朝烏と榊木で行った際に偶然発覚した。その時間は大丈夫なのだろうか。

（待て待て、おれはぼっちだぞ……）

助けようと考えるな。率先して人に関わりにいこうだなんて朝烏みたいじゃないか。しかもおれと同類のぼっちにだ。話しかけてほしくないのはおれが一番分かってる。

おれも雨宿りすることにした。雀玲音との距離は僅か一メートルほど。折りたたみ傘をバッグにしまっているのに変な行動だ。好奇心がおれのぼっちポリシーを打ち破った結果だった。

生徒らは徐々に減り始めた。諦めて雨の中を駆けていく者、友人の傘の中

に入れてもらった者、迎えの車に乗っていった者と様々。誰もが誰かとの繋がりを使ってこの場から去って行った。

それらを持っていないおれと雀玲音はまだここにいた。

いつまでここにいようかと考え始めた頃、

「式島くん」

と、小さな声が雨音に交じって聞こえた。おれは雀玲音に目を向ける。彼女は首だけを回しておれを見ていた。

「どうして、わたしを見ていたの……」

罪を咎められたみたいだった。おれは確かに数日間彼女を観察していた。気付かれぬよう注意していたのだがまさかバレていたとは大失態だ。

彼女の問いに対して嘘は少々気が引けたので、本当のことを明かした。

「おれと同じタイプの人間かと思ったんだ」
「どういう意味……」
「自らぼっちの道へと進んでいる。おれの勘違いだったら忘れてくれ」
我ながら気持ち悪いことを言っている。ただの不審者だ。変質者だ。おれがもし通常タイプの人類でこんな意味不明なことを言われたら速攻で逃げているだろう。
雀玲音は再び前を向くと今度は空を見上げた。すると雨音が弱まった。水溜まりの絶え間ない波紋は途切れ途切れとなり、そして遂には止んでしまった。
雀玲音は一歩踏み出し、空を確認するとおれに目を向けた。
「そんな自覚、ない」
一言残し、彼女は校門へと歩いて行った。

決まりだ。本物だ。彼女は天然のぼっちだ。

ぼっちの種別を付けるとすればこうだ。

朝烏百合愛　ぼっちの女神（模範的孤独を演出する美少女）

式島睦紀　上級ぼっち（苦悩しつつ孤独を求める男）

榊木アリス　悲劇のぼっち（卑しい悪意による被害者）

ご覧の通りぼっちにも種別がある。

朝烏は人付き合いが苦手ゆえにぼっちとなり、おれは自由を求めてぼっちとなり、榊木は人間の悪しき心によってぼっちとなった。

そして彗星の如く現れた雀玲音。彼女に称号を与えるならば、雀玲音天然のぼっち（人に興味を持たない最強のぼっち）

になる。

となる。

彼女はぼっちの中でも最強だ。おれのような上級ぼっちが苦しむ孤独感が、人より遙かに薄いのだ。つまりおれやツインテールが苦悩する寂しさをあまり感じないのである。特に特殊なマインドセットを行っているわけでもないのに。だから天然（ナチュラル）なのだ。

その思わぬ事実を知った日の翌日。

登校してきた朝烏におれは報告と助言をしてやろうと話しかけた。

「朝烏先生。雀玲音のことだが……」

「ふんっ、何よ。人と関わらないとか言ってるくせにあの子に興味津々じゃない。わたしのことは邪険にするくせに！　大体ね、どうしてあんたがあの子の話をするのよ。最初に話題を提供したのはわたしでしょ？　あのレストランで！　スノーホワイトジャイアントパフェを食べたとき！　それがどーしてこうなっちゃったのかしら。もしかしてあーいうお淑やかな子が好みってわ

け？　はっ、笑えるわ。まぁそうよね。あんたとちょっと似てるもの。無表情で笑ったことがなさそう。何考えてるかわからない。あーつまんないのー。つまんないつまんなぁーい！」

今日は一段と喋る。カラスでもここまでガーガー鳴かないぞ。

雑に鞄を机の横に提げると彼女は腕を組んで黙りこくってしまった。いつもの「話しかけないで、バカ睦紀」という態度である。こうなってしまったらどうしようもないのでおれもぼっちモードに入った。眠るか。秘技・寝たふり。

不機嫌スタートを決めた彼女だが超常現象はいつも通りだ。

体育、プールの授業。

この授業は男子と女子に分かれる。本校のプールは他校と比べても広いため、同じプールを半分に分けて使用する。授業の大半は泳ぎの練習で、夏休み前に行われる試験に向けてみな遊び半分に頑張る。その真面目な時間

が終わると余った時間で各々遊んでいいことになる。これをみな楽しみにしている。

そしてこの時間になるといつの間にか傍にツインテールがいるのである。

毎度毎度ご苦労様。

「泳げるようになったか」

「ま、ちょっとだけね」

死体のように浮いていたおれの元に朝烏がやってきた。まだ溺れるのが怖いのか、おれを浮き木代わりにして手を掴む。そのせいで顔が沈んだ。

「朝烏先生。死ぬ」

「あらごめんなさい」

そう言って水を顔面にかけてきた。なんてイジワルな野郎だ。

他のクラスメイトのようにはしゃぐ元気のないおれたちは水から上がり、

プールサイドに座った。誤解を生まぬよう言うが、朝烏から隣に座ってきたのだ。こんなラブラブカップルみたいなワンシーンは望んでいない。クソ、体育教師のニヤニヤとした目が強烈に痛い。

視線を泳がすと雀玲音の姿が目に入った。彼女は体育着で日陰で体育座りしていた。何だか彼女らしいな。

彼女を見ていると朝烏が手を目の前に振って妨害してきた。

「ちょっとー、女の子の水着見過ぎですよー、バカ睦紀ー」

「なぁ、どうして女子はよくプールを休むんだ？　やっぱり恥ずかしいという気持ちからなのか？」

「……あんたふざけて言ってる？　それセクハラよ」

「え」

「ナイテー。ヒヒハ、フズ、ロソヒ、バカー

「キンモチ　キモチいイ　イン　ニャ　ノカ」

朝烏はジト目で次々と罵倒用語を連発した。後で調べとくか、女の子について。

朝烏の心地よい罵倒を聞いていたら陰が落ちた。背後にはまさかの雀玲音。おれは驚き、朝烏は敵意の目に切り替わった。

「式島くん。校外学習、一緒の班になってくれる……」

唐突なお願いにおれは言葉を失い、朝烏は「ハァー!?」と激高した。

神は、ぼっちたちにどんな試練を与えようとしているのだろう……。

第20話　ツインテールは喜怒哀楽でお忙しい。

校外学習は七月上旬に行われるイベントのことだ。

内容は自然と地域文化の学習。一泊二日の短期間だ。そのイベントに向けて三人から五人の班を作れと教師から指示されており、雀玲音はきっとそのことを言っているのだと思う。

おれはその班作りに関しては余り者同士でいこうと思っていた。というのも余り者同士になれば自然と単独行動になるため、おれが求めている自由を得られるからだ。

を待ち構えるなんて
まさか雀玲音から誘われるなんて明日は地球に巨大隕石が降ってくるんじゃないか？
「ハァアア!?」

朝烏はキレ気味に威圧し始めた。水泳帽を脱ぎ捨て、収納されていたツインテールがびろーんと下に伸びた。
「朝烏先生。なぜ怒る」
「怒ってないわよ。ちょっと黙ってなさい」
彼女はおれの額をツンと指で押すと雀玲音に向き直った。
「お生憎様だけど、こいつはわたしと組むって決まってるの。他を当たりなさい」
「朝烏先生、初耳なんだが」

「だ、黙ってなさいって言ったでしょ！」

「誘われたことも誘ったこともなかったんだが……」

　すると彼女はおれの両耳を掴んで顔を引き寄せた。鼻先が当たりそうなくらい肉薄し、彼女は「話を合わせなさいっ、バカ睦紀っ」と声を抑え気味にご命令を下した。

「なら、わたしが最初。式島くん、どうなの……」

　断る理由なんてない。むしろ雀玲音とはしっかり話してみたかったので好都合だ。良い返事をしようとしたら朝烏が手でおれの口を塞いだ。まるで殺し屋がうるさい子どもを黙らせるかのように、後頭部までおさえて彼女は冷たい目で言った。

「わたしと同じ班になりなさい。いいわね？」

おれはこくんと頷いた。拒否したらこのまま窒息死させられていただろう。

望みの返答をもらったであろう朝烏はニッコリと笑顔を見せ、そして再び雀玲音に向き直った。

「あら、ごめんなさいね。バカ睦紀はわたしと組むの。他を当たってもらえるかしら」

「あなたに話しかけてない」

「くっ、何よそれぇ！　あんた何なの!?　あ、わかったわ。あんたバカ睦紀のこと好きなんでしょ。ふふーん、残念だけどこいつが人を好きになることはないわ」

「おれだって人間だ。好きにも嫌いにもなる」

「ちょ、あんたどっちの味方なのよ！」

[illegible]

敵も味方もないだろう、戦場じゃあるまいし。

遅かれ早かれ結局ツインテールと組んでいたと思う。いつも通りおれの傍にひっついて、班決めの期限が迫った頃に顔を見合わせて「組む？」となっていただろう。

「朝烏先生。おれと組んだとして、残り一人はどうするつもりだ。最低でも三人だ」

「ぐぬぬ……」

「あてがあるのか？　榊木は他クラスだから選択肢に入らないぞ」

「ぐぬぅ……」

朝烏は一切言い返せず、悔しそうに握りこぶしを作った。もう決まりだ。

「雀さん、組もうか」

「あリがとう」

「あいたよう」

過去最速で班作りが終わった。

その日以降、雀玲音と話すことは一度もなかった。

校外学習の日にどんな行動をするかとか、どうしておれを誘ったのかとか、そんな気さくな話はしなかった。というかできなかった。雀の纏う雰囲気はやはり天然のぼっちそのもので、人に興味が全くないといった感じだった。そんな相手に声なんてかけられない。

朝烏とは話をした。彼女から度々話を持ちかけられ、一日一日が過ぎていく度にその頻度は増加した。かなり楽しみらしい。友だちができるかもしれないと期待しているようだ。

「別にあんたの好みが知りたいってわけじゃないけど、あんたってどんな服が

好きなの？」

校外学習が始まる前日。

いつにも増してご機嫌なツインテールが昼休みが始まって早々話しかけてきた。

「それって、おれの好みを知りたいってことか」

「ち、ちがうわっ！　知りたいってわけじゃないって言ってるでしょバカ！」

「その後におれがどんな服が好きかって訊いてるだろ……」

「いちいち細かい男ね！　いいから答えなさい！」

しかしそんなことを訊かれても困る。女性のファッション事情に詳しくもないし、おれ自身どんな服が好みか自覚していない。なのでぼんやりと朝烏のことを思い返した。確か市民プールに行ったときだ。あの服装は良かった

気がする。

「市民プールの時の……」

「プール？　……って、もしかして水着で来いって言いたいわけ!?　バカ！　変態！」

「違う。あのときの朝烏先生の私服が個人的に好きだった」

「えっ!?　……ちょっとメモするわ」

「あれは可愛いと思った」

「ちょ、突然褒めないでよばかぁ……」

彼女は片方のツインテールでおれをはたいた。本当に変わってしまったな、朝烏。最近ぼっちの女神らしいところを見られなくて残念だ。

だが幸運にも雀玲音が現れた。もしかすれば彼女からぼっちスキルを得られるかもしれない。まだまだぼっちの高見は遠のいていないな。

ーーーーーーーー

その日の夜。

自室で明日の準備をしていると沙月が入ってきた。

「にぃに。家出するの？」

「いや。ただのお泊まりだ」

「また百合愛ちゃんのところ？」

「今回は学校のみんなとだ」

沙月も床に座り、服をたたんだりして手伝ってくれた。なんて優しい妹なんだ。これくらい朝烏が優しい女の子だったらいいのにとつくづく思う。そうすりゃいくらでもお喋りしてやる。

そして夜中だというのにスマホが鳴った。もしや思考が盗聴されているのか？　朝烏からの着信だった。

「式島だ」

『こんばんは、バカ野郎。うやうやしく準備はどこ？　お風呂とか歯磨きとか、寝

「こんばんは、ノナ睦紀、女子と逢瀬はしたか？　お風呂とか寝る前のルーティンワークは終わった？』

「おれの母親かよ」

『明日の朝は早いのよ。しっかりしてちょうだいね。遅れて来られなくなったら困るわ』

「おれがいないと辛いもんな」

『そ、そんなわけないじゃない！　あんたがいなくっても……と、とにかくしっかり寝なさいねっ！』

鼓膜に優しくないソプラノがスピーカーから響いた。

通話は切れた。よっぽど朝烏は明日が楽しみらしい。

「にぃに、百合愛ちゃん？」

「あぁ。明日が待ちきれないって」

「ふぇ～わたしもいきたーい。あ、おじーちゃんだー」

おれの部屋に死んだじいさんだと。やめてくれ、すごくイヤだ。高校生の部屋に居座るとかデリカシーがなさすぎるだろ、うちのじいさん。

「何か言ってるか」

「うーんとね。まだ赤ちゃんは作っちゃダメだってー。百合愛ちゃんとー」

「二度と現れるなって伝えてくれ。現れたら墓を破壊しに行く」

「にいに、赤ちゃんってどうやってつくるのー？」

「鳥さんが運んできてくれるんだよ。もう寝なさい」

「あーい。ぽやしみ～」

おれが朝烏に好意なんか抱いてるわけないだろ。

べ、別にただ隣にいるだけだろうが……。

第21話　ぼっちたちの成就させたいこと。

夏休み前の最後のイベント、校外学習。とうとうその日を迎えた。

我々一年生は朝七時に学校に集合し、あらかじめ決められた観光バスへと次々に乗り込んだ。そしてここから一時間ほど揺られる。朝が早かったので良い睡眠タイムだ。

おれの隣はもちろんツインテール美少女・朝烏百合愛だ。事前に教室にて行われた席決めで、おれが席を選ぶと速攻で彼女は隣を選んだ。いつものことなので特に気にしなかった。ただのクラスメイトが来るよりかは気まずくなくてよかったと思う。

だが乗って早々ハプニングが起きた。

「むぅ～……」

朝烏は朝に弱い。彼女は登校時間が遅く、常に朝は眠そうにしている。そして今日は普段より活動時間が早いため、その分朝烏の眠気もグレードアップしていた。当然バスに乗るなり彼女は寝始めた。

ここまではいい。いけないのは彼女が寝始めた途端、おれの肩や胸を枕代わりにして頭を乗せてきたのだ。丸い頭を擦り付け、ご自慢のツインテールをおれの身体に乗せ、すやすやとおねんねした。

ぼっちモード、ON。無感情状態へ移行。

――平穏。

早まっていた鼓動が安定していく。

――激情。

朝烏の寝顔がとてつもなく可愛い。

――静寂。

燃え上がる魂が冷えていく。

――熱情。

柔らかい感触が体表面を癒やしていく。

ダメだった。心が乱れに乱れて不安定だ。

そのせいでおれは人の目を気にする一般人に成り下がってしまい、クラスメイトが好奇の目をしていないかと身体がビクビクし始めた。しかし幸運にもおれは通路側の席。隣のクラスメイトにはバレなさそうだ。問題は斜め前方のやつだ。後ろを向かれたら終わる。

おれは小声で「朝烏先生、朝烏先生」と呼び、肩をそっと揺らした。

「んぅ、睦紀ぃ……」

初めてそう呼ばれた。

おれは言葉を失い、おそるおそる彼女の顔を覗いた。いや、寝てるじゃねぇか。

意識のある状態で、そんな艶めかしい声で下の名前を呼ばれていたらきっとパニックになっていた。そんなの朝烏らしくない。彼女はちょっとイラッとするお嬢様がちょうどいいのだ。

「離れたくないよ……」

また寝言だ。

おれは閃いた。寝言に話しかけると言葉が帰って来るというしょうもない噂を聞いたことがある。

一度は胸の奥底にしまった好奇心を再び呼び起こした。

「[illegible]

「おれたち……ずっと昔に出会ってたが……？」

チラつく過去の記憶。沙月ではない誰か。その誰かといるおなじみの公園。朝烏の家で見た写真、そしてその日の夜に聞いたあの言葉、「約束したのに」。

きっと知ったらおれと朝烏の関係は大きく変わる。多分、師弟関係なんてぶっちぎってもっと濃い関係になる。そうなったらおれたちはどうなるんだろう。そんな期待も込めておれは訊いた。

目と目が合った。

朝烏は自分が何をしていたか気付くとぷるぷると震えて顔が赤くなり始めた。女神様のお目覚めだ。

「キ、キスとかしてないわよね……？」

「するかアホ」

「アホって言うなし！　もぅ……ちょっと気を抜きすぎたわ。あんたも寝ておきなさい」

そうご忠告した朝烏は次はちゃんと窓ガラス側に身体を寄せて寝始めた。

おれの問いは聞こえていなかったようだ。やっぱり訊かなくていいか。大切なのは今、そして今後どう朝烏と付き合っていくかだ。

五分後、結局朝烏はまたおれに寄りかかった。おかげさまで寝ることができなかった。

旅館に到着し、荷物等を部屋に置いた。顔も名前も覚えていないクラスメイトと一緒だが問題ない。

その後すぐに学習タイムが始まった。

「わたっ！」

朝烏がバランスを崩して転びかけ、おれは反射的に彼女を支えた。

「足場が悪いからな。気を付けろ」

「なんで山登んなきゃなんないのよ～！」

我々一年生は山中にある大きな神社に向けて長い石段を上っていた。他にも観光客が多く、ここが有名どころなのだと無知でもわかった。

石段の両側には背の高い木々が立ち並び、目にも優しく空気も美味しい。自分たちの生活がいかに排気ガスにまみれた環境であるか思い知らされる。

朝烏の服装は短パンとパーカーだったため、転んだら怪我をしそうでハラハラする。その白い生足から鮮血が流れている様子を目にしたら貧血を起こしそうだ。

「でもいざとなったらバカ睦紀がお姫様抱っこしてくれるから大丈夫ね。おんぶはダメよ。その……色々と当たっちゃうから……」

「する気ないが」

「サイテー。あんたは思いやりってものが欠如してるわ」

「ぼっちだからな。興味がないんだ」

「ふん。わたしの足とかさっきからジロジロ見てるくせに。ほら、あんたが好きな短パン露出女になってきたわよ。感謝くらいしなさい」

「はい、ありがとうございます」

棒読みの感謝でも彼女は嬉しそうに「うしっ」とガッツポーズを作った。

雀玲音はというとおれたちの背後を少し遅れてついてきていた。まだ一言も彼女の声を聞いていない。

「あんたはお守り買うの？」

「ん？　いや、

「ん？　何のことだ」
「この上にある神社に質の良いお守りが売ってるのよ」
「なんだ、質の良いって……」
「多分効果が強力ってことじゃないかしら。あんたならどんなお守り買うの？」
「どんなのがあるか見てからだな」
　このツインテール、事前に調べてきたな。
　ちょうどいいので後ろにいる雀に話題を振ってみた。
「雀は買うとしたらどんなお守りにするんだ？」
　俯きがちに歩いていた雀は顔を上げ、少し遅れて口を開いた。
「わたしも、見てからにする」
「ごな。どこなりがるかつかないっこ

こんなのだまされないし」

その同調にツインテールは表情を曇らせた。すると彼女は無言でおれの服を掴んだ。いじけた幼児がほんの少しの愛情を求めて母に縋りつくみたいに。朝烏を敵に回しているわけじゃない。敵だったらおれの隣にいるのを許すわけないだろ。

なんてことを伝えられるような格好いい王子様ではないので、おれは謎の罪悪感を覚えつつ石段を上り続けた。

そうして到着した神社。

参拝客や外国の方もいて人が多かった。さらに我々も追加だ。これから祭りでも開かれるのかってくらいの人数になった。敷地が広かったのが唯一の救いだ。

ガイドさんの説明が終わるとそれぞれ自由行動となった。

おれはぶらぶらと敷地内を散策し始めた。萎れたツインテールと。

「そうだ。お守りでも買ってみるか」

「！　そうね、行きましょう！」

元気を取り戻した彼女はおれの手を引いて売店へと導いた。

売店にはお守りはもちろんのこと、よくわからないお土産物もたくさん売っていた。他の同級生たちも興味津々に眺めている。

「おれはこれに決めた」

学業成就のお守りだ。高校生は学業が本文である。ぼっち活動も大事だが未来に通ずるのはやはり学業だ。

お隣のツインテールはというと頬をほんのり染め、とあるお守りを握っていた。

「どれにしたんだ？」

「……」

答えてくれないので同じお守りを探した。なんと恋愛成就のお守りだった。

「おいおいマジか」

「……な、なによその反応！　わたしだって乙女なんだから恋くらいしたっていいじゃない！」

「朝烏に好かれたやつはかなり苦労しそうだ。運命の人に出会えるといいな」

「うるさいわね……もうとっくに出会って――」

突然ビンタされた。理由はわからない。彼女は顔を真っ赤にし、もはや熱中症寸前だった。

「忘れなさい!!」

[illegible]

「安心しろ、今のピンタで全部忘れた」
「あぁあああなんかもうわたし今日ダメかもー!!　ああ!!　いやぁあ!」
ジタバタしだして狂乱した。もう本当にダメかもしれない。
彼女がツインテールをぶるんぶるん揺れ動かしている間にお守りの会計を済ませていると、おれの隣に雀が立った。手にはお守りが握られている。
「お、雀も買うのか。何のお守りだ」
「成功成就」
細い声で彼女は呟いた。少し言葉を続けてみよう。
「何か成功させたいことでもあるのか」
「……ピアニスト、になりたい」
それはおれが初めて知った雀玲音の考えだった。

第22話　あんたが寂しがると思ったから言ってるの！

賽銭箱の前に立って手を合わせる。正しい作法なんざ知らん。手を合わせて頭を下げていればとりあえずはOKだろう。こんなので神や仏やらが「作法が違ぇぞ」と激怒するならこちらから願い下げだ。そんな気の短い神など滅んでしまえ。こっちはお金まで払ってるんだ。五円だが。

隣で目を閉じて強く念じる朝烏も作法はわかっていないようだった。しかたあるまい。彼女は帰国子女だ。様々な宗教と文化を肌で感じ、頭の中でぐちゃぐちゃになっているだろう。

女子くらいはなっていた。

そんな帰国子女ツインテールの隣にはピアニスト志望のショートカットが立っていた。雀玲音はお辞儀をして拍手をしてと正しそうな作法を丁寧に行っていた。

将来金持ちぼっちになれますように。

おれは心の中でそう願った。貧乏なぼっちは悲劇だが裕福なぼっちは明るいハッピーライフだ。誰にも縛られず、大抵の物事はお金で解決できる。自由の象徴にでもなろう。

「あんたはなんて願ったの？」

朝烏が興味津々な様子で訊いてきた。

「将来金持ちになれますようにって願った」

「うわぁ。なんて卑しいやつなの、あんた」

「そういう朝烏先生はさぞ素晴らしい願いなんだろうな」

「そ、そうよ。わたしは世界の子どもたちがみんな幸せになりますようにって願ったわ」

「嘘が下手だな。どうせお姫様になりたいとでも願ったんだろ」

「う、うるさいわね……あんたに言えるわけないでしょ……」

正直興味がないのでこれ以上は訊かなかった。おれは自由にしか興味がない。朝烏に対しては早く友だち作れとしか思っていない。別に最近可愛いなとか全然思ってない。

自由行動が終わると一行は下山し、また観光バスへと戻った。

次の到着地は古風の民家が建ち並ぶ村のような観光地だ。昔の日本人がどう過ごしていたか、どういった建築なのかを学ぶ。

ガイドさんの案内で古民家に入り、いろりやかまどを実際に体験し、その

他風土や歴史を学んだ。朝烏は興味深そうに目をキョロキョロ動かしていた。海外暮らしに慣れた彼女には物珍しかったのだろう。

そうして自由行動となり、みな散らばっていった。今回は迷子にならぬよう極力グループごとに行動するよう言われたので、おれ、朝烏、雀は一緒に動くことになった。

「二人は回ってみたいところあるか」

朝烏と雀に訊く。おれは特にないので彼女らの願望に従うことにした。

「あんたについていくわ。わからないし」

「式島くんに任せる」

そう言われても困るな。おれだって鉄筋コンクリートに囲まれて生きてきた現代人だ。おれだってわからない。

だが折角訪れたのだから回らないのはもったいない。

[illegible]

「じゃあ適当に歩くか。思わぬ出会いがあるかもしれないしな」

おれたちは迷子みたいにぷらぷら歩き始めた。お隣にはツインテール、背後にはショートカット、とトライアングル状に歩く。

眺めているだけでも意外と楽しかった。この血に流れているであろう先人たちの遺伝子が懐かしさに喜んでいる。生まれてちょっとのおれでも懐古できるとは驚きだ。

急に朝烏がおれのTシャツを掴んできた。何事かと彼女を見るとぷいっと目をそらされた。

「トイレか？」

「違うわよ、変態っ。迷子になったらイヤでしょ」

「確かに朝烏先生が迷子になったら泣き喚きそうだもんな」

「あんたが迷子になるのーっ！　っこ、この寛大な思いやりに感謝しなさ

「あんたな迷子になるの　……私の寛大な思いやりに感謝しなさい！」

素直じゃないな、普通に迷子になりたくないって吐露すればいいのに。

彼女が仮に迷子になったとしてもすぐ見つかるだろう。こんな特徴的な髪型をしているのだ。現代科学の結晶・スマートフォンもある。お互い使いこなしてはいないようだが電話くらいはできる。

しばらく歩いていると朝烏はそわそわし始めた。さっきから落ち着きがなく何度もおれに目を合わせようとチラチラ横目で視線を求めてきた。気のせいだろうと無視していたが無視できないレベルになってきたので、寛大な思いやりを持つおれはまた訊いてやった。

「トイレ行きたいなら一緒に行ってやるって」

「違うしっ！　その……あんたに相談があって……」

「相談？　珍しいな」

朝烏から相談されるなんて本当に珍しい。おれに頼ることを避けている彼女だ。まさかここで弱気な部分を出すとは、ちょっとキュンとするじゃないか。いや、嘘だ。別にキュンとしてない。

「夜、同室のクラスメイトとうまくやれるか不安なのよ……」

「あぁ……そうだよな……」

流石の朝烏でもおれの布団の中で一夜を共に過ごすなんてことはしないはずだ。もし入ってきたら弾き返す。色々とマズい上に教師から激烈指導を受ける。

朝烏の性格を考えれば若干気の毒に思えた。彼女はかなりの引っ込み思案だ。そんな彼女がクラスメイトが蔓延る狭い環境の中に放り込まれるなんて酷な話だと思う。おれに関しては問題にはならない。夜は温泉とマッ

サージ機がある。眠くなったら戻ればいい。

「頑張れ、なんて無責任なことは言えないが……自分が想像している以上に人間は他人を拒んだりしない。誰しもが孤独を嫌うからな。仲良くしてくれるかもしれないぞ」

「あんたはどうするの……？　男友だちなんていないでしょ？」

「どうもこうもしない。好き放題やるさ」

「そう……」

お悩み解決にはならなそうか。だがおれにはこれくらいしか言えない。

「あんたがよければ……一緒にいてあげる、よ？」

彼女はぼそっと呟いた。

何だよ、それ。なぜそんな期待に満ちた目でおれを見る。なぜそんなに瞳を潤わせる。なぜ、そんなに生き生きとしている……。

――朝烏百合愛は人形のような少女だった。

高校生活が始まっても姿を現さず、やっと現れたと思ったら全く喋らず、席を立たないぼっちだった。精巧な人形――美しいアンドロイド。おれはそう思っていた。そして羨望の対象としていた。彼女のようになりたい、と。

だが時は流れ、彼女は人間になった。笑いもすれば泣きもして、躊躇いなくおれに感情をぶつけてくる。

喉が渇いた。

いつもならすぐに返答できる。「おれはぼっちだぞ」と言って軽くあしらうことができる。けれど今回は違った。彼女が言葉に含めたある種の感情のせいで、おれの魂が彼女への同調を求めた。

朝烏に寄り添ってあげろ。

朝烏に向き合ってやれ。

朝烏に深く入り込め。

朝烏に優しくしろ。

朝烏を受け入れろ。

せき止めていた気持ちが膨張し、孤独という大きな壁に亀裂を入れる。おれはこのダムが決壊せぬよう努力してきた。

けれど、少しだけ放流する必要があるかもしれない。おれが壊れてしまう。

「寂しくなったらな」

彼女はふふっと笑って脇腹を小突いてきた。実に変な雰囲気だった。でも居心地がよかった。欠けていたピースがやっと埋まったようなそんな安心感、満足感、安堵感。人はこの関係をなんて言うんだろうか。

奇妙な雰囲気は唐突に終わった。足を止めて朝烏と額を見合わせる。普

通に道に迷ってしまった。おれたちに連絡を取れるクラスメイトはいない。この役立たずなスマホめ。

「道、覚えてる」

背後にいた雀が呟いた。そうだった、雀もいたのだ。

彼女の存在に気付いたと同時に羞恥心がこみ上げた。今までの変なやり取りをずっと見られていたのだ。

死にたくなった。孤独に。

第23話　湯けむりツインテールは上機嫌。

午後は基本的にフリーな時間が多かった。

午前中は歩きまくるイベントが多かったため、その配慮だろう。座って眺める系の学習時間が多く、その中でも足湯が最高に良かった。ちくちくと溜まっていた疲労が溶けていくようだった。

フリーな時間ではお土産に集中した。沙月と家族へのお土産だ。

そうして午後の時間はゆるやかに過ぎてゆき、十五時頃には旅館へと戻った。あとは夕食まで自由だ。温泉なり、お菓子を食うなりなんでも良し。

おれは早速浴衣姿に着替え、清潔な白いタオルを拝借し、替えの下着等を準備して部屋を出た。エレベーターで温泉のある一階に下って、ゆったりとした歩調で足を進める。そして我ら日本人が愛してやまない癒やしの泉、温泉に到着だ。女湯に入りそうになる心を抑えつつ、男湯の引き戸を開けた。

もちろんだがツインテールはお隣にいない。彼女はうまくやれているだろうか。部屋で過ごすのが不安だと言っていた。ひとり寂しく隅っこで体育座りしている彼女が頭に浮かんだ。少し……心に来るな。

「おぉ……よろしい……」

露天風呂が視界に広がった。自分の目ががっつり見開かれたのがわかる。

念入りに身体を洗い、おれは露天風呂から先に行った。他にも生徒はいる

が混雑はしていない。学校側の対策として、夜まで各部屋ごとに入浴時間を制限したのだ。今はおれの部屋もその時間に該当している。

というわけで悠々と湯につかれた。全身の酸素やら二酸化炭素がぶわっと抜けていく。このまま昇天しても悔いはないくらい気持ちよかった。

今日一日朝烏がずっと隣にいっぱなしだったのもあって、このひとりの贅沢が最高だった。朝烏を邪険にするわけじゃないが、やはりひとりはいい。心が安らぐ。

「ばーかむーつきー!!」

目を閉じて湯に浸かっているとツインテールの声がした。おれは雷にでも打たれたかのように驚いて辺りを見渡した。まさか男湯に侵入してきたのか？　もしや全裸で？　とうとう一線を越えたな、ツインテール。おれは全

力で彼女を探した。この際、隣にいても文句はない。

だが当然彼女がいるわけがなく、竹でできた壁越しの女湯から聞こえてきた声だった。

「騒ぐな、朝烏先生。幼稚園児の沙月の方がまだお上品だぞ」

「式島くーん！　わたしもいるよー！」

「榊木か」

美少女二人組がすぐ……傍に？　クソ、煩悩が想像力に力を与えやがる。肌色の多いよこしまな想像だ。

「見計らってたな、朝烏先生。温泉くらいひとりにしてくれ」

「うっさい自意識過剰バカ睦紀ー！　あんたなんか要らないわよーだ！」

「じゃあ二度とおれに近づくなよ」

「やだよーだ。あがったら待ってなさい！」

「……

「ゆっくりさせてくれよ……」

無視して長居しようとも思ったが朝烏を待たせると碌なことがない。若干早めにあがり、隣接する休憩エリアの椅子に座っていると二人がやってきた。

二人とも浴衣姿がとても似合っていた。朝烏は長い髪をひとまとめにして左肩から胸の辺りに垂らし、榊木は縛ってポニーテールにして首元をすっきりとさせていた。

「あら、あんた似合ってるじゃない」

「どうも。二人も似合ってるな」

お世辞でなく本当に似合っていた。美少女と浴衣という組み合わせは破壊力抜群で、目をそらそうとしても勝手に引き寄せられてしまう。

ご機嫌なソイノテールは鼻歌交じりにスキップしながら隣に座った。ふ

ご機嫌なツンデレ　ノに鼻高々しいにゃんこしておれの隣に座った　ふわっとシャンプーの香りが漂い、彼女はふふっと笑うとおれを見つめてきた。

「何だ」

「ふふっ。なんかいーなーって思って」

「良い？」

「そう、思い出すの。昔のことを」

昔。朝烏の過去。おれたちの……過去のことだろうか。

「二人ともイチャつくのやめなー？　こういう旅館での夜ってナニがあるかわかんないんだから～」

「や、やめなさいよアリスッ！　別にバカ睦紀とイチャついてなんか……！」

「ふーん？　でもそう見えちゃうんだよねぇ～？　百合愛って式島くんの前ではメスの顔になるから～」

「メス顔ってなによそれ!!　バカ睦紀、変なこと想像しちゃダメよ！　あんた

なんか……あんたはただの弟子なんだからねっ!?」

朝烏はおれの目の前でビシビシと指を振っておれに言い聞かせた。これがメスの顔なのか？　全くわからんな。やけに目を合わせてこようとする以外は通常のツインテールだと思うが。

その後、おれたちは一度別れ、待ち合わせをしてから大広間へと足を運んだ。夕食だ。ザ・和食といった感じの健康に良さそうな料理がズラリと並び、それぞれ自由に腰を下ろした。右隣にはツインテール、彼女の隣は榊木。そしておれの左隣にはなんと雀が腰を下ろした。

朝烏は露骨に表情を曇らせたが食事が始まると機嫌を直した。大変美味しかったのである。朝烏と榊木はあれこれ喋りながら食事を愉しみ、おれは静かに箸を運んだ。

「式島くん、ありがとう」
ぽそっと雀が呟いた。彼女は左隣でおれと同じく慎ましく食事をしていた。
「感謝されるようなことしたか」
「班に入れてくれたこと」
「あぁ、それか。でも誘ってきたのは雀の方だ。班を作ったのは雀だと思うがな」
「そう」
プールの日のことだ。突然彼女に話しかけられ、この校外学習の班になってほしいと頼まれた。理由は未だにわからない。
だからこの際訊いてみようと思った。
「どうしておれを誘ってくれたんだ」
[illegible]

「……同じだと思ったから」
「おれと雀が？」
「そう。似たようなこと、考えてる……」

予想は当たっていた。つまりこうだ。人との繋がりを求めていないから、同じく求めていない人と班を作りたかった。そうすれば相手から話しかけられることもないし、こっちから話しかける必要が生まれることもない。勝手にそれぞれ行動するから。

「なるほど。それじゃあ今日一日お節介ばかりだったかもな。すまない」
「……いいの、良かったから」
「良かった？」
「あなたたちといるの、面白かった」
「支支はまいりり少　ごナ口角を上げこ。笑つこ？　巨然りぼっこ二雀命旨

彼女にほんの少しだけ口角を上げた。等々力の天然のほっこり笑顔が？

彼女のささやかな笑みは、とても優しく静かで、お吸い物の湯気で消えてしまうくらい儚い笑顔だった。

なぜなんだろう。おれの周りのぼっちはどんどん変化してゆく……。

時間が過ぎると生徒らは自由に動き回り、部屋に帰っていく者もちらほら現れ始めた。左隣にいた雀はいつの間にか消えていた。右隣のツインテールも榊木もどこかに消えていた。

孤独な食事もいいものだ。味に集中もでき、余韻にも浸れる。大人になっても変わっていないだろうな。

そろそろ部屋に戻ろうかと思った矢先、ツインテールが戻ってきた。

「バカ睦紀。戻るの？」

「あぁ」

そう返事をすると朝烏はがしっとおれの浴衣を掴み、耳元に囁きかけてきた。

「後で一緒に……温泉入らない？」

榊木、助けてくれ。ツインテールが壊れた。

第24話　ずっと一緒だったんだよ。

一緒に温泉？

一緒に入る？

一緒に裸で？

朝烏の衝撃的なお誘い――『後で一緒に温泉入らない？』

おれは前期テスト以上に頭を働かせて彼女の言葉を分析した。本当に一緒に入りたいのか、それとも裏の意味があるのか、もしくは暗号か。

考えれば考えるほどこんがらがった。そして混乱しきったおれは一言でこう答えた。

「もちろん」

もちろん、一緒に入るとも。

人生最大のミスかもしれない。おれはこれから取り返しのつかないハプニングを巻き起こしてしまうのだろうか。そもそも今どき混浴なんてあるのか？　あったとしてもその旅館を学校側が選ぶか？　異性に興味津々の十代に混浴なんて場を与えたら絶対に事件が起きる。

おれは部屋で考え続け、約束の時間が来るまで朝烏の言葉を心の中で反芻した。

後で一緒に……入らない？

後で一緒に入らない？

後でぇ――。

私とぉ――。

勝手に魅惑的な声に変換される。おれが欲望のままに期待している朝烏の姿だ。

そこでふと思った。おれも変わりつつあるのかもしれない。朝烏も榊木も変わった。彼女らが人と関わったからだ。人と言葉を交わして影響を受けない人間なんていない。

悔しいが、おれも徐々に変わってきている。おれの目に写っていたぼっちの女神・朝烏百合愛が一人の少女になり、そして傍にいて当たり前の存在になった。おれは朝烏に対してどう思い始めているのか。最後にはどんな関係になってしまうのか……。

答えが出ぬまま約束の時間がやってきた。

「バカ睦紀」

エレベーター前で朝烏が待っていた。しっとりとした雰囲気でドキッとす

る。普段なら声にハリがあるのに今の声は赤ん坊に語りかけるような優しい声だった。

本当に一緒に入ってしまうのか？　脱衣所で一緒に脱ぎ、その後は肩をぴったり合わせて湯船に浸かってしまうのか？

朝烏先生……何を企んでいる……。

無言でおれたちは歩いた。目的の温泉に近づくにつれて鼓動が激しくなっていった。どうなるんだ。混浴なんてやっぱりないぞ。もしかして隠れながら入るのか？

「バカ睦紀……？」

男湯と女湯を前にしておれは固まった。

正しい選択はどっちだ。男か女。どっちが未来へ繋がるんだ。おれは今一度彼女の言葉を思い出した。そう、一緒に入ろうと言っていた。一緒だぞ。一緒

なら一緒にどちらかに入るってことだ。

おれは朝烏と一緒に女湯に入った。

「……は？　はっ、えっちょっとぉ!?」

「間違った未来だったか……」

「一緒に入るとは言ったけどそういうことじゃないわよっ!!　エロ睦紀!!　早く出て行きなさい！」

「すまない……すまない……」

「わかったから出てけっ！　えっちぃ!!」

どうしておれは朝烏を非常識なハチャメチャ少女だと勘違いしていたんだろう。常識的に考えてあり得ないだろ。恋人とか家族じゃない限り。

夜の露天風呂もまた最高だった。夜空を見上げると星がたくさん輝いている。人工光の少ないここより也哉なうではより美しいこと。

いる。ノーテンの生ぬるい空気ではの言い表わせなかった
将来は温泉街にでも住もうか。そんなことを考えていたら忘れかけていた彼女の気配を感じ取った。
「朝烏先生、そこにいるだろ」
「……よくわかったわね」
また壁越しにいるようだ。
「あんた、わたしと一緒に入りたかったの？」
「なわけあるか。紛らわしいこと言いやがって、恥をかいたぞ」
「ふふん。ま、わたしは別に良かったけどね？　あんたと入っても」
「じゃあ今からそっちに行こう」
「いいわよ。来たら従業員呼ぶけど」
ならやめておこう。下品なぼっちは最底辺だ。
「でも……本当はあんたもわたしもお互いの裸は見慣れてるのよー

「プールで散々見たからな」
「違うわ。わたしとあんたはずっと昔に出会ってるの」
おれは咄嗟に壁の方を向いた。
まさか彼女から直接その話題をふってくるとは。隠していたはずだ。それなのにいきなり暴露してくるなんてどんな心境の変化が……。
「あんたも薄々気付いていたと思うけど、そろそろハッキリさせておきましょうか」
「おれたちは……どういう関係だったんだ」
「そんな特別な関係じゃないわ。たった半年間だけの思い出よ。でも、その半年間はわたしにとって大切な時間だった。あんたは忘れてしまったようだけど。バカだからしょうがないわね」
「教えてくれ。おれたちは何なんだ」

「……あんたは、わたしの王子様よ」

　おれは笑いそうになった。おれが王子様だって？　式島睦紀はただの善良な一般ぼっちであって、階級なんざ持ち合わせていない。

「わたしの生活は教えたわよね。世界規模の転勤族なの。しかも箱入り娘で外にもあまり出られなかった。だからいつもひとりぼっちで本を読んでた。小学一年生になっても変わらず、わたしは半年後にまた日本を飛び出ることになった。その頃からわたしは親の目を盗んで家から抜け出してたの。本で読んだ友だちってものを探しにね」

「親は心配しただろうな……」

「もちろん怒られたわ。でも家にいてもつまらないんですもの。何度も抜け出したわ」

　昔の方がよっぽど行動的じゃないか。

ある日、あの公園でバカ睦紀と出会った。あんたもひとりぼっちだったから親近感がわいたわ。誰かに見せるわけでもないのに何個も泥団子を作ってるあんたが不思議で不思議で……どう話しかけたか忘れちゃったけど、気付けばあんたと一緒に遊んでた」

「あの公園って、まさか沙月と遊んだときの公園か？　ご近所さんだったのか……」

「えぇ。当時の家は売却されたけど。あんたとはいつも遊んでたわ。泥団子作って、駆けっこして、いつしかお互いの両親も公園にいて、家族ぐるみの付き合いにまで発展したわ。本当に楽しかった。あんたと遊んでいるときが一番楽しかったの」

うっすらとそんなことがあったような気もする。けれど色褪せていてハッキリしない。でも誰かが隣にいたのは覚えている。

「どうヨ本を売つヨは刹マこ自つてこいこ。長い間誰てるりはつかつてこいこ。ご

こても日本を発つ日には多々と迎えていた　長い間離れるのはわたしたちからこそとっても辛かったの。日本で初めてできた遊び相手と離ればなれになるから。現実を受け止めたくなくてあんたには直前まで秘密にしてた。そして今日が最後って日に、わたしはあんたに告げた」

「……お、おれはなんて言ったんだ」

「あんたと約束した。『日本に戻ってきたらぼくが百合愛ちゃんを迎えに行く。ぼくが日本を案内する』ってね」

　自分の顔に湯をぶっかけた。おれはそんな恥ずかしいことを言っていたのか。小学生のくせに何言ってやがんだ、このクソガキ。

「わたしはこう言ったわ。『絶対に忘れないでね。睦紀くんはわたしの王子様だからどこにいても迎えに来てね』ってね」

「おれたちヤバいな」

「ふふっ。そう、ヤバいの。ホント二人揃ってバカだった。でもわたしの方がもっ

とバカだった。あんたが思い出してくれるように髪型をツインテールから変えなかった。いつどこで再会しても気付いてくれるって信じてたから」

ツインテールにはそんな意味が含まれていたのか。なんて……なんて健気な幼心なんだ。

おれの方がバカだ。こんなに大切な思い出を忘れてしまっている。彼女はきっとガッカリしたはずだ。日本で唯一繋がりのある人は、綺麗さっぱり自分のことを忘却してしまっているなんて辛すぎる。

あのとき――彼女が初めて登校してきたとき――おれと再会したときのことを思い出して目が熱くなった。なんて辛い思いをさせてしまったんだろう。なんて残酷な仕打ちをしてしまったんだろう……。

「朝烏先生、すまない。本当に申し訳ない」

「謝らないでよ、バカ。昔のことなのよ。だから……この話はなかったことにし

ましょう。温泉からあがったらあんたとわたしは元通り。いいわね？」

「……わかった」

「ありがとう、バカ睦紀」

そうは言ったが無理だ。知ってしまった以上、なかったことにはできない。

温泉からあがって浴衣姿で対面した。朝烏は吹っ切れたような表情を浮かべていたが、おれはそんな気にはなれなかった。

「おれはなかったことにするつもりはない。どこにいても迎えに行く」

「や、やめなさいよ。本当にバカね……あっ、ダメ……ちょっと無理かも」

朝烏は目元を手で擦るやいなやおれに抱きつき、顔を胸にうずめて黙り込んだ。長いようで短い抱擁。けれどお互いの温かみを感じるには十分な時間だった。

多分、おれたちはもう寂しくない。

第25話　この一歩は小さいが、ツインテールにとっては偉大な一歩だ。

「ていっ！　ていっ！　はぁんっ！」

「弱いな、朝烏先生」

休憩スペースの卓球台を使って、おれと朝烏は下手くそなりに卓球を楽しんでいた。

「また百合愛負けそー」

審判はパックの林檎ジュースを飲んでいる榊木だ。朝烏が急遽呼び出してくれた。

力を抜くまでくれた
「あんたセコいのよ！　初心者のわたしに手加減無しだなんてこのドSが!!」
「おれも初心者なんだが……」
「自虐風自慢とかいらないんですけど？」
　朝烏が弱すぎるのだ。ある程度のラリーはできるようだが集中力が続かないらしく、すぐに空振りとなる。
「ふぬっ！　ふぬっ！」
「朝烏先生、浴衣が、あの、浴衣が……」
「ほえ？」
　無駄に激しい動きをしていたため浴衣が着崩れてきていた。胸元と太股がぺろんと露出して、そろそろ一線を越えそうな具合だ。
「あんたどこ見ながらやってんのよ！　エロ陸紀！」

「イヤでも目に入るんだよ……」

「アリス、交代！　バカ睦紀のことボコボコにしてやって！」

榊木は面倒くさそうにラケットを受け取ると、あろうことか朝烏の帯を引っ張った。帯はするりと抜けて、禁断のアンダーウェアが露わになった。

「ゆ、百合愛!?　どうしたのその勝負下着!?」

「アリスこそ何してんのよ!?　あうっ、バカ睦紀見ないでっ！」

おれは咄嗟に顔を手で覆った。なんだ、その下着は。上も下もブラックで艶やかな模様をしている。ちょっとアダルトすぎやしないか。

「百合愛……それエッチすぎない？　さっき温泉入ったときはそんなブラじゃなかったじゃん。も、もしかしてこの後……!?」

「変な想像はやめなさい！　いいから帯縛って！　わたし浴衣の正しい着方

わかんないのよ！　こらっバカ睦紀！　逃げるな！」

逃げるに決まってるだろ。この場にいたら頭がおかしくなりそうだ。

おれはもう一つの休憩スペースに向かった。そっちで気を休めてから再び合流しよう。本当に今日の朝烏はどうかしてる。変なクスリでも飲んだのか？

休憩スペースに近づくにつれ、音楽が聞こえてきた。ピアノの音。切ない音調が何度もリピートする名曲――ベートーヴェンの『エリーゼのために』だ。おれは音楽に導かれるままに歩いた。

休憩スペースにはピアノと雀玲音がいた。伴奏者はもちろん雀だ。どうやら自由に使っていいピアノらしく、雀は華麗に指を動かして音楽を奏でていた。純粋に綺麗だと思った。音もそうだが弾いている彼女の姿が真摯で、とても熱意が伝わってくる。彼女が言っていた「ピアニストになりたい」という

熱意だ。

『エリーゼのために』が終わると彼女は傍で座っていたおれに目を向けた。

「何か、弾く……」

「リクエストしてもいいのか」

「有名なクラシックなら一通り」

そりゃすごい。ベートーヴェンを弾いているならやはりベートーヴェンにしておこうか。

「〝月光〟……とかは？」

「大丈夫。静かなやつ、激しいやつ、どっち……」

「あぁ……激しい方で」

「第三楽章。わかった」

弾き始めると彼女はがらりと雰囲気を変えた。指を巧みに踊らせ、激しいリズムを上手く刻んでいく。木の器などこにない。まるでこれが息ぴ

いーニンムを立て続けに弾いていく。休む暇などないまるでこてとた急いで駆けているみたいだ。右手が左から右へ滑るように音を踏み、そしてまた左へと逆戻り。左手はリズムが乱れぬよう支え続けている。

あの静かな雀はどこへ行ってしまったのか。彼女とは思えぬほど音とともに身体を揺らし、全身で感情を表現していた。その姿におれは息をのんだ。一般客も足を止めて聞き入っている。まるで彼女が「わたしの音楽を聴け」と命令しているように、みんな足を止めた。

「終わり」

弾き終わると彼女はそう呟き、途端に小さな拍手が響いた。彼女は無表情でおれをぼーっと見たが、人が集まっていることに気付くと立ち上がった。

「あれ、本当に終わりか」

「恥ずかしいから寝る……」

「恥ずかしがることなんてない。ピアノ、もっと弾きたいんだろ。おれだって聴きたいな」

「……じゃあ、〝ショパン 夜想曲第二番〟」

無感情無表情のクール系少女だと思っていたが間違いだ。雀は表情で自分を表現するんじゃない。ピアノで自分を表現するんだ。

雀の伴奏会が終了した後、おれと彼女は同じ場所で牛乳を飲んでいた。やはりピアノから離れるといつもの雀だ。雨宿りする雀のように静かにしている。

「ピアニストってなるの難しいのか」

「……難しい。食べていける人、ほんの一握りだけ」

「そうか……でも雀ならなれるんじゃないか。おれは素人だが、雀のピアノは

引きつける力があると思う」
「そう、ありがとう……」
二人して牛乳瓶に口を付けた。会話が一瞬で終わっちまう。まぁ無理に続ける必要はないか。雀の性格をかんがみれば自然か。
と、思っていたが、
「ありがとう、式島くん……」
「ん？」
「わたしのこと気にかけてくれてる」
「そ、そうか？　迷惑だったらすまん」
「そんなことない。話しかけるの得意じゃないだけ。本当はもっと話してみたい」
「おれでよければ。そういや、なんでおれだったんだ？　班作りを誘ってくれ

たことだ」

「……優しそうだと思ったから、あまりうるさくなさそうだったから。それと、わたしも友だちほしいって思ってたから……」

おれが優しいかどうかはいいとして、雀も友だちがほしいだって？　なんてこった。朝烏と同じじゃないか。この世にはぼっちを貫き通そうとしている選ばれし人間はおれだけか？

「……わたしと友だちになってくれる？」

その懇願におれは戸惑った。おれはぼっちだ。しかも孤独と自由を求める冒険者的ぼっち。友だちなんていらない。不必要なのだ。

しかしおれに断れるか？　断れば絶対に雀は悲しむだろうし、傷ついてしまう。おれのせいで。まるでおれが傷つけたように。そう考えたときにある言葉を思い出した。

言葉を思い出した

――全ての悩みは人間関係から起因する。

ある人の言葉。

そう、まさにこの通りだ。雀と関わっていなければこんな葛藤などしなかった。

落ち着くんだ、式島睦紀。お前はぼっちを目指しているんだろう。なら、友だちなんて作ってはダメだ。苦悩を増やすだけだ。裏切られるかもしれないし、嫌われるかもしれない。

おれは冷や汗を滲ませ、声を出そうとした。どんな醜い声が出るかはわからないが何か答えを出そうとした。わからない。おれはどうすべきなんだ。どう、あるべきなんだ――。

「わたしと友だちになりましょうよ、玲音ー

朝烏がぱっと現れた。

おれがいないと榊木にも話しかけられなかった彼女が見せた、とても大きな一歩を踏んだ瞬間だった。

第26話　朝烏との朝チュンは朝飯前ではない。

どうやら朝烏と榊木も雀の伴奏会のお客さんだったらしい。タイミングを見てこちらに接触してきたようだ。

「朝烏先生が、自ら誘っただと……!?」

「あんた驚きすぎ」

驚かざるを得ない。雀をずっと邪険にしていたじゃないか。プールで雀から誘われたときだって敵対心いっぱいな態度を取り、とにかく雀の話題を出すと彼女は機嫌を損ねた。

て彼女に様子を探れ
それがどうしたことか、雀と友だちになりたいと言い出した。休戦協定でも結んだつもりだろうか。そもそも戦時下だったのかすら不明だが、何はともあれ仲良くしていただきたい。
「わたしのこと、嫌いじゃないの……」
雀が朝烏に問う。おれはハラハラしながら二人の様子を見守った。
「べ、別に嫌いじゃないわよ……わたしが人見知りなだけだったからあんな態度を取っただけよ」
「そう……でも、わたしはあなたに訊いてない」
「なんですって!?」
「わたしは式島くんに訊いてる」
雀がそっとおれの袖を掴んだ。朝烏はぎょっとした顔になり、彼女もおれの袖を掴んで引っ張った。

「ちょっとバカ睦紀！　あんた何か言いなさいよ！」
「何を言えばいいんだよ」
「うぐっ……た、例えば『おれは朝烏専用の奴隷なんだ』とか！」
「おれは奴隷という悪しき文化が大嫌いだ。あれは気安く口に出していいものではない。自由を奪われるということは――」
「わかったわかった、わたしが悪かったからお黙り！　もー、面倒ね……」
うろたえる朝烏の隣に立っていた榊木はニヤニヤし始めた。これは朝烏にいじわるするときの前兆だ。

「ねーねー、百合愛。本当のこと言っちゃいなよ。自分だけの式島くんが取られちゃうのがイヤなんでしょ？　わたしの男よって言っちゃったら？」
「別にバカ睦紀はわたしのものじゃないわ！　アリスも黙ってなさい！」

「百合愛ってわかりやすいよね。ドラマでありがちなキャラみたい」

「うるさいわねー！　おりゃ！」

朝烏は榊木の襟を掴むとばっと左右に開けた。おれは目を見開いた。超有名美少女子役の乳を見られるのだ。逃すわけにはいかない。たとえこの身が牢獄へとぶち込まれることになろうとも、おれは目撃する義務がある――。

「ざんね～ん。シャツ着てま～す。百合愛みたいなドスケベ装備じゃないです～」

「くうっ……！　わたしはエッチな子じゃない……！」

「そうかな？　温泉のときにバストアップマッサージ毎日やってるって言ってたよね？　一体何のために、誰に見せるために頑張ってるのかなぁ？　その細身巨乳体型が羨ましいなぁ」

[illegible]

こそ、そんなこと……バカ睦紀！　あんた顔赤いわよ！　興奮するな！」

べ、別に興奮してねぇし。全身がさっきからムズムズするがきっとトイレ行きたいだけだし。

女子の下ネタ話は結構エグいと聞いていたが本当だった。しかしこれも序章に過ぎないだろう。噂では女子の下ネタは行為中の生々しいことまで話すという。朝烏もそんな話をするのだろうか。清純派っぽいイメージもある榊木も……。

いや、やめよう。漫画みたいに鼻血を吹き出しそうだ。

「……わたしも朝烏さんと友だちになりたい。榊木さんとも……」

痴話に終止符を打ったのは雀だった。その言葉に朝烏は一瞬ぱっと笑顔になった。純粋に嬉しかったのだろう。すぐにツンツンした顔に戻ってしまったが。

た

「もちろん歓迎するわ！　これからお互いを知っていきましょう」

「よろしく～」

ひとまず話は落ち着いた。おれのぼっち生活もまだ続けられそうだ。

就寝時間が近づき、各々自分の部屋に戻った。

部屋は全員が揃っているわけではなく、他の部屋で過ごしている人もいた。教師側が面倒に思っているのかわからないが、それに対する取締はしないようだ。サファリパークみたいな高校ではないので多少は信用されているのかもしれない。

それはそれで助かった。夜中に騒ぐ者がいないので静かに寝静まれる。

そう思っていたが例のツインテールがそうさせてくれなかった。

「やっときたわね」
休憩所に朝烏が待っていた。
コンビニに行きたいから警護して、とメッセージが届いたのだ。無視するわけにもいかず、眠気が粘り付く脳を働かせて来てやった。
「コンビニくらい一人で行けるだろ」
「夜中に女の子ひとりなのよ？　あんたしか頼れる男がいなかったの。悪いとは思ってるわ」
しかしながら旅館から出ることは夜間は禁止されている。その旨を話したが「こっそり出れば問題ないわ」と悪ガキめいたことを言い、聞く耳を持たなかった。
おれたちは曲がり角やエレベーターに気をつけながら旅館内を歩き、口

ビーに教師らしき人物がいないかを確認してから外に出た。
「割とハラハラしたな」
「そうね。見つかったら勘違いされるわ。わたしたち、一応若い男女だし」
「だな」
コンビニに入り、おれは雑誌エリアを適当に眺めた。朝烏は洗顔料を選んでいた。おそらく忘れてしまったのだろう。
会計を済ますと再び旅館へと向かった。無言が続く。だが朝烏が隣にいると不思議と何かを話さなければと思ってしまう。なぜだろう。朝烏と共有する無言は居心地が悪い。
それは彼女も同じだったようだ。
「何か話してよ」
「……何もないな」
「……」

「あっそ」

優しく肩を当ててきた。

そういうところだ。そういうちょっとしたスキンシップのせいで、おれは奇妙な気持ちになり、彼女への気持ちが変容していく。

彼女に何かしてあげたい、何か与えたい。そう思うようになった。だからこそ彼女のお願いを拒むことができないのかもしれない。彼女が求める式島睦紀との時間を、おれは与えたいと思っているから。

「バカ睦紀。玲音のこと好きになったら承知しないわよ」

「なぜに？」

「……わ、わたしの友だちに手を出すのは許さないわ」

「なら安心しろ。おれは人を好きになったとしても何もしない」

「つまらない男ね。ま、恋愛経験のないあんたには無理でしょうけど」

「自分こそ兆候ゼロだろ」

二阿久と接客自体な」

「ふふん。ばーかばーか」

旅館に無事戻り、そのまま解散しようと思ったが部屋の前まで送ってやることにした。悪いおじさんに拉致されるかもしれないからな。

そして部屋を目前にしたときだった。教師の背中が見えた。非常にマズい。

どこかに隠れようと思った矢先、朝烏はおれを部屋に引き入れた。

「朝烏先生ッ!?」

「黙って。部屋には誰もいないから。落ち着くまでここにいなさい」

そうは言われましても。誰か女子が戻ってきたらどうするんだ。確実におれは処刑される。今後はクラスのぼっちじゃなくてクラスのゴミという認識になるだろう。

朝烏に手を引かれ、誰かの布団に入った。彼女も隣の布団に入る。すると

人が部屋に入ってきた。おれは顔を隠して息を殺し、ただの物質に還った。
「あ、先生。他の人は戻ってませんよ」
どうやら教師らしかった。見回りしてたのか？　それともおれの姿を見られたか？　この危機的状況に心臓が爆発しそうだった。
だが杞憂に終わり、教師は出て行った。首の皮一枚で繋がった。これほど緊張したのは初めてかもしれない。
「じゃ、じゃあおれはタイミングを見て帰るぞ」
「待ちなさい」
まだ何かあるのかと叫びそうになったが彼女の言葉で引っ込んでしまった。
「わたしをひとりにさせるの？　この誰もいない寂しい空間で」
彼女の瞳を見てしまったせいで断れなかった。潤んだ目で一心に訴えかけ

てきたのだ。あなたと一緒にいたい、あなたの隣にいたい、と。

ただの思い込みかもしれない。けれど断れなかった。おれも傍にいたかったから。

夜が明け、日が昇る。

太陽が顔を出したばかりの日の出の頃におれたちは目を覚ました。日光で起きたのではない。部屋に入ってきた榊木が立てた音でだ。

「うわあっ!!　ふ、二人ともシちゃった!?」

「してない!!」

おれと朝烏は口を揃えて否定した。一日の疲労には勝てず、おれは秒で就寝した。のび太くんと張り合えるレベルの早さだった。

一緒の布団の中で目覚めたのは謎だがきっと何も起こっていないはずだ。

第27話　ツインテールは席替えに命をかける。

七月上旬。

穏便だったように見えて色々と波乱があった校外学習が終わり、あとは夏休みの到来を待つだけのこの頃。蝉の声は以前より騒々しく、日差しは肌をチリチリと焼き、その肌を癒やそうとクーラーが忙しく働いている。

もう少しで夏休みだと考えるとワクワクする。楽しい予定があるわけじゃない。約一ヶ月間自由なのだ。課題を出されているとはいえ、時間的制約は登校日より多かこ少ない。

紙は登校日ごと選ばれた
おれは希望に満ちあふれていたが、お隣のツインテールはそうではなかった。
「うぅ……うはぁ……」

先ほどから様子がおかしかった。顔は青ざめ、ふるふるとツインテールが揺れている。原因はプチイベントの席替えだ。入学してから初めて行われる席替えが今から行われるのだが、彼女は乗り気ではないようだ。
「朝烏先生。そんなに席替えがイヤなのか」
「当たり前でしょ……あんたはイヤじゃないの？」
「全く。気分転換になる」
「はぁ……憂鬱……」
そんな朝烏百合愛の憂鬱は改善されることなく席替えは始まった。

「その……別に全く興味とかないしどうでもいいんだけど……ホントにどうでもいいんだけど、あんたはどこの席を希望してるの……？」

おそるおそるといった様子で彼女は訊いてきた。

「というか、くじ引きだぞ。望んでも無意味だろ」

「え？　くじなの？　自分で選ぶんじゃなくてっ!?」

「それだと争いが起きるからな」

「えぇ……いやぁん……」

イヤでもやるんだよ。変な声を出すな。

なるべく公平になるように各列最前席の生徒がじゃんけんし、勝者となった列から引いていく。そして次は左の列に移ってまた前から引いていくといった席決めだ。

幸運かはわからないが、おれの列が最初に引くこととなった。つまり、右の列に所属するツインテールはくじを最後に引くわけだ。それを悟ると彼女は机におでこを乗せて絶望した。席替えに命でもかけてるのか？

順番が来て、おれは教卓のくじ引き箱から折りたたまれた紙を引いた。席に戻るとこっそり見て黒板の配置図を確認した。一番後ろの席だ。中々いい。教室の中心になって四方八方を囲まれるよりは大分いい。

「朝烏先生。ダメだ」

ツインテールが首を伸ばして覗き込んできた。一応、みんなが引き終わるまで見てはいけないと決まっているのだ。

「けちんぼ睦紀」

「見たところで変わらないぞ。そんなにおれの隣がいいのか」

「あァんたなんかどうでもいいし！　どっか行けばいいのよ！」

[illegible]

「そうか、来年は朝烏とは別のクラスがいいな」
「……そんなこと、言わないでよばか」
「冗談を真に受けるな」
「……うん」
しょぼんとツインテールは萎れた。しかし朝烏の隣になるには運に頼るしかない。おれは先に引いてしまっているので、もう朝烏の運にかかっている。
こう言うとおれがあたかも朝烏の隣を望んでいるかのように思われるだろう。実際のところ、彼女の隣にいた方がいいのかもしれない。彼女が寂しそうにしている姿は見ていて辛くなってくる。
全員が引き終わると、生徒らは次々と黒板に書かれた席の配置図に名前を書き込んでいった。仲良し同士は喜び合って楽しそうだ。
おれはチョークを手に取った。傍にいる朝烏から視線を感じる。どこに書くのか、どこにいるのか、という手を目で追いかけている。うれしさが目

くのだ。とこはじるのだ。とおれの言を目で追いたけた。おれは笑いながら白い粉を落としながら自分の名前を黒板に刻む。書き終わると朝烏にチョークを渡した。彼女はさっきのしょげた表情から一転して得意げな顔でおれにウィンクし、カツカツと音を立てて名前を刻んだ。

アサガラス　シキシマ

「ちゃんと神様にお願いしててよかったわ」

やはりお隣のツインテールがおれの傍から離れない。

また当分の間、完全なぼっちにはなれないがこれでよかったのだ。なぜかは言わない。ぼっちらしくないことだからな。

とある日の平日の夜。

リビングで沙月とテレビを観ていると榊木が映った。

「お、榊木だー

「にぃに知ってるのー？」
「学校が同じなんだ」
「すごーー」
テレビの榊木を見ると、改めてとんでもない奇跡だなと思った。都会ならではだが都会だって学校は腐るほど点在する。その中で出会ったのだから奇跡としか言いようがない。
その番組は売れっ子や注目されている人物を特集する内容となっていて、今回のゲストは榊木だった。『現役女子高生の榊木アリスに迫る！』というテロップと共に司会者が話を進めていく。
『アリスちゃん、学校ではモテモテでしょ？』
『え～そんなことないです～！　何度か告白とかはされましたけど～』
『勇気あるね～その男の子！』

本当に勇気があるやつだな。身の程知らずのバカなんじゃないか？　榊木に手を出したらきっと日本中のファンが襲ってくるぞ。そうとも知らずによく告白できたものだ。

『最近ハマっていることはあるのかな？　アリスちゃんの年頃だとやっぱりSNS？』

『ん～友だちの恋愛相談に乗ったりとか、ですかね？　あれっ、これってハマってることとは違いますね』

『ちょっと変わってるかもね』

『ですよね。変な男の子がいるんですよ。ひとりぼっちを極めようとしてる変な人で、友だちがその子を気になってるらしくて……どうしたらいいか悩んでるんです』

絶対におれだ。ぼっち修行中の式島睦紀のことを指している。

[illegible]

「にぃに、怒ってるの？」
「いや。驚いてるんだ」
きっと朝烏とおれのことを話している。畜生。巨大広告塔たるテレビ放送でおれのことを流してしまったらおれはぼっちじゃなくなる。認知されてはいけないのだ。おれは無（ゼロ）でなくてはならない。そうとも知らずこのロングヘア美少女は……!!
『ま、大丈夫だとは思いますけどね。二人とも変わってるので他の子とは相容れないでしょうし。運命なんじゃないですかね？』
『いいなぁ、運命。ぼくも若かったら運命を感じたかったな、アリスちゃんに』
番組内に笑いに包まれる。茶化すな、下劣な司会者め。ぼっちにするぞ。
「にぃに、うんめいってなぁに？」
「うんちの命って意味だよ」
「ふ、ふぅん……」

きたなぁーい、うんちうんちー！」

「世の中うんちだ。覚えておきなさい、沙月」

「うんちー！」

おれと沙月は万歳して「うんちー！」と声を上げた。明日、榊木に忠告しておこう。

おれの話題をテレビに出さないこと。そして朝烏とは恋愛的な関係じゃないことも。おれはあくまでぼっちなのだから。

第28話　ぼっちくんのロンリー・ワールド

我々の社会には様々な媒体を通して、日々、情報が垂れ流されている。その最も巨大な情報放出源の一つとしてテレビ放送が挙げられる。老若男女、誰もが目にする数インチから数十インチの液晶画面に映し出される情報を何となく見ていると――いや、何となく見なくても異常な特徴に気づける。

芸能ニュースの多さだ。

不倫だの、熱愛だの、沙月が大好きなうんちみたいなどうでもいい他人の近況ばかりが取り上げられ、そして国民はなぜかそればかりに注目する。ま

るでこの日本の主人公が芸能人やタレントであるかのように。

そんなうんちみたいな情報を発信する一味である榊木アリスに今日は叱咤しなくてはならない。ぼっち生活を脅かしたのだからただじゃおかない。ぼっちの怒りは通常の一般人より強めだ。人と普段から関わらないため、怒りの感情的処理になれていないのだ。

昼休みになったタイミングでおれは教室から出て、例のグラウンドの階段へと足を運んだ。さてどうしてやろうか。榊木の写真集を目の前でなめ回してやるか、ご両親に娘さんを誘拐しますとでも脅迫しようか。

……おれにしか被害がなさそうだな。

「いないだと……」

榊木はいなかった。林檎ジュースを飲んで黄昏れていると思っていたが、少

し早かったのかもしれない。おれは数分待った。だが来る気配はなく、おれが黄昏れただけだった。

撮影で休んでいるのかもしれない。校舎に戻り、一応榊木のクラスを覗いた。いらっしゃった。しかも普通にクラスメイトと談笑している。まさか……伝説の「友だち」とやらが朝烏以外にもできたのか？　それとも闇取引でもしているのだろうか。よく薬物使用の芸能ニュースが流れるからな。

「榊木アリス」

「えっ、はい」

おれは堂々とした態度で彼女に話しかけた。突然現れた上級ぼっちに榊木はもちろんのこと、談笑相手のクラスメイトもぎょっとしていた。驚くな。おれはただのぼっちだ。きみらと同じように赤い血の流れる人間だ。

「昨日のアレはなんだ。よくもおれを番組内で話題にしたな」
「え？　なんかあったっけ？」
「あったぞ。番組名は忘れたが、榊木が気色悪い司会者からインタビューされているやつだ」
「あ～、昨日放送だったんだ。もう放送日時とか気にしてないんだよね～あはは～」
　こいつ……ぼっちにしてやろうか。おれには人をぼっちにさせる力がある――と信じている。あくまで信じているだけだ。そんな超能力があったら世界を孤独の坩堝に叩き込んでいる。
「いいか。今後はおれの話題は出さないでくれ。テレビで出されたらおれの『ぼっちアイデンティティ』が崩壊するおそれがある。おれは認知されてはいけないんだ」
[illegible]

「名前出してないからいいじゃん」

「だとしてもだ。気付くやつは気付く。これは式島睦紀の話だな、とおれや朝烏がな」

「式島くんって中二病ってやつ？」

「おれは万年健康体だ。ウイルスですらおれに近づきたがらない」

榊木はくすくすと笑って全く相手にしていないようだった。まぁおれはぼっちだからな。相手にされたらぼっちじゃない。

「それはそうと榊木。友だちができたのか」

「うん、まぁね。校外学習のときに」

「そうか。それはおめでたい」

「式島くんは？　友だちできた？」

「うるこ反ごうはいない」

「おれは友だちにはしない」

「わたしは友だちじゃないのかな？」

「……まぁそうだ。榊木は――」

榊木はおれにとっては何だ？

言葉に詰まったおれはその場を立ち去った。昔なら冷たい態度を取って切り捨てていたが、どうもその気になれなかった。榊木との関係を絶ちたくないという小さな思いが邪魔したのだ。

最近ダメだ。

何もかもが中途半端になりつつある。どっちに手を付けようか迷ったせいで温められて届けられた料理が冷めてしまった。そんな優柔不断なグルメ家みたいになってしまった。

この煮え切らない現状を打破するため、おれは半年前の自分に戻ることにした。

日頃以上に分厚い仮面を被り、ぼっちらしく会話拒否の態度を前面に出した。

朝烏がうきうきと話しかけてきても無視。

ツインテールではたいてきても無視。

揺さぶってきても無視。

この世のありとあらゆる現象を感覚しなかった。そうしてリセットを図った。

世界は孤独に包まれる。優しくなりすぎて過干渉になったこの世界に今一度孤独という名の『自由』を蘇らせ、人を究極の個人へと進化させるのだ――。

「式島くん。ひどいかも……」

おれの孤独な世界（ロンリー・ワールド）に介入してきたのは、ぼっちとして優秀な雀玲音だっ

た。流石は天然のぼっち。易々とおれに干渉してきやがった。
「何かしたか」
「百合愛さん、悲しんでる……」
隣の席にツインテールはいなかった。放課後だから当たり前だ。先に帰ったのだろう。普段なら最後に「じゃあ」程度の別れの言葉は交わすが、今日はしなかった。
「わたしに相談してきた。式島くんが、無視するって……」
「あぁ、それはだな――」
「悲しませてる。それはただのぼっちじゃなくて……イヤな人、だと思う」
イヤなやつ。ぼっち失格だ。人を不快に思わせている時点で最低なやつというだけで価値はない。人に負の感情を沸き立たせるだけのクズだ。
「雀、ありがとう」
「[illegible]

「どうして？」

「訊かないでくれ。今度バイト先のレストラン行くよ」

「来られると忙しくなるんだけど……」

あれま。ではやめておこう。

おれは教室を飛び出て走った。体育祭のとき以来かもしれない。あのときも、おれは彼女のために走った。喜んでほしくて、報われてほしくて。

「朝烏先生！」

小さな背中が見え、声をかける。びくっと肩が跳ねると彼女はゆっくりとこちらに振り返った。案の定、不満たらたらといった表情をしていて今にも怒り出しそうだった。

おれは息を整えつつ言葉を探した。酸素ばかりに集中するこの脳で適切な発言ができるかどうか自信はない。それでも彼女の可愛らしいふてくされた頭を見ると、長い付き合いで培った勘が口を開いてと言うのだ。

れた彦を糧に、強く生く叫を開して声をてれ、上した
「また、明日な」
　すると彼女はふふっと含み笑いをして、
「ばーか」
　と呟き、おれの胸をぽこんと優しく殴った。
　孤独な世界の実現は、まだまだ遠い。

第29話　昔、ある少女と別れた。そしてまた出会った。

おれがぼっちを追求しようとすると悲しむ人がいる。

個人情報保護の観念からあえて名前は伏せるが、とあるツインテール少女がその該当者だ。おれがぼっちモードになると寂しそうに見つめてくる。彼女には榊木アリスや雀玲音などの変わった友人がいるので、そちらの方々とお遊びになればいいのだが、なぜかいつも隣にいる。

一人になりたい者。

一人になりたくない者。

一人にしたくない存在。

おれと彼女は相容れない存在だ。

しかしこのままではいつかケンカ沙汰になるだろう。お互いを理解できぬまますれ違いが続き、思い込みが大きく膨れ上がり、やがて取り返しのつかない爆発が起こる。大きな後悔が波となって押し寄せてくるだろう。

そうならないためにも密かにおれは行動を始めた。おれの知識では自己解決できそうになかったため、おれより遙か高みにいる雀玲音に協力を仰いだ。

「おれはどうすればいい」

「……どうしてここなの」

雀玲音に相談がある旨を話し、どこかでじっくり話せないかと頼んだ。選んだ場所は雀が働くレストランだ。学校で二人っきりになったところを朝烏に見られたら面倒なことになる。だから二人が知っている場所かつ長時間

話せる場所としてここを選んだ。
「シフトがない日には来たくなかった……」
「すまない。ここが落ち着けるかと思って選んだんだが……」
「いいよ。それでわたしに何を教えてほしいの……わたしはピアノくらいしか教えられない」
「ぼっちスキルだ。誰も傷つかないぼっちスキルを教えてほしい」
真剣にそう問うと雀は首をかしげた。
「言ってる意味、わからない」

「誰も傷つかずに孤独になる方法だ。この前雀が言っただろ？『ぼっちじゃなくてイヤな人』って。おれの方法じゃ朝烏を傷つけるだけで、おれがイヤなやつってだけになる。雀なら良い方法を知っていると思ったんだ」

雀は顔色一つ変えず、静かに視線を下ろしてサラダにフォークを入れた。おれの言葉を噛み砕いている最中か、それとも帰る口実でも考えているのか。表面だけでは雀のことはわからない。

「もう、無理だと思う」

「無理……？」

「そう、無理。出会ってしまったから。関わりを持ってしまったから。もう式島くんは朝烏さんを無視することはできない」

「おれは……もうぼっちにはなれないのか？」

「ほどほどがいいと思う。わたしだって誰かと友だちになりたいと考えてた。式島くんだって……そうでしょう？」

おれはもう一人にはなれないのか……？

雀の言葉におれは少し落ち込んだ。これほど自由を渇望してきたのにそ

の先で待っていたのは自由の終焉だという、全ては出会ってしまったから、他人ではなくなってしまったから、と。

だからといって朝烏に「もう二度と話すのはやめよう」と言ってしまったら本末転倒だ。彼女が傷ついてしまう。

「式島くん。本当は怖いんでしょう？　別れるのが。式島くんは自由を求めてるわけじゃない。人と別れるのが怖いから……最初から関わりたくないだけ」

おれは反論できなかった。完全に図星だった。

胸に空虚な穴ができるのが怖かった。人と別れ、一人になるのが。そうなるくらいなら最初から一人の方が楽だった。物心ついた頃から潜在的にそう恐怖していた気がする。今思えば原因は彼女との別れだったのかもしれない。頭は忘れてしまっていたのに身体は覚えていたってやつだろう。

「雀ニ目炎　ンてよかっこ

「どういたしまして」

「あのデカいパフェでも食べるか？」

「あれ作るの大変だからやめてあげて……」

もうすぐ夏休みが来る。

長いようで短く、短いようで長い別れがやってくる。やっと一人になれると喜んでいたのに最近はそうでもない。彼女らと話す日常がしばしお預けになってしまうのが少々寂しかった。もう誤魔化せないほどにおれは彼女らと深く知り合ってしまったようだ。

「ばーかむーつきっ！」

左の席のご近所さん、朝烏がおれの脇腹をちょんっと突いていた。

「何だ。セクハラで訴えるぞ」
「あんたって夏休みどう過ごすの？　別に興味とか全くないけど一応訊いてあげる」
「そうだな……」
毎年夏休みはほとんど家で過ごしている。散歩するか、沙月と遊ぶか、課題をするか。それくらいしか記憶にない。
「寝て、起きて、沙月と遊んで、課題をする」
「じゃあ何も予定ないわね！」
「いや、ある。寝て、起きて、沙月と――」
「それを予定がないって言うの!!　あんた暇ならわたしの別荘に来なさいよ！　沙月ちゃんも連れて！」
「別荘なんてフィクションの話かと思っていた。すごいな」

「ふふんっ。すごいでしょ。アリスと玲音も誘っておくから絶対に来なさい」
おいおい、残酷だな。男はおれだけか。とんでもなく場違いじゃないか。
「ご両親は？」
「いないわ。どうして？」
「おれが行く必要あるか……？　沙月の保護者代わりにおれを引っ張らなくても沙月は大丈夫だ」
「ダメよ、来なさい。沙月ちゃんのために来てほしいだけじゃなくて、あんた個人にも来てほしいと思ってるの。こんなこと言わせないでっ、バカ睦紀。恥ずかしいでしょっ」
彼女はちょっと顔を赤くしてビシッと指を指してきた。
これ以上拒否してもおれがまた「イヤなやつ」になるだけだ。おれは頷いて了承した。

二回目のお泊まり会になる、校外学習を入れれば共に過ごす三回目の夜だ。またあのときのようなハプニングが起こらないといいが……いや、考えるな。期待しているみたいじゃないか。それに今回は雀もいる。紳士的な態度でいこう。

「襲ってきたら殴るからねっ！　でも優しかったら……ううん、何でもない！　忘れなさいバカ！」

「きみは……誰だ？」

「忘れすぎ！」

やっぱり夏休みが待ち遠しい。

第30話　ツインテールはスルーがお得意？

「夏休みが始まる前に一つくらいぼっちスキルを教えてくれないか」
「まだそんなこと言ってるの。あんたホントバカね」
朝烏には雀玲音という新しい友人ができた。直接的ではないが、おれも彼女の友だち作りに貢献している。なので対価であるぼっちスキルを教えてもらう権利がある。
「あなたはどう思う、玲音」
「式島くんが望むなら、教えてあげたら……」
「玲音はバカ睦紀側かぁ……仕方ないわね。一つだけ教えてあげる」

昼休みにおれと朝烏と玲音はそんな会話をしていた。最近は朝烏が雀を呼んで一緒にランチタイムを過ごすことが多い。食事くらい黙ってできないのかと毎度思うが、苗字にあるとおり、彼女はカラスのように常にガーガー鳴いている生き物なので諦めるしかなかった。

「バカ睦紀。あんたはスルースキルが未熟なの」

「スルースキル」

「そう。何事も流すスキルよ。誰かが騒いでいても視線を動かさず、誰かに罵倒されようとも沈黙を守る。反応したら負けよ」

「それならおれにもできる。というか常にやっている」

「そうかしら？　あんたこの頃は随分と人間らしい反応をするじゃない。それにマスターしてたらあんたは悩んだりなんてしないわよね？　スルースキルは寂しさを抹消する最強の技よー

「……反論の余地がない」
「ふふん。じゃあ修行でもしましょうか」
そう啖呵を切ると彼女はおれと玲音の手を取って教室を飛び出た。校舎も飛び出し、そして馴染み深い場所で足を止めた。榊木の黄昏スポットである。ぼっちたちはここに何らかのパワーでも感じるのだろうか。
「アリスは最近ここにいないわね」
「友人ができたんだ。今頃教室でお喋りしてるだろう」
「ぐぬぬ……わたしよりよっぽど世渡りうまいじゃない……」
そりゃ芸能の世界で生きてるからな。
朝烏は両手を腰に当て、仁王立ちするとおれの名を呼んだ。
「バカ睦紀!!」
「急にうるさいな」

「これからあんたに色々な言葉をぶつけるわ。玲音もやるのよ。あんたは無表情を保ち続けなさい。少しでも引きつったり目の色を変えたらアウト。そのときはわたしの靴でも舐めなさい。服従の印として」

「不衛生だから断る」

「いちいち注文が多いぼっちね。玲音と打ち合わせするから待ってなさい」

朝烏と玲音は背を向けてコソコソと話し始めた。このまま帰ってやろうか。自分から教えてくれと頼みはしたが、こんな馬鹿らしいことをするとわかっていたら頼んではいなかった。秘密裏に玲音にご教授願っていた方がまだ有益だっただろう。

打ち合わせが終わると再び朝烏は仁王立ちになった。

「よし、終わったわ。バカ睦紀、準備は？」

「生まれる前からできてる」

「よし、行こう」

「良い返事ね。じゃあいくわ」

朝烏は一歩踏み出し、おれに指を指した。

「バァアアアーーーーーカ!!　あんたってホンットバカよね!!　おれはぼっちを極めたい、ですって？　無理無理、気持ち悪いっ。あんたの声を聴いているだけで中耳炎になりそうだわ。ほんとやめてくれるかしら。早いとこ思春期卒業しなさいよ。いつまでもオムツなんて穿いてないで大人になりなさい。まだお尻を一人で拭けないわけ？　だっさ」

彼女は散々言い尽くした後、ご自慢のツインテールでぺしっとおれをはたいた。死体に唾を吐き付けるギャングみたいに。

正直ムカついた。顔には出さないよう努力したが、あと二分くらい続いていたら口を開いていたかもしれない。

朝烏は玲音にバトンタッチした。玲音は全く乗り気ではない様子だったが、朝烏に背中を押され、目一杯なさそうに乗り台りこ。

た。朝烏は青ロを指さされ、目し話なさそうに呟き始めた
「式島くん。体臭とか、気にした方がいいかも……」
「えっ、マジで」
つい喋ってしまった。瞬時に朝烏が歓喜した。
「はいざんねーん!!　反応したー!!」
「生理的な批判は卑怯だろ……」
「それでも反応したらダメよ。言ったでしょ、一切反応しちゃダメって」
「朝烏先生はこの世に現れた悪魔だな」
「あら、失礼ね。あんたは知恵を教えてもらっている立場なのに」
朝烏の隣で萎縮していた玲音はおれに頭を下げてきた。
「ごめんなさい、式島くん。嘘だから気にしないでね」
「いや、いいんだ。全部朝烏先生が悪い」
ニンマリと口角を上げている朝烏は付け足した。

「そうよ、バカ睦紀。あんたの匂いは大丈夫ってわたしが一番よく知ってるから」
「意味深な言い方はやめろ」
「ムカつくけど、あんたはすごくいい匂いがするわ」
「もっと気味悪いな」
おれはこのとき悪事を思いついた。このくらいの仕打ちならぼっちの神様も許してくれるだろう。
「朝烏先生。お手本を見せてくれないか。今度は朝烏先生が無表情を貫く番だ」
「ふんっ、チョロいもんよ。どれだけ罵倒されても屈しないわよ。だってわたしは可愛いもの。可愛いは正義よ。誰にも負けない」
「自分で自分のことを可愛いとほざくやつを初めて見た」

「いいから早く言ってみなさいよ。ば、か、む、つ、きー！」

調子に乗っている彼女の両腕を掴み、おれは彼女に目を合わせた。しかしもちろんこれだけじゃ朝烏先生は動じない。魚市場の死んだ秋刀魚みたいに空虚な瞳をしている。

だがこれでどうだ。

「異性の匂いが良ければ良いほど、遺伝子的にもパートナーとしても相性がいいらしいぞ」

「……むぐぅ！　ヘンタイ！」

「おれよりダメじゃないか」

朝烏はおれを突き飛ばして胸を押さえた。呼吸が荒々しくて忙しそうだ。

「生理的なことは卑怯よ！」

「[illegible]

だろ？　じゃあこれならどうだ」

おれは自分ができる最大級の侮蔑を込めた目で呟いた。

「お前なんか嫌いだ」

「……ふ、ふへぇ～ん」

数秒のタイムラグが起きた後、朝烏は玲音に泣きついた。かたかたとツインテールを震わせ、細い脚も小刻みに震えた。小便に行きたいならさっさと行け。

「嘘だ、朝烏先生。嫌いなんかじゃない」

「……ほ、ほんとに？　じゃあどう思ってるの？」

「朝烏先生は普通だ。普通の女の子だ」

「なにそれ。モヤモヤするんですけど！」

彼女はぴたりと泣き止み、硬いつま先で足を蹴ってきた。

吉司、真田なぼっこうスキレは学べなかった。そうそう真田ごっこぼっこうな

紙屋　真面目なほうっちゃコンヨノは学ケなかった　そもそも真面目なほうっちゃな
ど目指さないだろう。だから真面目なんて概念はぼっちにはないんだ。
その後、放課後が来るまで朝烏は「ほんとに嫌いじゃない？」と十回以上
おれに確認してきた。嫌いなわけないだろ。嫌いだったらスルースキルを使っ
てるからな。

第31話　ドスケベツインテール&ドスケベポニーテール VS 目覚めはじめたショートカット

夏休み直前や登校最終日に何か起こるのではないかとハラハラしていた。よくあるだろう。特別な日の前日に「今日死ぬんじゃないか」と妄想することが。もちろん不運なことは起きない。だが学習せず毎度妄想し始めるのが人間というものである。

当然今回も何事も起きず、無事、大量の課題とともに夏休みを迎えた。

ただちに沙月と一緒にビリビリに破いて紙吹雪にして遊びたいところだが、そんなことをやってしまった暁には停学にでもなって――朝烏に会えなくなる。

おいおい。

親が泣く、だろ。ひどい間違いだ。好きな人で頭が埋め尽くされて、最後には包丁を振り回す可愛い乙女みたいじゃないか。おれの脳みそはツインテールによって魔改造されてしまったのだろうか。何かを行動しようと思う度に朝烏のことがチラつく。

そうだ。これは洗脳だ。

きっと彼女はおれを洗脳したに違いない。あのツインテールを振り子代わりにしておれの意識を支配したのだな。あなたはわたしのこと以外考えられなくな～る、とでも念じてニヤける彼女の顔が目に浮かぶ。

「沙月。あのツインテールは恐ろしいやつだ。気をつけろ」
「ぐりんぴーす？」
「それは沙月の嫌いな豆の一種だ。朝烏百合愛のことだ」
「ゆりあちゃん！　ゆりあちゃんすきー！」
「ダメか……兄妹揃って洗脳済みか……」
おれは沙月の手を引きながら歩いた。ついでにキャリーケースも引きながらだ。
夏休みが始まって一週間が経過し、そして本日は以前から計画していた朝烏の別荘お泊まり会の日である。課題は順調に進んでいるので憂いなく羽を伸ばせるだろう。沙月も元気よく腕を振って遊ぶ気満々だ。沙月の喜ぶ姿だけで白米五キロはいける。
「ゆりあちゃんだー！」

おれの手から逃れ、沙月は駆け出した。待ち合わせ場所の駅前に着くやいなやのことだった。

「沙月ちゃ〜ん！」

ショートパンツの朝烏は膝をついて沙月と抱擁した。朝烏の甘い声は滅多に聞けないのでいつ聞いても新鮮味がある。そういや朝烏もぴちぴちのＪＫだったな。

その隣には大人気美少女女優の榊木。彼女は沙月を見て怪訝な顔になった。

「本当に式島くんの妹ちゃんなの？　式島くんと同じ血が流れてるとは思えないくらい可愛くない？」

「おれは可愛く生まれた方がよかったか？」

「うーん、無理」

「自分で振ったといてなんだが結構悲しい気持ちになった」
「大丈夫大丈夫！　式島くんはチョーカワイイ！」
光のないダークな目で褒められても微塵も嬉しくねぇ。
そのまた隣には雀。彼女は麦わら帽子を被っていた。
「麦わら帽子なんてもの久しぶりに見た」
「そう……似合ってる？」
「似合ってる似合ってる。ひまわり畑にいたら写真映えしそうだな。青春っぽい」
「式島くんもかっこいいよ。意外と……身体、鍛えてるんだね」
「そうか？」
優秀なぼっちは心身ともに鍛える。沙月と公園で遊ぶときはいつも懸垂や駆けっこをして体を鍛え、心身の強化を続けてきた。いくら心を鍛えても身体が追いついてこなければ意味がない。逆もまた然り。

身体を近づけてこなければ意味がない。近もまた然り。

Tシャツで来たのは間違いではなかったな。シンプル・イズ・ベスト。ザ・ベスト・イズ・マッスル、だ。

「ふんっ、どうせ大したことないわ。市民プールで見たときはそうでもなかったわよ」

雀との褒め合い合戦が気に食わなかったらしく、ツインテールは詰め寄っておれのシャツの胸元を手前に引っ張った。そしてちょっと背伸びして彼女は上からおれの体を覗き込んだ。おれもやってよろしいか。

「ふ、ふふふぅん？　……えっちじゃん」

おれは密かに絞り続けていたのだ。余分な脂肪を抜き、夏にふさわしい身体を目指して改造してきたのだ。

彼女はまじまじとおれの肉体を観察した。カンガルーが母親の袋の中に入ろうとしているように、彼女は熱心におれの肉体を覗き込み、明らかに興

奮していた。
「顔が赤いぞ、朝烏先生」
「あうっ、赤くないし！　あんたの目が血走ってるだけよ！」
「熱中症か？」
「ちゅっ、チューしようですって!?　いつの間に積極的になっちゃったのよ……わ、わたしどうなっちゃうのぉ……」
「耳鼻科行け」
おれは沙月の手を取って駅構内に向かった。ツインテールは任せた、榊木と雀。
電車に乗り、だいぶ駅をまたぎ、そして駅から降りると次はタクシーを捕まえた。タクシー代がいくらかかるのだろうと不安だったが、朝烏が魔法のカード――クレジットカードを誇らしそうに提示して全額支払った。いいご身

分だな、ツインテール。胸を張りすぎて海老みたいになってるぞ。

そうして到着した場所は太平洋を見渡せる海辺だった。ほのかに香る潮の匂い、耳に優しいさざ波の音、そして徒歩数分の距離には木造建築の別荘があった。

「あれですか。水着回ってやつですか、朝烏先生」

「何よそれ。もちろん泳ぐわよ!!　水着持ってきてって言ったわよね？」

「持ってきたが危なくないか？　朝烏先生、全然泳げないよな」

「ふんっ、バカね。そのためにあんたがいるんじゃない」

おおよそ、付きっきりで監視しろとでも言いたいのだろう。乳幼児か、きみは。残念ながらおれのおっぱいは搾乳不可なので母親役は引き受けられない。

テンションアゲアゲの朝烏は拳を上げて一行を導き、別荘へと案内した。

内装はとても綺麗で家具はきちんと並べられ、ツルツルの木材は触っていて気持ちがよかった。暖炉まであって見ているだけで心が温まる。

「バカ睦月はこの部屋ね。さっさと着替えなさい」

朝烏はおれを部屋に押し込み、女性陣らと出ていった。

ダブルベッドが一つ置かれた寝室だった。このデカいベットを独り占めできるなんて最高だ。どれだけ手足を伸ばしてもベッドからはみ出ない。やっぱりぼっちこそが至高だと改めて思った。

適当に荷物を出しつつ日用品を並べる。今回は二泊三日なので二日分の下着や消耗品等を散らからない程度に置いた。

そして水着を手に取る。おれはこの夏、あと何度この水着と向き合わなければいけないのか。そんなことを考えながら衣服を脱いでいった。

ドア。軋んだ音。

おそるおそる自室へ上半身裸の男がこちらを見ていた。日焼け跡と男らしい

おれはにっと首を百八十度回して一万を見た。口逆さ蒟蒻閉じたー万の隙間からは四つの顔。下から沙月、雀、朝烏、榊木。団子のように並んでいた。

おれはケツ丸出しの全裸状態で口を開く。

「お前らドスケベか」

みな水着姿になっていた。ツインテールの朝烏、ポニーテールになった榊木、ショートカットの雀はビキニ。沙月は超健全な子供用水着だ。

「にぃにのおしりー！」

「あうぅ……」

「式島くん……」

「前も見せてよ」

沙月、朝烏、雀、榊木の順にそれぞれ感想を述べた。おれは顔色を変えず、背中で語る勇ましい男のように直立状態を保った。膝を折るだけでも我が

象さんが彼女たちに挨拶してしまうからだ。
おれは復讐者（リベンジャー）のごとく握りこぶしを作り、横目で凄んだ。
「失せろ。さもなくばそちらを振り向く」
どうか清楚であってくれと願う。恥じらいで逃げ去ってくれ。
たが若干サバサバとした性格の持ち主である榊木アリスお嬢はその願いをぶちのめした。
「え、見たい見たーい！　写真撮っていい？」
「……きみには良心というものがないのかね」
「好奇心しかないよ!!　ね、百合愛？　見たいよねー？」
深い谷間に手を当て、朝烏は緊張した面持ちでおれのケツをガッツリ見ていた。一体いつまでケツ丸出し状態を続ければいいんだ。トイレに行きたくなってきたぞ。

「バカ睦月……その……全然興味とかないし好きとかじゃないしどうでもいいんだけどっ……ちょっとだけ……ちょっとだけ見たいかもっ……！」

おれは目を閉じて天を見上げた。

なんて――クレイジーな世界なんだ。神とやらに尋ねたい。おれはどうすべきだ。堂々と象さんを見せるべきなのか、ぱおーんするべきなのか、激怒して追い出すべきか、それとも興味津々の彼女らのために象さんを丁寧に解説するべきか。

お声は降りてこなかった。仕方ねぇ、ぱおーんするか。怖がって逃げ出すはずだ。そう諦めかけたとき、救いの神が現れた。

「みんな……ダメ……！　行こう！」

なんと雀が朝烏と榊木の手を引っ張ってその場から立ち去ろうとしたの

だ、普段言動に起伏があまり見られない彼女が見せたそのアクションは、おれの心を大きく揺さぶった。

おれなんかのためにありがとう、雀。

おれはこくんと頷いてそう彼女に伝える。雀は赤面しながらぎゅっと目を閉じて首を縦に振り、ドアにへばりつく朝烏と榊木を剥がした。

残されたのはおれと沙月。沙月には散々目撃されているので抵抗なく水着をはくことができた。

「にいにのおちんちーーーん!!」

「そんな下品に育てた覚えはないぞ、沙月」

さて、今度はおれのターンだ。

乳を見せろ、スケベども。

第32話　ツインテールがしてと言ったらするんです。

サングラスをかけてビーチチェアに寝転がり、おれは考え事をしながら肌を焼いていた。

さて、どうやって乳を拝もうか。

目には目を歯には歯をとあるように、ドスケベにはドスケベを行ってもよろしいはずだ。おれのお着替えシーンをぬけぬけと覗き込んできて、しかも股間を見せろと要求するとは、このハラスメントに敏感な時代によくもできたものだ。

たもの
しかも絶賛人格形成中の我が妹、式島沙月の前でなんたる悪行。榊木や朝烏のようにドスケベ少女になったらどうするんだ。兄は泣くぞ。
「にぃに！　あそぼーー！」
浮き輪に入った沙月が無邪気に誘ってきた。
「朝烏たちは？」
「いっしょに泳いでる！　にぃにもあそぼーよ！」
身を起こして波打ち際を見ると朝烏、榊木、雀が何やら水をかけあってはしゃいでいた。平和的じゃないか。
「もう少し後で行くよ。今は考えることがあるんだ」
「う～わかった！　あとできてーー！」
沙月が駆けていったのを見送った後、いかにして合法的に乳を拝むかを再び考える。

正直に言おう、これはおれのエゴである。普通に彼女らの裸体に興味がある。だってしょうがないじゃないか、人間だもの。むつき。

おれは立ち上がって背を伸ばした。やつらと遊んでいればハプニングの一つや二つ起きるはずだ。おれには画策などできない。ましてや悪事は心が痛む。なので自然の成り行きでドスケベを狙おう。

「あ、バカ睦紀！　やっと来たわね！」

「おれも混ぜてくれ。何してるんだ」

「いろいろ！」

本人たちもわかっていないようだ。

「にぃに！　投げて！　投げて！」

早速駆け寄ってきた沙月は抱っこを求めた。おれはもちろん快く抱きかかえ、地平線の彼方に向けてぶん投げた。全然飛ばなかったが沙月は大喜

びできゃあきゃあ叫んだ。
「もっかい！」
「飛んでけ！」
それを何度か繰り返していると隣に朝烏がいた。ご自慢のツインテールはわかめみたいになっていた。
「どうした」
「わたしも投げてほしい……かも」
「沙月は投げられるが、朝烏先生はなぁ……」
「なによ、わたしが重そうだって言いたいの？　そんなことないし」
「いやいやそういうわけでは……いや、そういうわけか？」
「うだうだ言ってないでわたしを抱きかかえなさいよ！　男でしょ!?　そんな……そんな立派な身体してるんだからっ！」

上巨遣いですいすい詰め寄ってきた。

これは何を言っても話を聞かないパターンなので、おれは仕方なく両手を広げた。沙月なら両脇に手を入れてぶん投げられるが朝烏は無理があるため……お姫様抱っこしかない。

「うっ、きゃあ！」

全然軽いじゃないか。こんなことを言ったら殺されそうだが女の子はもっと重いと思っていた。これなら沙月のように地平線の彼方へぶん投げられる。

さて、カリフォルニア州にこのツインテールを届けるかと思った矢先、朝烏はおれの首に両手を回した。それに驚いて彼女を見る。気恥ずかしそうに頬を赤くした彼女の顔が目の前にあり、長い睫毛や潤いのある唇が細部まで見えこ。

見えた
「な、投げられないぞ」
「……なげないで、ばか」
　すると彼女は頭をおれの肩に乗せてきた。ちょっかいをかけたがりの榊木がいる前で、と思ったが雀と一緒に沙月の相手をしていて助かった。
「あんたはわたしの王子様なんだからこれくらい当たり前だもん」
「そういえばそんなこと言ってたな」
「冗談だと思った？」
「冗談じゃないのか？」
「ばか、いじわる。あっちまで優しく運びなさい」
　彼女は荷物置き場のシートを指さしてそう言った。
　懇切丁寧にシートまで運ぶと彼女はビーチチェアでうつ伏せになった。
「バカ睦紀、いかないで。塗って」

「は？　何をだ」
「オ、イ、ル！　か、感謝しなさいよね！　わたしの身体に触れられるんだから！」
「榊木たちと塗ったんじゃないのか？」
「ちょ、ちょっと甘かったから塗り直してほしいのっ！　別にあんたに触ってほしいとか一緒にいたいとか思ってないんだからね！　勘違いしないでよね、ばか！」
　今日はやけに「バカ」が多いな。おれの名前はもはや「バカ・ムツキ」なので気にしてないが。
　保冷袋から日焼け止めオイルを取り出し、適量を手に取った。朝烏は背中の紐を外してじっと待っていた。
　この展開は何だ？

オイルを美少女の背中に塗ったくるとは、なんていうクソベタラブコメだ。
おれはそのようなワンパターンな流れにのまれるつもりはない。
「爪とか立てちゃダメよ。優しく……優しく撫でるの」
「任せろ」
「ふ、ふんっ。今日はほんの少しだけかっこいいじゃない」
「ぼっちはかっこいい生き物だからな」
オイルでべたべたの手で彼女の背中を撫でた。
「はぁうぅっ！」
「その声やめろ」
「あんたが悪いの、ばかえっち！」
このツインテール、全身性感帯なのかもしれない。
しかしやめるわけにもいかない。おれは自分を変態おじさんだと暗示さ

せ、巧みに手を動かした。彼女の背中の上で、まるでスケート選手のように上へ下へと行き来しながら円を描き、余すことなくオイルを染み込ませた。

「はぁはぁ……はぁっ、んん！」

呼吸が辛そうだが知らん。おれは無言と無表情のまま、手だけに全神経を集中させた。朝烏は時々助けを乞うように目を向けてきたが、それも知らん。これはおれの股間を見ようとした罰である。おれの象さんは博物館に展示できるレベルであり、無料で鑑賞できるものではない。

「あぁぁっ！　そこはっ、ばかぁ！」

わざとじゃない。わざとじゃないが、朝烏の下の水着の中にスベって手を入れてしまった。お尻である。ケツとか臀部とも言う。

「尻くらいで喚くな、ツインテール。ただの脂肪の塊なん、ぶべぇ！」

「殺ッるかッらダメ！」

「感じるだろ、メンなの！」

と叫んでおれをビンタした。

そして起き上がった彼女はぽろりした。「ぽろりした」とは「おっぱいを出した」という意味である。おれはその瞬間にぼっちモードを起動した。それでも刺激的な光情報を完全に耐えきれず、ガツンと頭をぶたれたような衝撃が全身を走った。

「あ」

朝烏は目を点にして自分の胸を見た。おれもしっかり目に焼き付ける。

彼女は慌てて水着を拾い上げて胸を押さえた。

「はううううう!!」

「どうした、目からビームでも出すのか」

「見たでしょばかばかばかぁー！」

「これでおあいこだー

「あんたはお尻だけだもん！　わ、わたしは胸を見られたのよ!?　しかもなんでそんなに冷静でいられるの!?　わたしって魅力ない!?　バカ睦紀にとってはわたしなんかただの子どもなんだぁー！」

こんなに暑いのによく叫べるなと感心する。

軽く流そうとも思ったが、この素晴らしい環境のせいか甘いことを言いたくなった。

「朝烏先生は……可愛い」

「えっ……む、無理そんないきなりっ！　目見ないで！　無理だからぁ！」

「可愛いぞ」

「うぬっ……！　好きじゃないのに、好きにっ……じゃなくて嫌いじゃなくなっちゃう！」

「朝烏先生以上に可愛い子なんていないんじゃないかな」

「も、もうダメッ、バカ睦紀！」

朝烏はシートに移って女の子座りをし、おれにも座るよう指示した。

「本当に可愛いって思うなら……あんたがしたいこと、してみて」

「……は？」

「男の子って好きな子にはキスしたくなるんでしょ……？　証明してみなさいよ、ばか。嘘で可愛いなんて言ってるなら許さないんだから」

「おいおいおい……」

「嘘だったらあんたのこと殺してやるんだから。わたしのこと可愛いって……好きって思ってるなら……できる、わよね……？」

朝烏は目を細めて首を伸ばした。両手を地に着け、顔だけでおれに肉薄した。

彼女が可愛いのは嘘じゃない。本当にそう思っている。こんなにも守ってあ

けたくなる子は沙月以外には初めてだ。可愛い……本当に可愛くて、いつまでも隣にいたくなる。

「はやく……いいからして、ばか」

いいのか。ぼっちがこんなことしていいのか。人との繋がりを絶とうとしている人間が繋がろうとしていいのか。

けれど、朝烏が望んでいるのなら――。

「にぃにとゆりあちゃん子どもつくってるー!!」

沙月の大声でおれたちは目を覚ました。

「つくってない!!」

朝烏と声を重ねて否定した。榊木と雀ではなく沙月で良かった。沙月じゃなかったら止まらずキスしていた――かもしれない。

朝烏は拗ねたように背を向けた。こうなると声をかけても「バカ」以外の言葉を言ってくれないのでうつ伏せて背を向けて寝ること。ごがすぐこ支えはず

言葉を得られないのでおれも黙って背を向けて黙ったまま彼女にて
たっと背中を合わせ、そっと手を重ねてきた。
「きょ、今日だけいつでもしていいからっ……！」
とんでもない一日になる予感がした。

第33話　わたし以外とイチャイチャしてほしくないんだもん!!

「式島くんって女の子に興味あるの？」

「は？」

BBQ用のデカい肉を焼いている最中、榊木は首をかしげて訊いてきた。

興味ないわけがないだろう。見事なプロポーションを目の前にして、おれはちゃんと動揺している。現在心臓はネズミの鼓動並みに早い。

「おれだって男だ。興味はある」

「そうなの？　ごってつこ　こころのこと見てる鼻血出さないっやん」

「それは漫画の世界だけだ」

榊木は本当にスタイルがいい。小顔で高身長で足も長く、肉付きもしっかりしていてグラマーだ。しかも超美人。もう高校生とは思えないほど成熟していて何もかもが素晴らしすぎる。親の良いところをしっかり受け継いだのだろう。

「そうなんだ。てっきり式島くんって男の子が好きなんだと思ってたから。スッキリした」

「とんでもない誤解だな」

「んふ。わたしにもトング貸してー」

そう言うと彼女はおれの隣に来てトングを奪った。榊木さん、おっ、お胸がすげぇ。豚のもも肉以上のボリュームだ。

「わたしに欲情しないでよ？　ファンに殺されるよ？」
「す、するか、ドスケベポニーテール」
「なーにその言い方ぁー。式島くんだってわたしのおっぱい見て興奮してるくせにー」
「してねぇ。肉を焼け、肉を」
「ひひっ。かしこまりましたー。ちなみに百合愛と付き合う予定は？」
　このポニーテール、いきなり何をッ。
　おれは咄嗟に辺りを見渡し、朝烏を探した。だが彼女は離れたところで沙月と一緒に砂でうんちを作っていた。雀はというと……いつの間にか榊木の隣にいた。
「有り得ん」
「百合愛のこと好きってバレバレですけどぉ？」

「好きじゃねぇ。ほら、肉を食え。そして黙れ」
「やだー。わたしお喋り好きだもーん。式島くんがお肉食べなよ。ほら、あぁ～ん」
榊木は手を添えておれの口元に肉を持ってきた。拒否するのも違う気がしたので、おれは気が進まないといった感じの表情を浮かべつつ口を開いた。
だが悲しいことに、肉はUターンして雀の方へと行ってしまった。
「わたしがあ～んしたら百合愛に怒られちゃうもんね」
「正直榊木のあ～んが欲しかった」
「あぁんっ」
「そういうことじゃない、やめろ痴女」
「痴女じゃないもーん、女子高生だもーん。ねー、玲音～？」
玲音は小さくこくんと頷いた。しかしながらちょっと乙女っぽい感じだ。

立ち振る舞いというかなんというか……冷淡なあの眼差しが、今日はどうも生き生きと輝いている気がする。

「とにかく榊木も雀もいっぱい食え。もっと食って太っちまえ」

「わーい。どんどん焼け焼け～」

調子に乗った榊木はおれの肩を揺さぶって遊び始めた。ちょくちょくおっぱい当たってるんだよなぁ。幸せ――じゃなくて辛いんだよなぁ、背徳感で。

「というかさ、式島くん。わたしたちのこと名字で呼んでるけど、まだそんなに距離あると思ってる？」

「距離？」

「うん。別に下の名前で呼んでいいよ。もうわたしたち他人じゃないしね」

「わ、わかった……」

おれは榊木に面と向かって呼んでみようとした。榊木は「ん～？」と上目遣いで目を合わせてきて、楽しそうに唇を吊り上げる。

逆して目を合わせてきて　楽しそうに薄い口元をゆる
名前を呼ぶだけだ。何を緊張しているんだ、式島睦紀。だたそれだけのことだろ。
「ん～？　なんで緊張してるのかなぁ？　意識しちゃってるのかなぁ？」
下の名前を呼ぶことは、おれにとって難しいことだった。なぜならそれは親しみを意味し、呼び捨てはぼっちを目指すこととは真逆の行為なのである。
「……やっぱり榊木でいいか？　慣れてないんだ」
「ダメー。呼んでくれなかったら叫んで大人の人呼ぶ」
「わかったわかった……アリス」
「むふっ。なぁに、睦紀くん？」
「ぐっ……何でもない」
「むふふっ。じゃあ次は玲音ね」
全身がむず痒い。イヤな感覚だ。

雀は胸あたりを押さえてもじもじしていた。まさか、恥じらいでいるのか？　あの無表情無感情系クールぼっちの雀が？

「ど、どうした。いつもと様子が違うぞ」

「……わたし、二人より胸ないから……あんまり見ないで……」

「そんなことないぞ……れ、玲音。それだけで人の善し悪しは決まらない」

「……！　嬉しい、ありがとう。む、睦紀くんっ」

ニヤケ顔のアリスと赤面した玲音。

二人を見て、おれは不覚にも「あぁ、なんか青春っぽいな」と思ってしまった。彼女らと話していると心が温まるし、気持ちよかった。

ダメだダメだ、おれは選ばれしぼっちだぞ。誰かおれを殺してくれ！　目覚めさせてくれ！

おれの願いは天に届き、処刑人はすぐにやってきた。

「あんたどうして呼び捨てにしてるの……」

アリスと玲音とワイワイ雑談しながら肉を食っていると朝烏が驚いた様子で話しかけてきた。

「うんちできたか」

「沙月ちゃんと作りまくったわ。いえ、そんなことはいいの。あんたいつから馴れ馴れしくわたしの友だちを呼び捨てにしてるわけ!?　しかも楽しそうに！　楽しそうにっ！」

ぷるぷると震えて怒り心頭といったご様子で、ツインテールはおれと榊木の間に割り込んできた。

「アリス。この男はすぐに手を出してくる下品なやつよ。わたしが管理するから離れて」

「[illegible]

「え～別にわたしはいいけどなぁ。積極的な人って素敵だよね。だって今の時代、ナヨナヨしたやつばっかで気持ち悪い。でも睦紀くんは違う」

「いいからっ！　こいつはわたしの下僕なの！」

「ふぅーん。じゃあ睦紀くんに選んでもらおうよ。睦紀くん、誰の隣がいい？」

　おれは無視して肉を食った。これは関わったら即死のパターンである。どれを選択しても最悪の結果となる。なのでこの場合は選ばず、ただいつも通りぼっちでいればいい。

　だが……。

「バカ睦紀！　当然わたしよね!?　あんたはわたしがいないとダメダメなんだから傍にいなさい！」

「睦紀くん、長身こなつでいいんだよ？　こいなモヤシうるさい乳づ

「睦紀くん、妻面になっていいんだ？　こんなエッチな色気づいた子猫の傍にいたら耳がおかしくなっちゃうよ」

「余計なお世話よ！　わたしよりアリスの方がよっぽど色気づいてるもん！」

「これは大人の色気なの、オ、ト、ナ、の、ね。ま、百合愛みたいなお子様には過激に見えちゃうから仕方ないかぁ」

「うるさいうるさいうるさぁーい！　バカ睦紀!!　ご褒美あげるからわたしを選んで！　お願いだからぁ！」

「わたしを選んでくれたら睦紀くんを自宅に招待しちゃおっかなぁー？　パパとママを紹介してあげる」

どちらも選ぶという選択肢はないのだろうか。毒占欲の強いやつらだ。ほら、玲音を見てみろ。お淑やかに――いや、おれをめちゃくちゃガン見してい

た。ぶっちゃけ肉さえ食えれば誰の隣にいても構わないのだが、そうもいかないようだ。

平和に行きたいなぁと考えているとおれの第六感が危険を察知した。

沙月がおれの海パンをがっつり背後から掴んだ。

社会的死。

露出魔。

変態バカ睦紀。

公然わいせつ罪。

停学。

自主退学。

おれは、未来が見えた。象さんを出して終わる未来が網膜に写った。

だが、そんな未来は実現させない。おれはバービージャンプの要領でその

場に伏せた。もちろん沙月に脱がされながらである。開脚して後ろの沙月を蹴飛ばさないよう注意し、必死の抵抗を見せる。

しかし沙月もプロだ。おれは何度も脱がされ、沙月の満足そうな笑みの前でひれ伏して悔し涙を流してきた。

熟練度は沙月が上だった。おれは再びケツ丸出しの状態で砂浜に象さんを埋めた。

「にぃに象さん見してーー!!」

一同固まっていたが沙月に救われた。彼女らには見られていないし、さらに究極の選択をこのハプニングで回避できた。ありがとう、沙月。

「とりあえずきみたち、後ろを向いててくれないか。海パンを上げたい」

「手伝う？　拭いてあげる？」

「黙れ、アリス」

第34話　これが、ぼっちとツインテールの物語

日中は遊びに遊び尽くしたため、夜はゆったり過ごすことになった。

広いリビングでカードゲームやらボードゲームやらを女性陣はやり始め、唯一の男であるおれはだらだらとテレビを観たり、彼女たちの楽しそうな様子を眺めた。正直かなり疲れていたのでもう遊ぶ気力は底をついていた。ツインテールから誘われはしたがやんわりと断っている。

ゆえに強烈な睡魔が襲ってきた。重りでも付けられているじゃないかってくらい、目蓋が重く、油断するとすぐ目を閉じてしまう。

<ぱし目言方言く　汨幽てるるとてく目目はなってしまう
「にいに死にそう」
「多分死ぬ」
「たまにお墓におしっこするね」
「水をかけろ。でなきゃ先祖に呪われるぞ」
　人生ゲームを堪能している沙月がおれの額をべしべし叩いた。沙月が心の底から楽しんでいるようで良かった。アリスと玲音と仲良くできるか若干不安だったのだ。だが沙月はおれとは異なり、ぼっちの道を歩む者ではない。そう、パリピなのだ。
「睦紀くん、眠いの？」
　アリスがおれの様子を見てそう言った。
「あ、あぁ。ちょっとな」
「力仕事は全部任せちゃったもんね、ごめん。寝ときなよ。明日もあるんだ

し」

「そうだな。じゃあおれは先に寝るとする。おやすみ」

ふらふらする足でリビングから出た。もうすぐ寝られると考えたらたちまち眠気が強まり、気付けばベットに倒れ込んでいた。

静けさがとても心地よく、ふかふかの布団も気持ちよくて身が溶けそうだ。

意識は一瞬で奪われた。

だが、これで終わらないのがお泊まり会である。

おれは真夜中に目を覚ました。眠気がたっぷり残っているのに起きたのは、ベッドにいた誰かのせいだった。おれは幽霊かと思って身を起こし、その正体に目をこらした。

「やっと起きた。何度も呼んだのに……」
パジャマ姿の朝烏がベッドに座っていた。月明かりでうっすらと彼女の顔が浮かび上がった。
「驚かせるなよ……マジで幽霊かと……」
「ふん。いつも一緒にいるのにひどいわね」
そんなツンツンした言葉とは裏腹に、彼女は身を寄せて横からぴったりくっついてきた。ふわっと彼女の甘い香りが漂ってきた。それだけで眠気が吹き飛び、妙な気持ちが沸き起こった。
「あんたのおかげで今日一日とっても楽しかったわ」
「おれも楽しかった。こんなに楽しいのは久しぶりだ」
「ふふん。だから言ったでしょ、孤独になってもいいことなんてないって」
「それとはまた別だ。孤独の楽しみもある」
「へへ、ばーか」

「わからずや、はーか」

いつものように罵倒すると彼女は身体をもたれてきた。小さな肩が腕に寄りかかり、そこから彼女の柔らかさと甘えたがっていることが伝わってきた。

「あんたには感謝してるの。アリスや玲音、沙月ちゃんとこうして友だちになることができた。わたし、こうしてみんなと遊ぶのが夢だったの。いつも一人だったから寂しくて寂しくて辛かった。でも日本に戻ってあんたを見つけ出してから変わったわ」

「おれを見つけ出した？」

「そう。高校に進学するならあんたがいるところが良かったの。日本で知っている人はあんたしかいなかったし、それと約束したじゃない。王子様として迎えに来てくれるって。そのE子様はつこ、ソリこに伝えてこに戻き改、こて

迎えに来てくれるって、その三年様はわたしのこと忘れてたし」に突き放してきたけど」

「す、すまん」

「いいの。結果オーライってやつよ」

「じゃあ偶然高校で再会したってわけではなかったのか。なら、もしかして最初の席が隣だったのも……？」

「それは本当に偶然よ。驚いちゃったわ。わたしたちって何かあるのかもね」

朝烏は小さく含み笑いをした。

「ねぇ」

「ん？」

彼女は改まった様子で再び口を開いた。

「なんでキスしてくれなかったの」

「は、は？」

「今日だけいつでもしていいって言ったのに」
「そ、それは違うだろ……第一あれだ、あの時は朝烏先生は頭に血が上っておかしかったし、可愛いと思ってる証明のためにキスとか常識的に……おかしいだろ。それに――」
彼女は目に涙を溜めていた。わけがわからなかったおれは言葉を失った。こういうとき、どうすればいいんだろうか。ぼっちのおれにはただ黙り込むしかできなかった。
「いいのっ、気にしないで。したくないならいいの」
「うっす……」
「男のくせにへぼい返事ね、バカ睦紀。情けない」
「朝烏先生には頭も上がらないさ」
「そうよ。可愛くて頭も良くて常に正しいわたしだもの。あんたはよくやって

るわ。わたしのためにしっかり働いてる」
「いきなり変な話になったな」
「だ、だからたまにはご褒美もあげないと、い、いけないわよねっ？」
「それは嬉しい。コンビニのお菓子とかでもいいぞ」
　すると突然、彼女はおれを押し倒して馬乗りになった。こんな状況だがおれは冷静に「やっぱり女の子だからアレがないな」と心の中で感想をもらした。
　いや、馬鹿野郎。これは国家存亡の危機レベルでやばい事案だ。ツンデレツインテール美少女が真夜中に馬乗りしてきたのだぞ。アリスたちにバレたらもう二度と顔を合わせられないし、下手すりゃ新たな生命が誕生するかもしれない。とにかく激ヤバ。
「げ、下僕にはご褒美をあげないとととと……に、逃げられちゃうもんね！

だからそう、これはそのためのこと……必要なことなんだもん……絶対にしなきゃいけないことだもん……」

「あ、あああああさがらす先生、け、けいさつ呼んでもよろしいか」

「うるしゃぁい！　もう先生なんて呼ぶなぁ！」

「そ、そっちが先に言い出したんだろ！」

「あんたはわたしの弟子であり下僕でもあったからよ！　当たり前じゃない！」

「だったら今は何だよ！　おれは何なんだよ！」

「あ、あんたはぁ……わたしの……」

朝烏は背を曲げてツインテールをおれの胸に垂らした。何度も小さく首を振って否定し、膨大な語彙の海を探検しているようだ。

そうしてぱっと綺麗な顔を上げ、おれの頭を両手で掴んで持ち上げた。

「バカ野郎はっこ　ンり大刀な反ごうなり！」

「ノナ瞳綺はわたしの大切な友だちなの！」

唇が塞がれた。

何が起こったのか最初はわからなかった。とても柔らかくて脳が痺れるほど気持ちがいい。意識の全てがこの唇に注がれている。そうわかったとき、おれは朝烏とキスしているんだとやっと気付いた。

「こ、これがご褒美よ。感謝しなかったら絶対に殺すっ！」

「くくっ……」

「なんで笑ってるのよ！　仕方ないじゃない、初めてだったんだからぁ……」

「おれが朝烏先生の友だちだとはな」

「あんたがどう思っていてもあんたはわたしの友だちっ！　それともう先生だなんて言わないで！　アリスたちみたいに下の名前で呼ばないと許さないんだから！」

「わかったわかった、朝烏ー

「ダメ、百合愛って呼んで。じゃないともっかいキスしてやるもん」
「百合愛」
「はい、よくできました」
そしてまたキスされた。
吐息がとても官能的で百合愛とは思えなかった。いつも子どもみたいに喚き散らしている彼女とは思えないくらい立派なレディに感じ、別人に精神を乗っ取られているんじゃないかと疑ってしまう。
深夜のテンションがこうさせてしまったのか、はたまた隠れてお酒でも飲んでしまったのかはわからないが、きっと朝になったら綺麗さっぱりなかったことになるだろう。
だってこれは――
「これはただのご褒美よ。満足した？」

「しました」

「これからもあんたはわたしの隣にいるの。友だちをまだまだ作りたいから協力しなさい。あんたはそのサポートをずっとし続けて、わたしを奉仕するの。いい？」

「どちらかといえば百合愛が隣にいるんだけどな」

「生意気なバカ睦紀。もっかいその口塞ぐわよ」

「窒息するからやめてくれ」

「ふん、ばか……」

彼女はやっとおれの身体から下りた。まるで夢みたいなひとときだった。本当に夢じゃないよな。流石に夢だったら起きたときに号泣する。

「バカ睦紀。これからもわたしの隣にいてね」

「あぁ、わかった」

[illegible]

「あんたは忘れてるかもしれないけど、別れる前にもう一つ約束したのよ」

彼女はベットから立ち上がるとおれの耳元に口を寄せ、魅惑的な声で囁いた。

「将来結婚しようってね」

彼女はそう言い残し、部屋から出て行った。

どこまでおれたちはバカなんだろう。

一方は必死にぼっちを目指して孤独を貫き、もう一方は友だち作りのために馬鹿馬鹿しいことをやってのける。そんな二人は過去に出会っていて、メルヘンチックなことを考えては突拍子もない約束までし、成長しても未だにその約束にとらわれている。仕舞いには結婚までそそのかし始めた。

でも、これでいいんだ。

おれたちはまだまだ子どもで夢を見てもちっとも恥ずかしくない。夢をなくした大人よりよっぽど素晴らしいと思うからだ。彼女もこ

なくしたカノジョがいっぱい楽しいし、表情に満ちあふれている。彼女のとびっきりの笑顔がその証拠だ。

きっとこの夏はツインテールづくしの日々になる。日頃以上にツインテールがお隣から離れないかもしれない。けれど次からはおれから傍に近づいてみよう。ぼっちらしくないかもしれないが、しょうがないなとぼっちの神様も許してくれるだろう。

彼女にとって、式島睦紀は友だちなのだから。

その夏、おれは初めて彼女の前で笑顔を見せた。

第一章　終わり

隣の席のツンデレツインテールが何故かおれの傍から離れない！

第2章　あなたの友人の物語

第35話　わたし子猫じゃないもん。

夏、スズメが寝ていた。

静かな眠りから覚醒へと導いたのは太陽でもなく、悪夢でもなく、胸の異物感だった。胸部を圧迫されている感覚があって少し息苦しかった。

ぴりっと残る筋肉痛に呻きつつ目を擦って確認した。

「おれ、なんかやっちゃいました……？」

布団の中に玲音がいた。背を丸めて縮こまり、おでこをおれの胸に当てて安からな寝息を立てていた。

昨夜を思い出す。玲音はこの部屋には来ていないし、話した記憶もない。

過ちも犯していないはずだ。犯していたら一秒たりとも忘れていない。おれはぼっち(童貞)だからな。

夜の記憶はツンデレツインテール美少女の百合愛だけだった。二度もキスして何のつもりだ、全く。好きになっちゃうだろうが。

「玲音、玲音」

彼女の肩を優しくさすって声をかける。起こさず部屋から脱出する手もあったが、まずは現状を把握したい。もしかしたらおれが何かしでかしてしまったかもしれないのだ。そのときは自害しよう。

「ん、おはよう、睦紀くん……」

「はい、おはようさん。どうしてここで寝てるんだい」

玲音は一度身を起こし、ぽけーっとおれを凝視した後、再び身を倒して寝始めた。

「起きろ、玲音。ツインテールとか、特にアリスに見られたりでもしたら高校生活終わるぞ」

「ん～……眠い」

「この状況でも眠気が吹き飛ばないなんて流石は天然のぼっち。感情が死んでるな」

何もなかったことにしよう。部屋を出て何食わぬ顔でリビングでだらだらしていればいい。

おれはそう考えてベッドから下りようとした。が――

「なんで睦紀くんがいるの？」

ばっと起き上がって玲音は訊いてきた。眠気はぶっ飛んだようだ。

「おれが訊きたいんだが。ここはおれのベッドだぞ」

「ほんとだ……あれ、なんで来たんだっけ……」

「酔ったりしてないよな？　お酒はダメだぞ」
「飲んでない。あっ、思い出した。これあげる」
　玲音はおれに小綺麗な封筒を手渡した。中身は意外なものだった。
「チケット……？」
「そう、コンクールの。わたしそれに出るから……む、睦紀くんに……」
「もしやピアノの？」
「うん……忙しかったらいい、捨てて。でもよかったら聴きに来てほしい……」
　玲音ははねる寝癖を手で押さえながらそう言った。俯きがちで表情を見せてはくれなかった。
　おれの回答を待たずに玲音はベッドから立った。
「昨日のうちに渡すつもりだったけど、睦紀くんぐっすり寝てたから渡せな

がった」

「お互い遊び疲れてたからな」

「うん。それで……一緒に寝ちゃった……」

「そこは頑張って部屋に戻れ」

「ごめんなさい……イヤだったらもっと謝る」

「イヤってわけじゃなくてだな……その……」

「……わたしはイヤじゃなかったよ？」

そう言い切ると玲音は歩き、ドアを開いた。

だがドアの向こうにはツインテールが立っていた。聞き耳を立てていたらしい。玲音と正面から鉢合うと百合愛はビクッと跳ね上がって身をよけた。

玲音は廊下に出る前に振り返った。

「わたし、睦紀くんのためなら良いピアノを弾ける気がする」

迷い言葉を残して命音は部屋から出ていった。明日ぱぅかぅ凶が支える

謎の言葉を残して玲音は部屋から出ていった。卓上には私が疲れる事件だった。これで一日分疲れた気もする。

もう一度寝ようかと思ったら百合愛がそおーっと顔を出し、ジト目で見つめてきた。

「何だ、ツインテール」

「はーい、ちょっとチェックさせてもらいまぁーす」

百合愛は部屋に入ってゴミ箱を漁り始めた。大したものは捨てていないはずだが恐怖を感じた。昨日は何もせず寝たはずだ。人様の家だしな。

「くんくん。くんくん」

百合愛は四つん這いになって犬のように匂いを嗅ぎ始めた。

お尻を突き出してふりふりと左右に動かすため、後ろから見ているおれは背徳感で冷や汗が滲んだ。

「ふむぅ……それらしいものは捨ててないわね……くんくん……」
「何を探してるんだ」
「女の子に言わせないでよ、ばか」
百合愛は四つん這いのまま床からベッドへと上がり、また嗅ぎ始めた。特におれと百合愛が寝ていた付近を念入りに。手で触って汚れの確認もしている。
そして次はおれにターゲットを移した。
「くんくん。くんくん」
「お、おい、百合愛」
「あんたって本当に良い匂いよね。悔しいわ。くんくん……」
「色んな相性がいいらしいぞ」
「ばか、下僕のくせに生意気よ？」

彼女はおれの首筋にツンと整った鼻梁を近づけた。心臓が跳ね上がったように強く打った。彼女はさらさらの髪をおれの身体に垂らし、なおも鼻を利かせた。

「くんくん」

「やめなさい、百合愛」

「うん、大丈夫そう」

百合愛は小さく「よしっ」と呟いてガッツポーズした。

心なしか、いつもより可愛く見える。寝起きのぽわぽわした雰囲気のせいか？　それとも……キスしてしまったから？

「バカ睦紀」

「はい」

「勝手に盛りだしたらお仕置きするからね」

「寝返りを打ったときに頭でもぶつけたか？」
「茶化さないで、ばか！　わかってるもん、男の子が年がら年中発情してるこ
とくらい。あ、あんただって男の子だものねっ！　だから忠告してるの！」
「余計なお世話だ。おれは猿じゃないんだぞ」
「ふんっ、玲音と幸せたっぷりに寝てたくせに」
「あれはだな……」
「とにかく！　玲音に発情でもしたら絶対に許さないわ！　あんたのそうい
うところもわたしが管理するの。わかった？」
　百合愛はおれの胸ぐらを掴んで引き寄せた。
「あんたはわたしの弟子で、下僕で……大切な友だちなの。わたしの言うこ
と一字一句漏らさず聞いて」
「わかったわかった」
「本当にわかった？」

「本当にそれだった？」
「多分死ぬまで忘れない」
「ホントにホント……？」
「本当だって」
お望みの回答を得られたようで、百合愛はにっこりと笑みを作った。すると女の子座りをしたまま彼女は前屈みになって顔を近づけた。
「ならキスして？」
「意味わかんねぇよ……」
「先生であり、ご主人様でもあるわたしに忠誠心を見せなさい。別にあんたにキスされたくらいで動揺なんかしないわ」
「昨日あれだけ顔真っ赤にしてたやつがよく言う」
「うるしゃい！　今度はあんたからしてよ。男の子でしょ？」

そう言われて断るわけにもいかない。してほしいならしてやる。

おれは百合愛のか弱い肩を掴んだ。

「きゅぅ……」

「まだ何もしてない」

「怖くなんかないもん！　緊張しただけだもん！」

「アリスが言ったとおりだな。色気づいた子猫だ」

「わたし以外の話しないで――ッ!?」

まさにキスしようとしたとき、百合愛は突然あんぐりと口を開けた。今にも発狂しそうなくらい絶望感のある顔だ。彼女の視線の先に首を回した。

「朝からあっつぅ～」

アリスが歯を磨きながら背を持たれていた。パンツとTシャツという超軽装でのご登場だった。女性が多いとは言え、おれのことも考えていただきた

い。ま、眼福ですけど。

「おはよう。良い夫婦だねぇ」

「なんて格好してるの、アリス！　バカ睦紀の前で！」

「百合愛がそんなこと言えるの～？　昨日睦紀くんに自慢のおっぱい見せつけてたよね？　遠くからちゃ～んと見てたよ!!」

「うっ、ううぅうぅうん……！」

百合愛は俯いて羞恥心に身を震わせた。

おれまで思い出してしまったじゃないか。本当に……本当に綺麗な色をしていた――ダメだ、忘れるんだ。マジで盛った猿みたいじゃないか。

「今日も一日元気にいこー！」

アリスは大の字になって拳を突き上げた。

元気に、そして健全にいこう。不健全なぼっちはただのクソだからな。

第36話　サキュバスツインテールは小雀を警戒中。

「あう～……」

室内からツインテールの呻く声が聞こえた。アリスも同じく呻いており、玲音も声には出さないものの表情には疲れの色が見えている。沙月は不調気味の彼女らと遊びたがっているらしく、昼寝中の猫みたいに液状化した百合愛を揺すっていた。

おれは屋外のガーデンチェアに座っている。彼女らと同じく疲労感が抜けきっておらず、おとなしく海を眺めていた。

「さて」

玲音からいただいたチケットを取り出した。一体なぜおれを誘ってくれたのだろう。百合愛とアリスも誘われているのだろうか。しかしそれを尋ねたとして、おれだけが誘われていたら面倒になることは必至だ。あのツインテールがどんな形相で「ご主人様の許可無しに女の子とデートは許さない」とお怒りになられるか。

チケットの情報を頼りにコンクールについてスマホで検索した。

該当するコンクールはすぐにヒットし、ページを開いて中身を閲覧した。見たところ、高校生部門があったので玲音はきっとこれに参加するのだろう。クラシック曲で戦うらしい。

「にぃに！　ひま！」

詳細を読んでいたら急に沙月が飛び乗ってきた。結局構ってくれなかった

ようだ。

「百合愛たちは疲れてるんだよ」

「ひまーー！　ひまーー！」

「大丈夫、小学生になったら忙しくなる。暇なのは幼稚園までだ。そして自由なのも幼稚園児までだ」

「そうなのー？」

「そうだ。さらに暇なのは幼稚園に入る前だ。人生で最も自由な時期なんだよ」

「ひまそー」

「ただし自我が完全に芽生えていないため自由とは何なのかを知らない」

「いみふめー」

沙月はぼっちにはならなそうだな。彼女は陽キャやパリピといった騒音発

生器候補だろう。どこかのツインテールのように警戒心が浅めですぐに乳を出すようなやつに育たなければ問題はないけどな。

「今、わたしのことディスってたでしょ」

ツインテールが傍に立っていた。薄いTシャツと短パンで実に涼しげだったが表情は曇っていた。

「下僕の考えることくらいわかるもん」

「超能力者として良い商売ができそうだな」

「あんたくらいわかりやすい男じゃないと無理よ。別にあんたのことを毎日考えてるとか好きだからとかそんなんじゃないからね!?　勘違いしたらお仕置きするからね!?」

「おれもツインテールの考えてることなら見破れそうだ」

百合愛はシャツを掴んで苛立った。そんなおれと百合愛のやり取りを見

て、いきなり沙月は爆弾発言をした。
「子どもつくったほーがいいーよ？」
「さっ、ささささ沙月ちゃん!?」
途端に赤面した百合愛は引き下がり、己の身体を案ずるように抱きしめた。
おれは冷静に沙月に問いかけた。
「じいさんがいるな？」
「うん。百合愛ちゃんとー、玲音ちゃんとー、アリスちゃんとー、うーんとね。だれでもいいから種まけーだってー」
「じいさんのDNAは沙月が守るって伝えてくれ。あといい加減成仏しろってことも」
「うんとねー、根性なしーだってー」
「寺セが違うぃこと、寺セが。ううぉぃこうは寺セ下適合当なぃこと」

「時代が違うんだよ。時代がもうあんたには時代が違うんだよ」

沙月の霊感は未だ健在のようだ。というか早くセクハラじじいは天に召されろ。おれの人生はおれのものだ。死者に左右されるつもりはない。

「バカ睦紀……あんた、わたしと……このわたしと交わりたいって思ってるの……？」

「死んだ人間の言葉を真面に受け取るな。シャワーでも浴びて頭冷やせ、お子様ツインテール」

「う、うるちゃい！　子ども扱いすんなバーカ！」

百合愛はおれの髪をぐしゃぐしゃにかき乱した。ついでに沙月も馬乗りになって耳を引っ張る。二人ともレベルが同じだな。

動ずればさらに調子乗るから無視していたが、百合愛が急に手を止めた。

「あんたそれ落ちたわよー

「……」

手からチケットが落ちた。それを百合愛が拾おうとしたため、おれは沙月を片手で抱えたまま素早くチケットを先に取った。

「……わたしに見られたくないもの？」

「いや、そういうわけじゃない」

「見せなさい」

「断る」

「ご主人様に逆らう気？　きつ～いお仕置きが待ってるわよ？」

「おれに主人はいないし、誰にも支配されていない」

「あーだこーだ言ってないで見せなさい。でないと……あんたのこと大っ嫌いになってやる」

「おれのこと元から嫌いだろ？」

「くぅー!!　バカ!!　もう知らないもん!!」

ツインテールの片方でおれをはたくと家の中に戻っていった。よし、玲音のチケットは守り切った。玲音から誘われた旨を百合愛が知ったら絶対にいい顔はしないとわかりきっている。適切な対処だった。

「あ～種まきしっぱい～」

「まだじいさんいるのかよ」

「孫の顔を見るまでだってー」

「あんたの目は灰になってるぞって伝えてくれ」

「もうおじーちゃん帰っちゃった」

「天国に帰ってくれ……」

その後、おれたちは静かに過ごした。

家庭的な料理を作ったり、気ままにお喋りしたりと非常にゆるい雰囲気

のまま夜を迎えた。

お泊まり会最後の夜だからといって盛大なパーティをすることはなく、自宅で過ごすようにおれはひとりで過ごした。そして早めにベッドで横になった。どうせ百合愛と関わっていたら何らかの事件が起きるだろうから今日の活動は終わりだ。おれはドアに鍵をして就寝した。

翌日の午前中は荷物を整理し、みんなで別荘の掃除をした。ゴミを集めた際にまた百合愛がおれの出したゴミを調べていた。みっともないのでやめてほしかった。まるでゴミを漁るカラスだ。

そしてお世話になった別荘に別れを告げ、おれたちの住む街へと戻った。

振り返ってみれば楽しい二日間だった。こんなにも濃密な時間は初めてだったかもしれない。小中の修学旅行よりも心の距離が近かった。身体にいこっこはゴコ巨雑り本（ツインテールのキス）食をンてンまっている。

たっては七日距離の休　騎をしてしまっている。

おれのぼっち道はこれからもっと厳しくなりそうだ。

「みんなありがとう。人生で一番楽しい二日間だったわ」

駅構内で解散する前、改まって百合愛はそう述べた。

「わたしも楽しかったよ。一般人に戻った気分になれて爽快だった」

「そういえばアリスは女優だったわね。テレビに詳しくないから時々忘れちゃうわ」

「その方が嬉しいよ、わたしとしては。特別扱いされると悲しくなるから」

「じゃあアリスをこらしめる時はＶＩＰ扱いしてあげるわね」

百合愛とアリスはケタケタ笑ってお互いの脇腹突っつき合った。だが周囲の一般人がこちらに視線を向け始めた。マズい、アリスであることがバレつつある。

「アリス、早いとこ退散した方がいいかもしれない」

おれが忠告するとアリスも異変に気付いた。すぐに彼女はこの猛暑の中でマスクをつけた。見ているだけで暑くなる。

「ご、ごほんごほん。ごめん、インフルエンザかもしれないから先に帰るね！」

「ホントに天才子役かよ」

「しっ！　じゃあまた今度！」

長い髪を宙に流してアリスは走り去った。人気者は大変だな。おれがテレビに出演したらぼっちアイデンティティが壊滅し、ドライアイスのように肉体が昇華するだろう。

おれらも帰るか、と手を繋ぐ沙月に目を合わせる。そして百合愛にその旨を伝えようとしたら彼女は耳を貸すよう人差し指でジェスチャーしてきた。沙月にも玲音にも聞かれたくない話のようだ。

「もう一度言っておくわよ。わたしの許可無しに女の子のこと口説いたりし

ないこと」

「ぼっちのおれに何言ってるんだ。やっぱり熱中症なんじゃないのか？」

「特にぜったいに玲音はダメよ。あんた好みのクール系美人だからといって……好きになったりしたら許さないもん……」

「じゃあおれは誰なら好きになっていいんだ？」

「そ、そんなの決まってるじゃない。あんたは誰の下僕なの？」

「身に覚えがないな」

「ばか、わたしでしょ」

耳に息を吹きかけられ、反射的に背筋がびくっと震えた。なんだその妖艶なテクニックは。このサキュバスツインテールめ……。

百合愛はおれの反応を見てくすくす笑った。そして軽く手を振り、とても上機嫌にツインテールを左右にぶんぶん振らして帰っていった。

「じゃあおれたちも帰るか」

残された玲音と沙月に言う。沙月は「玲音ちゃんまたあそぼーね！」と元気いっぱいに玲音に抱きついた。

意外にも玲音は愛らしそうに微笑み、お腹に顔をうずめる沙月の頭を撫でた。

「睦紀くん。来てくれる……？」

「あ、コンクールのことか。行く、もちろん」

「すごく嬉しい。わたし頑張るから……わたしのこと、見てね」

「双眼鏡でも持っていこう」

「ふふ、面白い。睦紀くんといるの楽しいな」

彼女は逃げるように背を向け、人混みの中に消えていった。

おれは呆然として彼女の小さな背中を凝視し続けた。初めておれが百合愛り向で笑ったこと、命旨うれり向で刃りて笑頭を見せこ。

愛の前で笑った。その時、玉音もまれの前で初めて笑顔を見せた。

過去に見せてきたささやかな笑みじゃない。彼女は沙月やアリスのように屈託なく笑ったのだった。

第37話　きみの声でいっぱい。

八月某日。

晴天だが前日に降った雨のせいでジメジメとした日だった。さらに本日も日差しが強くて路上から反射した光が容赦なくおれの目を焼いた。

「あちぃな……」

信号を待つだけで疲労が蓄積する。追い打ちをかけるように傍を過ぎた大型貨物車の吐き出した排気ガスが顔に吹きかかった。排気ガスはこんなにも熱かっただろうか。これも夏のせいか。

だが冷房の効いたオアシスはもう目前だ。信号を渡り終えると立派な建

物が空に伸びた。コンサートホールだ。こういった文化的な催しが行われるホールを訪れるのは中学生以来だった。その時は校外学習として演劇を鑑賞した。

早いとこ冷房の恩恵を賜りたかったため迷いなくホールに入る。

「あ、睦紀くん」

冷気より早く玲音がおれを見つけた。

「よく見つけられたな」

「睦紀くん、変なオーラあるから」

「そうか……修行中のぼっちがオーラを纏ってしまうとは、おれもまだまだ未熟だな……」

自分を叱咤すると玲音はくすくすと笑った。夏休み以前には見られなかった彼女の一面だ。レストランでバイトしているときでさえ、こんな可愛ら

しい笑みを見せたことはなかった。
　それに服装もだ。お泊まり会の際の服装は派手ではなかったので彼女らしいと思っていたが、今日はふんわりとしたロングスカートに肩出しのシャツで素人目に見てもオシャレだった。
「来てくれてありがとう」
「こっちこそ。おれもクラシックは好きだから一度生演奏を聞いてみたかったんだ」
「よかった。ならわたしも安心して弾ける」
「玲音のピアノが楽しみだな。応援してる」
「うん。すっごく頑張る」

本ピアノコンクールは予選会で勝ち抜いた者が最後に競い合う本選だ。その中で玲音は高校生の部で出場する。

会場内はコンクールが始まる前は割と穏やかな雰囲気だった。出場者の家族連れ、学生、お年寄りなど、当然荒々しい輩はいない。開始するとみな黙って司会者の声に耳を傾けた。全国の校長先生が羨むだろう。

今更だがやはり百合愛とアリスはいなかった。誘われていたら絶対に百合愛が話題にしていただろうし、隣には知らないＪＫ二人組ではなくツインテールが座っていたに違いない。

広いステージには立派なグランドピアノだけが中央に置かれている。そこで演奏者はたったひとりで音を奏でるわけだ。この大量の視線がある異常な環境でよくやれるなと感心した。

演奏はすぐに始まった。曲は十五分以内と決められているがとても早く

感じる、というのもみな非常に上手で聞いていて気持ちが良く、あっという間に時間が過ぎた。

次々と演奏者が入れ替わる。

そうして九人目に雀玲音が現れた。

黄色のドレスに身を包んだ玲音が丁寧な足取りでピアノへと進む。立ち止まり、こちらに向くと深くお辞儀をして椅子にゆっくり座った。

『バラード第一番 ト短調 作品二三』

重く一つ音が伸びる。僅かな間を挟むと階段を上がるように高まってゆき、そしてそこを越えるとゆるやかな音色が会場内に優しく響き始めた。

玲音はおよそ人間とは思えないなめらかな指の動きで、華麗に踊っているようだった。曲調はときに激しくなり、ときにゆるくなり、緩急があった。

彼女は違和感を覚えるリズムを弾くことなく我々の耳に音を届けた。とこう寸分の狂いもなく弾くことが人間ならば可能なのだろうか。否、恐らく彼

ても詰めて――言えて彼女たち鳥の　　ていること　　た　　音場や　　多

難に見舞われようとも負けずに乗り越え、鮮やかな花畑を軽やかにステップしていく。そんな情景が浮かんだ。

わたしのピアノを聞いて、わたしはこういう人間なんだ、わたしはいま楽しいんだ、とピアノを通して伝わってくる。その表現力にただただ虜になった。

演奏が終わると盛大な拍手の中で彼女は再び丁寧にお辞儀した。

照明でドレスは黄金に輝き、彼女はその光の中で小さく微笑んだ。地味な色をした雀でも鳳凰のように輝ける。そう感じるほど演奏の前後で雰囲気に大幅な差異があった。

感動して拍手していると隣のＪＫがぼそっと呟いた。

「流石は氷の玲音」

結構玲音はこの界隈では有名なのだろうか。随分と格好いい異名を持っ

てるんだな。

コンクールの結果は玲音が一位だった。

豪勢なトロフィーを抱える玲音はいつもの無表情系クール美少女に戻っていた。本当にピアノで自分を表現するんだなと苦笑する。でも彼女らしくて安心した。いきなりアリスみたいに爆笑し始めたら正気を疑う。

ロビーでうろちょろしていると玲音がやってきた。演奏時のドレスのままだった。

「玲音、おめでとう。凄く綺麗な演奏だった」

「ありがとう」

玲音はトロフィーを収納した縦長の箱と賞状を持っていた。

「睦紀くん。着替えてくるから待っててくれるかな」

「いいけど、家族は？」
「ううん、来てないから。これ持ってて」
そう言って大事なトロフィーと賞状を躊躇わずおれに預けた。なんとも荷の重いミッションだったが責任持って守り抜こう。
しばらくすると私服姿の玲音が戻った。警戒を解除したおれはすぐに返却した。倒してトロフィーが折れでもしたらと想像して気が気でなかった。
「この後、暇？」
上目遣いで玲音が尋ねる。
「一応暇だが」
「じゃあ少し……お茶してもいい、かな」
「全然構わないぞ」
一瞬ツインテールの怒った表情が脳裏をよぎったが無視した。これくらい

いいだろ、別にテートってわけでもないし、おれは巨乳を奪われるのが一番嫌いなんだ。

情けないことにおれは玲音に奢ってもらった。もちろん支払い能力はちゃんとあったのだが彼女がどうしても奢りたいと言って聞かなかったのだ。

注文した飲み物と一緒に喫茶店の席に腰を下ろした。室内は冷房がしっかり効いていて最高だ。

「本当によかったのか」

「うん、いいの。賞金も出たし、何よりも来てくれたお礼をしたかったから」

「へぇ。高校生でも賞金もらえるんだな」

「六万円だった」

「す、すげぇ」

「こちらこそ……」

涼しい顔で述べるからこっちの感覚がおかしいのかと疑ったが、いや、やっぱり大金だ。きっと賞金の優先度はかなり低いのだろう。物欲とかもなさそうだしな。

「悪かった、かな……」

「いや、綺麗なピアノだった。聞いていて惚れ惚れした」

「それはありがとう……じゃなくて、百合愛のこと……」

「え？　ツインテール？」

「百合愛、睦紀くんに言ってたから」

お泊まり会で最後に別れたときの会話を聞かれていたのだろう。許可なしに女の子を口説くなとかなんとか。

「いいんだ、気にしなくて。基本的にあのツインテールの言いつけは流してる」

「そう……ならよかった」

ツインテールの話題になったのでついでに訊いてみた。
「なんでおれだったんだ？　というかよかったのか、おれで。百合愛やアリスを誘えばよかったのに」
「百合愛とアリスのために弾くのと、睦紀くんのために弾くのとでは違うから」
「そうなのか？」
「うん、違う。全然」
「どう違うんだ？」
「教えない」
玲音は抹茶ラテを啜った。
何が違うんだろうか。女子と男子の違いか？　それともおれがぼっち修行中の身だから？　全くわからん。

おれもラテを啜ると再び玲音が口を開いた。

「わたし、ずっと母のためにピアノを弾いてた」

独り言のように呟く。

「物心ついたときからピアノを弾いてた。母が……ピアノ教室の先生だったからその影響。今日もそれで来てない」

「なるほどな……」

「わたしはずっとピアノしかなかったし、ピアノで音楽を奏でることが全てだった。母の指導にも耐えられたのもピアノしかなかったから。これを捨てたら何も残らない。いつしか母に褒められるために必死で弾いていた。楽しいって気持ちを剥離して、無感情で母を追った」

これほど長く話した彼女は初めてだった。最近言葉数が増えたことには気付いていたが、ここまで連続で喋れたとは知らなかった。

ラテに視線を落としたまま彼女は続けた。
「無感情でピアノだけしかない冷たい人。だからわたしのことを『氷の玲音』ってみんな呼んだ。だから……わたしはひとりぼっちになった。でもわたしはいつでも音楽を弾くことができた。ピアノがなくたって頭の中ではいつもクラシックが流れている。ひとりじゃなかったの。寂しくなんかなかった。違う、寂しいと思わないように音楽で塗りつぶしてただけ……」
「大丈夫だ、もうひとりじゃない。百合愛やアリスがいる」
「そう、わたしはもう頭の中でクラシックを流さなくていい。なら今は……どんな音が流れてると思う？」
「そうだなぁ。流行のポップとか？」
玲音は柔和な目でおれを指さした。
「わたしの頭は、睦紀くんの声で溢れてる」
その夏、ノヨーノロソノが終わった。

―その夏、ジ…　―大、―た恋をした

第38話　本当は冗談がキライですわ、お母様。

仰向けになって真っ白な天井を見つめる。

考えるのはあの日のこと。あの日の、彼女のことだ。

――わたしの頭は、睦紀くんの声で溢れてる。

あんなに生き生きとした目の玲音を見たのは初めてだった。最近恥じらいを見せるようになったことには気付いていた。けれど能動的に感情を出し、堂々と正面からぶつけてくるとは急速な大進化だ。

それこそあの言葉。おうちの皆で盛りかえっているなんて比喩はどう考えても

それはあの言葉、おれの声で流れたメッセージ上映はいとうまれ

「告白だよなぁ……」

口に出すつもりはなかったがつい漏れた。それくらい衝撃的だったのだ。

まず、おれがなぜ玲音に好かれたのかわからない。教室で百合愛と一緒に話していた程度で深い仲にまで発展していなかったと思うが、彼女にとっては違ったのだろうか。それともおれが薄情者なだけか？　究極のぼっちを目指す者としては薄情者は避けて通れない道だからこれでいいのかもしれないけどな。

「いま、なんて言った？」

語気を強めてツインテールが問う。

現在、おれと百合愛は式島家の自室で二人っきりで課題をこなしている。

なぜこうなったのかはツインテールの一言で理解できるだろう。「あ、あんたが居残り学習にでもなったらわたしの傍にいられなくなるでしょ!?　そんなの許さないんだからっ！」と、電話してきたのだ。本当にお節介なツインテールだ。

　そんなわけでうだるような暑さの中、両手をぶんぶん振って元気いっぱいにツインテールはやってきたのだ。休むための夏休みなのにご苦労なこった。

「何も言ってないが」

「言ったわ、ばか。とぼけないで。告白、ってどういうことよ」

　本日の百合愛は一段と私服に力を入れていた。可愛らしい乳白色のスカートを着て、白い生足をカーペットの上で晒している。上はぴちぴちのシャツでボディラインをくっきり浮かせ、胸元の口ゴマークは彼女のご自慢のお

胸で大きく歪んでいた。

そんなセクシーツインテールは女の子座りのまま、のそのそとこちらに近づき、寝転がるおれを見下ろした。

「ちゃんと説明して。誰かに告られたの？　それとも告った？」

「どっちでもいいだろ。百合愛には関係ない」

「大ありよ。だって……あんたはわたしの下僕だもの。そういうことも管理するの、ばか」

「……告られた」

「誰に？」

「それは言わない」

「ふぅん？　いいんだ、そんな態度で」

彼女はすっと顔を近づけてきた。まさかここで、と思いきや彼女はおれの

耳元に口を寄せた。
「この耳、噛みちぎってやるわ。イヤでしょ？」
「イヤだな」
「じゃ、する。はむっ」
本当に噛んだ。
背筋に電撃が走り、脊髄反射でおれは仰け反った。こ、これがＡＳＭＲというやつか!?（違う）激痛が襲ってくるかと覚悟したが、彼女は歯を立てることなく慈悲深い甘噛みで済ませてくれた。彼女の息づかいが直に伝わってきて、一丁前に色気を出していた。
「お前ガチで変態だよ」
「むはっ。いま『お前』って言ったわね？　わたしその呼び方が一番きらい。生意気だもん。ムカつくもん。いじめたく……なっちゃうもん」
彼女は耳の穴を広げ、ふうと息を吹きかけた。ふり向こうが耳覚り

彼女は目の色を変え、おれの首に手をかけた。心の奥に沸きつつある。はぁはぁと苦しそうに胸を上下させ、ゾクゾクと身を震わせておれを目をじっと見つめた。

「や、やめろ……やめろぉおお!!」

しかし正義は必ずやってくる。

「だだいまぁあああ!!　うんちー!!」

下の階から沙月の叫声が飛んだ。ようやく両親と沙月が帰ってきた。沙月のランドセルを買いに彼らは出かけていたのだ。

「う、うそ!!　あんた今日は親がいないって……だから何でもできるって……!」

「何でもできるなんて一度も言った覚えはない」

「こんのお騙したわねバカ睦紀!　でもいいわ!　折角オシャレして来たんだ

もん。改めてご挨拶しなきゃ。日本を発つ以来かしらね」

おれにのしかかっていた百合愛は立ってドアノブに手をかけた。おれは咄嗟に彼女の足首を掴んだ。

「何よエッチ！」

「余計なことは言うなよ。おれもついていく。実を言うと百合愛のことを親に話していないんだ」

「え、どうして？」

「……お、おれが好意を抱いていると親が勘違いするからだ。そういう感じの親なんだよ。ダルいだろ？」

「ふぅ～ん？　あんたがわたしを、ねぇ？」

百合愛は片眉を上げ、鼻で笑った。そして足を払っておれの手から逃れ、

「下僕がご主人様を愛するのは当然じゃない？」

と決め台詞を吐いて廊下に出ていった。

あぁ、悪い予感しかしない。不安を胸に彼女の後を追う。せめて普通に名乗って過去の話をするだけにしてくれないだろうか。おれが百合愛からぼっちスキルを教えてもらってるとか、師弟関係とかそういったアホみたいな話はやめてほしい。恥ずかしすぎて今夜の食卓に加われなくなる。

不安に駆られながらリビングに行くと、がに股になった百合愛の背中に出くわした。

「なんであんたがいるのよ!!」

玲音が沙月と手を繋いでいた。おれも状況が把握できず眉をひそめる。

「途中で玲音ちゃんとあったのー！」

「お邪魔します、睦紀くん」

ヤバいな、非常にまずい。告白の件の中心人物が現れてしまった。

[illegible]

どうすればいいかわからずフリーズしていると母親が口を開いた。
「あら、お客さん？　睦紀のお友だち？」
「母さん。おれには友だちなどいない」
「じゃあガールフレンド？」
「もっとありえ――」
百合愛がおれの顔に手を押しつけて割り込んだ。
「お久しぶりです、お母様。朝烏百合愛です。覚えていらっしゃいますか」
「え、ええ!?　あの百合愛ちゃん!?　日本に帰ってたの!?」
「はい。今年の春に。バカむつっ――む、睦紀くんと同じ高校に通っています」
「まぁなんて偶然。ちょっと睦紀。あんたなんで言ってくれなかったの」
母がおれを責める。同時にツインテールがニヤける。ざまあないわね、という心の声が聞こえてくるほど意地悪な顔だ。
「タイミングがなかっただけだよ　　それに、どうでもいいことだ」

「メンバーシップなんだから……それに、どうでもいいことだし……」

「どうでもいいって……あんたねぇ、百合愛ちゃんとどれだけ一緒に遊んだか覚えてないの？　朝から晩まで朝烏さんとこで遊ばせてもらって、お風呂まで一緒に入る仲だったのよ？」

「嘘だろ……そこは親として止めろよ、母さん」

裸の付き合いまでしてるとかどうなってるんだ、おれたちは。おれの困惑した様子を百合愛はくすくすと笑った。クソ、どこまで深い関係なんだ。

「それにしても本当に可愛くなったわね、百合愛ちゃん。まるでお姫様ね」

「やめてくださいよ、お母様。わたしなんてまだまだ未熟者ですわ」

「そうだ、覚えてるかな？　百合愛ちゃんが息子に『お嫁さんになる！』って言ったこと。あれ可愛かったなぁ～」

「やめろ母さん。おれの精神がもう限界だ」

おれは胸を押さえながら声を絞り出した。すさまじくこの場から消え

てぇ。というかこれ以上母さんと百合愛を話させてはいけない。よく洗剤に書いてあるだろ、混ぜるな危険って。あれと同じだ。大爆発が起きる。

「えぇ、覚えていますわ。そのために日本に帰ってきたんです」

「それって……もしかしてうちの息子と……？」

「もちろん結婚するつもりです」

空気が固まった。

沙月はランドセルを落とし、玲音は目をまん丸にし、母さんは口を押さえ、おれはその場に背中から倒れた。

「冗談ですわ、お母様。わたしたちはまだ高校生です。何も知らない子どもですわ」

「そ、そうね、てっきり本気かと思っちゃったわ。あはは……」

「むふふふ……」

百合愛と玲音のバトルが始まっていたことを、おれはこの時まだ気付いていなかった。

第39話　ツインテールは何でもできる良い子なんだもん。

これまでのツインテール。

八月のとある猛暑日に突如鳴り響いたスマートフォン！

『ご機嫌よう。あんた課題ちゃんとやってる？　うん、やってないわね。住所教えなさい』

百合愛の自宅訪問アポ取り電話に驚き、勢いに負けて住所を教えてしまう上級ぼっちの式島睦紀！

ンか ン重良ン 可現と少ヨは外出中！

しかし遅刻と両親と沙月は欠席

そのため朝烏百合愛を難なくお迎え！

可愛らしいスカートをふわっふわっ揺らし、いつも以上にプリティなツインテールとのドキドキワクワク課題消化が開始！

しかし式島睦紀は雀玲音に告げられた想いが脳裏をよぎって集中できず！

彼の怠け者に痺れを切らした朝烏百合愛は甘噛み作戦を実行！

あわてふためくぼっち!!　調子に乗るツインテール!!

あわや大乱闘寸前の危機的状況に陥るが、そこに救世主・未来の日本を担う陽キャ、式島沙月がご帰宅！　さらに雀玲音がリビングに電撃出現!?

お願い、逃げないで睦紀！　あんたがここで逃げ出したら玲音の想いは、百合愛との約束はどうなちゃうの!?　ぼっちレベルはまだ減ってない。ここを

耐えれば、さらなるぼっちの高見へと上れるんだから！

次回、「睦紀、逃げる」。ボッチスタンバイ！

というわけでおれは逃亡を選んだ。

元来、ぼっちとは逃げ足が早い種族である。

全てを捨てて全身全霊で走り続けたら人はとある状態になる。それは、『独走』だ。つまり走りを極めると、人はぼっちの極地に達することができるのだ。だからぼっちは逃げ足が速い。独走を目指して日夜走り込んでいるからな。

自宅を飛び出したおれはいつもの公園まで走った。

「無理だろ、あんな状況」

蛇口を捻って顔に水をぶっかける。百合愛は母親とぺらぺらと過去話を始

めて結婚を仄めかすようなことまで話し始め、しかも玲音も傍にいるというカオスである。逃げなかったらきっとその後はおれの自室に集まって、何らかのバトルが勃発していたことだろう。

今は玲音と目を合わせられる自信がない。百合愛はお子様ツインテールなので彼女からの奇妙な好意は軽く流せるのだが、玲音は無理だった。彼女の持つ純粋さがおれから逃げを許さない。

しばらく木陰のベンチで休んでいると、とうとうやってきてしまった。

「やっぱりにいにいたーー！」

「あら、本当にいたわ。すごいわね、沙月ちゃん」

ランドセルを背負った沙月、百合愛、玲音が公園にやってきた。きっと沙月が案内したのだろう。おれが気を休める場所と言ったら自宅かこの公園しかないからな。

[illegible]

「暑いからお嬢さん方は家にいた方がいい」
「あんたの課題を手伝うためにせっかく来てやったのに意味ないじゃない」
「かなり計画的に進めてるから大丈夫だ。おれは筋トレするから帰れ」
おれはベンチから立って鉄棒へと足を進めた。
「何が楽しくて筋トレなんてするの？」
「ぼっちだからするんだ」
「キモ。もうぼっちじゃないくせに……」
百合愛は腕を組んで鼻で笑った。筋トレを馬鹿にするだなんて、日々バストアップのためにマッサージされているそのお胸が笑っているぞ。
すると傍にいた玲音が近づいてきた。
「わたしもしたい」
「お！　筋トレの良さを知ってる民か！」
「本力がないと言う時間の無駄こ対えそうではないから」

「体力をつけるには長時間の運動が必要なんだ」

「いい考えだ！」

「それに……綺麗な身体にも、なりたいから……」

「ならますます筋トレだな！」

美脚も美尻も美しいくびれも自然と手に入るものではない。筋トレしたら太ると思って嫌がる女性がいるかもしれないがとんでもない。太くなるにはめっちゃ運動してめっちゃ食わねばならんのだ。ましてや筋肉のつきにくい女性ならもっとだ。

つまり太くならずむしろ引き締まって痩せるのである。

「フロントランジだ！」

片足を前に出して膝を曲げ、重心を落とす。そして引いてまた反対足を出す。その繰り返しだ。これをやれば尻と腿が綺麗に仕上がる。

おれと玲音は一緒に並び、それを十回ほどやった。意外と誰かとするトレーニングは楽しいもんだな。

「いいぞ、玲音」

「ありがとう。もっと教えて」

なんて素晴らしい向上心だ。一つのことを極めようと努力する者はやはり心構えが違う。

ツインテールはというとベンチで足を組み、つまんなそうにこちらを見ていた。沙月は砂場で泥団子を作っている。

なんだか不憫に思えたのでおれはツインテールを手招いた。するとパッと笑顔を咲かせておれの傍に近づき、餌を待つ猫みたいに首を伸ばして期待の目を寄せた。クソ、ちょっと可愛いな……。

「百合愛はそうだなぁ……何がいいかな……」

「何でもいいわよ？　わたしにできないことなんてないわ」
「なら、懸垂にしよう」
「ぶら下がるやつ？」
「そうだ。女性ならバストアップとくびれを作るのに効果的な種目だ」
「ば、ばすとあっぷ、ってあんたわたしのことそんな目で見てるの!?」
「だってしてるんだろ？　旅館に泊まったときにアリスが言ってたのを覚えている。毎日バストアップマッサージをやってるって」
「う、うるちゃいうるちゃあーい!!　いいから教えなさい、ばか!!」
ビシビシと手でおれを叩いて誤魔化した。まぁ百合愛のバストアップ事情なんてどうでもいい。今の時点でも十分立派だからな。
鉄棒の前に立ち、やる前に一応説明した。
「懸垂はこうやってぶら下がって、主に背中の筋肉で身体をあげるトレーニ

ンクだ」

一度身体を上げた。

「ふぅん、簡単そうね」

「いや、見た目以上にきついぞ。女性なら一回上がるだけでもすごい」

「だったら上げてあげるわ。わたしはただのツインテールじゃないのよ？」

百合愛は意気揚々と高めの鉄棒の前に立った。そして両手を上げて伸ばす。

「バカ睦紀」

「何だ」

「とどかない」

ギリギリ届いていなかった。

「ジャンプして掴め」

「こっちからどうぞ。あげて」

これしたらやだ　あけて」

「えぇ……」

「イヤな顔しないであげなさい。わたしの下僕なんだからこれくらいのことは喜んでやるの」

同性なら躊躇しなかったが百合愛を持ち上げるのには流石に抵抗を覚えた。懸垂の補助は足を抱きしめるように持ち上げるか、脇の下に手を入れてジャンプと同時に持ち上げるかだ。前者は尻に顔を埋め、後者は下手すると胸に指を食い込める。どちらをやっても「えっち！」と非難される未来が見える。

「百合愛。やってはやるが怒るなよ。脇を持ち上がるか、足を持ち上がるか。どっちか選べ」

「脇にして。わたしの……だっ、大事な部分に顔当たっちゃうでしょ」

正面からやるわけないだろ、何考えてたんだこのツインテール。

背後から脇を掴むと百合愛は反射的に「うんっ！」と官能的に呻いた。
「それやめないか。わざとか？」
「仕方ないでしょ出ちゃうんだから！　はやくあげてばか！」
早くぶらさがってほしかったので雑に上げて鉄棒を掴ませた。
「うにゅ～!!」
「頑張れ、百合愛。伸ばしすぎると疲れて上がらなくなるぞ」
「あぁあああ無理いいい!!　たしゅけて～！」
足をジタバタさせてヘルプを求めた。どうやら下りるのも怖いらしい。たかが数十センチなのに。
彼女の両足を胸に抱いて下ろさせた。
「な？　上げるの難しいだろ？」
「……うん、むずかしかった」

百合愛は俯いてしょげた。あれだけ豪語したから恥ずかしくなったのだろう。気の毒だからフォローしてやるか。

「ぶら下がるだけでもいいんだ」

「それじゃ効果なさそうだもん……」

「いや、ちゃんとある。それに百合愛はその……きっ、綺麗なくびれと良い胸してるんだから落ち込むな」

「……！　ばか。そんなことでご主人様が喜ぶと思ってるの？」

めちゃくちゃ嬉しそうに爛々と目を光らせているけどな。

「ほんのちょっとだけ嬉しかったから今度ご褒美あげる。何がいーい？」

「孤独をくれ」

「だーめ。わたしがいる限りあんたはぼっちにならないわ」

確かにほっちになれそうにないな、この半年間ずっと百合愛はおれの傍にいた。慣れてきたせいで彼女がいないと違和感を覚えてしまうほどに。

そんなやり取りをしていたら玲音が「ねぇ」と声をかけた。心なしか、表情が引き締まっている気がする。傍には泥だらけの沙月がいた。

「沙月ちゃんがやりたいことあるって」

「何だ沙月」

おれはしゃがんで沙月に訊いた。

「肝試ししたい!!」

「え？　なぜに？」

「したいから!!」

沙月の謎の欲望によって、その夜おれは初めて肝試しをすることになった。

ちょうど百合愛と命日が一緒で。また死んだときに与えてやるやつ

もちろん百合愛と玉音も一緒に。また友人たちとのお話もしようかな。

次回、「ツインテール、号泣」。ボッチスタンバイ！

第40話　熱くてじれったいミッドナイト

夜が来た。

恐怖と絶望のミッドナイトが始まった。

「バ、バカ睦紀が怖じ気づく姿がた、たたたっ楽しみね？」

おれのシャツを掴んで震えているくせによくそんな威勢の良いことを言えるもんだ。

おれたちは日が沈みかけた薄暗い夜になった頃、近所の神社に集まった。

今に至るまでおれは課題をやったり音楽を聴いたりして時間を潰した。百合愛、玲音、沙月は母とお喋りを延々としていた。口が疲れないのかと思う

ほどに。
「おれは百合愛が泣き喚いてへたり込む姿が楽しみだ」
「ふんっ。わたしはつよつよな女の子なのよ？　ぜったいに肝試しなんていう子どものお遊びになんか屈しないわ!!」
「大丈夫か、子鹿みたいに震えてるが」
「寒いだけよ！　あんたバカなんじゃないの!?」
「熱帯夜なんだがなぁ……」
　玲音は普段通りの曇りなき無表情で佇み、沙月はなぜか虫網を手に持って楽しそうに歌を歌っていた。
「沙月、なんでそんなもの持ってきたんだ」
「お化け取るため!!」
「お化けは虫じゃないんだぞー

「取れるもん！　らんかくできるもん！」
「乱獲なんて単語をどこで覚えたんだよ」
今回やる肝試しのルールは非常にシンプルだ。
鳥居から水平距離で約三十メートル続く階段を上りきり、その先の神社でお参りして自撮りするだけでよい。自撮りは上った証拠のためである。
だが一人で行くわけにはいかない。沙月は全く怖がっていないが流石に幼稚園児を一人で行かすことはできない。なので二人一組のペアを作ることになった。
「百合愛、じゃんけんするぞ」
「む～……」
何が不服なのか知らないが、百合愛はぴったりおれに肩を当てておれを睨んできた。

「じゃあ勝ったチームと負けたチームでじゃんけんだ。いくぞ。じゃーんけーん、ぽん」

おれ　チョキ

百合愛　グー

玲音　チョキ

沙月グー

「お、一発で決まったな」

「やったああ百合愛ちゃんとだぁー!!」

おれと玲音、百合愛と沙月になった。

玲音はそっとおれに近づくと「よろしくね」と呟いた。百合愛は「ばーか」とおれを小声で罵倒して脇腹を指で抓った。

「いって、何だよツインテール」

「ぶ、、、、

「はーが」
「泣いて助けを求めても知らないからな」
「ばーかばーか！　ふーんだ、バカ睦紀なんて知らないもん！　どっかいっちゃえ！」
すっかり臍を曲げてしまった。ま、どうせすぐに機嫌はよくなる。百合愛は山の天候より変化が激しいからな。
「じゃあおれと玲音から先に行く。見てろよ、ツインテール。無事に何事もなく帰ってきてやるよ」
「泣いてわたしに縋ってきても蹴飛ばしてやる！」
百合愛はべーっと舌を出して中指を立てた。フラグを立てすぎじゃないか。絶対に泣くパターンだぞこれ。
おれと玲音は一礼してから鳥居をくぐり、烏の鳴き声がやまない階段を上り始めた。先ほど見えづらく思った景が見え始めてきた。木々の枝は

「い、妹めた　既に足下も見えなく空も星た見えなめていた　スの村は黒く染まって人の指が無数にあるように見え、少し恐怖を感じた。

一人だったら冷や汗をダラダラかいていたかもしれない。けれど、今は玲音がいる。

「怖いか？」

「ううん、睦紀くんがいるから……」

考えていることは同じらしい。

「睦紀くん」

「ん？」

「イヤじゃなかったら……手、握ってもいいかな。ちょっと怖い」

「えっ、まぁいいが……」

何だが恥ずかしかった。あれだけ百合愛とベタベタしているのに玲音とは……何かが違う。はっきりとは言えない。ただ、玲音は別タイプの異性で

あるというのはわかっていた。

手をそっと彼女の手の平に回して触れた。すると玲音は立ち止まった。

「どうした」

「ううん、何でもない」

玲音は少し俯いて顔を隠した。そしてしっかりと指同士を絡めて握る。普通の手繋ぎでなく恋人繋ぎで。

一段一段上る。その度に上下して緩む手。しかし玲音は絶対に離さないと言わんばかりに強く握った。恐怖からか、それとも――

「睦紀くん。わたし、邪魔かな」

「邪魔って、なぜ？」

「百合愛と仲がいいから……」

「あー……別にいいんだ。百合愛とはアホみたいな取引してるだけで、男女

の仲みたいな関係じゃない」
「でも、結婚するって……」
「そ、それはだな」
やはり日中に百合愛が母親に言っていたことをガッツリ聞いていたか。
「実は百合愛とは子どもの頃に出会ってたんだ」
「それは聞いた」
「で、その時に将来結婚するって約束したらしい。許婚でも何でもない。子どものくだらない夢だ」
「……そっか」
そう告げると玲音は、
「よかった」
と心底安心した声音で呟いた。

階段を上りきり、早速おれたちは手を合わせてお参りした。余裕だったな。ひとりぼっちより、人間は二人でいた方が強い生き物なのかもしれない。

「じゃあ証拠の写真撮るか」

おれはスマホをかかげ、画面に二人が入るよう身を寄せた。そしてシャッターを切る。

「よし、任務完了だ」

「睦紀くん。その写真、ほしい」

「そうか。じゃあ――って、おれたちまだ交換してなかったな」

「うん、しよ？」

互いの連絡先を交換する。それを終えたらただちに階段へと足先を向けた。こんなところに長居したくないからな。

「まこ、降りてこない？」

「まだ繋いでもいい？」
「まだ怖いか？」
「ううん。睦紀くんと繋がりたいだけ」
「お、おぉ……」
「最後まで離さないでね」

階段を下りきると何度も見た表情に出くわした。
「おっそぉーい!!　あんたたち何してたの!?」

腰に手を当て前のめりに百合愛は叫んだ。沙月は懐中電灯で地面を照らして何かを探していた。きっと犬のうんちでも探しているんだろう。
「そんなに時間かかったか？　もしかして怖すぎて気が気じゃなかったか？」
「調子に乗るな、バカ睦紀！　あんたたちいつまで手握ってるの!!　気持ち

悪いから早く離しなさい！」
「おっ、そ、そうだったな」
おれと玲音は慌てて離れた。約束通り最後まで握ってしまっていた。
百合愛は荒々しい足取りでおれに近づき、びしっと指を指した。
「今度お仕置きするから覚悟してなさい」
「楽しみだな。おねしょの始末か？」
「ぬ～バカァ！　沙月ちゃん行きましょ！」
「お化けとるどー!!」
百合愛と沙月は狩りにでも行くかのような勢いで階段を上っていった。
ゴーストバスターかよ。
取り残されたおれと玲音は階段に座って彼女らの帰還を待った。どうせすぐ戻ってくるだろう。肝試しらしさが全然ない肝試しだ。一人はお化けを

追い求める恐怖とは無縁の幼稚園児、もう一人は怒りで燃え上がるツンデレツインテール。あっちの世界の住人が怖がるレベルだろう。

「睦紀くん。傍、いい？」

「あぁ」

玲音はお尻を浮かせてこちらに寄ってきた。階段についた手が当たりそうになる。

「睦紀くんって人の気持ちに敏感だよね」

「そうか？」

「うん。ぼっちの人の気持ちがわかる。だから人の視線とか気持ちに敏感。だから、人が不快にならないよう配慮できる。だから――睦紀くんは優しい」

「おれが優しいやつかね……」

一教室で百合愛と話してるときもわたしのこと見ててくれてた。気を遣って話しかけてくれた。睦紀くんは忘れてるかもしれないけど」

いや、覚えている。せっかく一緒にいるのだから話さないのもおかしいと思っていたのだ。それと、百合愛の友だちでもあるのだから仲良くして親交を深めてくれればとも。

顔を横に向けると玲音の顔が目前にあった。

「だからっ、わたしは――」

その時、叫び声が聞こえた。

耳にこびり付いて離れない彼女の――百合愛の叫び声だった。

第41話　それでも世界は変わろうとするのだ。

――百合愛の悲鳴。

恐怖で腰を抜かしたか。

足を踏み外して転げ落ちたか。

それとも、不審者に襲われたか――。

おれは野球部の階段ダッシュさながらの足運びで階段を上がった。焦ってつまずき、膝をぶつける。深く鈍い痛みが走ったがそれでも歯を食いしばって上を目指した。ふたりは百合愛のことだ。ここにいるはずだ。百合愛の頭を

て一を回した。小はおそのは百合愛のことだけだ。ナナナナ。百合愛の影を見たかった。彼女のことが心配で心配でたまらなく胸が痛い。

「ユリアッ！」

神社に再び戻った。そこには地面にへたり込んだ百合愛と彼女の肩を揺らす沙月がいた。おれは駆け寄って百合愛の肩を抱いた。

「大丈夫か!?　何があった!?」

「睦紀ぃ～ばがむづぎぃ～」

「お、おいおい何だよ……やっぱ泣いてんじゃねぇか……」

「ばがぁ～もっどはやぐぎでよ～」

彼女は嗚咽まじりに号泣しておれに抱きつき、子猫みたいに頬をスリスリ当てて甘えてきた。

「にぃに、これー」

沙月が百合愛のスマホをおれに渡してきた。画面には百合愛と沙月の自

撮り写真が映っていた。それを見て一瞬驚く。男の顔が写っていたのだ。画面の隅にばっちりと。

だがよく見るとこれは――

「じいさんじゃねぇか……」

死んだじいさんが百合愛のスカートの中を四つん這いになって覗いていた。顔はお宝を見つけた冒険者みたいに歓喜していた。笑えてくるくらい馬鹿面だったが百合愛には酷だったな。

「大丈夫だ、百合愛。これじいさんだから。悪霊とかじゃ……いや、悪霊か。とにかく大丈夫だから」

「ホントにホント……？　わたし大丈夫？」

「誓って大丈夫だ」

「うん……今度はもっと早く来て。お仕置きはしないであげる」

百合愛の甘えん坊モードは止まらず、おれから離れる気配がなかった。
きっとじいさんは作戦通りだとほくそ笑んでいることだろう。こうなると見越して百合愛のおパンツを覗いたのなら相当な策士であり、そしておれたちはまんまと罠に引っかかった間抜けな野生動物といったところだろう。
「百合愛、立てるか」
「うん。あ、あれ……？」
どうやら本当に腰を抜かしてしまったらしい。脚に力がうまく入らずピクピクさせている。おれの手につかまってもダメだった。
仕方ない、おんぶしてあげよう。
おれは背を向けてしゃがんだ。
「やだ。お姫様抱っこにして。そっちの方がいい」
「無茶言うな。腕力だけでこの階段を下りろってのか」

「……お、お姫様抱っこが好きなの？」
「わがまま言うな。トラック並みに重いツインテールを腕だけじゃ無理だ」
「サイテー！　バカ！　わかったわよ、乗るわよ乗る!!」
沙月が傍で「百合愛ちゃん赤ちゃんみたーい」と揶揄したこともあって、百合愛は観念しておれの背中に乗った。
「その……変なこと考えたら殺すわよ。色々と当たっちゃうけど感じたら殺すから」
「はいはい」
「……ありがと、ばか」
甘い声を耳元で囁かれ、全身が身震いした。危うく漏らすところだった。こういう不意打ちの方が肝試しよりよっぽど驚く。
一歩一歩気をつけながら階段を下りる。足を一段下げる度に百合愛の重みが変わるから、足下が正しいことを、正体不明で、

真っすぐ受け止めてくれる。彼女の吐く吸音はとても遠くて、立体的でとても……気持ちがよかった。そう、安堵感だ。彼女の生きている音や感触がおれに安らぎを与えてくれる。

「ばかむつき。ありがとね」

また彼女は耳元に口を近づけ、自分の声を染み込ませるかのようにねっとり呟いた。浮かせていた胸をぴったり背中に当てつけて。

「もう礼はいい」

「違うの、わたしを一目散に助けに来てくれたこと」

「なんだ、そんなことか」

「玲音といると思ったから。ちょっとビックリした。だから……嬉しかったな」

「別にそういうんじゃ……沙月もいたしな」

「ふん、正直じゃないわね。わたしこと……好き？」

即答できなかった。そんなわけないだろ、と即答すべきだった。

だがおれは黙った。白黒ハッキリ付けられない答えが喉で滞留し、おれを窒息させた。あまりにも曖昧で未熟な自分の自意識に腹が立つ。

そんなおれにできることは、ぼっちを盾にすることだけだった。

「ぼっちが人を好きになるもんか」

「……ぼけかす。いいもん、まだ時間はあるし」

無事、鳥居まで下りきった。玲音はさっきと同じ場所で待っていて、百合愛の様子を見るなり不安げに眉をひそめた。

「百合愛、大丈夫……？」

「うん、全然平気よ。ちょっと驚いちゃっただけだから」

泣いて抱きついてきた口がよく言う。

百合愛はおれから下りると仁王立ちになった。

「さて、もう暗いから解散にしましょうか。意外と楽しかったわ。二度とやりたくないけど」
「そうだな。玲音、帰りは大丈夫か？」
玲音は小さく頷いた。
「ちょっとぉー。なんで玲音には訊いてわたしには訊かないの？」
「百合愛は帰り大丈夫か」
「うん、大丈夫よ？　もしかしてわたしのこと心配？」
「いや、全然」
「ふんっ！　もういいわ。こんなバカほっといて帰りましょ、玲音」
百合愛は玲音の手を握って歩いていった。さよならを告げる隙すらない素早さだった。しかし玲音はこちらに顔を向けて小さく手を振った。ぼけっとしていた沙月も万歳して手を振る。おれも手を振った。

罪悪感がわきあがる。

おれは玲音を置き去りにし、言葉の続きを聞かずに百合愛を選んだ。聞いてから向かうことだって十分にできたはずだ。けれど結果的におれは、百合愛を優先した。百合愛が心配だったことに嘘はない。だがそれだけでなく、玲音の想いを聞いてはならないとも心の奥底で考えていた。

正面から受け止めたらガラッと世界は変わる。特に人間関係が。きっと今までの丁度良い距離感が崩壊して極端に近づいたり遠のいたりする。

「やっぱりぼっちが一番だな……」

闇夜に本音を吐露する。

百合愛や玲音が怖かった。おれを変えようとする彼女らが。

第42話　あんたがイヤでもずっと隣にいてやるもん。

「クソ、なんでおれが……」

肌が焼ける、喉が渇く、汗が出る。少しは自重してくれと訴えたいものだが、太陽はおれたちを焼き殺そうと必死であった。

この地獄の猛暑の中を歩くことになったのはこの手鞄のせいである。これは百合愛の私物だ。先日、百合愛は課題を入れた手鞄をおれの家に置いたまま、肝試し後に取りに行くことなく帰宅した。後日取りに来るだろうと思って持ち帰っていなかったが、やはり百合愛は「つこ　の家まで持って

思って牛は笑い留めていたが、やはり百合愛はいわゆる「きて」と期待を裏切らない生意気なお嬢様っぷりを電話口で披露した。

口ごたえは一応したが徒労に終わった。何やら絶対に来てほしい理由があるらしい。

朝烏家訪問は二度目のため緊張はない。とにかくこの手鞄を手渡して家に帰りたい一心で立っている。

百合愛を召喚するためインターホンを鳴らした。

「はい、どちら様で」

知らない女性の声だ。間違えたか？

「式島睦紀という者ですが、こちらは朝烏さんのお宅でお間違い――」

「まぁ、式島さんとこの――」

音が途切れる。やはり間違えではなかったようだが、もしや百合愛の母親

か？　帰っているのか。
　百合愛が玄関から現れ、門に駆け寄ってきた。
「配達どうも、バカ睦紀」
「早とちりしすぎだ。今度からは着払いで送りつけるからな」
「いちいち小っちゃいことでうるさい男ね。悪かったわよ」
「じゃ、おれは帰るぞ」
「ダメよ。上がっていきなさい」
「いや、結構だ。家族水入らずで過ごせ」
「そうもいかないわ。パパがあんたと話したがってるの」
　イヤな予感しかしない話だ。
　おれは右向け右をして歩き出した。だが門から飛び出た百合愛に首根っこを掴まれ、拉致されてしまう。

「ほら、行くわよ。大事な話があるんだから」
「不安しかないんだが」
「別にあんたのこと食べたりしないわよ。カニバリズムはうちにいないわ」
「笑えねぇよ」
彼女に引っ張られて家に入ると、早速あのモデルルームみたいに綺麗なリビングへ早速通された。そこには百合愛の父親と母親がいた。
「大きくなったな、睦紀くん」
「あ、初めまして……式島睦紀です」
「そうか、きみにとっては初めましてに近いのかな。百合愛がいつも世話になっている」
百合愛の父親はめちゃくちゃダンディなおじ様だった。おそらく外国の血が入ったクォーターだろう。海外映画の中でふらっと現れても不思議じゃな

い、落ち着いた佇まいと枯れた渋い笑いじわが非常にミステリアスで、若い頃も現在もかなりモテてるだろうなと思った。

「本当に大きくなったわね、睦紀くん。もう立派な男の子ね」

一方の母親もお淑やかな美人だった。ウェーブのかかった長髪を右肩から垂らし、ピンと背筋を伸ばした姿が百合愛そっくりだった。垂れ目がちなところは似ていないが、スタイルはきっと母親譲りだろう。

「ジュースでも出そう。百合愛、睦紀くんのために持ってきなさい」

「だ、誰がバカ睦紀のためなんかに……！」

「せっかく忘れ物を届けてくれたのだからそれくらいしてあげなさい」

「むむむぅ……」

百合愛は悔しそうに拳を握り、冷蔵庫へと足を運んだ。あのお嬢様ツインテールでも父親には敵わないらしい。

ノファに案内され、父親と百合愛に向かって座った。そこで私はノンジュー

ンションに家族と共に入居した。そして荷ほどきもそこそこに父親と百合愛に手渡される。彼女は「ふんっ、特別なんだからね」と小声で悪態をつくと母親と食卓のテーブルに座った。

なぜマンツーマンで百合愛の父親と話さなければいけないのか。大人の男性とこうして話すのは親か教師くらいだ。妙な緊張感が心拍数を狂わせた。

「百合愛は、学校ではうまくやってるかな」

なるほど、そういうことか。それもそうだよな。娘と離ればなれになっていたのだから気になるのは当然だ。

「元気でやってると思いますよ」

「それを聞けて安心した。日本に戻ってきたのは正解だったようだね。その、百合愛はどんな風に過ごしているんだい」

「そうですね……百合愛さんは普通ですよ。友だちと喋って、クラスでも人

気です」

大嘘である。百合愛はクラスの人気者ではなく、よくわからない面倒な美少女って感じの立ち位置だ。上級ぼっちのおれと天然ぼっちの玲音とつるんでいるのだから。

百合愛の父親は安堵したように胸をなでおろした。

「よかった。あの子は人との付き合い方がお世辞でも上手とは言えなくてね。やはり睦紀くんのおかげかな」

「いえ、おれは関係ないですよ。席が隣だっただけで」

「はは、君のおかげだよ。百合愛は睦紀くんのことばかりわたしたちに話すんだから。良い友人を持ってくれた」

一体何を話してやがる、ツインテール。どうやっておれを話題にするのか

おれ自身が知りたいくらいだ。話題にできるほど個性的でユニークなキャラではないぞ。

おれは苦笑いを隠すためジュースに口をつけた。冷えていて最高にうまかった。

「これからも百合愛のことを頼むよ」

「ははは……」

「実は睦紀くんに頼みたいことがあって今日は来てもらったんだ。聞いてくれるかな」

一変してシリアスな表情になった。何かよからぬことでもあったのだろうか。もしかして百合愛の身に何かが？　おれは唾を飲んで頷いた。

「年末まで日本を離れることになった」

「え……？」

[illegible]

それにて、百合愛が――

咄嗟に百合愛を見る。彼女は食卓で母親と談笑しながら料理の下準備をしていた。あのツインテールがいなくなってしまうのか？　入学当初、二週間空席だったように、隣から百合愛がいなくなってしまうのか？

おれは聞き返すこともできず頭が真っ白になった。

「睦紀くん、違うんだ。百合愛は日本に残る」

「あ……そ、そうでしたか」

「行くのはわたしと妻。娘はこれまで通り日本で過ごすよ。けれどね、とても心配なんだ。百合愛はしっかり者で信頼はしているんだが、未成年の一人暮らしは何があるかはわからない」

「おっしゃる通りで……」

心の底から安心している自分がいた。

いろいろ、可哀そうだと思っている。まつかくぼっちライフに戻るからこれな

いやいや、何を安心している。もっとなくはっきり反対をしなければいけなかったんだぞ。

「生憎、わたしは長らく離れていたこともあって日本にはあまり信用できる身近な人がいなくてね。両親も、妻の方も地方に住んでいるから呼ぶわけにもいかない。ましてや転校は娘が猛反対するだろう」

再び、徐々にイヤな予感がしてきた。さっきとは比にならないくらいに。冷房がしっかり効いているのにも関わらず、背中に汗が滲み始めた。

「だがこれ以上、監督者なしで娘を一人にさせるわけにはいかない。そこでだ――」

百合愛の父親はピンと人差し指を立てた。まるで無茶ぶりを要求するときのツンツン状態の百合愛みたいだ。

目前のおじ様は落ち着いた様子で恐ろしいことを述べた。

「式島さんのお宅で……娘を預かってくれないかな？」

お隣のツインテールはやっぱりおれの傍から離れない。一体、おれはいつになったら真のぼっちになれるんだろう。

その夏、ツインテールでいっぱいの波乱の日々が始まろうとしていた。

第43話　ツインテールといっしょ。

――百合愛と同棲!?

おれの解釈が間違えていなければ百合愛を式島家で預かるということだが――マジか？　朝から晩まで傍に百合愛がいたら気が狂ってハゲるぞ。

だが百合愛の父親は真剣な表情を崩さなかった。

「む、娘さんが本当にうちに……？」

ちらっと百合愛の様子を窺う。彼女はまだ母親と料理の準備をしていた。こちらには見向きもしない。知っているのだろうか、父親がこう提案していると。

「突然のことで驚いたろう。けれど睦紀くんに決定権があるわけじゃない。もちろん睦紀くんも考えてほしいが、その前に式島さんにこの件を伝えてほしい。連絡先を知らなくてね。これを」

電話番号が書かれた紙片を渡された。

「娘を預かることで発生する諸々の負担をご両親とお話ししたいんだ」

「な、なるほど……」

「急な話で申し訳ない。信用に足る人が睦紀くんとご両親だけでね。きみなら百合愛を守ってくれると思ったんだ」

「どうですかねぇ……あの、百合愛さん本人はどう思ってるんでしょうか」

「百合愛はかなり乗り気のようだよ。娘は寂しがり屋だからね」

おいおい、本当に百合愛がうちに居座ることになるじゃないか。家でも下僕とご主人様の関係を続けなきゃならないのか。そもそもいつこんな関係に

なった。元は師弟関係だったはずだ。

おれがあれこれ言っても意味はない。これは大人同士の話なのだ。お金の面だっておれが口を突っ込める立場ではない。

「どうかな。頼めるかな」

「はい。とりあえず親に話してみます」

「ありがとう、睦紀くん」

それから話は早かった。

一つ屋根の下で百合愛と暮らすという夢のような――いや、地獄のような話で思考力をそぎ落とされたおれは自宅に帰宅後、早々にこの件を親に話した。うまく話せていたかはわからない。思考力を失っていたのだから理路

整然ではなかっただろう。
それから何事もなく日が過ぎていき、夏休みが残り二週間を切ったある日。
年末まで百合愛を預かる話が正式に決まったことを親から告げられた。
理由を三点に要約すると、沙月の面倒を見てくれそう、めっちゃ可愛い、養育費が好待遇、である。うちの家族は大丈夫なのだろうか。色々と。
「今日からお世話になります。改めまして朝烏百合愛です。約三ヶ月間よろしくお願いします」
そして夏休みの終わり頃、百合愛がとうとうやってきた。
この間彼女は一切連絡を寄越さなかった。彼女なりに申し訳なさや気恥ずかしさがあったのかもしれない。
「百合愛、持つぞ」

「あっ……ありがとう……」

玄関で大きなキャリーケースの横に立つ彼女にそう声をかける。おとなしめな彼女に新鮮さを覚えた。入学当初でさえ彼女はこれほど礼儀正しくはなかった。主におれに対して。しかも少し化粧までしている。ツインテールは相変わらずご健在だ。

「な、何よ。そんなに見ないで」

「すまん」

調子が狂う。いつものようにツンツンしていた方がよっぽどやりやすい。

式島家総出で百合愛を迎えた後、おれは彼女のために部屋を案内した。ドアを開けて中を見せる。普通の洋室だ。テーブルや本棚はここに置いてあったものとおれの自室から運んだ。

うなずこ作ヨおうれが九一ヨ東つて帚余ンこ。そりはいか支女は、

女なのに毎日おれた犬一日使って掃除した。そのせいた彼女に
「バカ睦紀の匂いがする」
と一言呟いた。前世はきっと犬だったのだろう。将来は警察犬にでもなればいい。
「ここを好きに使ってくれ。敷き布団なのは悪いが……」
「別に気にしないわ。なめないでちょうだい」
「ならよかった。気になることがあったら遠慮なくおれに言ってくれ。言いづらかったら母親に」
「あんたの部屋って確かここよね」
「あぁ」
百合愛が指を指す。おれの部屋は廊下を挟んで向かい側にある。もっと離れたいのが本心だが他に部屋がなかったので仕方なくだ。

「そう。わたしのとこにノック無しで入ってきたら殺すから」
「そっちもノック無しで入ってくるなよ。家から追い出すからな」
「ふん、ばーかばーか。あんたのくさい部屋なんかに入るもんですか」
「こっちこそお前のところなんか入るかよ。うるさくて耳がイカれる」
「ふーん、ご主人様に向かってそういうこと言うんだ。しかもまた『お前』って言ったわね。二度目よ」
「この家じゃ百合愛じゃなくておれがご主人様だ」
百合愛はぷくっと頬を膨らませ、優しく小突いてきた。その優しさがもどかしい。まるで甘えたがっているような、構ってほしいような欲が見える。寂しがり屋な彼女らしい言動ではあるが、初日からこれなら三ヶ月後にはどうなっているのだろう。
いやいや考えたくもない。おれはぼっちの高見を目指す男だ。ツインテー

ルが二四時間傍にいても気にしてはいけない。

「今日の夜、お仕置きするから」

不意に百合愛が背伸びし、耳元でそう囁いた。ゾクッと背筋が凍るとともに、ほんの少しだけ気が高ぶった。彼女の持つ女王様成分がたっぷり表れた声音のせいで官能的な欲望が刺激される。

今でも現実を疑う。悔しいくらい……百合愛は可愛いのだ。

彼女ほどツインテールが似合う子はいないと思うし、小生意気でツンツンしている反面とても甘えたがりで、距離を取ると無言で近寄ってくる様は誰だって心を鷲掴みにされ、彼女の虜になる。さらに整ったロリっぽい顔立ちにうっとりする綺麗なボディ。それはまさに――

「ぼっちの女神だな……」

「ん、何か言った？」

――ヒトハ、ダレ……ナノ。

首をかしげて目を合わせてくる。
「短い間だがよろしくなって言ったんだ」
「あら、わたしがいるのがイヤなんじゃないの？　顔に出てるわよ」
「別にイヤってわけじゃない」
「ふぅん。わたしは嬉しいけどなぁ」
「……は？」
「だって寂しいんだもん。おかえりなさいの無い家はもうこりごり。これからはバカ睦紀が言ってくれるんでしょ？」
床に座り、百合愛はキャリーケースを倒して中身を開けた。これだけでなく明日には彼女の残りの私物が宅配便で送られてくる。
おれは咄嗟に目をそらした。洋服や日用品の他にも下着もたくさんあった。
「これからいっぱいつこ[illegible]見るんだからね」

これからはしばらくわたしのも見ることはなるんだから慣れなさい」

「せめて隠す素振りくらいしろ」

「はいはい、ごめんなさいね。もういいから出てってちょうだい」

手で追い払われる。おれはため息をついて背を向けた。心配で心配で先が思いやられる……。ちょうどいい距離感をこれから見つけていこう。

自室のドアノブに手をかけたときだ。

「いってらっしゃい、バカ睦紀」

振り返って百合愛に目を向ける。彼女は照れた様子で手を後ろに組み立っていた。

「言ってみたかったの。それだけっ!!」

扉が勢いよく閉まる。

そうしてツインテールとの同棲生活が始まった。

第44話　夏休みの終わり

おれは毎晩お仕置きされた。

体罰のような肉体的苦痛ではなく、精神的苦痛だ。彼女は毎晩のようにおれの部屋にやって来て、課題を無理矢理こなさせた。もちろんおれ自身の課題である。彼女は「夏休みの宿題は先に全部終わらせるのが一番！」と口酸っぱく説き、もう登校日目前だというのにおれの計画をぶっ壊した。課題は少しずつやってこそ意味があるのに。

そうして登校日を前日に控えた今日、完全に自由な一日となった。

「入るわよ～」

ドアのノックと共に百合愛がそう声をかける。おれはベッドで横になり、目を閉じイヤホンでクラシックを聴いていた。無視しよう。一日くらいぼっち気分を味わいたい。

無視しているとやっと静かになった。だが、突然音楽が飛んだ。

「無視しないでよ、ばか」

百合愛がイヤホンを取り上げた。忍び足で侵入していたらしい。

「勝手に入るな」

「ノックはしたわ。何度もね。それでも返事しなかったから仕方なく」

百合愛はベッドの隅に腰を下ろした。

「もう課題は昨日で終わったぞ。自由にさせてくれ」

「わたしがちゃんと監督したんですもの。終わらないはずがないわ。それで今日一日暇になったわけだけど、ちょっと付き合ってくれるかしら」

「イヤだ」
「……あんた、わたしのこと嫌いなの？」
急に物悲しい声になった。顔を起こして目を向けると彼女は膝を抱いて体育座りをしていた。顔も膝に埋め、小さく縮こまっていた。さらに目尻には涙が少し溜まっていた。おれは起き上がって話しかけた。
「百合愛……？」
「わたし……やっぱりいない方がいいのかも。あんたがイヤがるなら出てく」
「お、おい、そんなことはない。百合愛のことは嫌いじゃなくて、む、むしろ――」
「むしろ？」
百合愛が濡れた瞳で身を寄せてきた。おれの胸にしがみついて一心に答えを求めている。

紅潮した頬は桃のようでかぶりつきたいくらい……愛おしい。望まぬ回答に怯える潤った唇を見ていると心が惑わされそうになる。

あの日の夜、百合愛の別荘でたっぷりしたようにキスがしたくなった。無我夢中にただただ遺伝子を交換し合う本能的なキスを。

「むしろ――普通だ」

「ハァ!?」

危うく人間を辞めるところだった。動物の本能に従わず、理性で生きなければならない。ぼっちとは、群れようとする本能に抗う『理性の代理人』なのだ。

しかし百合愛は納得いかなかったようで、胸にしがみつく手でおれを押し倒した。さらに馬乗りになり、既視感のあるシチュエーションができあがった。

[illegible]

「ゆ、許さないんだから……いこはい勇気を出して色んなことしてきたのにあんたはちっともわたしのことを……」

「ちょ、ちょちょちょちょっと待て！　家ではマズい!!　というか家じゃなくてもやめろ!!」

「うるちゃいうるちゃーい!!　本当のお仕置きするからっ!!　もう手加減なんてしない!!」

「お仕置き!?　キスするんじゃないのか!?」

「するか、ヴァアアアカ!!」

百合愛はおれの頭上で手を伸ばした。ベッドと勉強机が隣接していて、彼女は机にあるシャーペンを手に取ろうとしているのだ。おそらくそれで串刺しにするつもりだろう。確実に一生残る傷ができるか、百合愛の名前が一生犯罪史に残る。

おれは彼女の言を聞いて即座に手を戻す。ソイントヘーレが頭に垂れかかって引っ

おれは彼女の肩を掴んで押し戻す。ツンツン　ノな彦は至れなかって百二張りたかったが、それをやったらDV野郎っぽいのでもちろんやらない。良い匂いだったから許す。

「はなしなさい！」

「死にたかねぇ！」

腹筋の力も使って彼女を押し返す。小さな悲鳴と共に百合愛がごろんとおれの両足の上に転がった。スカートだったらおパンティ丸見えである。しかし彼女は負けじと身を起こして再び詰め寄った、が――

「おんっ!!」

おれはくの字に身体を曲げた。彼女が四つん這いで詰め寄ったとき、おれの大事なところを手で押し潰したのだ。股の間に手を入れる計算だったのだろう。さらに不運なことに、服装はパジャマだったため装甲が薄くダイレクトに潰された。

百合愛は訝しんで数回揉み、自分がどこを触ってどこを揉んだのかに気付くと真っ赤に沸騰した。

「ひゃっ、ひゃだぁ……！」

情けない声を漏らして彼女は後ずさった。一方のおれはうずくまって身体をいたわった。潰れたら気絶するか死亡すると聞いたことがあるので多分無事だ。生殖機能は失われていないと信じたい。使わないと思うけど。

「おっ……おお……」

鈍痛で呻く。なぜ神はこんなに辛い痛みを与えるのか理解できない。ぶっ飛ばすぞ、地上に降りてこい。神なんざ片腕で十分だ。

呻いていると百合愛が背中をさすってきた。

「ごめんなさい！　本当にそんなつもりじゃなかったの！　本当にごめんなさ

い！　あ、あそこ大丈夫……？」
「大丈夫だ……」
「ごめん、ごめん……元気出して。その……りっ、りりり立派だったから自信持ちなさいっ!!」
「は？」
「いきなり真顔になるなぁー！　あんたのこと褒めてやってんのよ!!　何度も言わせないでよセクハラうんちバカ睦紀!!　ふんっ!!　だいっきらい!!」
彼女はとどめに腹を一発殴って部屋から出て行った。もはや下半身も下腹部もボロボロである。
その後、夕飯の席で謝罪された。殴ってごめんね、と。おれは「何のことだ？」と見事にとぼけてみせた。そうすれば尾を引かない。そして目論み通り彼女はぱっと笑顔を咲かせておれの隣の席に座った。
「い……

「いただきます」

すっかり百合愛は式島家の一員だった。

八月下旬。

夏休みが明けて今日は登校日だ。久しぶりの制服はとても面倒だった。ズボンを穿き、ベルトを通し、白シャツを着たら裾をズボンにいれ、最後にベルトを締める。パジャマが恋しくてたまらない。

洗面所から制服姿の百合愛が出てきてギョッとした。制服姿の百合愛を家の中で見るのは初めてかもしれない。

「何よ。ぼーっとしてないで支度済ませなさい」

「あ、あぁ……」

「ドア開。ばーか」

二次元面はだ」

「朝から大変ムカつくお嬢さんで」

百合愛ほど身支度に時間がかからないので、彼女がわちゃわちゃしている間におれは家を出た。二人で出るわけにはいかない。百合愛と同棲していると知られたらどんな迫害を受けることやら。

おれは迫害されたっていい。ぼっち隔離政策も万々歳だ。だが百合愛が迫害されるのだけはダメだ。彼女の悲しい表情は心が抉られる。

「待ちなさいよばか!!」

黙々と歩いていたら百合愛の声が後ろから飛んできた。どうやらこの暑さの中を走ってきたらしい。

「よく走ろうと思ったな……」

「なんで逃げるのよ！　置いていかないで！」

「今後のためにも言っておくが、別々に登校した方が身のためだ。おれたちが一緒に暮らしていると知られればどんな誤解を受けるかわからんぞ」

「うわっ、ちっちゃい男ね」

「おれは百合愛のことを考えてだな……」

「いいもん、どう思われたって」

彼女はおれの手を握った。すぐに払おうとしたが彼女は「むっ！」と威嚇して行動を咎めた。

「恋人って思われてもいいもん。わたし、全然気にしないもん」

「あのなぁ……そうじゃなくてだなぁ……」

「わたしが気にするのはバカ睦紀の目だけなの!!　こんなこと言わせないでよばか！」

怒った口調に言い負かされ、おれは閉口した。

照りつける太陽の下を歩き続ける。遠くを見れば陽炎ができていて、通行人が焼かれているようだった。ヒートアイランドだとか温暖化だとかどうでもいいが、いい加減はやいとこ秋になってほしかった。

そんな溶けそうな暑さだったが、百合愛と握る手の方がもっと熱かった。

第45話　ポニーテールは救われたい。

秋、ポニーテールが泣いていた。

しつこく話しかけては罵倒してくる百合愛から逃げ、校内外を彷徨っているお昼時のことだった。グラウンドへと続くあの階段に榊木アリスがポニーテールを靡かせていた。お気に入りの豆乳パックを片手に、「また黄昏れているのか」と小馬鹿にしようと思ったが、アリスは膝を折って縮こまり、目尻を何度も拭って泣いていた。流石に気が引けた。

放っておくこともできた。その方がぼっちらしいし、彼女は一人でいることを望んでいるのかもしれない。だが、足先は彼女に向いた。

「やはりアリスはその髪型が似合う」

何気ない切り口で声をかける。できるだけ柔らかい語り口。玲音と話すときのように優しさが伝わるよう努めて。

アリスは慌てて顔を背け、腕で強く目を擦った。綺麗な顔に傷がつきそうで心配するほど激しかった。その憂慮は的中し、こちらを向いた彼女の目は真っ赤に腫れていた。目の周りもひどいもんだ。

「四時限目は体育だったのか？　アリスがポニーテールの時は動くときだよな。スポーツとか、ほら、百合愛の別荘に泊まったときの海水浴とかも」

アリスはすんすんと鼻を鳴らすと尻を浮かせて階段の半分を譲ってくれた。隣に座ってもいいらしい。おれは素直に応じて腰を下ろした。

「琲紀くんって、そんなに喋る人だったっけ」

「お喋りなツインテールのせいで顔の筋肉が大分ほぐれたんだ。口さけ女みたいなこともできるぞ」

おれは自分の口に指を突っ込んで引っ張り上げた。多少の効果はあり、アリスは肩をすくめて笑ってくれた。そう、アリスも笑っていた方がもっと綺麗だ。

「……何があったんだ。それとも演技の練習か？」

「優しいとこあるじゃん、睦紀くん。もっと冷酷で人に興味がないと思ってた」

「いや間違ってない。アリスが弱ってるときを窺って親睦を深めた後、ぼっちスキルを教えてもらおうと思ってな。ここ数ヶ月、百合愛は全くぼっちスキルを教えてくれなくて困ってるんだ。アリスを存分に利用するつもりでいる」

「まだそんなことしてたんだ」
「あぁ、おれは手段を選ばん。今でも冷酷だ」
くだらない冗談を交えて淡々と述べる。
アリスは含み笑いをし、十数秒黙った。薄い呼吸音だけが二人の間に流れる。それから小さくため息をつくと口を開いた。
「多分、睦紀くんにはどうにもできないことだよ」
「そうかもな」
「話したらどうにかしてくれるの？」
「するさ」
「なんで？」
「なんでって……そりゃ、アリスは百合愛の友だちだからな。百合愛の友人が困ってたら助けなきゃならん」
「[illegible]」

「それって、ほっちっぽくない？」

おっしゃるとおり。こんな面倒ごとに自ら足をツッコむとかどうかしている。優秀なぼっちなら傍観するか、机で寝るか、音楽で世界を遮断するかだ。

しかしながらぼっちを極める以前に大切なことがある。

「人道や道徳を失ったら終わりだ。それらを捨てたぼっちはただのクズで人に迷惑しかかけない、クズのぼっちだ。クズだからぼっちになったぼっちだよ。おれはそんなやつになるつもりはない。だから、おれはアリスを心配することができる」

アリスは目を丸くし、

「やっぱりそれじゃあぼっちっぽくないよ」

「ぼっちぼっちうっせぇやなくてこういう

この際ぼっちでもいい」

「ぼっちじゃなくてヒーローだね。百合愛が溺愛するのもわかる」

「あれはただの歪みきった病的支配欲だ。そんなんじゃない」

予鈴が校舎から響いてきた。本題に入る前に話しすぎたようだ。

立ち上がって校舎の方を向くとアリスが「待って」と制止を求めた。座ったまま彼女は手を差し出した。

「ヒーローは手を差し伸べるんだよ？」

彼女は白い歯を見せて笑みを浮かべた。曇天が晴れて日光が差し込んだ瞬間のように、こちらの心まで晴れる素敵な笑顔だった。

「おれはただのぼっちだ」

手を取って立ち上がらせる。すっと背が伸び、ポニーテールがまた靡いた。

解決していたと思っていたアリスのぼっち事情。そう簡単にうまくいかないのがこの世の定理だ。人の思い通りにいく世界ならきっと世界中の人間は

大金持ちだろう。
「どこかで……時間取れるかな」
「いつでも。暇じゃないときを見つける方が難しいからな」
「ありがとう。睦紀くんのこと借りるね、って百合愛に言っといて」
「ぶち切れるから絶対に言わん」
アリスは泣いているより笑っている方がいい。
日本中の彼女のファンはそう思っているはずだ。すっかりファンになったおれが言うんだから間違いない。
「帰るわよ、バカ睦紀」
放課後になると百合愛は速攻で帰宅を促した。

強気な口調だがこのツインテール、実は一人で帰れないのである。毎日登下校を一緒にしていたせいか、彼女はおれ無しでは怖くて単独行動ができなくなったのだ。以前先に帰ったときは家でこっぴどく怒られた。わたしが誘拐されたらどうすんのよ、と。警察に通報して終わりだ、と返したらさらに怒られ、尻を何度も蹴られた。

「悪いが先に帰ってくれ。先生に訊きたいことがあるんだ」

「ふぅん。じゃあ待っててあげるわ」

「どれくらいかかるかわからないから先に帰れ。それとも一人で帰るのが怖いのか？　もう高校生だよな？」

挑発にはうまく乗ってくれた。百合愛は何か言いたげ様子で口をもごもごさせ、顔を赤らめ始めた。

「怖くないもん！　あんたなんかいなくたって一人で帰れるもん！」

[illegible]

「それが普通だ。じゃあな、気をつけて」
「……いっしょに帰りたいだけなのに」
「ん？」
「何でもないっ！　一生帰ってくんなばーか！」
　ツインテールで数回おれをペシペシはたき、教室から出て行った。ちょっと心配になった。一人で……帰れるよな？
　百合愛が完全に消えたことを確認してからおれはアリスの教室へと足を運んだ。中を覗くと数人程度しかもう残っていなかった。その中にアリスがいた。椅子に座って顎に手をつき、窓辺で外を眺めていた。まるで写真集の一ページだ。
「アリス」
　髪はポニーテールではなく流されていた。長い黒髪はいつ見ても美しくて

人の会話は一言一句漏らさず聞いているのだろうか？　人体の一部とは到底見えないほど見事な美髪だ。

百合愛に嘘をついたのは申し訳ないがこれは必要な嘘である。

アリスと学校を出て、話しながら歩いた。アリスが泣いていた理由を聞きながらどういう現状なのかを頭に入れる。

要約するとやはり嫉妬が原因だった。

あるドラマでアリスととある男性アイドルが仲良くしているシーンが多々あり、それに嫉妬を覚えたクラスメイトの数人がアリスに対してありもしないことを言っては口で攻撃した、というものだ。

大変くだらない内容だった。現実と創作の区別がつかないアホのやることである。

「元々、その子たちはわたしのこと良く思ってなかったから仕方ないのかもねー

普段は気丈な態度のアリスが声を震わせて語った。彼女の萎れた姿に抉られるような痛みが胸に走る。ダメだダメだ、アリスらしくない。悪意満点のからかいをおれにぶつけてくれ。だがそう言える雰囲気ではなかった。彼女は本気で悩んでいる。

「仲良くしたいのか」

「そりゃあできたらそうしたいけど……無理だよ。こういう誤解には慣れないといけないことはわかってる。仕事柄、永遠に付き合っていくものだから」

半ば諦めているような口振りだ。だが活路はある。仲良くできないのならその逆の発想で戦えばいい。

信号待ちするサラリーマンや学生や小さな子どもたちの中で、おれはアリスに提案した。

「アリス。ぼっちになろう」

「えっ？」

「友好的になれない相手に歩み寄っても突き返されるだけだ。なら切ってしまえ。アリスの理解者がクラスに一人もいないわけではないんだろう？」

「でも、その子たちも目を向けられないよう最近は……」

「ならそれぞれの世界を作ろう。はっきりと壁を作って分けるんだ。国境線みたいにな。その後に仲良しを引き込めばいい」

「そんなこと……どうやって？」

青信号になって人々が乱雑に歩き出す。そのカオスの中で立ち止まり、眉をひそめるアリスに向けて、おれは彼女が大得意なニヤけ面を作った。

「おれが、ドスケベになるんだよ」

エロは地球を救う――いや、愛だったかもしれない。

とにかくおれは、ドスケベでアリスを救うことにした。

第46話　恥を捨てた男の真実

早朝、百合愛の自室。

「ばかぁダメぇ……はずかしいよぉ……」

彼女は顔を手で覆ってとても羞恥していた。イケないものを見ている罪悪感とイケないものを見てみたい好奇心が彼女の胸の中で激闘を繰り広げている。その証に指の隙間から彼女の目が何度も見え隠れした。

おれは問答無用で彼女の前で服を脱いだ。布団の上でへたり込む彼女は目をギラギラさせて息を荒くした。

「ほ、ほんとうに……するの？」

「朝は早いんだ。さっさと済ませるぞ」
「うん、がんばる……」
百合愛の前で膝をつく。彼女は唾を飲み、そっと手を上げておれの胸を撫でた。なんてか弱く小さな手なのだろう。そんな可愛らしい手に触れられ心拍数が上がった。
さぁ、やってしまおう。
熱い一日が始まった。

ぼっちの強みと言えば、やはり人の目を気にしなくていいことである。だがこのケースは少数派だ。ほとんどのぼっちは人目を意識して避け、目立たないよう暮らしている。変なやつ、可哀想なやつ、何考えているかわからないやつと思われないよう影を薄くし、あわよくば交友関係を作れないかと機

会をうかがっている。
おれは少数派の特殊なぼっちであるため、基本的にぼっちモードに入れば他人の視線を感知しなくなる。つまりどんなことをやってもそれに伴って発生する羞恥心、不安感、劣等感等から解放された「人間でない何か」にグレードアップできるのだ。
「ねぇ、あんた今日おかしいよ？」
昼休み、黙って昼食を摂っていると左の席の百合愛がおれの脳内状態を突然案じ始めた。まだ朝の一件が胸中で燻っているのか、中々目を合わせてくれない。
「おれがおかしいんじゃない。世界がおかしいんだ」
「絶対あんたがおかしいわ。あ、朝だってあんなことわたしにさせて……それに今日のあんたはスマホを触る頻度が異常」

「常に情報を欲しているスタンスは現代人として普通だ」
「ふん。わたしがメール送っても無視するくせに」
「一緒に暮らしてるんだから電子機器を通さなくていい。おれたち……いつも傍にいるだろ」
「……うん。話したいときはあんたの部屋いく」
ぷいっと顔を反対に向けて拗ねてしまった。未だに彼女の扱いがよくわからない。脈絡がないところでしょんぼりしたり怒ったりするので、その日の天候や気温などの自然環境で左右されているのではと最近は考えている。もしくはおれが単にバカなだけか。
こういうときは褒めれば機嫌が良くなる。
「百合愛。今日も素敵なツインテールだな」
「んんっ……あ、ありがと。けど、あんたはアリスのことが好きなんでしょ。そ

んなにわたしチ三口くないもん」
「さーて、どうだかな」
「ばか。ばかばかばか、きらい」
アリスの話題が出たと同時に、おれのスマホがポケットの中で鳴った。すぐに取り出して画面を確認する。百合愛が椅子をこちらに引きずって覗き込もうとしてきたが、手で制止。負けじとスマホを取り上げようとする姿は不倫疑惑の夫を追求するようだった。
画面には一言。「助けて」
その三文字の救助要請を待っていた。
「百合愛、席に座ってくれ」
「やだ。わたしに見せなさい」
「百合愛」
おれは支支を言を国外、ンつかリ支支り目を見こ。ここう奇麗な童。石て

おれは彼女を肩を抱き、しっかり彼女の目を見た。とても綺麗な瞳。汚れがなくとても純粋で悪意なんて微塵もない。

彼女には悪を見てほしくない。悪を見ると人は悪に染まる。善を見れば人は善に染まる。汚れを知らないお姫様のままでいてくれ。

「ちゃんと帰ってくる。待っててくれ」

「なに、言ってるの？」

席を立ち、教室から出た。

廊下を歩く。僅かに残る躊躇いを打ち消すように数回指を鳴らす。ぱちん、ぱちん、ぱちん。ついでにシャツのボタンもぱちん、ぱちん、ぱちん。ぱりっとしたシャツを脱ぎ、背後に投げ捨てる。下着も脱いで廊下にポイ捨て。好奇の視線が一気に集まったが、ぼっちモードのおれにはノーダメージ。

真夏の太陽で焼けた上半身裸の男が悠々と歩いて行く。おれはイヤホンを耳に挿してベートーヴェンの『歓喜の歌』を流した。玲音の影響で最近は

もっとクラシックにハマっている。今度オススメを訊いてみよう。

馴染みのない教室に堂々と入った。

笑う者、不審がる者、戸惑う者、驚く者と教室内の生徒は四種類に分類された。中でもひときわ驚いていたのが榊木アリスだった。何故かはおれの上半身を見ればわかる。「アリス命!!」と縦に油性ペンでデカデカと書かれているからだ。朝、百合愛に無理を言って頼み込み、ゴシック体で上手に書いてくれた。

「だ、だれ？」

席に座るアリスを囲む女子たちの一人がおれに問う。

おれはさも愚問だなといった強キャラ感を醸し出して答える。

「――アリス様のファンだが？」

「あ、あー、そう……」

首を左右に動かして女子たちを一瞥する。貴様らなど眼中にないといった目付きで。今度はこちらから口を開いた。

「アリス様に何をしている」

「いや、まず誰？　キモいよ、マジで」

「きみらの言動よりはキモくないと思うが。おれはアリス様を守りたいだけだ」

「あたしらの何がキモいって？」

「嫉妬だ。住む世界が違うのだから無意味だ」

「意味わかんない。誰か先生呼んで」

想定内の事態だ。教師が召喚され、おれは連行されるだろう。

しかしながらここからが勝負なのだ。連行までの時間に爪痕を残す。

「ところで知っているか。この学校には男子中心で構成された秘密組織があ

ることを」

「マジで話しかけないで。男子こいつどうにかして」

「榊木アリスファンクラブだ。アリス様が困るだろうから表には出ていない。だが、ちゃんと存在している。周りを見てみろ。特に男だ」

アリスを貶める女子たちは各々首を回した。全員の視線が集まっている。男も女も、そして廊下からの野次馬も。

彼女らが何を感じ取ったかはわからない。しかし人の悪意に対して人はどう思い、どうしてやろうかと善人が悪を芽生えさせる瞬間の片鱗くらいは感じ取っただろう。

「いいか。アリス様を執拗に攻撃するなら黙っていないやつらがいることを忘れるな。脅しというわけじゃない。ただ、警告している。類は友を呼ぶって言葉通り、自分たちに似た人間が近づいてくるぞ。人を貶めようと画策するような奴ら、生各がねじ曲がったこうつこか、あこうつ々こいな姿態がな

「なぜ、とは性格なれし由なきやうとは、あとおれのたいな変態だな」

おれの剣幕に圧倒されたのか、彼女はいつの間にか口を閉じて聞いていた。無理もない。変態と誰が真面目に喋りたいと思うのか。おれだって絶対にイヤだ。

アリスはずっとぽかーんとした表情を浮かべていた。見たことのない気の抜けた顔だった。そんなアリスも良かった。暗い顔じゃなけりゃアリスはいつだって百点満点だ。

「アリス命！　アリス命！」

遂にやってきた体育教師に拘束され、連行されながらもおれは叫び続けた。

端から見れば「狂信的ファンの奇行」だろう。真実ではないが弁解する気はない。おれはアリスを助けたかっただけだ。きみは一人じゃない、ぼっちじゃ

ない、絶望するには早い、と。

方法は他にもあっただろうけれど、おれにはこれくらいしか思いつかなかった。自分のステータス――失うものが無いぼっちを最大限利用した方法だ。

ちなみに悔いはない。上半身裸で堂々と歩く行為はかなり気持ちよかったからな。

第47話　龍の如く、彗星の如く、ポニーテールは空を駆ける。

何が悪いことで、何が良いことか。

それくらいわかっているつもりだった。

担任教師が穏やかな声で事情を訊く。なぜあんなことをしたのか、きみはあんなことをする生徒ではなかった、と頭を抱えて。

騒ぎを起こした張本人たるおれは依然として生徒指導室でも上半身裸で尋問を受けていた。途中でシャツは脱ぎ捨てたっきりだ。未だ冷めぬ興奮のうかげで凡事さは感じなかった。

のおかげで助かった。

「自分がバカでした」

おれは全面的に非を認めた。つい頭に血が上ってしまって、と古臭い言い訳を述べてアリスを引き合いに出さず答えた。当然胸に書かれた「アリス命!!」の意味を問われたが、

「アリスさんと仲良くなりたかっただけです」

と間抜けな衝動を告白し、これで悪人はおれだけとなった。

アリスを囲っていた生徒たちはいなかったし、アリスは何も困っていなかった。ただ目立たない男子生徒が狂乱した珍事件。それが教員側の認識だ。

これだけで終わればよかったが誠に残念ながら親に連絡がいくそうだ。息子さんが学校で裸になりましたと報告して叱責を促すに違いない。沙月に大笑いされそうだな。

さらに大変残念なことに、アリスの親にも連絡がいくことにもなった。お

れはおそらく娘に危害を加えた極悪人として、榊木家で代々語り継がれることになるだろう。悲しい世の中だ。What a sad world.

「もう二度としません。反省しています」

胸の宗教的模様を渡されたタオルで消し終え、おれは深く頭を下げた。

「榊木さんに謝りなさい。ただし少し時間を置いてから」

「わかりました。ご迷惑おかけしました」

しばらくおれに関する噂が絶えないだろうな。注目されることによって、ぼっちとしての特典を得られないことが惜しかった。

生徒指導室から担任と出ると、ドアの横で百合愛が立っていた。彼女の腕には折りたたまれたシャツと下着がかけられていた。まぎれもなくおれのものだ。

「百合愛、ありが――」

彼女は素早くおれの手を掴み、担任に一礼すると早足で歩き始めた。言葉を挟む余地なく荒々しく革靴の音を立てて歩き、廊下を曲がって階段を下りる。そして踊り場で止まると無言で服を押しつけられた。おれは何も言わず服を着る。

そして服装を整え終わるやいなや、彼女はおれを壁に追いやった。

「なんであんなことしたの？」

「見てたのか。待てと言っただろ……」

「答えて。どうせアリスを助けるためだったんでしょ？　どうしてあんな方法を選んだの？」

「真っ正面から刃向かうと悪化するだけだ。だから対立関係に変化を加えた。それがあの方法だ」

「[illegible]

「あんたほんっとバカね!!　あんたが笑い者になってどうするのよ！」

胸ぐらを掴んで彼女はせき立てた。身長差のせいで若干ぎこちないが、しっかり怒りは伝わってきた。彼女が怒る必要なんてどこにもないのに不思議でならない。

「けど後悔はないんだな、これが」

「茶化さないで！」

彼女は後ろにターンして腕を組んだ。相当お怒りらしい。しかしすぐにこちらに向き直ると俯きがちのまま肉薄し、そっとおでこをおれの胸に当てた。そっと体重を預けてくる。百合愛の優しい匂いがふんわり広がった。

「お、おい百合愛」

「安心しなさい。学校中があんたを指さして笑ってもわたしだけは味方でいてあげる。ひとりぼっちにはさせないって

てあげる。てとかなんたにはならしれ」

「友だちできなくなるぞ」

「いいもん。あんたのこと馬鹿にするやつなんかどうでもいいもん」

「わかったわかった。もう戻ろうな」

「……うん、もどる」

百合愛の心優しい言葉は嬉しかった。口を開けばバカバカバカの連続が常なのに、不意打ちで優しくしてくるのは反則だ。けれど彼女が巻き込まれるのだけは避けたかった。おれと違って彼女はぼっちになりたいわけではない。きっと苦い過去を経験しているからこそ、おれにはそうなってほしくなかったのだろう。

教室に戻ると大量の視線がおれたちに集中した。主におれだ。かつてこれほどまで式島睦紀という人間が興味を抱かれたことはあっただろうか。当然、皆無と断言できる。

慣れない光景に寒気がして、これからの生活に若干不安を抱いた。

百合愛に影響がないことだけを強く祈った。

たった一週間で事実なるものは形を変えた。

元から謎の人物としてクラスで通っていたため、クラスメイトから話しかけられることはなかった。玲音はとても心配した様子で気にしてくれて、アリスの一件を信じてくれた。理解者は百合愛と玲音だけで十分だ。

問題は噂が一人歩きしてることである。おれがアリスのストーカーだとか、犯罪者だとか、挙げ句の果てにはアリスを辱めようとしたという噂まで流れた。そう勘違いされても仕方ない。一方のアリスはというと、百合愛の偵察によればひとりぼっちではなかったとのことだった。あとやたら男子が

目を光らせているとも。

「流石に気疲れするな……」

下校中につい心の声が漏れる。

傍にいる百合愛が不安げな顔でおれの顔を覗き込んできた。

「バカ睦紀、大丈夫？　わたしにできることがあったら何でも言いなさいね」

頼もしい一言に励まされる。煩わしかっただけなのに今となっては世界一頼れるご主人様だ。

百合愛は学校では片時もおれの傍から離れなかった。席を立てば彼女も立ち、トイレに行けば途中までついてきた。距離が出ると小走りして近寄ってきた。

彼女のおかげで人の誤解ある視線に晒され続けても耐えることができた。

[illegible]

「百合愛、ありがとう。百合愛がいなかったら学校に行けなかったかもしれない」

「ふ、ふんっ！　感謝されて当然よ。むしろそれだけ？　って感じね」

「それだけとは？」

「……言葉だけで終わりなのって意味！」

「今なら何でも言うこと聞いてやろう。何して欲しい？」

百合愛は立ち止まると九十度回転して背を向けた。そして何やらブツブツと口ずさんで考え事を始めた。電柱に向かって独り言とは、通行人はおそろしくてたまらないだろうな。

考えがまとまると彼女は再びメリハリある動きでこちらに正対し、一歩前に出た。

「なぁっ……なっ、なでなでしてほしいっ！」

「　　なぜなぜ？」

「……なでなで？」

「頭を撫でることっ!!　も、もしかしてそんなことも知らないの!?　ば、ばぁーーかばーか!!　頭悪うーい!!」

自分がどれだけ恥ずかしいおねだりをしているのかちゃんと自覚はあるらしく、彼女は足をガクガク震わせておれを指さした。お漏らし寸前のようにも見える。

そんな不安定で甘えたがりなお嬢様の要望通り、紳士な気持ちを込めて彼女の形の良い頭を撫でた。

「んっ……」

彼女は目を閉じ、満足げに口元を緩めた。緊張していた彼女の身体が弛緩してゆくのがわかる。まるで喉を撫でられて気持ちよさそうに鳴く猫のようだった。

その時思った。

百合愛に嫌われなければ世界中から嫌われてもいい。一週間前に彼女が言い放った言葉に似ている。一見相対的のように思えて、実は深いところで通じ合っているのかもな。

「睦紀くん！」

唐突に名前を呼ばれた。アリスだった。事態が沈静化するまで距離を取っていたので久しぶりに彼女の声を聞いた。おれたちを追いかけていたようで少し息が上がっている。そのせいか髪型はポニーテールだった。

「ど、どうしたアリス。あれから大丈夫だったか？」

「うん、おかげさまで。何か男子たちの目線が気になってわたしにちょっかいかけなくなったっぽい。友だちともまた話すようになったよ」

「安心した。ちなみにファンクラブの話だが、あれはブラフだ」

アリスは目を見開いて驚愕した。

「思惑通り、疑心暗鬼になってくれたようだな」

「なんだぁ～。ファンクラブのこと知らなかったから調べてみたのに～」

今時そんなもの学校にあるわけがないだろ。あったら教師が黙っていない。確実に問題になるからな。

「アリス、何か用があって来たんでしょう？　どうかした？」

すっかり機嫌を取り戻した百合愛が問う。

「そ。ちょっと野暮用がね。睦紀くん」

「ん？」

「今度時間あるときにさ、うち来てよ」

「え!?　お、おれが!?」

「もちろん百合愛もいいよ。玲音も呼ぼう！」

有名美少女子役のご自宅にお邪魔してもいいのか、たかが一般ぼっちが。

百合愛も驚いていたが、喜ぶおれを見てむっと睨んだ。また家でたっぷり撫でてあげよう。

「パパがどうしても睦紀くんにお礼がしたいってうるさくてね。あ、ちゃんと睦紀くんのことは真実を伝えてるから安心して。わたしのヒーローってことになってるから」

「お、おぉ……」

「それだけっ！　じゃ！」

アリスは翻って駆けだした。ポニーテールが龍のように飛んでいく。

明日は前向きに登校できる気がした。

第48話　絶対不可侵の女神さま

アリスが自宅に招待してくれるという話は、彼女のスケジュール上の都合で二週先になった。売れっ子の休日はもはや平日と変わらないようだ。彼女の体力には驚かされる。

九月に入って文化祭の話が出てきたこの頃。ついに榊木家にお邪魔する土曜日がやってきた。

昼食を家で摂った後、おれと百合愛はそれぞれお出かけ準備をし始めた。

まだ一ヶ月も経っていないから慣れないことが多く、百合愛との同棲生活

は正直ハラハラすることばかりだ。特に機嫌が一番良い風呂上がり。彼女は頻繁にシャツ一枚でおれの部屋に来ては自由に寝転がり、たあいない話をもちかけてくる。深い谷間を見せびらかすように前屈みになったり、腰からパンツがはみ出ていても知らんぷりを決め込む。全て気を引くためにやっていることには気付いていた。おれが目を逸らしたりウブなリアクションをすると決まって彼女は満足感にみちた笑みを浮かべるのだ。

「バカ睦紀～。入っていーい？」

百合愛がひょこっとドアから顔を出して尋ねる。

「入る前にノックをしろと……」

「別にあんたの裸みたって驚かないもーん」

「そんな優しいハプニングじゃなくて、アレをしてたときとかどうするんだよー

「アレって何？」
「……アレだ。いや、もういい」
「ちゃんと説明しないとわからないわ」
本当にわかっていないようだった。おれは語るのをやめた。これはお嬢様が知らなくていい汚い世界だ。それでも百合愛は「説明しなさい」と問い続けたので、苦渋の策として行う褒め言葉作戦を実行した。
「それはそうと、気合い入ってるな。すごく可憐だ」
「ふふん、でしょ？」

百合愛はくるりと一回転してワンピースを花のように開いた。髪型はいつも通りツインテールだが、髑髏のアクセサリーを髪に飾っていたり、耳には小さなイヤリングが光っていた。不本意だが、いつもとは違う可愛さに高揚し

た。

「下僕のご主人様がどれだけ高貴な人物かをちゃんと見せつけないとね。あんたもきちっとしなさいね。わたしが低く見られたらお仕置きよ」

そう言っておれの肩に付着するホコリを手で払った。

「友人の家に行くだけじゃねーか」

「何もわかっちゃいないわね。これは勝負なの。わたしにとってね」

九月ともなれば日差しは落ち着き、手をかざす必要はなかった。

百合愛も眉間に皺を寄せず元気よく腕を振って歩いている。まだ何も始まっていないのにハイヒールを固い歩道でコツコツと鳴らし、鼻歌まで初めてとても上機嫌だった。そう言えば彼女と私服で出歩くのは久々だった。

「睦紀くん、百合愛」

途中で玲音と合流した。その理由はアリスの住む場所だ。

「クソデケェ……」

三人揃って空を見上げた。アリスは都心部のタワマン住人なのである。財力の差というやつを思い知らされ、何か強大な権力に戦いを挑むように思えて武者震いがした。

「ひどい言葉遣いはやめなさい。あんたが教養のないバカと思われたら舐められるわよ。それにわたしもその程度かと思われちゃう」

「アリスに恨みでもあるのか？」

「違うわ。隙を見せたくないだけよ。誰もがわたしの敵になり得るから」

意味不明な言動を続ける百合愛は一人先にタワマンの入り口へと歩いていった。何の迷いもない足踏みはお嬢様の経験がそうさせているのだろう。というか、おそらくはノンアポでタワマンが多すぎないか。

というか、あれの匂いは[illegible]

玲音と顔を見合わせて首をかしげる。彼女も百合愛の発言を理解できていなかった。百合愛の取扱説明書や翻訳辞典などあれば便利なのにな。急に甘えてきたと思ったらツンツンし始め殴ってくる理不尽な行動をどうにか是正させたい。

インターホンらしきパネルの前で百合愛が何かを喋り、それから一分後にアリスが下りてきた。

「ごめんね、来てくれてありがとう！」

彼女が来たことによってやっとガラスドアが開いた。なるほど、これは庶民との区別をつける壁だったのか。まるで世界史の話だな。

「凄いところに住んでるんだな。タワマンに入ったのは初めてだ」

「あはは。数年前からだけどね。百合愛も玲音もようこそ」

女子三人がかたまってエレベーターへと進む。その後をのそのそと追った。

何だか少しだけ緊張してきた。上昇し続けるエレベーターの中でアリスの両親はどんな人だろうと考える。やはり娘が娘だから美人な母とかっこいい父なのだろうか。百合愛の両親はそのケースに当てはまっていた。玲音もきっとそうだろう。

「あ、睦紀くん」

「ん？」

「最初に言っておくけど、わたしのパパ、ちょっと変だから」

「変？」

「うん。訂正する、すごく変人。睦紀くんみたいにね」

否定はしない。ぼっちを目指すやつは普通の人間ではない。きみは変だ、と教えられないくらい人と関わってこなかったのだ。明らかにノーマルじゃない。

しかしおれより変人ではないだろう。結婚もして良い娘もいるのだ。式島睦紀より変人だったらコミュニケーションは成立しない上に、ましてや人と恋に落ちるなんてことは起こりえない。夢の話だ。

「すまなかったぁああ!!」

だが玄関を開けた瞬間、その考えは霧散した。

アリスの父親らしき男がいきなり土下座してきたのだ。大の大人の土下座はそう簡単に見られない。犯罪に手を染めた有名人が報道陣の前でする、演技臭くて陳腐な土下座くらいだ。

おれたちはドアの前で固まった。百合愛は身を引いて仰天し、玲音はおれの背後に回り、おれは口をぽっかり開けて呆然とした。

「パパ！　みんな驚いてるから！」

「あ、あぁ……少し長く土下座しすぎたか。おかげでブラジル人の生活を覗

くことができた」

「やめてよ、友だちの前で恥ずかしい……いいから戻って！」

アリスは父親の背中を無理矢理押して奥へと進んでいった。おれたちは言葉を失って立ち尽くし、そしてこう思った。ヤバいところに来てしまった、と。

戻ってきたアリスは申し訳なさそうに手を合わせてきた。それすら恐ろしい。何か裏があるのではと勘ぐってしまう。さっきまで強気だった百合愛もおれの袖をつまんで怯えていた。

「変なもの見せてごめんね。上がって上がって。大丈夫だから」

おれたちの警戒心を感じ取ったのか、アリスは安心させるような優しい声で話しかけてきた。怖くても今更逃げるわけにもいかない。おれが先頭に立って百合愛と玲音を導こう。食われるようなことがあったら守ってやる。

ぼっちは狼の血を引いた種族だから強いぞ。

真直な長身で美女、そしてノーブラ頭を出す。

恍惚な姿で迎え、そしてヒンズは彫を上で
その瞬間、おれは強烈な光の前で蒸発した。
――本当の美を前にすると人はどうなるか。
死ぬんだよ。全感情がね。（日本・十代男性ぼっち）
女神が本当にいるとすればきっと眼前の女性のことだろう。
アリスの母親は目がくらんで頭痛を覚えるほどに美しかった。アリスと同じ黒い長髪で大きな目が宝石のように光を放っていた。はっきりとした目鼻立ち、控えめでありながらも上品な口元、座っていてもわかるスタイルの良さ、そしてその圧倒的な美貌が生み出した絶対不可侵の存在感――。
二十代前半、いや、十代でも納得する。それとも年を取らない魔女なのか。
おれはアリスの母親が放つ美人オーラによって抜け殻になった。

第49話　誰かを守るということ、愛するということ。

「あなた。紅茶運んで」

「お、おれ？」

「えぇ、やって」

「……おう」

アリスの母親がキッチンで全員分の紅茶をいれていた。これくらいの距離なら見間違えないが遠くから見たらアリスと判別がつかないだろう。黙っているアリスがあんな感じだ。

しをニィーニンたあんな感じた

おぼんに紅茶を乗せ、アリスの父親はおぼつかない足取りでソファに座るおれたちの元まで運んでくれた。普段はやらないのだろう。テーブルに置き終わると息を吐いて肩を上下させた。

「ありがとうございます」

お礼を言い、紅茶を啜る。ほのかな甘みと茶の風味が鼻に通った。あまり紅茶は飲まないがとても美味しかった。

おれと腰から腿までぴったりつけてソファに座る左隣の百合愛は、背筋を伸ばしてお行儀良く紅茶を味わっていた。それはそれはお上品な姿で、厳しく教育を受けた貴族のお嬢様みたいだった。ちょっとツンとした表情がまた気取っているようでお嬢様っぽさを助長させている。

右隣に座る玲音はおれと同じように普通に啜っていた。作法があるのかもしれないが、少なくともおれと玲音は知らない。なのでズズッと二人して

一般庶民らしく味わった。

「休日にも関わらずありがとう。あ、それとさっきはすまなかった……驚かせてしまって」

向かい側のソファに腰を下ろした父親は手を合わせてヘラヘラ笑った。なるほど、アリスの陽気な性格は父親譲りだったわけか。母親だけを継いでいたら相当クールで無口になりそうだな。

と、思いきや母親は意外と喋る性格だった。

「あなたの悪いところよ。誰彼構わずあんなボケ毎回かましてたらいつか通報されちゃうわ」

「なかなか癖がなおらないんだよな。ついボケてしまう」

「まぁそういうところも含めてあなたが好きなんですけども」

「やめろやめろ娘たちの前で！」

突然夫婦で惚気だした。おれの頭の中でクエスチョンマークたちが大行列を作る。

「パパもママもやめて！　友だちの前だよ!?　睦紀くんにお礼が言いたかったんでしょ!?」

「まぁまぁ落ち着け、アリス。そういう怒ったところは母さんに似てるよな」

「もうやだ……恥ずかしい……」

母親を間に挟んで座るアリスは呆れて足を組んだ。面白いことに母親も足を組んでいた。二人とも右足を上にして。

奇妙な家族劇に対し、百合愛はおすまし顔で傍観していた。今にも「ふーん、で？」とぶっちゃけそうで怖かった。玲音は紅茶のカップを持ってじっとしている。クラシックでも脳内で流しているのだろう。

「式島睦紀くん。娘の件についてはとても感謝しているよ。昔から娘は巻き

込まれやすかったんだが、この歳になってからな……きみたちも何となくわかるだろう？」

父親がおれの目を見て言った。

「わかります。アリスさんは人気者ですからね。嫉妬されていたようです。色々な面から」

「そうか。親として介入しようと思ったんだが、やはり子どもの世界は難しい。かえって逆効果になるときもある。だからきみが――睦紀くんがしてくれたことは本当に感謝している」

「そんな大袈裟な……いいんですよ」

「しかしなぜ、自分を犠牲にしてまでアリスを守ってくれたんだ？」

その答えは単純明快だ。

まずアリスの泣く姿に耐えられなかった。無関係だったらあの日階段で泣く神下アリスに声をかけなかっただろう。だが関わってしまった無見でき

く椅子フューンに声をかけなかったネコ。なんて関わってしまったら無礼できない。

次に百合愛の友人だから。ご主人様のご学友は助けなければならない。でないと百合愛が悲しんでしまう。

そして最後に、これが正しいと思った。自分の中にある道徳心が身体を動かしたのだ。その過程で自己価値は優先されなかった。むしろ排除することによっておれは自由に動けた。

その説明をしようとしたら、アリスの母親が先に口を開いた。

「やめときなさい。アリスたちは繊細な年頃なのよ」

「ん？　それはわかってるが……」

「本当にいくつになってもあなたは鈍感ね。あなただって彼と同じことをしてくれたじゃない。自分を犠牲にしてわたしを助けてくれた。どれだけ青くてもどれだけ温かくても冷たい曇り空だったあの世界から連れ出してくれた

のはあなただったでしょ？　そんなあなたは、当時わたしのことをどう思ってた？」

言わんとしていることに気付くと父親は苦笑して自分のこめかみを小突いた。

おれも気付いた。ついでに百合愛も気付いた。ぶんっと首を横に回しておれを睨み付ける。それだけでなく死角を利用して尻の肉をつねってきた。

「もちろん、好きだった」

「そういうこと。ちなみにわたしの方がもっと大好きだったから」

「も～!!　はい終わり終わり！　この話やめっ！」

アリスが耐えきれなくなって両親の間に入った。よし、よくやった。この話は誰も救われない話だ。特におれが救われない。

自然の摂理がそうさせるのか、はたまた似た者同士だからか。

おれたちは自動的に女子陣と男子陣にわかれていた。女子三人と美人妻はリビングでお喋りやカードゲーム、そして男子陣のおれとアリスパパは寝室だった。

「睦紀くん、これ」

「ありがとうございます」

アリスパパからリンゴジュースの入ったコップを手渡される。彼も同じものを手にしていた。

大きなダブルベッドの端に二人で腰を下ろした。ふと思う。あ、あの美女と彼が夜な夜なここで……？　あの美女に本能的な欲求があるとは到底……。

おれは自己嫌悪に苛まれる前にジュースを喉に流し込んだ。煩悩ごと胃

袋にぶち込んで溶かしてしまおう、
「見ての通り、うちでは一番権力が無くてね。妻、アリス、そしてしがない夫の順番だ。尻に敷かれるってのはこのことだ」
「大変そうですね。でも、ちょっとわかる気がします」
「もしかしてあのツインテールの子かい？」
「まさにそうです。ドギツく扱われてますよ」
アリスパパは含み笑いをし、懐かしむように上を見上げた。
「好きな人のことをいじめたくなるってやつさ。可愛いじゃないか」
「違いますよ。百合愛の場合は支配欲です。あいつはかなり寂しがり屋で一人になりたくないだけなんです。誰でもいいんですよ。きっと都合の良い人間って思ってますね」
「はは、本当に似ているな。都合の良い、ね。昔よく言われた」
そう言って彼は最近習慣になっているらしい、司妻尻舌のせいで毎

その厄介な支配欲に最近管理されていることを知らない　同様に生活のせいで毎日一緒だから毎日顔を見合わせ、毎日言葉を交え、毎日彼女に触れられる。常に彼女の監視の目があり、あれこれおれに指示して反抗すると機嫌を損ねる。

もしかしておれは自覚していないだけで立派な奴隷になっているのでは？

何らかのご奉仕を強制されてその度に記憶を消去されていたり？

ファンタジー的だがありえる話だ。最近彼女の匂いが良すぎてラリってしまいそうになる。永遠に嗅いでいたいと思ってしまうくらい良い匂いなのだ。絶対にヤバい薬を隠している。

「そうか……ツンデレツインテール。いいね」

「ツンだけですけどね」

「じゃあこれからさ。ツンデレはいきなりデレないからね。ツンツンしてるうちにデレるんだ。睦紀くんから仕掛けてもいいんだ。そうすればデレも早まる

よ」

「おれは……別に好きじゃないです」

「ふふ。今はそれでいい。いつか大事なことに気付く。そしたら好きになることを恥じなくなるさ」

　これが恋バナか。修学旅行で女子たちはこれをよくするらしい。もしかしてリビングではそんな話が展開されているのだろうか。おれには何時間もできそうにない。心の秘密を打ち明けるなんて人前で全裸になるようなもんだろ。つい数週間前に裸になって気持ちよくなったが、あれはノーカウントで。

　アリスパパは改まった態度で声のトーンを真面目に戻した。

「何回目か忘れてしまったが、本当にありがとう。娘にまた何かあったら手を差し伸べてやってほしい」

「もちろんですよ」

差し出された手を掴む。男の握手だった。

年齢は二倍以上あるがきっと男の本質は変わらないのだろう。いくつになってもだ。おれのじいさんだって性懲りもなく女の尻を追いかけ、百合愛をエロい目で見ている。死してなおエロを求め続ける変態だ。

少なくとも百合愛、玲音、アリスは力の及ぶ限り協力的になるつもりだ。世界は救えないが、身近な人なら救える。プロのぼっちでもそれくらいはできる。

「娘さんの名前の由来を訊いてもいいですか。カタカナなので気になっていまして」

「夫婦の名前から取ったんだ。妻のアリナ、夫の彗。合わせてアリスだ」

「良い名付け方ですね。自分たちの子どもって感じで素敵です」

「ハ　ビ　ネ　ス　ホ　テ　ル　ア　リ　ス」

第50話　ぼっちの信条と生き方

「おはよう」

洗面所でばったり会った百合愛に朝の挨拶をすると、彼女はタオルを顔半分に当てたまま固まった。

「な、なによ急に」

「どうした」

「あんたから挨拶するなんて珍しいじゃない。それも、ちょっと爽やかな感じで……」

「そうだったか？」

心境の変化があった。

アリスの父と話して以来、百合愛や他人との関わり方を考えるようになった。無論、ぼっち活動を中止するつもりはない。具体的にどういった変化かというと、こういった挨拶のような最低限のコミュニケーションだ。

今までおれがしてきたぼっち活動は徹底的なコミュニケーションの排除である。そうすると究極の自由を手に入れることができるのだが、周知の通り容易いことではない。究極の自由というものは、究極の孤独を手に入れることと同義なのだ。そして孤独は人を苦悩させる。故にぼっち活動は寂しさとの戦いだ。

「にぃに！　百合愛おねーちゃん！　おぱよー！」

人は生まれながらにして孤独という概念から切り離せないようにできている。誰もが母から生まれ、泣きじゃくる我を誰かが受け止める。そう、生

まれながらにして人間は一人じゃない。他者の完全排除と概念からの消去が無理だからこそぼっちは辛いのだ。

だから落としどころを模索することにした。

自由が失われず、孤独を感じない丁度良いラインだ。その素晴らしいバランスを発見できれば世界一の幸せ者になれるとおれは思った。

「おはよっ！　沙月ちゃん！」

「げんきいっぱいだぁ！　いいことあったのー？」

「そうよ。とっても良いことが朝からあったの」

その試みとして、おれは人が最低限心得ておくべき「挨拶」を積極的に取り入れることにした。あまり自分からはしてこなかったコミュニケーションだ。

「ふぇ～。そーだ、百合愛おねーちゃんとにぃにってケッコンしたの？」

「ちっ違うの！　わたしがその……お泊まりさせもらってるだけで、ただのお友だちの関係だからね!?」

「沙月。おれがこのツインテールと結婚するわけないだろ？　するのは沙月とだけだ」

「そのとぉーりー！」

沙月は元気いっぱいに駆けだして洗面所から出て行った。何だか気持ちの良い朝だった。挨拶一つ自分からしただけで気持ちがこれだけ変わるのか。

百合愛はちらちらとおれの顔色を窺い、同様に洗面所を後にした。結婚の話で動揺しているようだった。幼稚園児に揺さぶられてるぞ、ツインテール。

そんなツインテールは慌ててすぐ戻ってきた。

「バカ睦紀!!」

「バカ睦紀!!」

「ん？」

「……おはよ！」

「あぁ、おはよう」

再びぴゅんとツインテールを宙に巻いて飛んでいった。

朝から可愛らしい笑みを残して。

秋のイベントと言えば文化祭だ。

文化祭とは文字通り文化的な祭り。そして祭りとは大勢で催すものである。つまり、ぼっちにとって辛い行事だ。

「睦紀くん」

クラスで何を出店するかを取り決める話し合いの時間に、玲音がぽつりとおれの名を呼んだ。教室内は自由に歩いていい状態だったので、おれと百合愛と命音は三人集まって話していた。

合愛と玲音は三人集まって話していた
「睦紀くんはどういうお店がいい？」
「そうだなぁ……」
正直どれがいいとかはなかった。
中学時代の文化祭も深く関わらず、重役にならないようううまく立ち回ってきた。そうすると文化祭当日は非常に質の良い自由を手に入れられる。
食べ物はあり、暇を潰せる劇があり、さらに行動は制限されていない。最高だ。
「喫茶店とか？」
「被りそうだけれどいいな」
確かに喫茶店は必ずある。やるならば個性を出すためにプラスアルファ付け足さなければならない。

「百合愛は何か案ある？」
　自分のツインテールを指でいじくっていた百合愛は、話を振られると退屈そうにため息をついた。
「何も」
「文化祭期待してなさそうだな」
「あんまり良い思い出ないし。というか祭り全般」
「なるほどな。ま、おれも同じようなもんだ」
　しかし過去は過去だ。せっかく過去を克服しようと百合愛はここまで頑張ってきたのだから文化祭もその意気でいくべきである。
「これを機に、積極的に参加したらどうだ。友だちができるかもしれないぞ」
「そんな簡単にできないわ」
「おいおい、いつから友だち作りに興味を失ったんだ。これじゃおれのぼっちス

キルも練度も平行線だ」

「ふ、ふんっ。わかったわよ。あんたのためにも友だち作ってみる」

ちょっとだけやる気をだしてくれたようだ。だがその後話し合っても良い案はでなかった。おれたち三人は文化祭に興味がないぼっち三人衆だ。捻りある案なんて思いつかない。

話し合いが終わり、生徒たちが手を上げて案を述べる。それをクラス委員長が黒板に書いていった。それから最後に多数決を取った。

その結果……

「お化け屋敷に決定しました」

沙月が喜びそうな出し物に決まった。シンプルでいいと思う。接客も避けられそうである程度ぼっちを貫けそうだ。仕事もシンプルだ。適当に暴れてみんなを怖がらせればよいだけ。実に楽勝だ。

[illegible]

それから文化祭の準備期間に入るまで平穏な日々が続いた。

百合愛と一緒に登校し、玲音とお昼を過ごし、たまにアリスと冗談を言い合った。下校すれば、おてんばな沙月の遊び相手をし、百合愛とテーマのない無秩序なお喋りを二人でする。場所は自室やリビングなど様々だ。

――おれは、楽しんでいるのだろうか。

シャンプーを洗い流しながら思う。

時々考えるのだ。今までのぼっち生活は間違っていたのか、と。一匹狼がずっと正しいと思い込んでいて、それが正しい幸せなんだと結論づけていた。

しかしどうだ。

百合愛と出会い、玲音やアリスとも出会ってからおれは群れを成す犬になった。毎日がひとりじゃなくなったことによって、うっとうしく感じることも増えた反面、気分の高ぶりも多くなった。それが正しいことなのか、楽しく感じているのか、今でも上手くつかめていない。

く感じれているのだ。そしても、なくれなっていない
シャワーを止め、泡が渦巻く排水溝をぼんやりと眺めた。
「いや、楽しいんだよな……」
ぼっちスキルなんてどうでもいいのかもしれない。
おれが完全にぼっちになれないことに悩んでいた問題は、人と交流することで解決できる。自由は失われるが悩みは消える。だったら、もうぼっちでい続けるのをやめるべきなのだろうか。
「バカ睦紀」
浴室ドアを挟んで百合愛の声がした。
「入ってるぞ」
「廊下にパンツ落ちてたわよ。届けてやったんだから感謝しなさい」
「お、そりゃ申し訳ない。助かる」
「こんなことご主人様にやらせるなんて懲役百年だからねー

「牢獄で暮らしてた方が安全かもな。どっかのツインテールから攻撃されないし」

湯船に浸かる。何やら話したがっているようなので、百合愛の挑発に乗ってやることにした。

「ふん。あんたホントバカよね。こんなに可愛いお嬢様と一緒に暮らしているのに、それに感謝もしないし嬉しがることもしない。普通の男の子だったら羨ましいシチュエーションなのよ？」

「それは朝烏百合愛がどんな生き物かを知らないからだ」

「知ったらもっと羨ましがるわ。普通の男の子はそうなの。あんたは異常よ！　普通だったらとっくにわたしのこと――」

ぼんやりと曇りドアに彼女の背中と後頭部が浮き上がる。

「百合愛のことを……何だ？」

「とっくにわたしのこと襲ってるもん……」

「ハァ!?　バカはお前だ！」

「わたしバカじゃないもん！　バカ睦紀の方がバカだし間抜けだし根性無しだし！　本当に男なの!?　普通だったらわたしのこと口説いて、頑張って自分のことアピールして、真夜中に寝てるところを襲ってくるもんでしょ!?」

またぶち切れ始めた。そういうところだぞ、百合愛。自覚があるかわからんが、そういう面倒なところを男は嫌う。良い例が長電話だ。しつこく行動を制限される行為は致命的にイヤがられる。

彼女は立って何かドタドタと動き始めた。おさまると勢いよくドアが開かれた。

現れたのは下着姿の百合愛。

「……わたし、魅力ない？」

泣きそうな目で訴える。

魅力がないはずがない。彼女のスタイルには惚れ惚れする。意識をしっかり保たねばその大きな胸に顔を埋めてしまいそうになる。脇から始まり腰で終わる曲線は魅力的なカーブを描き、足は無駄な脂肪がいっさい無く、長くてモデルみたいだ。悪いところなんてどこにもないし、褒め出したらキリがない。

「魅力的だ。かなり」

「じゃあ夜……わたしの部屋に来て」

「相談事か？」

「少しでもわたしが好きなら、わたしの身体に教えて」

「おまえっなに言って――」

「そしたらわたしもっ、バカ睦紀のことといっぱい好きになるからっ！」

耳を塞ぎ背を向けると、逃げるように出て行った。

百合愛に尻の肌を当てると逆にそこは生で行った
彼女の綺麗な背中が目に焼き付く。言葉や声も海馬に焼き付き、何度も脳内でリピートされた。洗濯機の上にはおれの下着が丁寧に畳まれた状態で置かれていた。
今夜、はやめの卒業式が行われるかもしれない。
だがこうも思った。
おれは、短絡的に生きるつもりはない。
怒りがこみ上げた。

第51話　上を向いて歩こう。

「なんで……来てくれなかったの？」

朝、目が覚めると百合愛がベッド前の前で立っていた。昨日最後に見た下着姿のままだ。その姿を見ても日頃より興奮しなかった。彼女に対して初めて抱いた、明確な怒りによるものだった。

「百合愛、服着ろ」

「答えて。どうしてわたしの部屋に来てくれなかったの」

おれは答えずベッドから立ち、彼女の横を通り過ぎた。だが彼女は手を掴んでおれを部屋に留まらせる。おれはドアノブを捻ったまま止まり、答えを

求め続ける彼女に一言述べた。
「おれは、百合愛が思っている以上に適当に生きていない」
「どういうこと？」
「……だから、中途半端な気持ちで襲うような人間じゃないってことだ！」
手を払う。自分がコケにされているようで腹立たしかった。
だがその行為が間違いだったことにはすぐ気付いた。百合愛は悲愴に満ちた表情でおれを見つめていた。胸が苦しくなる。百合愛や玲音やアリスの悲しい顔を見たくないからこれまで色々とやってきたのに、これじゃあパーだ。
「百合愛……」
「もういいっ！　わかってたもん！　バカ睦紀はアリスとか玲音の方が好みなんでしょ!!」

「ちっ、違ぇよ！　そんな話じゃねぇ!!」
「きらいきらいきらい!!　きらいっ！」
「……おれもお前なんかきらいだ」
百合愛はドアを荒々しく開き、自分の部屋へと戻っていった。
それをきっかけに、おれたちは一緒に登下校するのをやめた。

文化祭の準備期間に突入し、ちょくちょく作業が入り始めた。
まる一つ授業時間を使い、教室で衣装や道具をみんなで工夫しながら作る。おれも簡単な作業くらいはやっていた。布をボロボロにして黒く塗るお仕事だ。これを飾って恐怖を演出するのだ。
「睦紀くん、隣いい？」
ダンボールを敷いて座っていたおれの元に玲音が近づいてきた。

「あぁ。玲音も布きれをワカメにする作業か」
「そう。簡単」
玲音も床にダンボールを敷いて女の子座りをした。毎度思うのだがその座り方はどうやってやるのだろう。やってみようとすると身体が悲鳴を上げる。やはり女の子とは骨格的な違いがあるのだな。
「玲音はお化け役やるのか？」
「うん。着物着る」
玲音の着物姿は想像しやすい。旅館に泊まったときだって玲音の浴衣姿は見事なものだった。
彼女は髪を耳にかけ、下を向くとおれの顔を覗き込んだ。
「……ケンカしてるの？」
その言葉に一瞬手の動きが止まる。だが動揺を悟られまいとおれは作業

をすぐに再開した。

「ここ最近、ずっと百合愛と話してるところ見てないから……」

「そういうゲームをしてるんだ」

「どんな？」

「あ、あれだ、あの……透明人間ゲームだ。お互いをいないものとして日常を過ごし、いるものとしてリアクションをしたら負けっていう……」

「そう……」

バレバレの嘘だった。そんなゲームはもちろんやってない。彼女には嘘も百合愛との状況も筒抜けのようだった。

しかし玲音はそれ以上訊いてこなかった。てっきり問い詰められるのかと思っていた。その理由は一度顔を上げたときに気付いた。離れた場所に座っていた百合愛がこちらを凝視していたのだ。

「命旨。目炎　ンこらいいか」

「玲音、本読んでもいい？」
「うん、いいよ」

昼休み。

正直この時間が一番息苦しい。授業中は黒板に集中していればいいが、休み時間はやることがなく席でぼーっとしているだけなので、同じく席を立たない左隣の百合愛と気まずくなる。

彼女は気まずく思っていないかもしれない。

だがおれは気まずい。学校でも家でも口クに話していないせいか、なぜか「何か話さないと」と義務感に駆られる。そうして意固地な面の自分が唇をしっかりと縫い付ける。どうしようもなくおれは頑固者だった。

校舎の中庭のベンチに玲音はいた。

――ハレルヤ、ハレルヤ。

彼女は天上を見上げて鼻歌を奏でていた。まるで天使を呼んでいるようだった。彼女がどれだけ音楽を愛しているのかがわかる。音楽を奏でているときの彼女はとても安らかな表情で気持ちよさそうなのだ。

「玲音」

「あ、どうぞ」

彼女は少し移動してスペースを作ってくれた。ありがたく腰を下ろす。

人に相談事などしないため多少緊張があった。人間関係の悩みというセンシティブな内容だ。ぼっちとしてあるまじき悩みである。さらに悩みを打ち明けるという行為は自分の弱みを見せるということ。ぼっちとして、一匹狼として強くあろうとしているおれにとって敵に弱点を見せるようなことだ。

それでも、曝け出さないとダメな気がした。

「百合愛と……口喧嘩したんだ」

声をなんとか絞り出す。自分の罪を自供するかのようだった。喉が渇き、奥で張り付いて痛みが走った。けれど唾液は一向に出る気配がなく、かわりに肌から汗が滲み出る。枯渇感と息苦しさで吐きそうだ。

今すぐこの場から逃げ出したくなった。けれどこの場から逃げ出したら百合愛とも向き合わず、誠実な心で接してくれた玲音に泥を塗ることにもなる。だから浮きそうになる足を必死で地面に押しつけた。

「そっか……」

玲音は背を持たれ、さきほどのように天上を見上げた。

「じゃあ、いいのかな」

何のことかわからず横顔を見ていると、彼女は急に指二本をおれの二の腕に突き立てた。驚きつつ身を少し引くと玲音はくすっと笑い、指を動かした。人が歩むように人差し指と中指を交互に動かす。ゆっくりと、一歩一歩

腕や肩の肉の感触を確かめるように。

そして首元に到達した途端、彼女は顔を近づけ耳元で囁いた。

「わたしと付き合ってください」

告白。

あなたが好きだという内容。あなたと結ばれたいという願望。

おれは、雀玲音と付き合い始めた。

第52話　玲音の嘘と他人のために生き続けること。

玲音の想いを拒否する理由など微塵もない。

以前から感じていたのだが、玲音はおれとの共通点が多い。

二人とも平穏を好み、クラシック音楽を愛し、一定の距離感を保つことに重きを置いている。だから玲音といるときは式島睦紀らしい姿でいられた。

さらに付け加えると、玲音は近寄りがたい雰囲気を放ってはいるものの、とても愛嬌のある顔をしている。黙っていると何を考えているかわからない無表情なのだが、いざ口を開くと毒舌をまうっすら微笑む。ゆっくりと目蓋

無表情なのだが、いつまでも眺めていると思わず微笑まずにはいられない顔を動かし、きゅっとつぐんでいた口元を緩ませる。その微妙な変化が、とても胸を温かくさせるのだ。

「わたし、誰かと付き合ったことないからつまらないかも……」

中庭のベンチに二人でまだ座っていた。昼休みの時間はあと少し残っている。

突然告白された衝撃がずっと心の中で波打っていて、彼女への返事に戸惑っていた。おれだって人と付き合うのは初めてのことだ。

「お、おれも彼女いない歴イコール年齢の人間だから……」

口を開けば自分を卑下する言葉しかでてこない。

彼女は真剣な眼差しでおれの瞳の奥を覗いていた。ピアノを弾くときのように真摯に。虚ろな目で黒板を眺める無機質な雀玲音ではなく、真っ赤

で熱い血が流れる雀玲音だった。

そんな彼女を見ていたら、自然と口が開かれた。

「おれでいいなら……付き合ってみる、か」

うわ、何か違う。気持ち悪い。自分がキモすぎて吐き気がこみ上げた。

おれはすぐに訂正した。

「違う。つ、付き合おう！」

引きつった歪みある笑みで彼女に答えた。好き嫌いの感情を正面から伝えるなんて長いことやってこなかったから喉が震えた。顔の細かな筋繊維が緊張しているのがわかる。

気味の悪いやつだと思われてもしょうがないのに、玲音は全てを許す聖母のように微笑んだ。

「これからは一緒」

玲音と付き合い始めたその日の夜、自室。

この事実を百合愛に報告すべきか、おれは迷っていた。未だ喧嘩中で私的な会話はおろか世間話でさえしていないバチバチな関係下だが、何となく報告の義務があるのではと思っていた。それは今まで彼女と続けてきた濃密な主従関係のせいだ。大小に関わらず人間関係の変化は常に彼女と共有してきたのだ。

「やっぱ言っておいた方が良さそうだよな……」

そろそろ仲直りすべきとも考えている。お互い意固地になりすぎた。ぼっちだから喧嘩自体ほとんどしたことがなかったので、ここまで長引いてしまったのだ。一人でいることに慣れているからこうなるんだ。

おれは思い立ってベッドから下りた。幸運にも百合愛はこのドアと廊下を

挟んだ先にいる、こんなにも近かったのに喋らなかったなんて、何だか馬鹿馬鹿しく思えてきた。

ドアを開けると目の前に百合愛が立っていた。

ずっと廊下に立っていたのか、それともたまたま百合愛もおれに用が合ったのかはわからない。どちらにせよ、おれと同じく伝えたいことがあったに違いない。

二人とも一歩後ずさった。何かを言いたそうに彼女は口をわずかに開けた。胸に手を当て、勇気を出そうとしていた。

そんな彼女を差し置き、おれから告げた。

「百合愛。実は今日、玲音と付き合い始めたんだ」

「えっ……」

彼女は理解不能といった感じに眉をひそめた。

「命与かうらヨさこれこ。そこで　　うてはうく　こ

「玲音なら告白されたんだ　それで……おれはOKした」
「そう……」
「そっちは何か、おれに用があったか？」
「ううん。ない」
そう言うと彼女は自分の部屋に戻った。
仲直りはできなかったが一応伝えることができた。隠していたら後々「どうして隠していたのか」と余計な軋轢を生むだろうからこれでよかったんだと自分を納得させた。
しかし同時におれはこうも思った。
式島睦紀はクズに成り下がった。
人は付き合うと何をするのだろう。
おれには皆目見当がつかなかったため恋人同士ですることをネットで調べ

た。色々と出てきたがやはりデートに関することが非常に多かった。というかデートがメインだ。いや、もう自分が何を言ってるのかわかっていない。とにかく二人で一緒に何かをすればいいんだ。

「睦紀くん。今度の土日、遊びに行かない？」

学校の中庭のベンチで弁当を食べていたとき、玲音はそう提案してきた。おれたちはこの関係を大っぴらにしない方向に決めたため、昼は教室ではなく外で二人になった。

「そうだな。でも今週の土曜日はもう文化祭だから、来週とかか」

「うん。睦紀くん、文化祭当日はどう過ごすの？」

「適当にぶらぶらするつもりだった」

「じゃあ……一緒に回らない？　お化け屋敷のシフト、確か同じだったよね」

「もちろん。回ろう」

誰かと回る文化祭は初めてだ。しかも女の子。親に見られたらと思うとヒヤヒヤする。

教室で玲音と二人きりになることはほぼない。

彼女が率先しておれの元にやってきて他愛ない会話をするくらいだ。もっとイチャつくかと覚悟していたのだが、実際、付き合っていると噂されている教室内のカップルもそんな感じだった。おれはとんでもなく恋愛初心者だった。

しかし放課後が来たら別だ。

「玲音、帰るか」

帰宅準備中の玲音にそう声をかけた。今度はおれから誘ってみた。

「うん。途中まで」

彼女は嬉しそうに笑みを浮かべ承諾した。そのささやかさが玲音らしく

て、自然と二守ってあげたい」という気持ちが湧き起こった。そう、以前から玲音に対してはそういう思いがあったのだ。保護欲というやつだろう。きっと沙月のように小柄で、消えてしまいそうなくらい雰囲気が薄いからだ。

二人で学校から出ると肩を並べて街を歩いた。腕が触れそうで触れない絶妙な距離を維持しながら黙々と歩く。あまり言葉数は多くなかった。ただ隣にいるだけでおれたちはよかった。

飲食店が増えてきたところでふと思いついたことを訊いてみた。

「玲音、今日バイトは？」

「ない」

「そういやどうして玲音はバイトしようと思ったんだ？　確か、まだ訊いたことなかったよな」

「大学ではひとり暮らしが、こちらに今から通うと金銭的にも負担になる。旨

二人並んではにかむ、幸せそうなカップルたち。その為には今だけは全員敵でも、音大遠いの」

な、なんて偉い子なんだ……。

しかし玲音はすぐ言い直した。

「嘘。本当は親から逃げるため。あんまり仲良くないから」

玲音のコンクールを見に行った際にそのようなことを言っていた。ずっと母のためにピアノを弾いていた、母の指導に耐えてきた、と。

「偉いなぁ……おれなんて夢すらないから玲音が羨ましい」

「まだまだ時間があるから焦ることないよ」

すると玲音は手を絡めてきた。小さな手でしっかり指の一本一本を交差し、散々街中で見てきたカップルたちのように恋人繋ぎをした。

「睦紀くんがよかったら……一緒に住んでもいいよ？」

「だ、大学が近かったらな」

「嘘嘘、冗談。ごめん、わたし嘘ばっかなんだ。できたらいいなって、思っただけ」

焦ったおれを見て玲音はクスクス笑った。そんな姿はやっぱり可愛くて守ってあげたくなった。

しかし自己嫌悪が強烈に襲ってきた。今日一日玲音と過ごしてきて、自己嫌悪が到来しなかったときはなかった。なぜかはわかっている。

おれは、いつも百合愛のことを考えていた。

教室から中庭に行く際も百合愛の目を気にした。

文化祭の準備をしている時も百合愛がぼっちだったことに心を痛めた。

放課後玲音を待っているときも百合愛がそそくさと教室を後にする背中を目で追った。

そして今も百合愛のことを考えていた。

玲音と大学で一緒に住んだら、百合愛との関係はどうなってしまうのだろうと。

だからおれはクズなんだ。

何もかも受け身で、反射的に生きている。だから玲音の気持ちにも応えたし、百合愛の命令にも大抵素直に従ってきた。

一見良いように見えるが間違っている。

流され続けた先に待っているのは、身の破滅だ。おれの身だけじゃない。きっとこのままじゃ玲音も百合愛も不幸にさせることになる。

第53話　アリスの母性と繋がるということ。

文化祭の前日、金曜日。

午後はめいいっぱい文化祭準備に使われ、校舎内も外側も時間の経過とともに彩られていった。生徒らが働き蟻のように廊下や階段や各教室を歩き回り、心なしか空気の通りが良くなっているように感じる。

おれもそんな蟻たちに倣って働いていた。

「えぇっ!?　玲音と付き合ったぁ!?」

アリスが廊下でドデカい声を上げた。おれは「アーアー!!」と喚いて声を打ち消そうとしたが女優の通った声には敵わず、忙しく動き回る蟻たちが

目を覚ましたようにこちらを見た。いや、アリスじゃなくて謎の露出魔ぼっち・式島睦紀に注目してるのかもしれない。最近その異名を耳にするのだ。

「ごっ、ごめんつい……なるほど、そういうことね。この頃百合愛とじゃなくて玲音と一緒にいることが多かったのはそんな事情が……」

アリスは驚いて落としたゴミ袋を拾った。まさにこの両手を塞ぐゴミ袋を運ぶのが現在の仕事だ。正確にはおれの仕事ではない。廊下をぶらついていたらアリスに捕まってパンパンのゴミ袋を押しつけられた。

そしてアリスとともにゴミ捨て場へと向かい、その最中、彼女から身の回りのことを問われたのだ。

「このゴミ、まだ教室にあるのか」

「まぁーあるけど、睦紀くんはこれだけでいいよ。うちのクラスの仕事だしね。それよりも。いつから付き合ってたの？」

「一週間前だ」
「なんだ、できたてホヤホヤじゃん」
「まぁな」
正直まだ付き合っている実感は無かった。友だちという感覚は何となくある。だが恋人という感覚がよくわからないでいる。これがぼっちを極め続けた人間の末路なのだろうか。
外のゴミ捨て場に到着し、耳をつんざくような音を出しながら鉄のドアを開ける。自分の持っていたゴミ袋をぶん投げ、次はアリスから受け取って再び投げた。
「前から玲音のこと好きだったの？」
「い、いきなりまたその話か……」
「だって睦紀くんは百合愛と付き合ってると思ってたんだもん。付き合ってい

なかったにしろ、百合愛のことが好きだと思ってた」

「なわけ――」

否定しようとした瞬間、アリスはおれに体当たりした。バランスを崩したおれはよろけてゴミステーションの中に入った。人が三人くらい入れる広さと高さがあるため、ちょっとした牢屋である。たった今囚人も追加されたしな。

事態を把握する前にアリスは外から鍵を閉めた。

「おい、どういうことだ」

「わたし、誰の味方でも誰の敵でもないつもりだけど、やっぱり友だちが苦しんでいる姿を見るとね。だから睦紀くんに色々と訊きたいなって思って閉じ込めちゃった」

「……百合愛と計画してたのか？」

「……」

ーううん、たまたま思いついた」
「臭いから出たい。切実に」
彼女はおれの懇願を無視して腕を組んだ。それは尋問の始まりだった。
「さっきの質問。玲音のこと好きなの？」
「訊いてどうするんだよ」
「何で答えてくれないの？　別に答えても変わらないじゃん」
「……好きじゃなかったら付き合ってないだろ」
「引っかかるなぁ。素直に好きだからって言えばいいのに」
「素直じゃない性格してるからな」
「そ。じゃあ玲音に好きだよって一度でも伝えたことは？　一週間も経ったんだから直接じゃなくても言ったでしょ？」
過去を振り返る。だが該当する光景は浮かばなかった。
「　ー

「……」

「あのねぇ……睦紀くん。人の行動を無理矢理ただそうとするつもりはないけど、アドバイスくらいはさせてもらうよ。もっと自分のために動いたら？」

「してるさ。おれを誰だと思ってる。ぼっちだぞ。おれはおれのためだけに動いている」

「かつては、ね。こうして話してるきみはそれでもぼっち？」

「……ぼっちだ」

「わたしのために身体張ってくれたのは？」

「脱ぎたい気分だったんだ」

「百合愛と片時も離れなかったのは？」

「命令されたからだ」

「じゃあ……玲音と付き合ったのは？」

「そ、それは――」

言えなかった。言っちゃダメだと思った。

おれは金網を掴んだまま下を向いて歯を食いしばった。もやもやとしたはっきりとしない悔いで心臓がきゅっと縮こまる。それと罪の意識も。

鍵が開けられた。アリスは呆れた様子で肩を落とし、出てよいと顎で示した。

「勘違いしてると思うけど、百合愛のために責めてるんじゃないから」

「……え？」

「玲音のためでもない。もちろんわたしのためでもない。睦紀くんのために言ってるの。もっと自分のこと大事にして。昔の自分を見ているようで不安」

おれはおそるおそるゴミステーションから出た。次はどんな尋問をされるのかと恐怖に怯えながらアリスの顔色を窺う。だが彼女はおれの肩を掴み、戒めるように強く力を込めた

「睦紀くんはわたしの友だちだよ。普段からよくわかんない顔してる友だちが明らかに苦しそうにしてたから心配してあげたの。百合愛のために言ってると思ってた？」

「ま、まぁな……」

「やっぱり」

「参考にさせてもらいます。ありがとな」

「本当にそう思ってる？　ま、わたしの恩返しはこうやって背中を叩くことしかできないから。お金の力を使ってプレゼントしてもイヤがりそうだし」

発言通りアリスはおれの背中を手のひらで何度も叩いた。

「そうだな。多分もらっても百合愛か沙月に横流しする。物欲があまりないんだ」

「そういうのマジで殺されるからやめときな」

[illegible]

おれはつくづく思った。

人間って超面倒な生き物だ。ちょっと関わっただけでこんなにも疲弊してしまう。おれよりもよっぽど広く繋がりを持っている周りの人たちはどうやって生きているのだろう。

しかし悪いことばかりじゃない。何かに属している、誰かと関わっているという意識が生む「安心感」は百合愛たちと出会う以前、中々味わえなかったことだ。それをアリスが今与えてくれている。

「おれもいつかアリスを友だちに認定しよう」

「懲りないねぇ。とりあえず睦紀くんが納得する形にしなよ」

アリスはそう忠告し、校舎へと戻っていった。

明日の文化祭は期待と不安が入り混じる、精神的に忙しいものになりそうだ。

第54話　睦紀の変化とひとりになるということ。

文化祭当日。

文化祭がぼっちにとって地獄であるということは言うまでもない。

この行事は人との繋がりが非常に重要で、繋がりのない孤島の住人のような――まさしくおれ――人間は強大な孤独感を味わうハメになるのである。

しかしながら孤独感に苦しむのは訓練を受けていない下級ぼっち。上級ぼっちこそこれは大してダメージを受けない。これを完全にノーダメージこ

ぼっち女子をおれはプロデュース、ぼっちを受け入れ、それを完全に、クソ、それすることができたらぼっちを真に極めたと言えるだろう。

「睦紀くん、どう？」

お化け屋敷と化した教室にて、着物姿の玲音が評価を求めてきた。仕掛けの調整を中止し、彼女に目を向ける。病的なほどに白い化粧をし、目からは血の涙が流れている。恨みを抱えたまま死んでいった江戸の少女、というストーリーを感じ取れる良い出来映えだった。

「怖いけど綺麗だ。なんか、人柱になって若くして死んだ過去を持ってそうだな」

「ありがとう。睦紀くんは裏方がんばってね。その後いっしょに回ろう」

「おう、頑張るぞ。どこ行くか決めてるのか？」

「ぐるぐる適当に回りながら遊ぼ」

おれと玲音は開始直後の時間帯を担当している。昼ちょっと前には解放

される予定だ。屋台にでも行って焼きそばでも買うのが良さそうだ。ちなみに文化祭のオープニングは既に終了している。

個人的な紛争が続く百合愛は現在この教室にはいない。彼女とはシフト時間が被らなかったのだ。ひとりぼっちで体育座りする彼女の姿が頭に浮かび、おれはふっと息を切って忘れようとした。ダメだ、今は。

「睦紀くん？」

玲音がおれを気遣う。おれは「いや、緊張してきたんだ」と誤魔化して仕掛けの調整に戻った。

今は目の前のことに集中しよう。おれは百合愛の親じゃないんだ。玲音といるときでさえも彼女のことを考えるなんて最低だ。

お化け屋敷の開店時間になるとエキストラたちはそれぞれ持ち場についた。

おれの仕事は生首を落下させる仕事だ。天上に吊した生首を客の目線の高さまで落として驚かせる。なのでタイミングが重要だ。遅すぎるとぶつかり、早すぎると驚きが半減する。

そんなわけでひたすら待機の時間が始まった。血糊で汚れたボロボロの障子の裏に隠れ、客が来たらタイミングを見計らう。じっとしていることが苦手な人にはキツいが、おれには適役であった。玲音のように客の目に触れて演技をしなくてはならない役はおれにはできない。

「ぴゃあ！」

何度も生首を落下させて客の反応を楽しんでいると、聞き覚えのある声がした。暗くてよく見えないがアリスだ。一般人もいるので大変苦労してい

ることだろう。サインや写真撮影をせがまれているかもしれない。
「アリス驚きすぎ。こんなの子供だましよ」
百合愛の声も聞こえた。どうやら二人で回っているようだ。少しほっとした。
障子の破れた隙間から二人の様子を覗いていると丸められた紙くずが飛んできた。この暗さでは視認できないのできっとおれがここにいることを知っていたのだろう。百合愛は的確におれの目に向け投げた。存在を知られてはいけない立場ということをわかっていながらこんなことをするなんて百合愛らしい意地悪だ。
「どうかした？」
「いいえ。虫が飛んでただけ」
何の意思表示かはわからないが久しぶりにおれへかけたちょっかいだった。
二人は通り過ぎ、その後可愛らアリスの驚いた声が響いた。吉澤アリスは

二人は通い慣れた道をその後何度も下ったが、結局下ったこういうのを純粋に楽しむタイプらしい。

おれは生首を落とし続けた。当初は退屈するかと思っていたが意外と面白い。人によってリアクションが異なり、大きな叫びであればあるほど達成感が違った。これで生活できるならばおれは喜んで定年を迎えるまで生首を落とし続けるだろう。こういうと昔の斬首処刑人みたいだ。

そして交代時間がやってきた。エキストラはメイクを落としに、裏方は次の人に現場を明け渡した。

廊下でしばらく待っていると玲音が小走りで戻ってきた。

「お待たせ。お腹空いちゃった」

「おれもだ。焼きそばでも食いに行くか」

「うん」

彼女は小さく笑みを作って頷いた。

色鮮やかな校内を二人で歩く。みな、一様に表情が豊かだった。気味が悪いくらい口角を上げ、せわしなく目玉をぐるぐる回している。普段は見慣れた制服の生徒ばかりなのに今は家族であろう大人たちもいる。陽気な音楽も流れて体育祭みたいだ。

わずらわしいと思わなかった。むしろ高揚していた。

玲音と一緒にいるからか。高校生になったからか。それとも人と関わるようになったからか。いや、その全てが原因かもしれない。

「睦紀くんといるとあったかくなる」

不意に玲音が呟いた。

「ん、ん？」

「氷の玲音だからね、わたし。人より色々と冷たいから、温かく感じやすい

の」

「あのコンクールの時にもそう言ってたな」

「どうして睦紀くんのこと好きになったと思う？」

「ま、まったくわからん！」

鼓動が変に跳ね上がった。こういったことにまだ慣れていないし、慣れそうにもない。人の目線や気持ちに敏感すぎるのかもしれない。

玲音は挙動不審状態のおれの袖をつまんで引き寄せた。

「優しいところ。ちゃんと話を聞いてくれるところ。冷淡そうに見えるけど思いやりがあるところ」

「おれっぽい要素ゼロだな」

「そんなことないよ。多分、睦紀くんはそう思いたくないだけ。だってぼっちっぽくないもんね」

[illegible]

「……そうかもな、そういや珍音ってよく喋るようになったな、最初は一言で終わってたのに」

「これも睦紀くんのおかげ。だって喋りたいこととか知りたいこと、いっぱいあるから」

なら、今後は彼女もひとりぼっちになることはないだろう。

ぼっちを抜け出すのは簡単だ。勇気を出して話しかければいい。お互いがどういう人間かわからないから口を閉ざして心も閉ざす。心を閉ざすと顔に出る。わたしは心を開いていません、という生気のない無表情だ。そんな顔を見て関わりたいとは思わない。

外の屋台で焼きそばを二人で買った。ベンチに座り、人の行き交う様子を二人で眺め、焼きそばを食べる。黙々と。一緒に時間を共有しているということを感じながら。

「うれは　きつこ間違っている」

「おれは……きっと間違っている」

玲音に自分の考えを問う。

おれの生き方は間違っているのだろうか。ずっとぼっちの高見を目指し、その先で待つ自由のために自らぼっちの道を突き進んできた。孤独で苦しむことはわかっていた。だがやはり人間関係によって悩むよりかは自由の幸せを――いや、違う、本当はそうは思っていない。

単に、おれは臆病なんだ。

「ずっとぼっちこそが至高だと言い続けてきた。けど、本当は嘘なんだ。強がってきただけなんだ。中学も小学も、一度始めたことをプライドが邪魔してやめられなかった。だから高校生になっても続いてる」

「意外。本当にひとりが好きだと思ってた」

「好きだけど極端な孤独は無理だってことを最近悟り始めた。やっぱり限界がある。おれも人の子なんだと思い知ったよー

百合愛と出会ってから友だちの意味を知った。
玲音と出会ってから心を通わす意味を知った。
アリスと出会ってから助け合う意味を知った。
無益で無価値でくだらないと思っていたことが、彼女たちによって意味あるものに変化した。
「そっか。じゃあわたしも変わらないとね」
「玲音は変わったよ。笑顔なんて見せなかっただろ」
「ううん、根本は変わってない。わたし嘘つきなの。辛いことから逃げるために嘘を並べてきた。特に母親に対して。嘘つく方が楽だったから。それと、睦紀くんにも嘘ついてる」
「おれに？」
「うん。文化祭が終わる頃に言うね」

彼女は明るく優しい声色でそう告げたが、不穏な感じしかしなかった。おれに対する嘘とはなんだろう。嘘をつかれる理由なんて思い当たる節がなかった。

第55話　不透明の二人三脚

手を繋いだ。

小さくて、きっと百合愛より小さい玲音の手。それでいて指の力はしっかりしている。幼少のことからピアノを打ってきただけある。しっかりこの指で音を届けてきたのだろう。

おれと玲音は体育館でパイプ椅子に座り、演劇部の劇を観ていた。照明は落とされ、代わりにステージの役者たちにスポットライトが当てられている。

彼らの演劇に集中した。時に歌い、時に軽やかなステップを踏む姿は実に

自然で、そして羨ましいとも思った。おれは大勢の前で演技なんてできない。それ以前に大勢の前に立つ勇気がない。純粋に尊敬できた。

「玲音を改めて凄いと思った」

劇が終わって照明が上がるとおれはそう感想をもらした。

「なんでわたし？」

「玲音はここにいる人数よりもっと多くの人の前で演奏してるんだよな。しかも一人で」

「ふふ。慣れだよ、何事も」

繋いでいた手を離す。手汗が出ていなかったか若干不安になる。

手を繋いだのは玲音からだった。偶然暗闇の中で触れてしまい、おれは手を引っ込めたが彼女は探し求めるように腿付近を手の甲でさすってきたため繋いだのだ。決しておれからではない。そう、おれは色んなことに対して勇

気が出せない情けないやつなのだ。

その後、おれたちは色んな店に立ち寄った。科学部の実験、屋台、脱出ゲーム、喫茶店など時間の許す限り玲音と過ごした。

こんな文化祭は初めてだ。中学時代は毎年ひとりで、立ち寄った出し物の数ももっと少ない。ましてや女の子と行動するだなんて、中学時代のおれが知ったら正気を疑う事態だ。お前はぼっちのプライドを失ったのか、と。

そして午後の後半、おれたちは自分たちのお化け屋敷に戻った。シフトチェンジの時間だ。

「あ……」

教室に入る際、百合愛と鉢合わせた。彼女は吸血鬼の仮装をしていた。真っ赤なカラコンを目に入れ、鋭い犬歯をちらつかせた姿は一目で幼い吸血鬼だとわかった。服は黒いワンピースで割と肌の露出は多い。

そんな彼女と対面したまま数秒程度固まった。何かを言わなければならなかった。可愛いとか似合ってるとか、そういった褒め言葉を伝えるべきだったのにおれの口は麻痺したように動かなかった。喧嘩が長引きすぎた結果の一つだ。

人が一生に生首を落とす回数を優に超えただろう。

おれは終了時間までずっと生首で客たちを驚かせた。中々楽しい時間だった。終わりを告げる校内放送に少し寂しさを覚える程度には満足した。

うちの高校は文化祭が一日だけなのでただちに閉会式が行われ、そして軽い撤収作業に移った。完全撤収は休日を挟んで後日行われる。理由は後夜祭の時間確保のためだ。

「初めて楽しいって思えた文化祭だったよ」

すっかり暗くなった校庭の隅で座って、おれと玲音は中心で燃えるキャンプファイヤーの炎を眺めていた。灰の匂いが小学生の頃の野外活動を連想させる。あの頃も、おれはずっとひとりだった。カレーを煮るための薪をひたすら追加していたっけ。

「おれも楽しかった。楽しめるとは思っていなかった」

「わたしも。なんか文化祭したなって感じ」

「そうそう、まさにそんな感じ。来年が楽しみだな」

おれはそう言って炎の方に再び目を向ける。ゲラゲラ笑う生徒、花火ではしゃぐ生徒など最後の最後まで遊び尽くすといった元気溢れる姿に、こちらまで力が漲ってくる。普段のおれなら後夜祭なんか抜け出してさっさと帰宅していただろう。そうしないのはこの雰囲気に心地よさを感じていたからだ。

「長年はないよ」

「元気はない？」

ぽつりと玲音が呟いた。おれはその一言に嫌な予感を覚えつつ、深い意味はないと願いつつ、彼女の横顔を見る。橙色に照らされた彼女の顔は穏やかではあるものの、どこか物寂しくもあった。

「睦紀くん。わたしのこと好きじゃないでしょ？」

「え……」

「わかるよ。睦紀くんのこと本当に好きだから、すごく敏感になるの。睦紀くんの視線の先とかわたしに向ける感情とかに」

何かとても恐ろしいことを話している気がした。取り返しのつかないミスをしてしまったのかと胸騒ぎがし、頭に白い霧がかかり始める。考えようとしてもその霧が思考を妨害するのだ。

「すっごく悔しいんだ。どうやったって百合愛には勝てないってわかってる。睦

紀くんが合わせてる焦点にわたしは立ってない。わたしがどれだけ睦紀くんが好きでも意味ないの。多分、追いかけるだけの恋って迷惑かけるから」

「待て、おれは玲音を――」

「ダメ！　そんな嘘、ひどいよ……」

初めて見せた玲音の怒りだった。

「……ううん。ひどい嘘をついているのはわたし。言ったよね、わたし嘘つきって」

「……あぁ」

「バイトしてる理由は、大学でひとり暮らしするためって言ったけどあれは嘘。本当は音楽留学のため」

「留、学？」

「そう、音楽留学。ドイツでピアノを勉強する。そのためにできるだけお金を

貯めてた。高校に入学する前から母親と決めてたことなの」

「……いつ？」

「来年から。もう面接も手続きも終わって、後は一年生をちゃんと終えるだけ」

別れ。その二文字が頭に浮かんだ。

気にもしなかった出会いと別れの当事者におれはなっていた。

嫌だと思った。玲音がいなくなるということがたまらなく嫌だった。だってこんなにも親しくなったじゃないか。たった半年かもしれないが、玲音はおれにとって濃い関係を築いた人間の一人だ。

そんな彼女が来年からいなくなってしまうという。だが行くなとは口が裂けても言えない。彼女の夢なのだから。

「……寂しくなるな」

「……」

「わたしも寂しいな」
「いつまでドイツに？」
「それは行ってから。半年で帰るかもしれないし、一年いるかも。どちらにせよ長期であることには変わらないと思う」
玲音は急に立ち、おれに手を差し伸べた。憂いに満ちた表情で。
手を取ると彼女は軽く上下に振り、そして手を離した。
「これがわたしとの最後。ごめんね、付き合ってなんて言っちゃって」
「……玲音？」
「でも後悔はしてない。好きって伝えられないままドイツに行ったらピアノに集中できないから。それに百合愛と睦紀くんが付き合い始めてから告白しても迷惑だしね。だから――」
玲音は一筋の涙を流し、温かい笑みを作った。
「幸記くんという後輩がいたことね。ほっ、行ってこ

「一瞬紘くんも後悔しないとは言えない、ほら、行って」

キャンプファイアーの周りでは生徒たちがペアを作って踊り始めていた。優雅な音楽も流れていて、カップルらしき男女が次々と手を取り合ってゆく。その中に見慣れた後ろ姿があった。ひとりぼっちで体育座りをし、周りから避けられているように見えた。

自然と腰が浮き、背筋が伸びる。

今度は自分から歩める気がした。

これからは自分から歩める気がした。

玲音に背中を押されて走った。今にも消えそうな背中を目指して一直線にだ。誰が前に立ち塞がっていようが勢いで避けさせ、寄り道なんかもちろんしない。

振り返ればおれは拒絶してばかりだ。なんでそんなことをしてきたんだ

ろう。素直に受け入れればよかったのに。そしたらこのくだらない喧嘩もすぐ終わって仲直りもして、今日も彼女の吸血鬼姿に可愛いと伝えられていただろう。

「百合愛」

彼女は驚いた様子でおれを見上げた。

睨まれるかと思いきや、彼女は無邪気に微笑んで立ち上がった。

「おれと踊ってほしい」

今度はおれから歩いていこうと思う。

ひとりで歩くか、ふたりで歩くかはまだわからない。

第56話　百年後も好きだと言いたい。

ゆっくりと円を描くように炎の周りを歩く。

ぱちぱちと木の焼ける音が耳に心地よく響く。

彼女の背後から手を取り、おれは歩調と音楽に合わせて踊り始めた。

「わたしとなんかでいいの？　あんたにはお似合いの彼女がいるじゃない」

棘のある言い方だがちょっぴり揶揄のこもった声。けれど落ち着いていて、優しさもこもっていた。

「今さっきフラれてしまった。おれが不甲斐ないせいだな」

「ふぅん。ま、あんたの頼りなさはわたしが一番知ってるから納得だわ。あん

たなんかと付き合っても絶対碌なことにならないもの」

玲音の事情については伏せた。おそらく海外留学の件は百合愛やアリスにまだ伝えていないだろうし、おれの口から言うことじゃない。

彼女の軽い挑発には乗らず、おれはまず謝罪から始めた。

「悪かった。頑固になりすぎた」

「……ふんっ。遅すぎよ」

「本当は無視し続けるつもりはなかったんだ。けど……わかるだろ。おれはあんまり喧嘩したことがなくて仲直りの方法もよくわからなかった。だからずるずるここまで来てしまった」

「ばーか」

「すまん……傷つけたよな……」

思い返すと自分の首を絞めたくなる。どうして意固地になって百合愛を

避けていたのだろう。怖いことなんて何もないじゃないか。

しかし今更悔やんでも遅いのだ。彼女と喧嘩した時間はどこかへ過ぎ去ってしまった。だからこそ、これから流れてくる時間を大切にしなければならない。

「いっ、一回だけだからね!?」

百合愛はくるりと回っておれと対面した。炎で橙色に染まった目を向け、悔しそうに下唇を噛んでいる。

「ご、ごめんなさい……嫌いとか言っちゃって！」

「嫌いなのは事実だろ？」

「そんなことっ……う、うざい!!　その言い方!!」

「第一なんだよ、アレは。『夜中に来て』とか、行くわけないだろ。おれはそんな野蛮な人間じゃないからな、覚えておけ」

「うるちゃいうるちゃい！　そんなこと忘れたもん!!　でもあんたがわたしのこと嫌いって言ったのは覚えてる!!　許さないからね!!」

ビシビシと指を縦に振って怒る姿は懐かしかった。それに心地よくもあった。百合愛の怒ってる姿は本当に可愛い。子猫が駄々をこねているみたいでついつい和んでしまい、いつまでも怒られたくなる。そしていつまでも……隣にいてほしいとも思ってしまう。

「百合愛。お前が好きだ」

恥ずかしくなんかなかった。ぼっちスキルも発動しなかった。

ただただ、百合愛が愛おしかったんだ。

彼女がたまらなく可愛くて、抱きしめたくて、好きだと伝えたくなった。

対価など求めず、自己中心的で一方通行の想いを百合愛にぶつけた。彼女の胸の奥底に、魂とやらにも浸透するよう純粋に好きだと言った。沙月に

伝える「好き」ではない、これはもっと高度な――未来永劫、例え死んだとしても消えることのない愛情だ。

「――ふぇ？」

百合愛は目を点にして気の抜けた声をもらした。そしてすぐにボッと顔を真っ赤にして口元を手で隠し、半歩後ずさって状況をのみ込もうと地面に視線を落とした。

ぷるぷる肩を揺らす姿も、長く綺麗なツインテールも、小生意気で高い声も全てが大好きだ。そう、おれにとって百合愛は完璧な存在なのだ。出会ったときはそう思わなかったのに、今は世界を天秤にかけてもおれは迷わず彼女を選ぶ。

「ばかぁ!!　いきなり何なのもぉおおお!!」

「すまん。けど、本当に好きなんだ。嘘じゃない」

「言ってないっ！　あいこは口を開けば適当なことばかりごちゃ

「信じられない！　あんたは口を開けば適当なことばかり言ってる……紘文この場しのぎで、わたしのご機嫌取るために言ってるんでしょ！　わかってるもん！」

「この期に及んで嘘はつかん」

「むぅ……だったら証明しなさい!!」

百合愛は大きく一歩を踏み出し、上目遣いで肉薄した。胸が当たりそうなくらい近く、大きな瞳を飾る睫毛が一本一本鮮明に見える。

「……わかるわよね」

彼女は顎をわずかに上げた。同時におれの両手にそっと触れてきた。

「ちょ、ちょっと待て、周りの目が」

「知らないもーん。だってわたしたち、ぼっち同士でしょ？　しかも片方はぼっちを目指してる。人の目なんて気にしちゃうの？」

「ぐぬ……」

「……」

「はやくして。バカ睦紀とならわたしは知らない土地だって、知らない外国だって……宇宙の果てすら行けるわよ？　ふたりぼっちでね」

彼女は薄く目を閉じて首を少し伸ばした。

そして、おれはゆっくりと唇を重ねた。

炎の音も、音楽も、全てが聞こえなくなって、本当にふたりぼっちになったみたいだ。世界に百合愛とふたりだけ。この世界の中心でたったふたりだけの甘い口づけだった。

今こうして彼女と想いを確かめ合う一秒一秒がとても惜しくて切ない。嬉しくもあり切なくもある複雑な感情で、心の中で長年こり溜まっていた固いモノが融解してゆく。

温かくて気持ちいい。まるで冬を越して春が訪れたようだった。

きっと、孤独に勝った瞬間だ。

「好き！　好き好き好き、大好きっ、ばかむつきっ！」

夢から醒めると百合愛はそう連呼した。

クラスメイトたちは踊るのをやめ、口を丸くしておれたちを注視していた。ぼっちらしくない光景だ。みんなこぞっておれたちに注目し、ひゅーひゅーと口を鳴らしている。

ツインテールは涙を目尻に溜めて微笑んだ。おれもつられて目頭が熱くなったがぐっと堪える。今泣き出したらきっと彼女が見えなくなってしまう。

「結婚を前提に、わたしと付き合いなさい」

久しぶりに下された命令だ。

面倒で馬鹿らしいだけだったはずの彼女の命令は、今は全て喜んで了承できる。どれだけ過酷なことでも彼女のためなら何でもすると思う。決して

マゾヒストになったわけじゃない。好きな人のために頑張りたいだけのひねくれた変人だ。

だからこう返す。

「ちょっと重くね？」

「そこは『はい』でしょ!!　ばか！　好き！」

これからはきっと伝えることが増えていくだろう。

今まで口を閉ざしていた分、顔面が狂ってしまうくらい色んなことを伝えていけなければならない。百合愛にも、玲音にもアリスにも、その他のクラスメイトにも。そして少しずつ訓練して最後には思いっきり笑えるような人間になろう。

そのためにもおれは百合愛に伝え続けようと思う。

「大好きだ」

十年後も百年後も、そう言えたらいいな。

一年後も百年後も、ずっと言えなかった

第二章　終わり

隣の席のツンデレツインテールが何故かおれの傍から離れない！

第3章　あなたの恋の物語

第57話　変わったぼっちくんと愛しのツインテール

冬、ツインテールが怒っていた。

「バカ睦紀！　いつまでも寝てないで起きなさい！」

十一月。

耳を塞ぎたくなる高音によってガラガラと崩壊してゆく夢の国を惜しみつつ、重くてたまらない目蓋を開けるとツインテールのお嬢様が仁王立ちをしていた。ふっふっふっパジャマで身を包み、今日も素敵なニつの乳尾を頂か

していた。おれのハシゴで、午後を台なしにしてくれた張本人の尻を蹴飛ばしながら下げている。

「無理だ、眠い」

今日は休日だ。しかも休日の朝。休日に早起きなど疲労困憊の現代っ子にはあり得ない話で、あり得る話をするならば早朝ウォーキングに勤しむ眠りの浅いご老人ぐらいである。

おれは寝返りを打って彼女に背を向け、再び夢の国の再建を試みる。温かくて気持ちいい――そう、あの時のキスのような甘菓子で作られたワンダーランドへと旅立つために目を閉じる。だがツインテールはそうさせてくれなかった。

「起きるの!!　ほーーらっ!!」

強引に布団を取っ払われ、首、手首、足首から冷気が忍び寄る。残酷極まりない行為を躊躇無くやってのけた朝烏百合愛はまたまた残酷にもベッド

から引き落とそうとおれを引っ張った。ごろりと転がり床に身体が落下する。ひどく不快だった。

「きゃあああああ!!　何で朝から欲情してんのエッチ!!　最低！　あり得ない！　気持ち悪い！　ばか！」

生理現象だと弁明しようとも思ったが、眠気には勝てず口を固く閉ざした。年頃の女の子なのだから男の生理現象くらい知っていてほしいものである。そういった情報から隔離されて育てられてきたのかもしれない。しかし舌をツッコんでキスをしてきた記憶が蘇った瞬間、そんな箱入り娘論はただの虚しい願望へと成り下がった。

百合愛は意外とかなり挑戦的で積極的で、大胆な少女なのである。

ツンデレ。ツインテール。

どう足掻いても性格の悪い印象がつきまとう属性を兼ね備えた美少女・

朝烏百合愛と付き合い始めてからもう一ヶ月以上が経った。だが付き合ったからといって関係が大きく変わることはなかった。なぜならおれたちはずっとひとりぼっちで生きてきた歴戦錬磨のぼっち。恋愛するということに無知だった。

「百合愛。別に今日じゃなくても明日でもよかったよな」

「うるさい。あんたは黙ってわたしのお尻追いかけてればいいの」

たたき起こされてから色々と済ませた後、おれと百合愛は身支度を整え街に出た。無計画な彼女の行動に呆れながらも彼女がおっしゃったように見事な尻を追い、本屋の前で足を止めた。

まさか結婚情報誌でも買うのではあるまいな。彼女は「結婚を前提に」という鉄より重たい条件を提示して交際命令を下したのだ。だから結婚情報誌は現実的な話である。

ヒクヒクしながら彼女の後を追うと景色がピンク色に染まった。女性誌コーナーである。少女漫画コーナーでもこのピンク化現象は目撃できる。女の子とピンクは後天的な因果があるのだろうか。

「ここ、キツいんだが」

百合愛に不満を表明する。周りは主婦や綺麗なお姉さんばかりで男などいない。勝手な思い込みかもしれないが、おれはこの空気の異物かつ敵であった。あと三十分もいれば書店員か警察がおれの肩を叩くことになるだろう。

「あんたも選びなさい。お付き合いを勉強しなきゃダメよ。わたしたち、何も変わってないんだから」

そう言って彼女は雑誌を手に取り立ち読みを始めた。

おれは渋々彼女に寄り添った。彼氏と思われれば多少の誤解は軽減するはずだ。そう目論んだ。ピンクの七田に目をこらした。

にてた　そっと自分を鼓舞して言葉にした
彼女の焦りは理解している。確かにおれたちは何も変わっていない。普段通り一緒に登下校して一緒に学校で話すだけで、数ヶ月前と同じ状況である。「彼女がどこへも行かない」という安心感はあった。けれど、それだけだった。
「……玲音とは、どういうこととしてたの？」
「ん？　れ、玲音？」
ぼーっと雑誌を眺めていたら百合愛が小さく呟いた。
玲音のことを話すのは正直嫌だった。彼女には何もしてあげられず、最後は苦い思いが残る別れ方をした。だからあまり言いたくはない。
「特に、何も……」
「ふぅん。隠すってわけね」
「そういうわけじゃない。今のおれたちと変わらない状況だった」

「ちゅーはしてないわよね？」
「あぁ」
「ふふ、よかったぁ」
彼女はほっこり笑顔を咲かせ、ぴっとり肩を当ててきた。
これ、マジで好き！
こういう甘えたかがりなところが大好きだ。もう永遠に守ってあげたくなる。無限に可愛い。可愛すぎてツインテールが天の川に見えてくる。もしツインテール教団なるものがあれば速攻で魂を売り飛ばそう。
といったくらいには百合愛のことが好きだった。
自分の気持ちに気づき、彼女に伝えてから想いはこの一ヶ月でおそろしいほど肥大化した。そのせいもあって自分の性格もだいぶ変容してしまったようにに最近感じる。変な方向に。これは変人化だ。

「デートでも、してみるか」
「デートって何するの？」
「二人で……出歩くとか？」
「じゃあ今じゃん。これデート？」
デートである！
いつも二人一緒だったから気付かなかったがこれは確実にデートだ。
「デートだ。おれたちは今、デートをしている」
「デートなんだ」
「あぁ、デートにする」
ゲシュタルト崩壊寸前の頃合いに、おれは百合愛の手を取って書店を出た。
本当に女の子の手は柔らかい。この柔らかさは……ゆで卵？　多分ゆで

卵くらいだと思う、ちょっと加減をミスれば崩れる慎重さを捨ててはいけない程度である。恋愛関係にも通じる柔らかさではないだろうか。正直何を言っているのかわからない。式島睦紀は壊れたのかもしれない。

そんな変人とお嬢様は軽やかにステップを踏みながら映画館へと舞い降りた。

「あんた映画好きなの？」

「いや、そうでもない。でもデートっぽいよな」

恋愛初心者だから自信はないがデートだろう。同じ時を過ごすのだから、多分。

しかし初心者なりに映画デートへの疑念はあった。映画が始まったら喋れもしないし暗闇の中では彼女の顔がよく見えない。それが二時間も続くのだぞ。果たしてそれはデートなのか、それとも木偶時間なのか。真尾はうそう

た　男たちはそれは子　ーなのだ　それとも仮面時間なのだ　真実はおそら
く無い。あるのは解釈だけだ。
　上映作品を選んでいると一つ目にとまった。
「これ、アリスが出てるじゃないか」
　主演ではないがポスターに載るくらいの重要キャラを演じているようだ。
ぼっち同志として見ておくべきか。
　意気揚々と彼女に提案すると、なんということか、彼女はむすっと表情を
曇らせてしまった。それすら可愛いので文句はないし写真を撮っておきたい
くらいなのだが、一応わけを訊いてみた。
「どうかしたか」
「……だってあのアリスだもんね。観たくなるもんね」
「そういうわけじゃない。いや、そういうわけでもあるか……でも、おれは百
合愛だけしか見えてない」

「むふ。好きー」
「こんなこと言わすなよ……」
「死ぬまで言わすもーん」
結局アリスの映画を観ることになった。
ジャンルは恋愛。おれたちに必要な正しい恋愛だと思う。ポップコーンみたいに軽くて甘いものだといいなと願いながら二人一緒にシートに座る。おれたちは色々と重すぎるからな。
さて、へんてこな恋の物語の開幕だ。

第58話　おしゃれデビュー

「にぃにってケッコンしたのー？」

純粋無垢な瞳で問うのは妹、式島沙月である。

普段なら軽く「何を言っているんだ」と返していたがおれは黙った。現在、家族の夕食の場である。テーブルを挟んで母親、父親、そしておれの両側には百合愛と沙月という構図だ。

百合愛と交際していることは親に伝えていない。伝えたら伝えたで延々と面倒な質問を浴びせられることになるだろうし、第一おれが恋愛脳の持ち主だったと親に思われたくない。

「沙月、小学校は楽しみか？」
「ケッコンしたのー？」
「しょうがっ――」
「ケッコンはー？」

壊れたAIだ。沙月はケッコンケッコンと口が止まらなかった。
親の目が怯え、嫌な汗が背中に滲み、持ち上げた茶碗もカタカタと震えて味噌汁が波を打つ。修羅場が始まるのだ、今から。おれは震えて戦慄した。
最も問題なのは百合愛のリアクションだ。彼女がどう反応するかでおれの命運は決まる気がする。
「お母様、お父様」
百合愛は丁寧に呼んだ。自宅では、特に両親の前では完璧なお嬢様なの

だ。とてもお淑やかで無駄がなく品が良い。普段からお嬢様成分は割とあるのだが、親の前では別人同然に完璧なお嬢様なのである。

「睦紀くんとお付き合いさせていただいております」

彼女は滑らかに述べた。時が止まったかのように両親はフリーズし、おれも心臓が止まった。生きた心地がせず、自分が呼吸しているのかすらわからない。この空間における生者は黙々と白米を食べる沙月とお嬢様ツインテールだけだった。

「え、む、息子と……？」

「はい。つい一ヶ月半前からです。ご報告が遅れてしまい申し訳ありませんでした」

母は驚愕の色に染まり、目は現実を見ていなかった。百合愛と焦点が合っ

ていない。一方の父親は湯飲みを口に当てたままテーブルにお茶を垂れ流していた。どんだけ驚いてるんだよ。そんなに息子が誰かと付き合うのが超常現象レベルだと言いたいのか。

「不誠実なお付き合いではありません。わたしは睦紀くんに嫁ぐ覚悟でお付き合いしています」

「と、嫁ぐ!?」

「はい。本気で彼を愛しています」

「愛い!?」

「絶対に結婚します」

「ぎょえっ!?」

強い、強すぎるぞ百合愛！　敵無しだ！

こんなに驚く母を見たのは初めてだった。父はもう魂が抜けそうで走馬

灯でも見ている最中だろう、沙月はずっとうきょとんとした顔だ、なぜなら危険を感じた時からずっと沙月の両耳をおれがふさいでいるからだ。この話は非常に教育に悪い。幼児に修羅場はキツすぎる。

何事もなかったように百合愛が箸を動かし始めると、案の定、両親の視線はおれへと向き、まるで罪人を問い詰めるが如く眉間に深い皺を作った。

「ご、ごちそうさま」

逃避を選択。

色々とキツいものがある。付き合っている相手は超絶美少女で、しかも衣食住を共にしている。同じく恋に落ちて結婚した親たちなら恋人同士がすることなど容易に想像できるだろう。そんな想像をさせるだけでもおれは羞恥心で爆死したくなる。実際のところ百合愛とは何もしていないけれど。

自室へと逃げ込んだところでおれはベッドにダイブした。

自室へと逃げ込んだおれはベッドに大の字になった

これからどうなってしまうのだろうという恐怖と本当に百合愛と結ばれるのかという期待感で胸が重苦しい。実の両親に知られることがこれほどまでダメージを負うものだとは、やはり思春期の親は大敵である。

そして数十分後。

「……入るわよ」

「お、おう」

身を起こして百合愛の方を見る。おとなしいが頬はほんのり桃色に染まっていた。食卓では超硬派なお嬢様だったのに、今はもう色恋に目覚めたお嬢様である。

彼女もベッドに腰を下ろすとこちらにすり寄り、頭を横に倒して肩にもたれた。沈黙を味わい、ただぴっとりくっつくだけ。そんなささやかな時間のおかげでだいぶ心が落ち着いてきた。

「わたし、本気だから」

ぽつりと呟き、ツインテールの先っちょでおれの頬をくすぐる。むっとした顔をしているのはきっとおれが逃げたからだろう。きっとあの時に言ってほしかったんだ。おれも百合愛を愛してるとか、結婚するつもりだとか。

「おれも本気だ」

「ふ、ふんっ！　どうかしら。あんたなんか少しほっといたらすぐ浮気しそうだし。首輪でも買わないとダメね」

「そっちだってどうだか」

「わたしは絶対しないわ。もうあんたのお母様とお父様の前で宣言したもの。あとは……そうね、あんたがわたしのママとパパに挨拶するだけね」

「挨拶!?　いやいやいやちょっと待て待て！」

「ま、その反応は想定済みだわ。小心者のバカ睦紀には無理ってね」

それは人生で最も難易度の高い挨拶だ。娘さんをください、だなんて高校生が言えるかよ。黙れクソガキ、ぶっとばすぞボケと足蹴にされるのがオチだ。あの温厚な百合愛のご両親でも流石に表情を曇らせるだろう。親の気持ちを考えれば当然の反応だ。

「だからあんたは男を磨きなさい。もっと格好よくなって頼れる男になってわたしのママとパパを納得させなさい」

「そんな無茶な……あんな立派なご両親を納得させるとか……」

「もし何年経っても無理だったら駆け落ちするわ」

「何かドラマみたくなってきたな……」

「本気だもん。それくらいあんたが好きなんだもん」

それは同じだ。おれだって百合愛が大好きだ。

これがきっかけだったのか、数日後に変な活動が始まった。

「ねぇバカ睦紀」

昼休みの教室。弁当を平らげ終わった後、退屈そうに机に頭を乗せていた百合愛は気の抜けた声をもらした。

「ん、なんだ？」

「あんたって告白されたのことある？」

「……一回だけ」

「え、ウソ」

「玲音だ」

「あぁ、そういうこと」

あれから玲音とはあまり会話していない。とにかく気まずく、ぎこちない動きになってしまうのだ。

「あいこりイメージが悪いより上。意味分からない、ぼっこ、う、ゃてっ気

「あんたのハンカチ、汚れてるの？　意味ないし、ほっときなさいよ。多分もう使わないし」

「致命的だな」

「もっと改善してイイ男になってよ」

「難しいなぁ……」

「はいはい、じゃあすぐ行動!!」

彼女は席を立つとおれの背をぺしぺし叩いた。どうやらどこかへ連れて行きたいらしい。素直に従い、おれたちはアリスの教室へと赴いた。アリスを救うために上半身裸になった記憶が蘇る。当然おれを見てコソコソ話をし始める生徒がいた。だが百合愛は堂々と踏み込む。帰りてぇ、消えてぇ。

「アリス。バカ睦紀におしゃれ教えてあげて」

「い？」

豆乳パックのストローを咥えたまま、アリスはあ然とした。
アリス先生によるおしゃれ講座の始まりだった。

第59話　わたしも可愛くなりたいもん！

おしゃれに無頓着なのは否定できない。

そもそもおしゃれとは人の目を気にする他者本位の人間が気にすることである。孤高のぼっちとして生きてきた者がそれをするかどうかは語るに及ばず。

しかし今は違う。

百合愛にはよく見られたい。それにおれのダサさのせいで百合愛の気品が落ちたり、周囲の目を気にさせ煩わせるのは絶対にダメだ。窃盗の次くらいにやっちゃいけないことだ。

「んじゃ、座って」
「よろしく頼む」
放課後、アリスの教室。残っている生徒は数人程度だった。

アリスの指示に従って椅子に座る。ちなみに百合愛はというと、前の席で闇の女王のように腕と足を組んで悪の笑みを浮かべていた。いよいよ始まる施術に大層お喜びらしく、タイツで黒く染まった足でおれのふくらはぎをょんちょん突いてきた。イチャつきたいという意思表示だ。
「百合愛。流石に惚気すぎ」
それをアリスがため息交じりに指摘した。
「の、のろけてなんかないもん！　はやくうちのバカをおしゃれにしてやって！」

「ウソだ～。だってさっきからずっとメスの顔してるけど」
「してないもん！」
「発情ウサギ。メス猫。欲求不満。変態ドスケベ女！」
「んもぉお!!　アリスだってどうせ枕営業とかしてる変態でしょ!?　汚いおじさん相手に良い子ぶってるんだ！　絶対！」
　百合愛は耳を真っ赤にして言い返した。対してアリスは「はいはい」と子どもの駄々を流すように相槌を打ち、ワックスを手のひらに出して馴染ませる。おれたちより何十倍も社会経験が豊富な彼女だからこそできる大人の対応だ。
「仮に誘われたとしてもうちのパパが許さないから枕営業なんかしてるわけないでしょ。したら死体の山ができると思う。そんくらいパパは親馬鹿でわたしに溺愛してて、家族のためなら何でもするバカだから」

「ぐぬぬ……悪かったわよ。ごめんなさい、アリス」
「はい、良い子良い子。ちょっと婚約者借りるね」
「……うん、許可する」
なんだ、許可とは。おれは市民図書館の本か？
ヌチャヌチャと音を立てて馴染ませ終わるとアリスはおれの髪に触れた。
独特な動きだ。つまんだり、払ったり、とにかくせわしない。自分の髪に何が起こっているのかは、アシスタント役の百合愛が構える手鏡で確認できた。
「おぉ……なんかテレビの人みたいだ」
「なにテレビの人って」
「テレビに出てる男性アイドルってこんな感じの髪だろ。パイナップルみたいだな」
「こういうのが格好いいって思われるの。覚えておきな。百合愛も喜んでる

よ」

鏡から焦点を百合愛に戻す。とてもウキウキした様子で目が煌々としていた。

「なるほどな。ワックスってこうやって使うのか」

「そ。簡単でしょ？」

「だな。それにイイ匂いもする」

「ちょっとした香水代わりにもなるかもね。これあげるよ。わたしからのプレゼント」

「マジか。ありがとう、勉強してみる」

「えらいえらい」

アリスは手を洗いに教室から出て行った。

ワックスをつける前と後り印象は月、つかこ違つこ。寸する前は音及皆みこ

「ハンカチを二枚と後の印象は明らかに違った　作はる前は明確者のたいだったのに今のおれには爽やかさがある。アリスが魔法使いだったとしても全く疑わないだろう。こんなの式島睦紀じゃなくてホストだ。

「か、かっこいい……」

百合愛は両手を股に挟んでモジモジしていた。瞬きの回数を大幅に増やし、目を合わせようとするときゅっと目を閉じる。乙女モードに入ったな。

「ありがとう。もっと頑張ってみる。そしたら自信持って百合愛の隣を歩けると思う」

「あ、あんたは十分立派よ！　変な心配しないのっ！　でも……もっと立派になれるから……もちろんわたしももっと綺麗になるからねっ！　アリスに負けないくらい可愛くて綺麗になる！」

「だぁ～れがわたしに負けないくらいだって～？」

前のめりに百合愛が意思表明をした時、戻ってきたアリスがドアに背を持たれてそう挑発した。手にはいつもの豆乳パックだ。

心地の良い革靴の音を立てて言葉を続けた。

「悪いけど、百合愛って子どもだと思うんだよね」

「むっ!?」

「だって睦紀くんに甘えっぱなしでもはや依存じゃん。おっぱいねだってる赤ちゃんみたい」

それはおれも同じだ。おっぱいがほしい。

「何が言いたいの……？」

「大人になった方がいいって話。きみらの恋は応援するよ？　もちろん百合愛が頭お花畑のぱっぱらぱー状態で言ってた『わたしバカ睦紀と結婚する！』って話もね」

アリスにも言っていたのか。内々の話ならいいが第三者に言うことではないだろうに。

百合愛は今更になって恥ずかしくなったようで背を丸めて縮こまった。

「……バカ睦紀のこと、奪う気？」

「あははっ！　そんなわけないじゃん！　わたしは大事な友だちで恩人でもある睦紀くんが乱暴に振り回されるのが見てられないだけ。睦紀くんもまだまだ子どもだと思うけど、それ以上に百合愛がお子様すぎ。それともわたし以外に冷静な目で見れる人いるの？」

「……うるちゃい」

「そ。ま、わたしも子どもだからあんまり言えた口じゃないけど」

ずずっとストローで豆乳を飲む。

「アリス。それも美容の一環か？」

「[illegible]

ーん、まぁそんな感じ。豆乳ってお肌にいいのよねーん。割と味も好きだし。豆乳メーカーさんのスポンサー募集中」

「なるほど今度試してみよう」

何だか楽しくなってきた。自分磨きで得られる自信が色んな可能性を作ってくれる気がする。気後れしてできなかったことがこれからはできるようになるのだ。未来の創造と言える。

自宅に帰ったら早速部屋にひきこもった。

美容やらオシャレについて熱が冷めないうちに調べる。まるで第二の自我の目覚めだ。自意識を獲得し、そして次は他人を強く意識し始めたのだ。とても新鮮な感覚だった。

ひたすらスマホの画面をフリックし続け時間が溶けてゆく。気付けば風呂り寺間、気付けば数寺間経過。寺に取扱がないこり寺間ここ寺間ここ寺間

呂の時間　今仕には数時間経過　特に起床たなしたため特定のことには意味が
なったことはあまりなかったが、とうとう見つけたのかもしれない。
　熱意のままに調べていると、ドアがノックされた。現れたのはもちろんパ
ジャマ姿の百合愛。相変わらずのツインテールで良いとこのお嬢様みたいだ。
実際お嬢様だが。
「自分磨きで今忙しいんだが」
「ねぇ……バカ睦紀……」
「どうした、塩らしいな」

　現れたときから妙に火照った顔で様子がおかしい。アリスが言っていたあ
の「メスの顔」ってやつに近いような――いや、風邪でも引いたのだろう。冬に
入ったばかりだから身体が対応しきれなかったか。
　しかし百合愛は予想外の言葉を口にした。

「……おっぱい揉んでほしい」

第60話　幸せの真実

――おっぱい揉んでほしい。

おれは百合愛のお願いに頭を抱えた。どういう目的を設定したら、異性に自分のプライベートゾーンを揉みしだいてもらう考えに至るのかいっぺんその頭蓋を開いてみたいものだ。きっと詰まっているのは名前にもあるとおり愛でぎっしりで、砂糖の何倍も甘ったるい脳漿が満たされていることだろう。

多分、試されてるんだ。

式島睦紀という一人の男は、恋人を大切にできるか。大切に扱えるか。大

切に愛せるか。自分を性的な目でじっとりねっとり見ているだけなのかを彼女なりに暴こうとしているのだ。

そう勘付き、おれはモジモジと立ち尽くす百合愛に優しく声をかけた。

「はやく寝ろ。おれは百合愛を無下になんか扱わないぞ」

「……うん、寝る」

駄々をこねるかと思いきや意外にも素直な反応だ。

やっぱり試していただけだったのか、と緊張をほぐす。だが彼女は部屋を出ずにベッドに膝をついた。そして背を見せると胡座をかいていたおれの懐に入って座った。

彼女を全身で包み込むような体勢。尻から肩にかけてぴったり密着し、彼女の匂いと体温が身体に浸透していく。目を下に移せば彼女の胸元。緩やかで柔らかそうな二つの丘が見える。

「……好きな人から揉まれると大きくなるんだって」
「は、は？　いや寝るって言ったよな？」
「だから愛情込めて揉みなさいっ！　男の子っておっきい方が好きなんでしょ」
彼女はおれの手を掴むと自分の片乳に当てつけた。
――おれは、世界の真実を知った。
おっぱいは、幸せだ。
幸せの塊だ。幸せの権化だ。

触っているだけで幸福度がぐんぐん上昇しているのがわかる。脳内でヤバい成分がドバドバ放出され、もはや本当にお乳を触っているのかすら不鮮明だ。莫大な幸福感の前であらゆる感覚が希薄し、冷気にやられて感覚が麻

痺したときのように、おれの手は眠りに落ちて不感症になった。

だがこれだけはわかる。おれは今、とても幸せなんだと。

人は生まれるとおっぱいを求める。母の愛じゃない。濁った視界の中で母など見つけられないし、カオス状態の自意識では世界の認知すらできない。

しかしそんな赤子でも生きようとするために探すのだ。おっぱいを！　自分が世界でひとりぼっちかすらわからない恐怖の中でさえ、おっぱいという希望は本能的にわかっていて、そしてそれがいかに温かくて安心して幸せなものかを知っている。

おっぱいとは、人間が世に生まれ落ちて初めて知る最初の幸せなのだ。

「もっと揉んで……んっ、育てるつもりでね……」

おれは揉んでなどいない。世界の真実を知ってそれどころではなかったのだ。それとノーブラだったことにも驚いていた。

[redacted]

「百合愛、大丈夫だ」

「何がよ。ほら、両手で優しく揉みなさい。わたしをもっと魅力的な女にして」

「今のままでいいんだよ。胸の大きさで善し悪しが決まるわけじゃない。おれは今の百合愛が好きだし、それに胸だって十分すぎるほどあるじゃないか」

そう諭すと彼女はおっぱいから手を離し、力を抜いて体重を預けてきた。さらさらの髪をおれの頬に擦りつけて無言のスキンシップを始める。あまりにも愛おしくて知能低下がしそうだ。理性を投げ捨てそうだ。

「寝ろ。百合愛に足りないものなんてない。逆におれは不足しているものばかりだ。だからおれが頑張るよ」

「……ばか、かっこつけちゃって。死ぬほど努力しなさいよね。わたし、あんた以外の男はイヤだからね。ううん、ないと言うよりマジでイヤだからね」

以外の男はノセたら、しないとお見合いをセッティングされるわよ？」

「マジで……？」

「ふふっ、ばーか。嘘に決まってるじゃない。わたしの親がそんな古臭い風習に従うわけないでしょ」

安心した。お見合いなんてされたらおれに勝ち目はない。百合愛のご両親の人脈を持ってすれば、ずば抜けたエリートたちが大勢集結し、列を作って百合愛に愛を囁きまくることになるだろう。

しかし安心なんてしてられない。おれたちは成長し変化し続ける子ども。身体だけでなく心も変化するのだ。この関係が永遠に続くとは断言できない。

だから、頑張るんだ。がむしゃらに。

おしゃれキャンペーンが始まってから一週間が経過した。

まだまだ不慣れではあるが毎朝髪を整えるようにはなった。百合愛の頻繁に行われるスキンシップで匂いにも気をつけるようになった。

自分でも多少の変貌を遂げたとは思っているが、その審査はおれではなくアリスが適任だろう。というわけで密かにアリスにコンタクトを取った。

「あ、百合愛の旦那さんだ」

昼休み、中庭のベンチを訪れアリスと接触した。相変わらず美味そうに豆乳を飲んでいる。その豆乳に含まれるイソフラボンが美容に良いらしい。勉強し始めてから初めて知った。

「絶対に人の前で言わないでくれよ」

「言わない言わない。うちでの睦紀くんのイメージ、どんなか知ってる？」

「え、変に知られてしまってるのか……？」

「そりゃもう、アリスのストーカーとか、露出魔とか、異常者とか」
「散々だな……」
しかたあるまい。あんなことをしたら誰だっておれを危険人物と見なすだろう。
アリスはすっとベンチから立った。
「うん、前と変わったよ。明らかに印象は良くなってる」
「おぉ良かった……女子から直にそう言われると嬉しいな」
「自信持ちな。容姿なんて簡単に変えられるからこれからも努力を怠らないように」
「へい」
「それよりも！　今月は何がある月？」
十一月。すぐに思いついた。
[illegible]

十一月二十二日、百合愛の誕生日だ」

「さっすが百合愛の旦那様。答えられなかったら殺してたところだから」

「あぶねぇ……」

「何か考えてる？　プレゼントとか、デートとか」

それについてはちゃんと悩んでいた。

百合愛は何が喜ぶだろうかと考えたとき、まずはプレゼントを思いついた。しかしおれが買えるものなんて百合愛の家庭では容易く手に入れられるものばかりだろうからガッカリされるかもしれない。デートだってしっかりエスコートできるのか不安だ。

そんな中でも一つだけ「これはいいのでは」と思うことがあった。

「手料理って……どうかな」

両親不在の際に沙月のご飯を作ったりしていたのである程度できる。なので百合愛が喜びそうな手料理を振る舞うことぐらいかこっそり陰で考えてい

て自分を喜ばそうとする三米理を振り返ってあげようと心の隅で考えていた。

「いいじゃん！　じゃあケーキだね」

「ケーキかぁ……できるか不安だな……」

「安心しな。わたしが教えてあげるから今度うち来な」

ただの美少女女優だったアリスが、いつの間にか頼れる女友だちになっていたようだ。

第61話　愛のケーキ作り

男の飯ってのは粗雑だが驚くほど美味かったりする。

魚の目玉みたいにてらてらと輝く油まみれのチャーハン、菜食主義者が顔をしかめる肉だけラーメン、盛大に焦げた醜い目玉焼きなどなど。人に食わせるとなると気が引けてしまうものばかりだが、なぜか美味いのである。それも世界一なのではと思うくらい。

しかしながら美味さとは主観であり、人と同じ感じ方はできないもの。なら、美味さの平均値を目指せばいいわけだ。男飯は刺さる人には刺さる珍味のようなものなので、百合愛には与えることはできない。もはやギャンブ

ルである。

そんなわけで生活力の高さそうな榊木アリスに頼ることになった。人生二度目のタワーマンション訪問だ。

「はいはい、いらっしゃい。え、材料買ってきたの？」

立派なドアが開かれるやいなや、彼女はおれの手に持つビニール袋を見て仰天した。

「そりゃ当然だ。知識を教えてもらうのだからそのための材料くらいは用意する」

「うちで買っちゃったんだけど……イチゴも生クリームもその他諸々……まぁいいや。連日お祝いってことにしよ」

ちなみに百合愛には「自分磨きしてくる」とだけ伝えてある。一応サプライズの一環だからな。それにアリスの家に行くなんて行ったらキツいお仕置

きをされそうだ。

玄関に入り、キッチンへと通されるといきなり背後から肩を掴まれた。

「睦紀くん！　やったな！」

アリスの父親だった。何がやったのかわからないがとても嬉しそうな様子だ。

「お、お久しぶりです。その、何がですか？」

「何がって、あの子と付き合ったんだろう？　あのツインテールの子」

「あ、ははは……そうですね、なんやかんやあって付き合うことになりました」

「アリスから聞いたとき自分のことみたいに喜んでしまったよ。あのときは『別に好きじゃない』って君は言っていたけど、本当のことはわかっていたさ。あんな可愛い子を好きにならない方が無理がある」

「で、ですよね～！」

百合愛以外の人に自分の気持ちを曝け出されて死ぬほど恥ずかしかった。どんどん自分の身体が小さくなっていく感覚に襲われる。

「学生時代にあんな可愛い子が傍にいたら確実にオチてたね！　しかも今も同棲してるんだろ？　野獣並みに高ぶってる時期にスーパー美少女と暮らすなんてヤバいね……気狂っちゃ――あだだだだ！」

アリスパパの止まらぬ興奮は、彼の奥様によって止められた。アリスママはツーンとした目で彼の耳を引っ張り、「下品よ」と冷たく叱責した。

「ごめんなさいね。この人のことは放っておいていいから。自由に使ってちょうだい」

「すみません、ありがとうございます」

「ガールフレンドのために頑張って。想いが伝わると良いわね」

女神の擬人化たるアリスの母親はささやかな笑みを作るとアリスパパをキッチンから退場させた。とても仲が良くて羨ましいと思った。あそこまで円満な夫婦仲はこの時代には珍しい方だろう。

「ごめんね、睦紀くん。うちって男がパパだけだからさ。うちらくらいの男子と接する機会があんまりないから、睦紀くんの存在に喜んでるんだと思う。子どもなんだよね、ずっと」

「いいんだ。おれだって大人の男性と関わることはあまりないから楽しい。というか同級生の男すら全然関わってないんだけどな……むしろなぜか女子とばかり関わってる」

「いいじゃん。多分みんな睦紀くんのこと嫉妬してると思うよ。だってこの有名子役の榊木アリスちゃんと仲よさそうにしてるんだから！　誇りな！」

アリスは胸を張ってドヤ顔を披露した。

「ごめん、本当に不思議ごと」

「なな、スミは？見識だ。」
「ふふん。んじゃ、準備しちゃおっか」
アリスは髪をまとめてポニーテールにし、慣れた手つきでエプロンを着た。おれも貸してもらったエプロンを着、手を洗ってビニール袋から材料をキッチンに並べた。まるで中学校の調理実習だ。家でわざわざエプロンなんてしないからな。
「始める前にさ、ぶっちゃけていい？」
「おう」
「ケーキって別に教えるほどでもないよ。超簡単」
「中々今更な話だな……」
「もしかして生地から作るつもり……？　かなりダルいよ？　失敗のリスクを考えたら市販の生地使った方が良いよ？」
「あ、その手があったか。そういや生地って売ってたな、完成されたやつー

「そうそう。だから生地はわたしが前もって買ってたやつを使おう。今回のお勉強は見栄えに絞ろっか」

おれは後先考えず生地の材料まで買っていた。アリスから言われて気付いたがそもそも自宅に生地を焼く電化製品や設備があるのか疑問だ。

お勉強の方向性を変更し、最初はどんな見た目にするかを決めることになった。アリスとネットで画像を検索し、どういった外見にするかを競技した後、生クリーム作りから開始した。

「じゃあ睦紀くん。大きいボウルに氷水入れて。入れすぎちゃダメだよ。氷水に浮かせて冷やしながらかき混ぜるから」

「了解」

アリス先生の指示に従い、氷と水を適量入れた。

「はい、次は生クリームをこっちのボウルに入れて、グラニュー糖もぶち込む。

そしたらそっちの氷水で冷やしながらトロトロになるまでかき混ぜる」
「うい」
仰せのままに生クリームとグラニュー糖をぶち込み、泡立て器でかき混ぜ始めた。自動の泡立て器ではなく普通の泡立て器だ。カチャカチャと音を立て、飛び散らないようにクリームを撹拌する。どれくらいやればいいのかわからないがそんなに時間はかからないだろう。
「睦紀くん、何か足りないよね」
「え？　入れてなかったものあるのか？」
「愛だよ、愛。ちゃんと愛も込めてる？」
「……込めてます」
「ならよし」
馬鹿馬鹿しいが反論の余地はない。これは食べ物でもありプレゼントでも

あるのだ。しっかり愛情を込めないと市販のケーキと変わらない。

百合愛好きだよ、と心の中で呟きながら手を動かした。我ながら気持ち悪いとはわかっている。それでも愛を込めねばならんのだ！　百合愛！　愛してるぞ！

心の中ではいくらでも言えるんだがな。

「よーし、百合愛みたいにトロトロになったね。これでホイップクリームの完成だ」

「変な誤解を招きそうな表現だな」

「モタモタしてらんないよ！　はい次はイチゴのヘタ取って！　ブルーベリーとミカンも冷蔵庫から取り出して！」

「了解」

果物の下処理をしたら載せる前にホイップクリームを塗らねばならない。そのほうがうまくデコレーションできるからだ。

いその二秒前に私を前にフーンなどと見せてくれた
「このヘラを使って塗るんだよ。こうやって伸ばしながら表面をスケートリンクみたいにつるつるにするの。まだ一段目の生地だから丁寧にやらなくてもいいけど、外側の見える部分は綺麗に仕上げるように」
「なるほど。これが終わったらスライスしたイチゴとかオレンジを並べるわけか」
「そ。ちゃんと愛を込めてね。そういうとこ百合愛は気付くよ」
「もう超能力者の域だな」

「当たり前じゃん。女の子は男の浮気なんてどれだけ距離が遠くても気付くよ。きっと今頃百合愛はわたしに殺意を覚えてるね。睦紀くんと一緒にいるから」
「めちゃくちゃ愛情込めます」

第62話　本物の寂しさ

愛情を込めて生地にクリームを塗る。

芸術を作るつもりで果物を飾る。

検索した画像を参考にしつつ、ちょっとオリジナリティも加える。

そういったことに気を遣い、アリスの監督の下、とうとうバースデーケーキが完成した。販売できるクオリティではないが、人の表情を緩ませるくらいには美味そうなビジュアルではなかろうか。

「おつかれ。いいじゃん、絶対喜ぶと思うよ」

アリスは腕を組み、とても満足そうに何度も頷いた。アリスの指導は非常

に助かった。おかげで手を止めることなくせっせと動くことができ、新鮮さが命の材料たちが無駄にならずに済んだ。

「アリス目線でも良い感じに見えるか」

「そりゃあわたしが監督したんだもん。これを作ってもらって喜ばないやつがいたらそいつはただの性悪女だよ。踏み絵として有効的だね」

「百合愛はきっと大丈夫だ。いや違う、実は少し不安なんだ……あのお嬢様が本当に満足するだろうか……」

「これで満足しなかったらわたしが百合愛に怒ってあげる。人の心がないんかこのドスケベツインテール!!　ってね」

「気にしなくていい。君らは仲良くしてくれよ」

「間違いを正すのも友だちとしての義務だと思うけど？」

―――――――――――――――――――――――――――――――――」

そう言われると反論なんてできない。何でもかんでも首を縦に振る関係なんて気持ちが悪いだろう。全肯定なんて目を閉じているのと同じで機械人形みたいなものだ。

「んじゃ、食べちゃお。手洗いな。片付けは後でね」

「わかった。果たしてちゃんと美味いのか……」

「どうやったってケーキはマズくはなんないよ」

アリスの指示に従ってケーキを切り、四人分小皿にわけた。残りはアリス家が夜に食べてくれるそうだ。

ありがたいことにアリスママが紅茶をいれてくれた。変わらぬ美しさの前に息をのみ、魂が震える。制服を着て登校してきてもぱっと見ならアリスと見間違えてしまうだろうな。おれも老けない遺伝子が欲しい。

アリス家の三人とケーキを食べ始める。
「うまいぞ！　睦紀くん！」
一口食べたアリスパパが無邪気にはしゃいだ。
「本当に美味しいわ。きっとあなたの恋人も喜ぶわね」
続いてアリスママも口元をふきながらそう述べた。
「ありがとうございます。すみません、ご両親にも協力していただいて。何だか自信がわいてきました」
「大丈夫大丈夫！　絶対に喜ぶさ！　ツンデレタイプは正面からぶつけられるのが弱いんだ。多分ツンツンするかもね。でも内心は飛び跳ねちゃうくらい喜んでるはずだ。杞憂する必要はないよ」
「お詳しいんですね、ツンデレに」
「だいぶ苦労してきたからね、ツンデレに」

忠告しているような小声だった。そうさせる元凶が誰かはすぐにわかった。隣でツーンとした目で冷たく睨む女神様がいる。

自分で作ったケーキは美味しかった。これなら百合愛も喜んでくれるだろうか。ぼんやりと彼女の笑顔が脳裏に浮かんだ。想像で終わらず現実にさせるんだ。おれは今日一日で学んだことを頭に強く刻み込んだ。

その後、簡単な手料理をアリスから色々と教わった。

どれも手軽で美味しく作れるものでとても勉強になった。改めてアリスの凄さに驚かされた時間だった。容姿は完璧、役者としても天才、性格も最良、さらに家庭料理までそつなくこなせる。将来アリスと結ばれるパートナーは相当な幸せ者だな。

休日に家族水入らずの時間を潰すのは申し訳なかった思いもあり、早めにおれは帰ることにした。それに百合愛から変に疑われるかもしれないしな。

な
「サプライズ、成功するといいね」
エレベーターで下がっている途中にアリスがそう言った。彼女はおれが迷わないよう見送ってくれている。
「成功させるさ。何が成功なのかわからんけど」
「ふふ、喜んでくれたら成功だよ。ま、睦紀くんが与えるものは全部喜んで受け取ると思うけどね。百合愛は結構単純なところあるから」
「確かに。条件反射的な反応をよくされるんだ。別に悪いことじゃないがな」
そこが百合愛の可愛いところでもある。その純粋さが保護欲を刺激し、彼女への想いを増長させるのだ。もう狂いそうになるくらい。時々ふとした瞬間、彼女を抱きしめたくなるのはそれだ。決しておれが変態化＆変人化しているわけではない――と信じたい。
「玲音のこと聞いた？」

急な話題転換に言葉を返せなかった。

「知ってるって顔。わたしも本人から聞いたよ。あの事情もあって別れたとは思うんだけど――ううん、そういうことを言いたいんじゃなくて……」

「玲音と……何かあったのか？」

「いや、別に何もないよ。ただね、ちょっと言いたいことが……」

歯切れの悪い口調にモヤモヤした。すぐに悪い考えをしてしまうのはおれの治すべき癖だとはわかっているが、良からぬことを告げられるのではと思わざるを得ない。

アリスはすっと息を吸うと意を決した表情でこちらを見た。

「海外進出決まっちゃった」

「え、海外!?」

「うん。映画の撮影でね。まだ詳しくは言えないんだけど日本原作のとある

作品を海外で実写化する企画が動いてて、そこに日本人としてわたしが出演することになったの。来年から撮影が始まるんだー」

スケールの大きさに驚愕した。そしてチクリと胸に痛みが走った。

「そうか……それはめでたいことだな。とうとう国際的な女優か」

「ありがと。事務所を移すわけじゃないから全然国際的じゃないけどね」

「ということは……アリスも来年からいなくなってしまうのか」

寂寥感たっぷりの自分の声にイラついた。アリスに行くなと同情を誘導させているようじゃないか。そんな無責任な思惑など微塵も頭に浮かんでいないのに。

胸の痛みは寂しさのせいだった。

せっかく仲良くなってようやく心を開けるようになった途端、玲音もアリスも離れていくという。それぞれの夢のため、勝負するため、学ぶために。応

援するべきで無論そうするのだが、この寂しさはまぎれもなく本物だった。

「でも安心して。短期間の滞在を何度も繰り返すだけだからずっと離れてるわけじゃない。玲音よりかは日本にいると思うよ。卒業できるかだけが不安だなぁ」

「なんだ、そうなのか」

「あらあら？　ちょっと安心してない？　孤独なんて気にもしないぼっちくんじゃなかったっけ？」

「う、うるさいな……安心なんてしてない。頑張ってこいよ」

「ぷぷぷ。本当に人間らしくなったね、睦紀くん。お姫様に感謝しなよ」

「アリスも人間らしくなったな。初めて出会ったときとか、テレビと別人同然の冷たい態度だったのにな」

「し、仕方ないでしょ！　……ま、こうやって人って変わっていくんだろうね」

そう、うれしそうな笑っこと。そ　ってこうかうな笑っってゆくんだろう。出会う

それぞれの女は変わった。そしてこれからも変わっていくだろう。
度に、別れる度に、紙粘土みたいに心の形を変え、いつの日か誰の色に染まるか決断するまでたくさんの色を吸収するのだ。
多分、大人ってそういう生き物なんだと思う。

第63話　わたしだけはあんたの隣にいる。

「沙月はいなくならないよな？」

「うんち！」

おそらく沙月のお下品な言葉遣いは現在テレビで放映中のアニメのせいだろう。とある日の夕方になると沙月は画面に釘付けとなり、約三十分間ケタケタと笑い続ける。微笑ましいことなのだが、できれば「うんち」や「ちんちん」という単語は口に出さないでほしい。癖がついてそのまま成長したら変な男が近寄ってくるかもしれない。そしたらおれは斬らざるを得ない。どうかおれを殺人鬼にさせないでくれ。

ソファーでクッションを腹に抱える沙月はおれの心配事など一切気にもせず、無邪気に笑った。

「何度も言ってるけどな、来年小学校に入ったらそういう言葉は封印するんだぞ。友だちできなくなるからな」

「そうなのー？」

「そうだ。うんちが好きなやつを誰が好きになるってんだ。フンコロガシがちょっと共感してくれるくらいだぞ」

「じゃあにいにみたいにひとりぼっちになっちゃうんだ」

「よくわかってるな。沙月にはそうなってほしくないんだよ」

「うーーーん、わかった。うんちやめる」

「よしよし、良いことだ」

おれを反面教師にしたのは正解だった。沙月なりにおれのぼっち状態に思

うところがあったのだろう。今なら理解できるがな。ぼっちを続けたところで楽しいことなんて何もない。

「にぃに」

「ん？」

「もうしんぱいいらないよ」

「心配って……？」

「もうあかちゃんじゃないよ、わたし」

その言葉にハッと気付く。

思い返せば沙月とはいつも遊んでいた。何をしでかすかわからない子だったから目が離すことができず、常におれは行動を監視していたのだ。

しかし彼女はもう一人で歩けるらしい。来年になれば一人で小学校へと

行き、一人で帰ってくる。もしかしたら気の合う友だちができて一緒に登下校し、そして一緒に遊ぶのだろう。

「にぃには百合愛ちゃんをしんぱいして」

「そっか、沙月も成長したな」

「おとなのれでぃーだよ」

「それはまだ早い」

雀玲音、榊木アリス、そして式島沙月。

みんな離れていく。最近そう考えることが多々ある。

この件に善悪はない。

みんな意思ある人間で各々目的があるのだ。それがたまたま離れ離れに

なってゆく結果を生み出しただけのことで、おれが反省しようと過去を振り返るのは無意味なんだ。だがそう思っていても「おれが何かしてしまったのか」と信じてもいないぼっちの神に懺悔してしまう自分いた。

「バカ睦紀っ、バカ睦紀っ」

ちょうど一時限目が終わったトイレ休憩時間。お隣のツインテールが落ち着きなくそわそわしていた。目をぱちくりさせ、若干緊張の色も見える。

「ん？」

「今週の土曜日は何の日かわかるっ？」

前のめりになって問う彼女はとても目が輝いていて期待に満ちていた。もちろんおれは即答した。

「百合愛の誕生日だ。忘れてると思ったか？」

「！　ふ、ふんっ、忘れてこっちへっ浸きり判ごっこっよ！」

「!!　ふくっ…恥ずかしがり屋さんの照れ隠しかなぁ…」
「ちゃんとお祝いする計画も立ててたから楽しみにしててくれ」
「!!　ホントに!?」
「あぁ。色々と勉強してたんだ。手料理とか」
「!!　好き!!　……あっ、あんたのことじゃなくて手料理が好きなんだからねっ！　勘違いしたら殺すからっ！」
「はいはい」

ぷくっとふくれた百合愛はいつものようにツインテールでぺしぺしおれをはたいた。流石に教室ではクラスメイトの目を気にするようだ。

そのため百合愛と付き合ったからといって教室でイチャイチャし出すようなことは当然しない。そんなことしたら速攻で生徒指導室行きだ。だから毎日普通に授業を受けて普通に飯を食って日常を過ごしている。家に帰れば別だけど。

「楽しみだわ。あんたの手料理かぁ。でも振り返ればよく作ってたわね」
「百合愛は料理とかするのか？」
「……」
「なるほど」
「うるちゃい！　ちょっとくらいできるもん！」
「そうか。なら、一緒に作ってみるか」
「それはいいわね！　絶対もっと美味しくなるわ！」
彼女は頬杖をついて想像し始めた。
そんな夢見る姿にまた良くない考えを巡らせてしまう。
彼女も離れていってしまうのだろうか。
玲音やアリスよりずっと海外との縁が深い生活をしてきた彼女だ。何か

の拍子で再び海外に戻ってしまうのではと度々考えていた。現に両親は日本にいない。いつまでも百合愛がいるわけじゃない。それにあと一ヶ月後、年末になれば百合愛との奇妙な同棲生活が終わる。

「バカ睦紀、どうしたの？」

表情に出ていたらしい。百合愛は不安げに眉をひそめて心配してきた。

「いや、ちょっとな」

「言いなさい。隠し事はなしよ。これから一生死ぬまで一緒なんだから」

「相変わらず重いな……」

「言わないとお仕置きだから！」

「……百合愛もいなくなるんじゃないかなって思ってな」

そう悩みを告白すると彼女はきょとんとした顔になった。

「何よそれ」

「[illegible]

「玲音やアリスのことは聞いたか？」
「ええこっそり聞いたわ。二人とも大変ね」
「急に不安になったんだ。初めてできた友だちが次々といなくなってしまうから……もしかしたら百合愛もって、思ったんだ」
「……ふぅん、ちょっと来て」
百合愛はおれの手を取ると力強い足取りで教室から出て、階段を上がり、最上階へと引き連れた。もしやキツいお仕置きの始まりかと覚悟したが、彼女は母性溢れる微笑みを見せると正面からぎゅっとおれを抱きしめた。
「こんなにあんたのこと大好きなのに離れるわけないでしょ、ばか。ばかばか」
「すまん……まだまだ小心者だな。本当におれはダメだ」
「ううん誰もここまでこられないよ。つこ　は全力でぶつかってきた手

「もし離れることになっても追いたければなさい。わたしは全力であんたに手を伸ばすから。だからちゃんとわたしの手を掴みなさいよね！」

「わかった。何があっても追いかける」

「そうよ、それでいいの」

そう約束し、背徳的な気分に浸りながら唇を重ねた。

おれたちは絶対に風紀委員になっちゃいけないな。それくらい夢中で、終わりを告げる鐘の音が恨めしかった。

第64話　ヘンタイ・ツインテール

十一月二十二日、土曜日。

〝良いツインテールの日〟とも呼ばれる今日は百合愛の誕生日だ。

その日の朝はすっきりとした気分で起床した。前日は早めに寝た。朝一番に起きて百合愛にこう言うためだ。

「お誕生日おめでとう」

起きたばかりの百合愛はツインテールではなくただのロングヘアだった。洗面所で髪を梳く彼女はおれの声に気付くとぱっと笑顔を咲かせた。

「ありがと、バカ睦紀。もう年下なんだから敬語くらい使いなさいよねっ！」

「どうせすぐ同年齢になるぞ」

「あんたは一月十一日よね？　しっかり覚えてるんだから褒めて！」

「別におれのは祝わなくていいからな。その時にも百合愛が隣にいてくれればそれが最高のお祝いになる」

「ふん、バカ言わないで。あんたの隣はわたしのものなんだから当然でしょ」

彼女は照れくさそうに髪をいじるとおれの胸を小突いた。

「じゃ、今日はいっぱいわたしのこと喜ばせなさい！」

というご命令はあったものの、リードは百合愛が握った。

「おれたちは何をしてるんだ……？」

折角の誕生日だというのにおれの部屋で課題を消化している。熱心に

シャーペンを走らせる姿はとても記念日とは思えぬ真面目ぶりで、教師が見たならば深く頷き感心することだろう。

はっと我に返ったおれは呟いた。こんなめでたい日に何をしているんだ。

「邪魔くさい課題をかたづけてるんでしょう？　あんたも早く終わらせなさいよ」

「これでいいのか……？　もっとほら……どこかへ行くとかさ」

「ばーか。わたしが一番喜ぶのはあんたと一緒にいることなの。今日は一日中あんたの部屋にいるからね。いつもはすぐ追い払うけど、今日はずっといる」

「百合愛がそれで満足ならいいが……」

しかし普通に課題をこなしているわけではない。部屋中央に置いた足の短い机で勉強しているのだが、百合愛は隣にはいない。おれの股の上、胡座

をかいたおれを座布団代わりにして座っているのだ。ちょっと前までの沙月みたいに。

「どうしたのかしら。さっきからあんたモゾモゾと落ち着きないわね」

「そりゃこんな格好だからな」

「わたしが重たいって言いたいの？」

「まさか。重さなんて感じない」

「ならあんたは病気ね。お医者様に看てもらいなさい」

いい気なものだ。こっちは色々と余裕がない。その肉付きのいい丸いお尻をどこに押しつけているのか彼女には自覚がないらしい。

彼女はさらにおれの勉強を邪魔しようと背中でおれの胸を押し、手を机から離そうと力一杯いじわるしてきた。おれも負けじと背を折り抵抗する。まるで抱きしめるように。そんな攻防戦を少々続けた。

「ベー[illegible]

「バカ睦紀って無駄に良い身体してるのなまいきっ！」
「どうもありがとうございます」
「見せて。脱いで」
「は、はぁ!?」
「脱がせる」
いきなり彼女はおれのシャツを捲り上げると顔を突っ込んだ。髪が擦れてこそばゆい。何をしているのかわからないが彼女の頬が心臓付近に当たっているのはわかる。
「あついからぬいで」
「百合愛って実は非常識なのか？　やってること変態だぞ」
「そうだよ？　わたし変態だよ？」
「え」
「バカ睦紀の身体ごいすき。本当愛してるのごいすき。安らかる！

「ノナ瞳紗の身体たいて寄、体温感しそのたいて寄、安心でそる」

「お嬢様ツインテール帰ってこい……！　朝烏百合愛はそんな変態さんじゃない……！」

「夜が楽しみ。いっぱり喜ばせなさいね？」

意味深な発言に言葉が詰まる。夜に一体何が始まるというんだ。おれたちはプラトニックな関係だ。小学校低学年の女の子が読む少女漫画みたいに、初々しく健全な恋を歩んでいる。それが今夜、肉欲に負けて崩壊してしまうのか？

――ダメです。

確実に、徹底的に、無慈悲に殺される。百合愛のご両親に。式島家の記録が世界から抹消される。そして沙月は小学生になることはかなわない。

それは絶対にダメです。

「今日はバカ睦紀のベッドで寝るから」
「じゃあおれはリビングで寝るか」
「ばか。一緒に寝るの！　今日はずっと一緒なのっ！」
やれやれ、久しぶりにぼっちモード起動するか。

そんな調子で昼も午後も過激なスキンシップ（百合愛による）を続けた。
昼飯を食った後にベッドに横たわり、百合愛もおれを枕代わりにして横たわった。音楽を聴こうとすると片方のイヤホンをせがんできた。そして定期的に無言でぎゅっと抱きしめられた。
もはや……おれは百合愛だ。

肺は百合愛の匂いをたっぷり吸い込み、皮膚は百合愛の体温や柔らかさ

や鼓動を感じ続け、我があらゆる臓器たちは彼女への同化を進めている。心なしか女性ホルモンが大量分泌されている気がする。いや、ツインテール・ホルモンか……？

「シャキッとしなさい。もしかしてキスして目覚めさしてほしいの？」

いよいよケーキ作りが始まるというのに意識がとんでいた。ツインテールづくしの時間が長すぎて過剰分泌された快楽物質で夢でも見ていたのだろう。

エプロン姿になった百合愛は手に腰を当て、ツンツンした様子で上目遣いになった。

「初めての共同作業なんだから真面目に！」

「す、すまん。百合愛のことを考えてた」

「……！　今更何よ、もぅ……わたしもあんたのことずっと考えてるわ

よ？」

「よ、よし！　じゃあホイップクリームから作るか！」

「はぐらかさないで。ご両親が近くにいるからって遠慮してる？　小さい男ね。あ、あそこは立派なくせにっ……」

「生クリーム！　生クリーム！　生クリーム！　うおおおお！」

現実から逃げるように生クリームをかき混ぜ始めた。本当に今日は何か起こってしまうのかもしれない。日頃よりもだいぶ過激で攻めていて、一言で言えば「急激な変態化」である。

おれは声を大にしてSOSを求めたい。

朝烏家の皆さん、娘さんが大変なことになってますよ。

第65話　それぞれの夢

『初めての共同作業』と聞いて連想するものはやはりケーキだ。

牛刀のような包丁を共に持つ新郎新婦が馬鹿でかいケーキに入刀する光景が、一瞬目に浮かんだ。

「はっじめてはっじめて！」

キッチンで百合愛が大変ご機嫌な調子でリズム良く「初めて」と口ずさむ。自分で「初めての共同作業」と言ってからずっとこうで、ハキハキとした動きで生クリームをかき混ぜている。

「おれが混ぜるぞ」

「いいのっ！　一緒に作りたいのっ！」

せっかくアリスから教えてもらったのに知識を発揮できないでいた。これではおれのプレゼント作戦が……と若干アリスへの申し訳なさが募る。

「バカ睦紀、ありがとう。自分の誕生日を祝ってくれるの、いつも親か親のお友だちだけだったからすごく嬉しいわ。こういうのが欲しかったの」

「おれも良かったよ、百合愛が楽しそうで。ただの料理じゃつまんないかなって思ってちょっと不安だったんだ……」

「ばか。あんたといるだけで楽しいのに一緒に何かしちゃったら……どうにかなっちゃうでしょ!!」

「おいおいクリーム零れるぞ」

つまりもうどうにかなっているわけか。

百合愛の可愛らしいエプロン姿を拝みつつ、共同作業は進んだ。

ケーキ作りは百合愛と二人で、夕飯のご馳走は母とおれで作った。

母はおれと百合愛の惚気っぷりにもう慣れていた。百合愛の「絶対に結婚します」というもはや宣戦布告に近しい宣言をおれの両親に告げてからだいぶ経ったが、あれから親との関係性に変化はない。きっとまだおれたちのことを小さな子どもだと思っているのだろう。だが、百合愛はガチだ。

百合愛のお誕生日のお祝いは終始温かな空気が流れた。ずっと昔から我が家にいたみたいに、百合愛は溶け込んで柔らかな笑みを振りまいた。

ありがとう。

一緒にいてくれて、ありがとう。

百合愛は度々おれにそう言った。

おれも嬉しかった。好きな人が幸せそうにケーキや肉を食べ、そして隣で

笑っている。あぁ、これが友だち――恋人なんだと改めてわかり、その尊さが身に染みた。一人じゃこんな気持ちは味わえない。

そして夜は深まり、あっという間に寝る時間になった。十一月下旬ともなればもう夜は肌寒く、布団を被らず寝てしまえば翌日には腹を壊すだろう。

だからか、明かりの消えた自室に一人のお客が現れた。

「バカ睦紀。一緒に寝よ？」

寒いからじゃないとはわかっている。彼女は誰よりも寂しがり屋で甘えん坊なのだ。枕を抱きかかえた百合愛は夢を見ているかのようにぼんやりとしていた。寝ぼけか、風呂でのぼせたか。いや、どれも違うな。多分おれと同じで夢を見ようとしてるんだ。

一緒にベッドの上で横たわり、布団の中で身体を寄せ合う。いつもより温

かい、服越しから伝わる感触は身体だけでなくもっと奥の芯の部分――心までも温めた。

「ねぇ、わたしの夢って覚えてる？」

彼女は唐突に呟いた。

「友だち百人ってやつか」

「ふふ、あれ冗談だから。友だちなんて十人くらいでいいわ」

「まぁ真剣に捉えてはいなかったよ」

「よかった。あんたはそこまでバカじゃないものね。でも最近ちゃんとした夢ができたわ」

「まさかおれとケッコンってやつじゃないだろうな……」

「それは夢じゃなくて義務だから。わたしはあんたに、あんたはわたしに全て捧げるの」

音割り中で彼女は憂いを耳元で囁いた。

暗闇の中で彼女は優しく耳元で囁いた
「わたし、通訳者になろうと思うの」
「つ、通訳？」
「そう、わたし英語ができるから。この力を使って世界を繋げようって思ったのよ。あんたのおかげで一人じゃないって気付かせてくれた。だから今度はわたしの番」
「いいことだな。応援するよ」
「ありがと。ずっと傍にいなさいよね。遠くから応援とかヤダから」
まさかそんな夢を持っていたとは思いもしなかった。こんなに近くにいたのに。けれど夢って人に語るようなものではないからな。
おれはどうしよう。なりたいものとか、やりたいことが全く定まっていなかった。玲音もアリスも、そして百合愛も夢に向かって歩き始めている。おれだけがまだ歩き始めていない。

「おれも、そろそろ将来のこと考えないとな」
「ダメ。あんたはわたしのことだけ考えて」
「それはいつもだ」
「ふんっ……好き。ちゃんと考えなさいよ？」
何かを見つけなければならない。そう念じながら目を閉じる。百合愛の安らかな呼吸音がはっきりと聞こえた。心の底から安心しているのがわかる。信用してくれているのだ。
その信用を裏切るわけにはいかない。だから彼女の幸せのためにも何かを見つけ、一歩踏み出そう。
翌日の朝、目を覚ますと胸の上に百合愛が寝ていた。心臓の音を聞いているかのように耳を胸に当てている。昨夜はとても深くぐっすり寝ることができた。もちろん一線は越えてはいない。おれたちは純粋に好きなだけなん

だ。け、決してやらしいことをしたいわけではない!!

「んっ、おはよう……」

彼女を観察していたら起きた。乱れた髪を指で梳き、小さく微笑む。どんなココアよりもずっと温かくて甘い笑みだった。彼女がいれば冬なんて寒くないのかもしれない。

そうしてしばらくお互いベッドの上で横になりながら静かに過ごした。まだ身体は完全に起きていないし、しかも休日だ。いくらでも寝られるし、いつまでもくっついていられる。

そして彼女が自分のスマホをいじり始めたとき、緩やかな時間は急に早歩きとなった。

「バカ睦紀……ママからメール来てた……」

「何て?」

[illegible]